

北中原遺跡

KITANAKAHARA SITE

—県営一宮団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1995. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

北中原遺跡

KITANAKAHARA SITE

—県営一宮団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1995. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部



第1次調査全景（遺跡東方から、やや右上に甲斐国分寺跡を望む 1993年12月撮影）

序

本書は、山梨県土木部による県営一宮団地建設工事に伴い、1993・1994年度の両年にわたって行われた、山梨県東八代郡一宮町塩田に所在の北中原遺跡における発掘調査の成果をまとめたものであります。

本遺跡が位置する一宮町は、甲府盆地東部にあって、原始・古代から中世へと長きにわたって人々の生活が展開されてきた地域であり、このことを物語る埋蔵文化財の濃密な分布が見られる地域としてもよく知られています。とりわけ古代における地方行政単位である“国”の中核施設とも呼べる国分寺が置かれていたこともあって、周辺にはたいへん重要な遺跡が点在しております。それらはこれまでの町や県などの行ってきた発掘調査により実態の解明が進められて来ていますが、本遺跡もそうした国分寺周辺遺跡群の一翼をなすものといえます。

調査の結果、平安時代中頃の竪穴住居跡77軒を中心に、縄文および平安から中・近世までの土坑131基、中世の溝路や道路状遺構などを主な内容とし、墨書き土器を含む9世紀から11世紀にかけての土器類をはじめ豊富な出土遺物を得られております。その成果は、概して言えば、国分寺に近接した平安集落の一定範囲の様相を明らかにし、また伝説的にいわれることの多い中世塩田郷の実像に一步迫るものといえるのではないかと思われます。

北中原遺跡における今次の調査は、県営団地建設予定地6,000m²について全面を対象にしたものではありますが、建築工事との兼ね合いの中で細切れの調査区割りを余儀なくされ、またその調査行程も工事と調整しながらの複雑なものとなってしまいました。こうしたことでもあって十分な調査であったか危惧されるところもありますが、本報告書が本県における平安時代から中世にかけての地域社会の解明の一助となれば幸甚であります。

末筆になりますが、調査にあたり種々ご指導・ご協力いただきました関係各位、並びに調査に従事された皆様に厚くお礼申し上げます。

1995年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

- 1 本書は、山梨県東八代郡一宮町塙田585に所在する北中原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、県営一宮団地建設工事に伴うものであり、県教育委員会が県土木部の委託を受け実施した。
- 3 発掘調査および整理調査は、県教育委員会の調査機関である山梨県埋蔵文化財センターが行なった。
- 4 調査はつぎの2次にわたって実施されたが、本報告ではこれらをまとめて報告する。
 - 第1次調査（平成5年度本調査） 1993年11月17日～12月27日
 - 第2次調査（平成6年度本調査） 1994年4月17日～12月27日
- 5 本書の編集及び執筆は、出月洋文が行った。
- 6 遺構については各担当者が担当し、遺物の撮影は出月洋文が行った。
- 7 本調査に係る資料（出土遺物、記録図面・写真等）は一括して、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 発掘・整理調査に際し、下記の方々・機関からご協力・ご教示を頂いた。記して感謝申し上げたい。

一宮町役場、一宮町教育委員会、帝京大学山梨文化財研究所、猪股喜彦・瀬田正明（一宮町教育委員会）、望月和幸（御坂町教育委員会）、室伏徹（勝沼町教育委員会）、芹沢昇（駿迎堂遺跡博物館）、萩原三雄・鈴木稔・畠大介・河西学・宮澤公雄・平野修・樋原功一（帝京大学山梨文化財研究所）

(順不同・敬称略)

凡　　例

- 1 遺構番号は、原則として発見順に付している。
- 2 掲載遺構図の縮尺は、とくに断りのない限り、住居跡が80分の1、カマドが40分の1、土坑が80分の1、溝状遺構・道路状遺構が200分の1となっている。
- 3 掲載遺物図は、平安時代遺物および遺構外の各時代の遺物が4分の1、錢貨が2分の1、縄文時代土器が3分の1、縄文時代の石器が、石器が2分の1以外は4分の1となっている。
- 4 平安時代土器の断面には、墨塗りで須恵器を、網点で灰釉陶器を、砂目のスクリーントーンで綠釉陶器を表示している。

本文目次

口 紙
序 文
例言・凡例
目 次

序章 発掘調査ダイジェスト	i
第1章 発掘調査の概要	
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 調査組織	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と層序	
第1節 調査区の設定と遺構調査	5
第2節 基本層序	5
第4章 発見された遺構と遺物	
第1節 遺構と遺構に伴う遺物	8
(1) 積穴住居跡	
(2) 土 坑	
(3) 特殊小坑	
(4) 積穴遺構	
(5) 柱穴群	
(6) 溝状遺構	
(7) 道路状遺構	
(8) 遺物集中区	
(9) 集石遺構	
第2節 遺構外の遺物	121
(1) 遺構外の繩文時代遺物	
(2) 遺構外の古墳時代遺物	
(3) 遺構外の中世遺物	
(4) 遺構外の近世遺物	
第5章 遺構遺物についての検討	127
第6章 調査のまとめ 一問題点と課題	144

挿図目次

第1図 調査対象範囲と調査前地形	2
第2図 調査原因となった工事計画	2
第3図 試掘調査の実施結果	2
第4図 北中原遺跡の位置とその周辺遺跡	4
第5図 調査区全体図	5
第6図 調査の設定およびグリッド配置	7
第7図 標準的な土層	7
第8図 地山発露頭状況見取り図	7
第9図 1A・1B・2・3号住居跡	

(1/80・1/40)	28
第10図 4・5A・5B・6号住居跡	
(1/80・1/40)	29
第11図 7~9号住居跡 (1/80・1/40)	30
第12図 10~12号住居跡 (1/80・1/40)	31
第13図 13~14号住居跡 (1/80・1/40)	32
第14図 16~18・20号住居跡 (1/80・1/40)	33
第15図 19・21・22号住居跡 (1/80・1/40)	34
第16図 23~25号住居跡 (1/80・1/40)	35
第17図 26~29号住居跡 (1/80・1/40)	36
第18図 30~32号住居跡 (1/80・1/40)	37
第19図 33~35号住居跡 (1/80・1/40)	38
第20図 36~38号住居跡 (1/80・1/40)	39
第21図 39~42号住居跡 (1/80・1/40)	40
第22図 43~45号住居跡 (1/80・1/40)	41
第23図 46・47・51・52号住居跡 (1/80・1/40)	42
第24図 48~50号住居跡 (1/80・1/40)	43
第25図 53~56号住居跡 (1/80・1/40)	44
第26図 57~59号住居跡 (1/80・1/40)	45
第27図 60~62・77号住居跡 (1/80・1/40)	46
第28図 63~65号住居跡 (1/80・1/40)	47
第29図 66~68号住居跡 (1/80・1/40)	48
第30図 69~71号住居跡 (1/80・1/40)	49
第31図 72~74号住居跡 (1/80・1/40)	50
第32図 75~77号住居跡 (1/80・1/40)	51
第33図 1・23~28・86~90・95号土坑 (1/80)	57
第34図 2~11・13・65号土坑 (1/80)	58
第35図 12・14~22・94・96~104号土坑 (1/80)	59
第36図 29~35・50~52・66~69・117・118・129・ 130号土坑 (1/80)	60
第37図 36~49・53~59・91~93・131・132号土坑 (1/80)	61
第38図 60~64・70~85・112~115・119~122号土坑 (1/80)	62
第39図 105~111・116・123~128号土坑 (1/80)	63
第40図 1・2号特殊小坑 (1/20)・1号積穴群 (1/40)・1号柱穴群 (1/80)	64
第41図 1~5号溝・1号道路状遺構 (1/200)	65
第42図 1号集石土坑 (1/40)・繩文遺物分布	66
第43図 1A・2・3号住居跡出土土器 (1/4)	67
第44図 4号住居跡出土土器 (1/4)	68
第45図 4・5A・6号住居跡出土土器 (1/4)	69
第46図 7・8・9号住居跡出土土器 (1/4)	70
第47図 10・11・12・13号住居跡出土土器 (1/4)	71
第48図 13・14・15・16号住居跡出土土器 (1/4)	72
第49図 17・18・19号住居跡出土土器 (1/4)	73
第50図 20・21・22号住居跡出土土器 (1/4)	74
第51図 24・25号住居跡出土土器 (1/4)	75
第52図 25号住居跡出土土器 (1/4)	76
第53図 26・28・29号住居跡出土土器 (1/4)	77

表 目 次

第54図	30・31号住居跡出土土器（1／4）	78	
第55図	32・33号住居跡出土土器（1／4）	79	
第56図	33・34号住居跡出土土器（1／4）	80	
第57図	35・36・37号住居跡出土土器（1／4）	81	
第58図	38・39号住居跡出土土器（1／4）	82	
第59図	39・40号住居跡出土土器（1／4）	83	
第60図	42・43号住居跡出土土器（1／4）	84	
第61図	44号住居跡出土土器（1／4）	85	
第62図	44・45号住居跡出土土器（1／4）	86	
第63図	46・47・48・49号住居跡出土土器（1／4）	87	
第64図	50・51・52・53号住居跡出土土器（1／4）	88	
第65図	54・55・56・57号住居跡出土土器（1／4）	89	
第66図	58・59・60号住居跡出土土器（1／4）	90	
第67図	60・61号住居跡出土土器（1／4）	91	
第68図	62・63号住居跡出土土器（1／4）	92	
第69図	64・65号住居跡出土土器（1／4）	93	
第70図	65・66号住居跡出土土器（1／4）	94	
第71図	67・68・69号住居跡出土土器（1／4）	95	
第72図	70・71・72・73号住居跡出土土器（1／4）	96	
第73図	44号住居跡出土土器（1／4）	97	
第74図	75・76号住居跡出土土器（1／4）	98	
第75図	住居跡以外の遺構および遺構外出土土器（1／4）	99	
第76図	瓦類一その1（1／4）	100	
第77図	瓦類一その2（1／4）	101	
第78図	瓦類一その3（1／4）	102	
第79図	瓦類一その4（1／4）	103	
第80図	鉄製器（1／4）	104	
第81図	羽口・鉄津・石製品（1／4）および錢貨（1／2）	105	
第82図	砥石一その1（1／4）	106	
第83図	砥石一その2（1／4）	107	
第84図	縄文時代遺物一土器・その1（1／3）	108	
第85図	縄文時代遺物一土器・その2（1／3）	108	
第86図	縄文時代遺物一土器・その3（1／3）	108	
第87図	縄文時代遺物一土器・その4（1／3）	109	
第88図	縄文時代遺物一石器（1／4・1／2）	110	
第89図	出土土器の変遷	129	
第90図	40号住居跡における墨書き土器の状況	131	
第91図	北中原遺跡における墨書き土器等の分布状況	132	
第92図	北中原遺跡における平安時代住居の変遷(1)	135	
第93図	北中原遺跡における平安時代住居の変遷(2)	136	
第94図	34号住居跡における礎の状況	138	
第95図	37号住居跡における礎の状況	139	
第96図	42号住居跡における礎の状況	140	
第97図	北中原遺跡周辺の古代情報	141	
第98図	北中原遺跡周辺の中世情報	143	
	第1表	豎穴住居跡一覧表	27
	第2表	土坑一覧表	53
	第3表	土器類觀察表(1)	108
	第4表	土器類觀察表(2)	109
	第5表	土器類觀察表(3)	110
	第6表	土器類觀察表(4)	111
	第7表	土器類觀察表(5)	112
	第8表	土器類觀察表(6)	113
	第9表	土器類觀察表(7)	114
	第10表	土器類觀察表(8)	115
	第11表	土器類觀察表(9)	116
	第12表	土器類觀察表(10)	117
	第13表	土器類觀察表(11)	118
	第14表	瓦類觀察表	118
	第15表	鉄製品觀察表	119
	第16表	羽口觀察表	119
	第17表	鉄津・石製品觀察表	119
	第18表	錢貨觀察表	119
	第19表	砥石觀察表	120
	第20表	石器觀察表	120

写真図版一覧

図版1	調査前状況・試掘調査状況
図版2	第1次調査の状況
図版3	第2次調査の状況
図版4～23	各住居跡の状況
図版24～29	土坑・特殊小坑の状況
図版30～31	溝状遺構・豎穴遺構・柱穴群・道路状遺構
図版32～39	各住居跡の出土土器
図版40～41	墨書き土器・ヘラ書き土器
図版42～43	瓦類
図版45	フイゴ羽口・磨り石・石杵・錢貨
図版46	砥石
図版47	被熱土壤
図版48	縄文時代遺物
図版49	中近世遺物
図版50	調査経過の記録

序章 調査報告のあらまし

1はじめに

北中原遺跡は、東八代郡一宮町の塙田地区にある古代の遺跡の一つです。

この報告書は、今回の北中原遺跡における発掘調査、すなわち字北中原585番地の約6,000m²を対象にした埋蔵文化財記録保存のための調査の成果をまとめたものですが、この章では本書を利用する際の手引きとなるよう、調査の概要を整理しておきます。

2 調査の進められ方

(1) 調査に至るまで

この調査が実施されることとなったのは、当地で賃貸住宅建設の計画がなされたからで、事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の確認をしたところ平安時代の集落が営まれていたことが明らかになりました。この試掘結果を受けて建築主体の県土本部と県教育委員会とで協議し、認められた期間内に建設工事を完了する必要から、「93(平成5)年と「94年の2年に分けて発掘調査し、調査成果をもって記録の上で保存するという対応がとられることになりました。経過や調査の体制は第1章に詳述されます。

(2) 調査の方法

初年度に約1,000m²を調査し、翌年度に残り5,000m²を調査するという、2年がかりの調査であったことは

先に述べましたが、その調査の方法は共通で、まず試掘調査でわかった埋蔵文化財までの深さのデータとともに、そのまままでの土を重機によって除去し、その後は人手によって遺構確認や遺構の掘下げ、遺物の



住居跡や土坑の調査のようす（53住付近）

取上げなどを進めていきました。どのような配置で住居跡などの遺構が確認されたか記録を取るために5m間隔の杭（グリッド）を設定し、それに基づいて測量したり、各段階での写真撮影などを行いました。現地調査終了後は、出土遺物のデータ化や調査中の図面・写真等による記録類の整理などを進め、本書が作成されました。調査方法の詳細は第2章にあります。

3 調査で発見されたもの

細かな内容は第4章に報告のとおりですが、第4章が遺構ごとの説明であるのと別に、ここでは発掘調査の成果を年代順に概観します。

(1) 繁文時代

遺構としては、集石遺構が1、上坑が7確認されていますが、いずれも繩文前期の諸磯式の時期のものと考えられます。また調査区東端部の谷状の地形の部分には同じ時期と見られる包含層が形成されていました。このほか遺構は伴わないものの前期から中期、後期・晩期の土器片が調査区のそこそこから採集されています。

(2) 弥生～古墳時代

この時期の遺構は見つかっていませんが、遺物はたいへんわずかながら確認されています。

なお、古墳時代の後半から奈良時代の末頃までの遺構や遺物は確認されませんでした。

(3) 平安時代

今回の調査ではこの時代の堅穴住居跡群が主体的に確認されました。いくつか重複が見られます。全部で77軒分の住居跡が見られ、これらに伴う比較的豊富な遺物が出土しました。

住居跡は大部分が角が丸みをもった四角形、いわゆ



建設中の建物の下での2年目の調査（25住付近）

る隅丸方形の平面形の、半地下式（竪穴）のもので、東北や南東の隅などにカマドが作られていました。カマドは蓄うまでもなく煮炊きを行うためのもので、石を組んでその周りを粘土で固めて構造される、この時期、この地域において一般的に見られるものです。

遺物としては、上器類で土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器があり、国分寺が近いこともあって丸瓦や平瓦などの古代の瓦も見られました。また釘や刀子、斧などの鉄製品、磁石などの石製品といったものも出土しています。

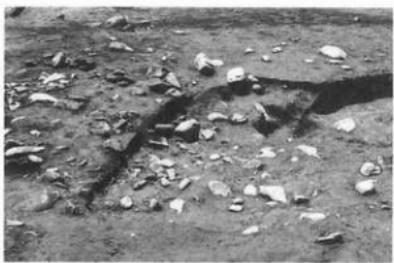
竪穴住居跡以外に今回の調査では130あまりの土坑、すなわち円形や楕円形の素掘りの穴が見られましたが、縄文や中世、近世と時期が特定されたものは1割程度で大半は時期がわかる遺物が伴わないものでした。ただいくつかの上坑が平安時代の住居跡を壊して作られ、またいくつかのものが中世の道路状遺構の下から確認されていることもあります、その多くは平安時代の終わりごろのものではないかと推測されます。

（4）中世以降

調査区の東北部での竪穴遺構1、東南部で部分的に確認された道路状遺構1、4条の溝跡、上坑が数基といった中世のものと見られる遺構が確認されています。遺物では、その大半は遺構に伴うものではありませんが、中国製と見られる青磁の碗の破片、常滑焼の壺などの破片などがありました。



住居の廃棄を物語る住居跡内のカマド材の礫（34住）



住居跡内外に露出する地山の礫（36住）

近世では、2つの上坑が確認され、このうち寛永通宝が1点見られた96号上坑は墓穴である可能性も見られます。

なお井戸の跡と推定される95号上坑は遺物が伴わないではっきりした時期はわかりませんが、平安時代の住居跡を掘り込んでいたことから、中世ないし近世の井戸はないかと考えられるものです。

（5）年代不確定の遺構

調査区の中央からやや東寄りの位置に掘立柱建物の存在がうかがえる柱穴群が見られましたが、これについては年代を特定する手掛かりが得られませんでした。平安時代から中世までの幅が推定されます。

4 調査の結果わかったことと今後の課題

第4章に報告の成果について、いくつかの視点で検討を行った結果は、つづく第5章に記述されますが、大まかには次のようになります。

（1）遺跡の歴史的位置づけ

調査成果の中心は、平安時代の、9世紀から11世紀にかけての集落跡の把握にあったといえます。

この遺跡の西側には1kmも隔てないところに、奈良時代の終わり頃、甲斐国の大安寺が建てられたこともあって、奈良時代から平安時代にかけては甲斐国の中核地（現在の駒ヶ岳所在地周辺のような状況）でありました。このため、北中原遺跡の周りには国分寺跡や国分尼寺跡などを初めとして、重要な遺跡が集中して見られます。その詳細は第2章にも触れられていますが、北中原遺跡はそうした国分寺遺跡群の中の一つであることが明らかになりました。

（2）平安集落のあり方

i) 集落構成に見られる計画性

確認された平安時代の住居跡は、数時期にわたって営まれているので、一度にどのような配置であったかが問題となります。全体的に個々の住居の方向性や間隔などに計画性が見られるよう見受けられます。扇状地の基盤をなす地山の礫が露出していて、竪穴住居を造るのに適さないと思われるような所にも配置されたり、重要なところには何度も立て替えしながら作り続けられるような傾向がうかがえます。

ii) 竪穴住居の造営と廃棄

調査した70軒あまりの竪穴住居の一つひとつには、造られ（建築）、使われ（居住）、片づけられる（廃棄）というサイクルがあります。住居を新たに造るときは、先にふれた造る場所の選定のことの他に、竪穴住居の床（土間）の下に利器を埋めるなどの地鎮祭がとりおこなわれたような痕跡が見られたりしました。また集落が終わりを迎えたとき、カマドを解体したりしながら、住居を閉じるお祭りをしているような状況も観察されています。

Ⅲ) 墓書土器

平安の住居群からは、日常の食器などを中心に様々な生活遺物が出土しましたが、その中で一つ、注目される遺物として墨書土器があげられます。これは、土師器の环などに墨で文字が書かれたものです。これも平安社会における精神活動との関わりで理解されるものと遺跡の機能などに結びついたものがあることが知られていますが、北中原遺跡の場合、比較的古い段階の住居から、1点の土器について一文字のみが墨書きされた例が主体的で、精神活動に関連したものと見られます。

(3) 中世の時期の北中原

調査成果の中心をなすものは、平安時代の集落跡であることはすでに見てきましたが、その後の、いわゆる中世の、武士社会の中で営まれた土地利用の痕跡が見られたことも、平安時代の成果に次いで、注目されましょう。遺跡のある一宮町塩田地区は、塩田の長者の伝説が伝わるところで、これまでの周辺の発掘調査

でも、この地に勢力を張った人々がいたことがうかがえるような内容が断片的に確認されてきていますが、この北中原遺跡でも、道路状遺構や青磁碗の破片などの遺構遺物を通じて中世の塩田の実像にふれるものと見られる資料が確認されています。

(4) 今後の課題

このたびの北中原遺跡の発掘調査は、工期が大変限定された住宅建設の工事に関わって行われたもので、大部分が工事と平行して進めざるを得ないような状況にありました。このため一度に全体を見渡して調査することができず、遺構の把握に十分でないところなどが問題点が多く残りました。資料整理も遺跡の位置づけや集落跡の動態的把握などに迫るためににはやはり不十分なものとなってしまいました。ここに報告する成果がこの地域の、ひいては本県の歴史研究に反映されしていくよう、活用されていくことを望むところですが、そのために掘り下げが不十分などころは、今後の課題として引き続いて研究されるべきものと考えられます。

第1章 調査の経緯と概要

第1節 発掘調査に至る経緯

今回の北中原遺跡の発掘調査は、山梨県土木部（建築住宅課所管）による県営一宮団地の建設に先立つ埋蔵文化財の記録保存を目的に行われたものである。

土木部では、既に供用されていた一宮団地の北側に用地を追加取得し、平成5～6年度に、RC5階建て2棟を建設することを計画したが、当該地は甲斐国分寺跡にも近接した、埋蔵文化財の多く点在するところでもあることから、県教育委員会学術文化課と協議を持ち、計画地における埋蔵文化財の有無を事前に確認することとした。

この協議を受けて、平成5年10月に、山梨県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施したところ、計画地6,000㎡の全城に遺構・遺物の存在が明らかになった。

この試掘結果を踏まえて、土木部建築住宅課・県教育委員会学術文化課に県埋蔵文化財センターを加えた3者で、計画地における埋蔵文化財の取扱いを協議・調整した結果、当該住宅建設が国（建設省）の補助事業として事業期間内の工程確保が必至とされたものであったため、急遽調査体制を確保し、本格的な発掘調査に取り組むこととなった。

第2節 発掘調査の概要

前節に見たような経緯で発掘調査が実施されることとなったが、調査は平成5年と6年の両年にわたり、とくに2次には、団地の建設工事と並行しながらの困難な調査であった。結果的に、平安時代半ば過ぎに營まれた集落跡についての好資料を得ることができた。ここで、その調査全体の概略を確認しておきたい。

（1）試掘調査

試掘調査は平成5（1993）年の10月19日から10月22日まで実施した。周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが前述のとおり国分寺跡に近接する場所であり、建設工事に先立って埋蔵文化財の有無確認が必要とされたことから、用地買収をもってトレーン調査を実施した。この結果、平安朝を主とした集落遺跡の存在が判明し（第3図）、遺跡所在地の小字名に据って北中原遺跡と命名、直ちに周知化が図られ、以下に見る緊急の本発掘調査に至った。

（2）第1次調査（平成5年度本調査）

第1次調査は、試掘調査の翌月、11月17日に着手し、12月27日までの間、1棟目の建設に必要な1,000㎡分について行い、石組カマドをもつ竪穴住居跡20軒と20数基の土坑、縄文前期の土坑6基を確認している。

（3）第2次調査（平成6年度本調査）

第2次調査は翌6（1994）年度に、4月17日から、建設工事と並行して残り約5,000㎡を対象に進め、第1次調査と併せ77軒の住居跡などを確認し、12月27日をもって現地での発掘調査を終えた。なお、9月からは報告書の作成作業についても年度内刊行を目指して進めてきた。

第3節 調査組織

北中原遺跡の発掘調査・整理調査にかかる組織は以下のとおりである。

調査主体 山梨県教育委員会（所管課：学術文化課）

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

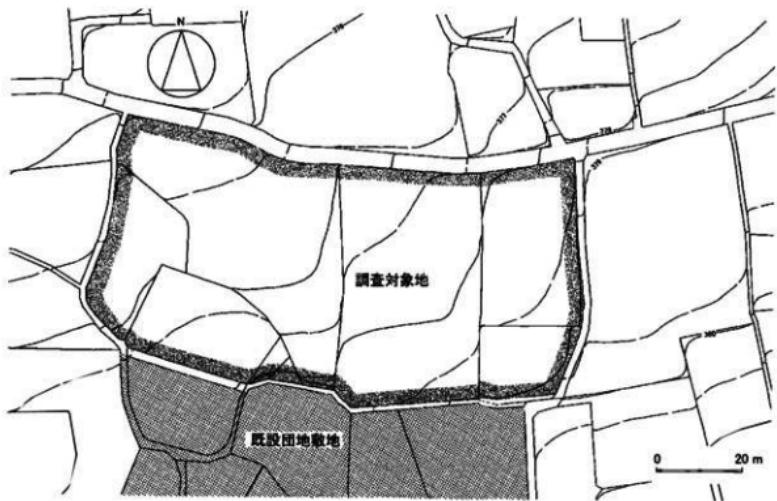
調査担当者 調査研究課調査第一担当 山本茂樹・野代幸和

〃 調査第二担当 澤登正仁・今福利恵（以上、平成5年度）

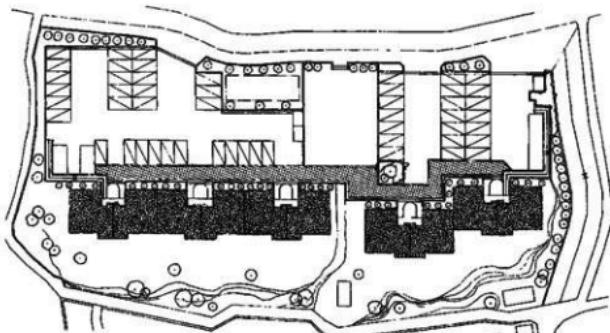
調査研究課調査第五担当 出月洋文・澤登正仁（平成6年度）

発掘調査作業員 芦沢津屋子、雨宮滋美、荒川公子、荒川奈津江、池谷馨、岩間藤江、岩間行子、小幡裕巳、金子浩江、久保田留代、弦間みづみ、河野茂、越石力、小林よ志子、坂本逸郎、志田由記子、志村悟、平重蔵、千須和貴子、内藤巳喜子、長坂清、中村郁子、中村君子、名取静、西脇誠、橋本和美、平山勝子、藤巻公恵、藤巻ひさ江、保坂武子、星野松子、水上五郎、水上秀樹、宮川ともゑ、村松おとめ、村松まさみ、矢崎米子、渡辺徳子、渡辺初江（以上、現地調査）
雨宮洋子、飯田みづほ、石原清子、石原由美子、荻原光代、小野恵、武田きく江、内藤富代、中込星子、中村隆代、正木なつ子、丸山輝雄、矢崎継、渡辺和子（以上、現地調査および整理）
齊藤律子、佐野眞雪、塩島富美子、清水友美子、中込みち子、古屋茂子、望月厚子、渡辺洋子
(以上、整理)

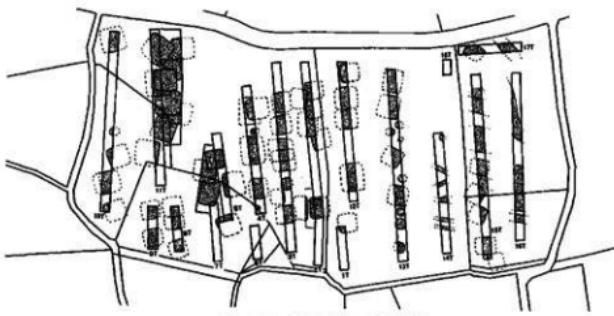
なお第2次調査の際に、海外技術研修員の雨森サン德拉奈美さん（ブラジル）が8～9月に参加している。



第1図 調査対象範囲と調査前地形



第2図 調査原因となった工事計畫



第3図 試掘調査の実施結果

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

北中原遺跡は、東八代郡一宮町塙田の字北中原に所在する。

調査対象地は大小あわせて8筆に及んでいた（第1図参照）が、県営団地建設事業にかかる公有地化に伴って合併され、調査時以降、字北中原585番地となっている。

本遺跡の立地は、笛吹川支流の金川が形成した扇状地の扇尖部にあって、調査対象地における標高は376～380mとなっている。南東から北西へ100mに対し4m程度下がるといった緩斜面で、また遺跡周辺には扇状地特有の細かな起伏が見られ、調査地内にあっても小さな尾根状部と谷状部が平行する状況が観察された。

遺跡周辺における土地利用現況を見ると、調査地も含め、大部分がモモまたはブドウを栽培する果樹園となっている。遅く、近代以降の土地利用の変遷を見ると、扇状地という地形的制約から、当初はクワに比重が置かれた畑作が中心であったが、部分的に遺跡の東側400mを流れる田垂川の流域などでは水田も形成されていた。しかし、1945年以降、畑作地は徐々にクワからモモを主体とした果樹に転換はじめ、1960年代にはそうした傾向が加速し、かつて水田の見られたところも含め見渡す限りと形容されるほどとなり、国内有数生産量を誇る果樹園地帯となった。

こうした土地利用下にあって、次節に見るように、本遺跡周辺には多くの埋蔵文化財の包蔵地が分布しており、それらの遺跡は、大抵の営農行為においても大きく損なわれることなく、今日まで伝わってきていた。しかし、本遺跡の南側100mを東西に通過する中央自動車道の1980年前後の建設工事を契機に、近年、農業経営における状況変化などから、果樹園地が徐々に道路やその他の公的施設、商業施設などに変わることが目立つて多くなってきており、開発事業に伴って行われる今回の埋蔵文化財の事前調査等の件数も増加してきている。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡がのっている金川扇状地は、はるか昔の地質時代から長い年月をかけて形成されたものといえるが、この地域で人の暮らしが明確にたどれる1万年余り前には、現在とほぼ同様の状況になっていたと見られる。この金川扇状地にあっては、国分寺が造営された古代を中心に、相互に関連性をもつような遺跡が比較的濃密に分布する状況は周知のとおりであり、遺跡の面からこの地域に原始古代から中世にかけて継続的に土地利用がなされてきたことが指摘される。

ここで周辺の遺跡の状況について時代を追って概観しておくと、旧石器時代から縄文時代にかけては、金川扇状地（特に右岸側）の標高360～380m前後と東方、京戸川扇状地の標高440～450m辺りとに分布が見られる。本遺跡も含まれる前者では、国分寺西遺跡、国分寺南遺跡、豆塚遺跡、北堀遺跡などがあり、後者は駿遊堂遺跡群に相当する。

続く弥生時代から古墳時代にかけては、本遺跡に隣接する塙田地内や国分寺地内などでも遺物の出土が散見されるが基本的に希薄で、遺跡分布の中心は標高360m前後から下、扇端部に向かっていく傾向が見られる。

古墳時代も後半になると、この周辺には横穴式石室を有す後期古墳が多く築造されるようになる。金川沿岸域の四塚古墳群や長田古墳群、塙田（楽音寺）古墳群、国分寺地古墳群など、また京戸川右岸の千米寺古墳群などがそれで、県下でも有数の後期古墳群の集中域として知られる。

7世紀代までの開発形態の限界からか、専ら奥津城としての位置づけが主であった本遺跡の周辺も、つぎの8世紀以降になると、政治経済的な土地利用がにわかに高まりを見せるような状況になる。すなわち集落遺跡等が増加し、とくに本遺跡の西側1kmに国分僧寺、国分尼寺の造営が開始され進展する奈良時代末から平安時代半ば過ぎまでは、当地に古代甲斐國の一大拠点たる活況がもたらされたことを物語るように、濃密な遺跡群の分布が確認されている。本遺跡に近接する塙田周辺に限って見ても、笠木地蔵遺跡、北堀遺跡、東新居遺跡などで中央自動車道建設の際の面的な発掘調査により実像の解明が進んでおり、また一宮町教育委員会によって継続的に行われている国分寺周辺地域の調査成果からも、該期における当地方の繁栄ぶりが明らかにされてきている。

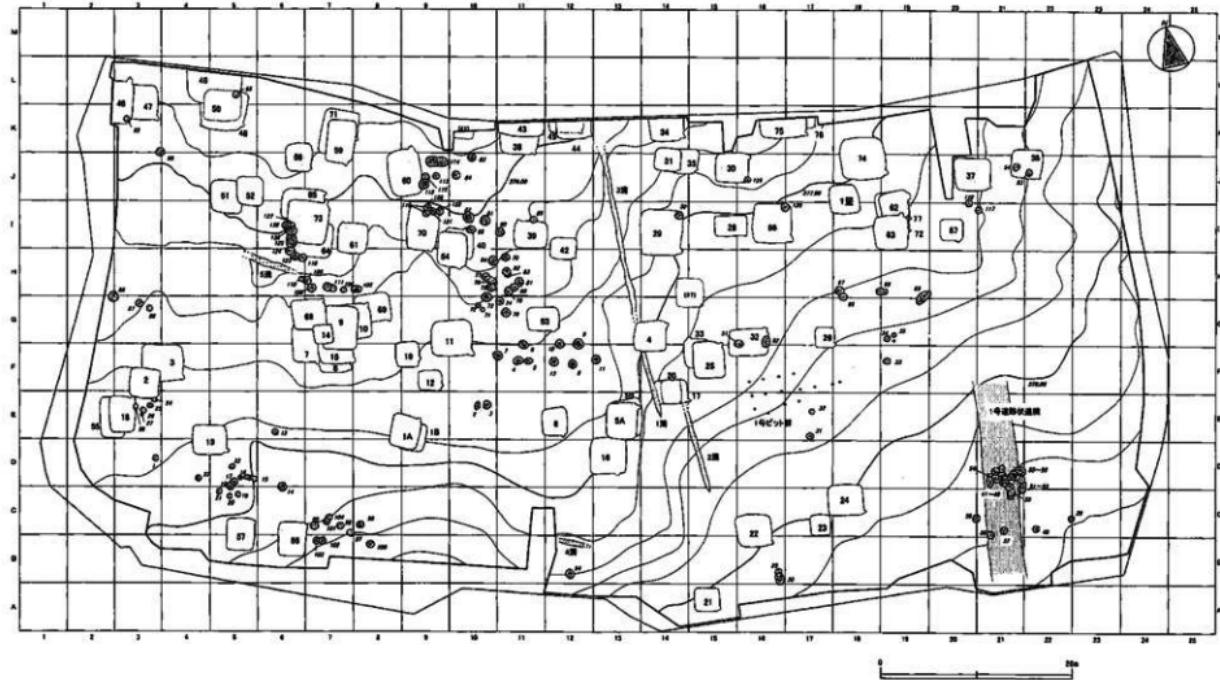
『甲斐国志』は建長7（1255）年に甲斐国分寺の諸堂の焼亡を伝えるが、その少し前から集落遺跡は影を潜めている。しかしそれは周辺に社会的な動きがなくなったということではなく、竪穴住居で構成される從前の形態の集落からの変化を意味すると見られ、実際断片的ながらもこの周辺一帯には中世遺物を出土させる遺跡が、他地域より高い密度で確認されている。それは中世塙田郷に勢を張ったとされる塙田長者の伝説のバックグラウンドに相当するものと見ることができよう。

以上に見たような遺跡環境にあるが、改めて強調的に確認しておくことは、本遺跡が甲斐国分寺跡の東に直線距離0.5kmの近接した位置関係にあり、今後も含めて注目のされるところであるということである。



第4図 北中原遺跡の位置とその周辺遺跡

- | | | | | | |
|-------------|------------|------------|---------|--------------|----------|
| 1 北中原遺跡 | 2 甲斐国分寺跡 | 3 甲斐国分尼寺跡 | 4 北堀遺跡 | 5 東新居遺跡 | 6 天神原遺跡 |
| 7 笠木地蔵遺跡 | 8 豆塚遺跡 | 9 国分寺南遺跡 | 10 松原遺跡 | 11 経塚古墳 | 12 電ノ木遺跡 |
| 13 甲斐国分尼寺遺跡 | 14 両ノ木神社遺跡 | 15 車地蔵遺跡 | 16 鞍掛遺跡 | 17 託堂遺跡 | |
| 18 筑前原北遺跡 | 19 筑前原遺跡 | 20 国分尼寺北遺跡 | 21 桜畠遺跡 | 22 矢倉遺跡 | 23 北大内遺跡 |
| 24 西田町遺跡 | 25 大原遺跡 | 26 御幸道遺跡 | 27 狐原遺跡 | 28 茶かん遺跡 | 29 純塚遺跡 |
| 30 二之宮遺跡 | A 国分築地古墳群 | B 四ツ塚古墳群 | C 長田古墳群 | D 塩田(楽音寺)古墳群 | |
| E 千米寺古墳群 | | | | | |



第5図 調査区全体図

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査区の設定と造構調査

(1) 調査区設定

今回の北中原遺跡の発掘調査では、東八代郡一宮町塙田字北中原585番地の約6,000m²の全面を対象に本調査事業が実施された。

調査の原因となった県営住宅の建設計画は、敷地の中にRC5階建ての30戸棟および20戸棟の2棟を建て、その周囲に駐車場その他の外構施設を配置する内容であった。建築自体が補助事業で認可事業期間内に工事工程の確保をする必要から、初年度に30戸棟一棟分の建築に必要な範囲約1,000m²を調査し、終了後は直ちに1棟目の建築工事側に引き渡し、翌年度には建築工事と並行しながら、残り5,000m²を調査するという行程がとられ、その年度割りの調査区設定は第6図のとおりとなっている。

(2) グリッド配置

第1次調査の着手段階で、調査対象地全体を見渡して最も効率よい任意の方向を基準に5m方眼のグリッド設定を行い、第2次調査でもそれを踏襲した。グリッドには、東西方向に西から東へ1から25まで番号付けし、南北方向に南から北へ順にAからMまでのアルファベットを割り当て、それぞれの組み合わせでG-4あるいはH-15などのようにグリッド名を表示した。

なおこの調査で用いたグリッドは国土座標と整合するものではないが、周辺で調査を進めている一宮町教育委員会では遺跡相互の関係を把握し、ここの調査成果を体系的に見るために国土座標を基準にしたグリッド設定を行っており、本調査の成果もそれらと関連付けできるよう土地地区画の測量成果に基づいた座標系を第6図の中に示した。

(3) 造構調査の方法

造構調査手順は原則として、重機による表土・耕作土の剥ぎ取りを行い、埋蔵文化財包含層の直上からは人手によって薄く土を削りながら造構の検出作業を進めた。確認された造構は、造構ごとに検出順に造構番号を付し、造構内に堆積した土（覆土）の掘下げを行い、遺物の検出や造構自体の把握につとめた。

造構面図の作成には、1/20スケールでの平板実測とグリッド杭を基準にした1m方眼の造り方実測を併用しているが、カマドの精査などにおいて1/10の、道路状造構などの広範囲に及ぶ造構では1/40のスケールによる実測を行っている。また造構全体図作成においては、複雑な調査行程のためその都度1/100スケールで造構平面の記録を進め、併せて2.5mメッシュで造構面のレベル記録を行った。現地調査終了の段階で数枚に別れたこれらの実測図を集め、20cm間隔のコンターを描きこして、全体図としている。

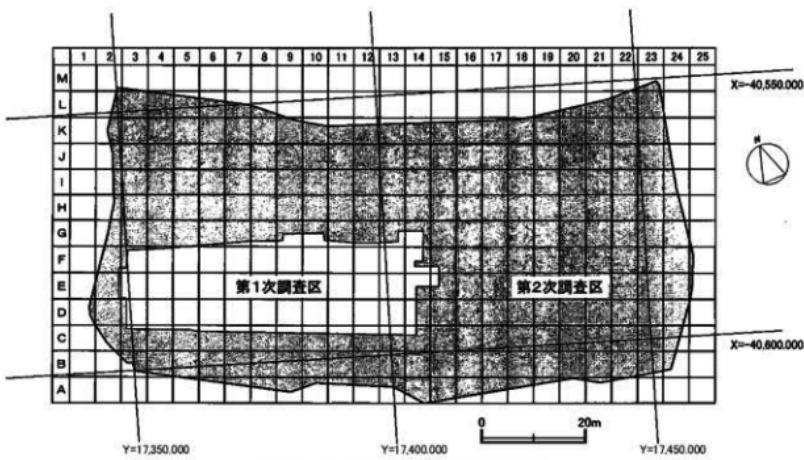
空中写真撮影は、初年度の終了段階に実施しているが、2年次は2棟の団地建物を建てながらの調査であったため、実施を見送り、建築中の建物の最上部などからの撮影により、欠を若干なりとも埋めるよう留意した。

なお、竪穴住居跡の調査については、一般的な調査の進め方のほか、とくに調査後半段階でのカマド施設の精査でセクション記録を略し、替わりに石組みの見通し図作成に重点を置いているところがある。また住居内に点在した礫やカマド石組みの用材としての礫などは、水洗いし通し番号を付した後、大きさや煤の付着状況などを観察しデータを取るようとしたものもある。

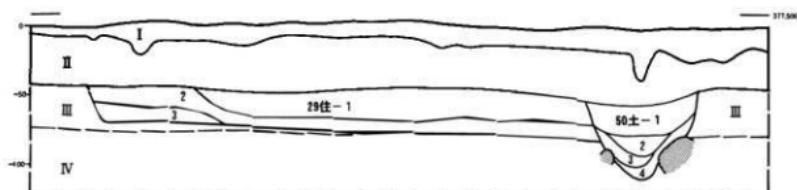
第2節 基層序

今回調査の実施範囲における埋蔵文化財包含層を含めた標準的な層序は、第7図に例示したような状況であった。同図は、平安期の29号住居跡とそれより新しく掘り込まれた中世の頃の50号土坑にかかる部分の現況地表面からの土層の記録で、図中のⅠ層は暗褐色土で、當時耕作が及ぶ表土層であり、Ⅱ層も暗褐色土であるがやや黒味と縞まりが増し、十数年あるいはそれ以上の頻度で作物の改植のための深耕や土壤改良のための天地返しが多く及んだ層と見られる。まばらに遺物が混じる。Ⅲ層は地山の上部にあたる暗黄褐色土で、遺物を含まず、基本的にはこの層の上面が造構確認面となっている。Ⅳ層は黄褐色の砂質土で、大小の礫が多く混じる。地山の基盤をなす土層である。調査期間中に、工事引き渡し後のJ-13グリッド周辺で、合併処理槽埋設のための掘削工事の際の観察では、表土下3m余りのところまで礫が大型化するものの同様な扇状地に普遍的な堆積が確認された。

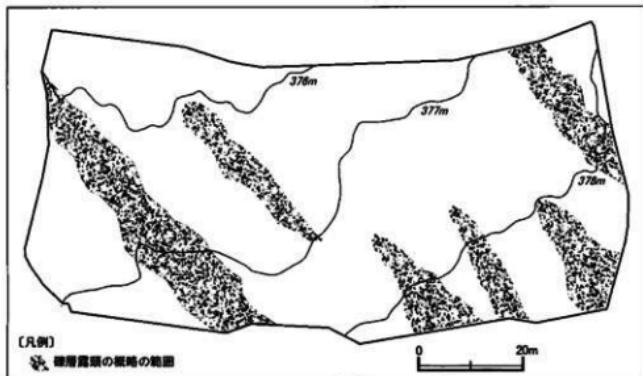
なお、Ⅱ層とⅢ層の間には、縄文遺物を包含する暗褐色土層がH-22グリッド周辺で、平安時代遺物を包含する暗褐色土層がH-15グリッド周辺などで、中近世遺物を包含する暗黒褐色土層がK-12グリッド周辺でそれぞれ部分的に確認されている。また、Ⅲ層とⅣ層の境界は数十cmの幅で上下の変化が有り、高いところではⅣ層が直に竪穴住居跡の床面や造構確認面にまで露頭する状況も見られるが、この集落跡の構成を考える上での参考とするため、Ⅳ層の露頭が確認される範囲を第8図に模式的に示した。



第6図 調査の設定およびグリッド配置



第7図 標準的な土層



第8図 地山疊露頭状況見取図

第4章 発見された遺構と遺物

ここでは今回の2年次にわたる北中原遺跡の発掘調査の中で確認された遺構と遺物について報告する。

調査の結果、発見された遺構は、竪穴住居跡（平安時代）77、土坑（縄文、平安～中世）131、特殊小坑（平安時代）3、竪穴遺構（平安～中世）1、柱穴群（平安～中世）1、溝跡（中世）5、道路状遺構（中世）1、集石土坑（縄文時代）1、遺物集中区（縄文時代）1などがあった。以下、遺構の種別ごとにその出土遺物も合わせ見していく。

第1節 遺構と遺構に伴う遺物

（1）竪穴住居跡

第1次調査で22軒、第2次調査で55軒、合わせて77軒の竪穴住居跡が確認された。いずれも平安時代の半ば頃を中心とするもので、多くが内部施設として石組みカマドをもっているものである。それぞれの住居ごとに、発見の状況や重複関係、形状・規模や施設、出土遺物などについて、項目立てて説明する。

1 A号住居跡（遺構：第9図、遺物：第43図・第76図1）

（概要）調査区の中央部西寄り、D-8・D-9・E-8・E-9グリッドに位置する竪穴住居跡である。

（重複）1軒の住居跡として調査を進めたが、途中から同位置で1B号住居跡と重複するものと判明し、その前後関係は1B号（旧）→1A号（新）と理解された。

（形状）やや歪んだ隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.5m×南北4.1m。床面までの深さは南壁で28cm、北壁で10cmを測る。

（床面）床面標高は376.57mを測る。南側半分ほどに搅乱を受けているほかは、貼り床も確認され、全体的によく踏み固められている。

（施設）壁溝、柱穴などは確認されていない。カマドは、北壁の中央よりやや東寄りに付設される。石組みカマドで、袖石が部分的に遺存している。

（遺物）土師器で壺（1・2）、高足高台付壺（3）、小型甕（4）、甕系鉢（5）および羽釜（6）などがある。

1 B号住居跡（遺構：第9図）

（概要）調査区の中央部西寄りで、1A号住居跡とほぼ同位置に、東に1mほど偏して確認された竪穴住居跡である。

（重複）1A号住居跡と重複し、1A号に切られている。

（形状）やや歪んだ隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西4.1m×南北3.5m。床面までの深さは南壁で28cm、北壁で10cmを測る。

（床面）床面標高は376.60mを測る。大部分1A号住居跡に切られているが、東辺部寄りで比較的良好な床が1A号よりも若干高めのレベルで確認されている。

（施設）壁溝、柱穴などは確認されていない。カマドも1A号住居跡と重複する関係が確認されなかった。

（遺物）土師器片などが若干見られたが、図示できるものはなかった。

2号住居跡（遺構：第9図、遺物：第43図・第80図1・30）

（概要）調査区の南西、E-3からF-3グリッドにかけ位置する竪穴住居跡である。

（重複）3号住居跡と重複し、関係は3号（旧）→2号（新）である。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.3m×南北3.3m。床面までの深さは南壁、北壁ともに30cmほどであった。

（床面）床面標高は376.57m。比較的平坦で、よく踏み固められている。竪穴内南側で、床面よりやや浮いた状態で、20cm内外の礫が点在していた。

（施設）壁溝はない。南西隅に寄ったところに深さ20cmほどの小土坑が見られた。カマドは南東コーナーに付設されていた。石組みカマドで、部分的に解体され、用材の礫を積み上げた状況が観察される。積まれた礫の下部には、左右の一部の袖石が原位置を保っており、焚き口部での幅は40cm程度と推定された。

（遺物）土師器が主で、壺（1～3・5～9）、皿（4）、甕（10～14）および羽釜（15）などが見られた。また鉄製品で刀子（第80図1）、釘（同図30）があった。

3号住居跡（遺構：第9図、遺物：第43図）

（概要）調査区の南西、F-3・F-4グリッドに位置する。

（重複）2号住居跡と重複し、関係は3号（旧）→2号（新）である。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西4.5m×南北3.5m、床面までの深さは南壁で32cm、北壁で23cmを測る。

（床面）床面標高は376.57m。貼床が確認されている。

（施設）カマドは南東コーナーに付設される。石組みカマド

（遺物）土師器で壺（1・2・5）、皿（4・6）、高足高台付壺（3）、および羽釜（7）などがある。

4号住居跡（遺構：第10図、遺物：第44・45図・第80図3）

（概要）調査区の中央部、F-13・F-14・G-13・G-14グリッドに位置する。

（重複）他の遺構との重複関係はない。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.5m×南北3.6m、床面までの深さは南壁で33cm、北壁で17cmを測る。

（床面）貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）カマドは北東コーナーに付設される。石組みカマドで左右の並びが確認され、焚き口部での幅は35cmほどである。

（遺物）土師器で壺（1～20）、羽釜（21）などのほか、甕（22～24）がある。このうち土師器の壺の19・20は墨書きが見られ、19は体部外面に正位で「有」と読める。20は判読困難であるが、体部外面に逆位で記せられたものと見られる。ほかに第80図3に示した鉄製品（釘か）がある。

5A・5B号住居跡（遺構：第10図、遺物：第45図・第80図28）

（概要）調査区の中央部南寄り、E-13グリッドに位置し、ほぼ同じ位置に主軸をやや異にして2軒の竪穴住跡が存在する。擾乱等により確認が容易でなかったため、調査中は明確でなかったが、平面形やカマド位置などの検討により2軒重複と理解された。

（重複）16号住居跡と重複し、関係は古い方から新しいものへ16号→5B号→5A号となっている。

（形状）ともに隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）5A号住居の方が東西2.8m（推定）×南北3.5m、5B号は東に0.8m寄って軸方向を西に振った状況だが規模は5A号とほぼ同じくらいで、東西3.0m（推定）×南北3.7mと見られる。床面までの深さは、ともに南壁で10cm、北壁で17cm程度となっている。

（床面）床面標高は、ほぼ同じで376.82m。貼床・硬化面は良好に観察されていない。

（施設）カマドは、5A号住居跡については東壁北寄りに付設される。石組みカマドと見られるが、残存状態はよくなく、右袖の一部の石が残るのみである。また5B号のカマドは不明だが5A号と同じ辺りとも見られる。

（遺物）土師器で皿（1～3）、壺（4）、高足高台付壺（5）、甕（6・7）などのほか、鍋と考えられるもの（8）が見られた。以上の図化されたものは、いずれも5A号住居跡に帰属する。なお5B号住居跡では、第80図28に示した刀子が1点、東壁際の覆土上部より出土している。

6号住居跡（遺構：第10図、遺物：第45図・第80図2・4）

（概要）調査区の中央部南寄り、E-11・E-12グリッドに位置する。

（重複）他の遺構との重複関係はない。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.0m×南北3.2m、床面までの深さは南壁で13cm、北壁で5cmを測る。

（床面）床面標高は376.75m。東半分に烟灌用送水パイプ埋設による錯乱があるなど状態はよくない。

（施設）カマドは南東コーナーに付設される。石組みカマドの可能性が考えられるが全壊に近い。

（遺物）土師器で壺（1～3）と、甕系鉢（4）がある。また第80図2の刀子、4の釘も見られた。

7号住居跡（遺構：第11図、遺物：第46図・第76図2）

（概要）調査区の中央部西寄り、F-6・F-7・G-6・G-7グリッドに位置する。

（重複）8号、14号、15号、68号の各住居跡と切り合っている。8号より新しく、その外のものに先行する。

(形状) 開丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.3m（推定）×南北3.8m、床面までの深さは、調査時期と状況が異なるが、南壁で30cm、北壁で15cmとなっている。

(床面) 床面標高は376.23m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは南壁の東寄りに付設される。石組みカマドであったと思われるが、原位置を保つ袖石等は残らない。

(遺物) 土師器で壺（1～3）、高足高台付壺（4）、甕（7・8）などのほか、転用硯かと見られる須恵器の甕の体部破片（6）、灰釉陶器の椀（5）があった。1の壺には、体部外面に逆位で「親」と判読される墨書きが見られた。ほかに第76図2の丸瓦片が出土している。

8号住居跡（遺構：第11図、遺物：第46図・第76図3～4・第80図6・第81図9）

(概要) 調査区の中央部西寄り、F-7グリッドに位置する。

(重複) 7号、15号住居跡などと切り合っていて、本住居が先行する。

(形状) 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.0m×南北1.5m以上、床面までの深さは南壁で35cmを測る。

(床面) 床面標高は376.34m。貼床が部分的に確認されている。

(施設) カマドは東壁の南寄りに付設される。石組みカマドだが解体が進み、左袖石を一つ残すのみである。

(遺物) 土師器で壺（1～4）、高足高台付壺（5）、甕（6）、甕（7）、甕系鉢（8）などが見られた。このほか覆土内より北宋錢の熙寧元寶が1点出土している。また平瓦片や鐵製品（鎌）などもある。

9号住居跡（遺構：第11図、遺物：第46図・第81図15）

(概要) 調査区の中央部西寄り、F-7・F-8・G-7・G-8グリッドに位置する。

(重複) 10号、14号、15号、68号住居跡などと重複関係をもち、最も新しい。

(形状) 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.0m×南北4.8m、床面までの深さは南壁で35cm、北壁で20cmを測る。

(床面) 床面標高は376.20m。重複の関係で、貼床としての状況が確認されている。

(施設) カマドは西壁の北寄りに付設される。焼土の堆積が確認されたのみで、石組みかどうかも明確にしない。

(遺物) 土師器が主で、壺（1～3）と、皿（4）、甕（5）、甕系鉢（6・7）などがある。また覆土内より北宋錢の至和通寶が1点出土している（第81図15）。

10号住居跡（遺構：第12図、遺物：第47図）

(概要) 調査区の中央部西寄り、G-7・G-8グリッドに位置する。

(重複) 9号、14号、69号住居跡などと重複関係をもち、9号、14号より古く、69号より新しい。

(形状) 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.0m×南北3.5m、床面までの深さは南壁で35cm、北壁で20cmを測る。

(床面) 床面標高は376.15m。貼床は明確でないが、中央部で硬化が確認されている。

(施設) カマドは東北コーナーに付設された石組みカマドで、両側の袖石の並びがよく残る。焚き口部の幅は35cmを測る。焚き口部の中ほどに支脚かと見られる小砾が置かれていた。

(遺物) 土師器で壺（1～3）、高足高台付壺である可能性が高い皿（4）、羽釜（6）などのほか、灰釉陶器の碗（5）が見られた。

11号住居跡（遺構：第12図、遺物：第47図・第76図5）

(概要) 調査区の中央部西寄り、F-9・F-10・G-9・G-10グリッドに位置する。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 開丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.1m×南北3.7m、床面までの深さは南壁で23cm、北壁で16cmを測る。

(床面) 床面標高は376.37m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは南東コーナーに付設される。石組みカマドであったが、解体が進み両側の袖石の一、二を残す程度であった。

(遺物) 土師器で壺（1～3）と、甕（4）がある。ほかに丸瓦片（第76図5）もある。

12号住居跡（遺構：第12図、遺物：第47図・第81図5）

(概要) 調査区の中央部西寄り、F-9グリッドに位置する。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西2.9m×南北2.3m、床面までの深さは南壁で22cm、北壁で21cmを測る。

(床面) 床面標高は376.54m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは東壁の南寄りに付設される。カマド構造は石組みによると思われるが、解体が進んでおり、本来の構造を残していない。

(遺物) 土師器で壺（1～3）と第81図5の鉄滓が見られた。

13号住居跡（遺構：第13図、遺物：第47・48図・第81図4・第82図1）

(概要) 調査区の南西、D-4・D-5・E-4・E-5グリッドに位置する。

(重複) 他の遺構との重複関係はないが、南東側に土坑（16号土坑他）が集中して存在する。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.0m×南北2.7m、床面までの深さは南壁で26cm、北壁で17cmを測る。

(床面) 床面標高は376.55m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは南東コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で壺（1～5）、皿（6・7）、壺かと見られるもの（8）、甕（10～12）、小型甕（13）があり、灰釉陶器の椀（9）も見られた。また第81図4に示した碗形の鉄滓も出土している。

14号住居跡（遺構：第13図、遺物：第48図）

(概要) 調査区の中央部西寄り、G-7グリッドに位置する。

(重複) 7・9、15号住居跡などと重複関係をもち、7・15号より新しく、9号より古い。

(形状) 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西1.8m（推定）×南北2.0m、床面までの深さは、周囲すべて他の住居跡と重複しており、セクション観察での数値であるが、東壁で20cm程度である。

(床面) 贼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは東北コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で壺（1～4）が見られた。

15号住居跡（遺構：第13図、遺物：第48図）

(概要) 調査区の中央部西寄り、F-7・F-8・G-7・G-8グリッドに位置する。

(重複) 7・9・10・14号住居跡などと重複し、10号より新しく、7・9・14号より古い。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.0m以上×南北3.4m（推定）、床面までの深さは東壁カマド付近で35cmとなっている。

(床面) 贊床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは東南コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で壺（1～5）、高足高台付壺（6・7）のほか、灰釉陶器の椀（8）が見られた。

16号住居跡（遺構：第14図、遺物：第48図）

(概要) 調査区の中央部南寄り、D-13グリッドに位置する。

(重複) 5号住居跡と重複し、16号（旧）→5号（新）である。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.3m×南北3.9m、床面までの深さは南壁で9cm程度と全体に浅い。

(床面) 贊床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは南東コーナーから付設される。

(遺物) 土師器で皿（1・2）、高足高台付壺（3）がある。

17号住居跡（遺構：第14図、遺物：第49図）

- （概要）調査区の中央部南寄り、E-14・F-14グリッドに位置する。
（重複）20号住居跡と重複し、20号（旧）→17号（新）である。
（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。
（規模）東西4.0m×南北2.8m、床面までの深さは南壁で35cm、北壁で20cmを測る。
（床面）貼床・硬化面は全く確認されていない。
（施設）カマドは南東コーナーに付設される。石組カマドと見られるが残りはよくない。
（遺物）土師器で壺（1・2・5～7）、皿（3・4）、小型甕（11）、羽釜（9・10）、甕（12・13）、須恵器の甕（8）などが見られた。

18号住居跡（遺構：第14図、遺物：第49図）

- （概要）調査区の西端、E-3グリッドに位置する。
（重複）55号住居跡と重複し、55号（旧）→18号（新）である。
（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。
（規模）東西2.7m×南北4.0m、床面までの深さは南壁で29cm、北壁で24cmを測る。
（床面）貼床・硬化面は全く確認されていない。
（施設）カマドは北東コーナーから付設される。
（遺物）土師器で壺（1・2）、皿（3・4）、高台をもつ壺系鉢（5）、甕（6・7）がある。

19号住居跡（遺構：第15図、遺物：第50図）

- （概要）調査区の中央部西寄り、F-8・F-9グリッドに位置する。
（重複）他の遺構との重複関係はない。
（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。
（規模）東西2.3m×南北2.5m、床面までの深さは南壁で36cm、北壁で20cmを測る。
（床面）貼床・硬化面は全く確認されていない。
（施設）カマドは東壁の中央部やや南寄りに付設される。石組の残りはよくない。
（遺物）土師器で壺（1・2）のほか、灰釉陶器の長頸瓶（3）と思われるものの底部が見られた。

20号住居跡（遺構：第14図）

- （概要）調査区の中央部南寄り、E-14・F-14グリッドに位置する。
（重複）17号住居跡と重複し、20号（旧）→17号（新）である。
（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。
（規模）東西2.7m（推定）×南北2.5m、床面までの深さは17号住居跡の下部で10cm前後である。
（床面）貼床・硬化面は全く確認されていない。
（施設）カマドは確認されなかった。
（遺物）少量で、図示されるものはない。

21号住居跡（遺構：第15図、遺物：第50図）

- （概要）調査区の南寄り、A-15グリッドに位置する竪穴住居跡である。すべての住居跡の中で最も南に位置し、遺跡立地からしてこの住居の本来の周辺生活面の標高はもっと高かったと見られるが、結果的に削平が激しく、残存状況はかなり悪い。なお、本住居跡以降は2年次め（94年）の調査によるものである。
（重複）他の遺構との重複関係はない。
（形状）隅丸方形の平面形を呈し、残存部は浅いが本来は箱形の断面形状を呈したものと思われる。
（規模）東西2.9m×南北2.7m。床面までの深さは南壁で12cm、北壁で4cmを測る。
（床面）床面標高は377.94m、南西側に床面に達する搅乱が見られる。全般に地山の裸の露頭が見られ、踏み固めの状況も弱い。
（施設）カマドは、南東コーナー付近に付設される。残存状況は悪く、袖石を抜き取った状況が見られるところから、両袖石の間が30cm弱となる石組みカマドであったと見られる。
（遺物）図示できた遺物に、土師器で壺（1・2）、皿（3）がある。

22号住居跡（遺構：第15図、遺物：第50図・第76図6・第82図2）

（概要）これも調査区の南寄り、B-16・C-16グリッドにあって、残存状況のよくない竪穴住居跡である。

（重複）他の遺構との重複関係はない。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.1m×南北3.0m。床面までの深さは南壁で8cm、北壁で4cmを測る。

（床面）床面標高は377.81m。地山の礫がそこそこに露頭しているが、比較的平坦で、周辺部を除いてよく踏み固められている。竪穴内南側で、床面よりやや浮いた状態で、20cm内外の礫が点在していた。

（施設）壁溝はない。南西隅に寄ったところに深さ20cmほどの小土坑が見られた。カマドは南東コーナーに付設される。石組みカマドで、部分的に解体され、用材の礫を積み上げた状況が観察された。

（遺物）土師器、瓦、砥石などが検出されている。このうち、図示できたものは、土師器で壺（1・3・5・6）、皿（4・7・8）、高足高台付壺（10）、环系鉢（9）、小型甕（11）、甕（12）などがある。瓦は第76図6に示した平瓦の残欠で、カマド内より、砥石は第82図2のものが北壁寄りの覆土中から出土している。

23号住居跡（遺構：第16図）

（概要）調査区の南、C-17グリッドに位置する。調査段階では住居跡として進めたが、直接に伴う遺物が認められないもので、確実なことはいえないものの、平安時代の竪穴住居とは周壁の立ち上がり方などにおいて若干様相を異にし、形態等から平安以降の竪穴遺構の可能性も考えられる。

（重複）他の遺構との重複関係はない。ただし、次に見る24号住居跡が、東側に10cm弱まで近接しており、これとの同時存在はありえず、状況から24号（旧）→23号（新）との前後関係が推察される。

（形状）平面形はややくずれた隅丸方形で、断面形状は皿形を呈す。

（規模）東西2.9m×南北3.2m。床面までの深さは南壁で8cm、北壁で7cm。

（床面）床面標高は378.00mを測る。貼床は確認されず、ほぼ平坦な床面には、全体的に大小の地山の礫の露頭が見られた。

（施設）壁溝や柱穴のほか、カマドも確認されなかった。

（遺物）覆土に混入した少量の土師器片のみで、図化し得るものはなかった。

24号住居跡（遺構：第16図、遺物：第51図・第80図7）

（概要）調査区の南東寄り、C-17・C-18・D-17・D-18グリッドに位置する竪穴住居跡である。

（重複）他の遺構との重複関係はない。ただし、前項でふれたように23号住居跡が西側に近接し、24号（旧）→23号（新）の前後関係が考えられる。

（形状）平面形はややくずれた隅丸方形で、断面形状は皿形を呈す。

（規模）東西4.4m×南北3.2m、床面までの深さは南壁で15cm、北壁で10cmを測る。

（床面）貼床は確認されず、床面には南北に二分するような東西方向の段差が認められ、カマド前付近の床面標高は377.88m、北半部で377.94mとなっている。この段差の前後でかなりの床面硬化が見られる。なおいくつかのピットが認められたが、その性格は特定できなかった。また床面上には、カマド前周辺を中心大小の礫の投入が観察されている。

（施設）壁溝、柱穴は見られないが、大小のピットが4カ所確認されている。カマドは南東コーナーに付設された石組みカマドであったと見られるが、残存情況が悪く、左側の袖石1つを留めるのみであった。

（遺物）土師器で壺（1・2）、皿（3・4）、高足高台付壺（5）や羽釜（8・9）、甕（10）などがあり、灰釉陶器の椀（7）や輪花椀の破片資料（6）も出土している。7は完形で、見込み底面に平滑化した範囲や口縁部に墨痕と思われるものが観察されることなどから、転用碗と理解される。

25号住居跡（遺構：第16図、遺物：第51・52図・第82図3・第80図8・9）

（概要）調査区の中央部南寄り、F-15からG-15グリッドにかけて位置する竪穴住居跡である。床面からやや浮いて焼土層が一面に覆っていて、火災住居の可能性が見受けられた。

（重複）西側で33号住居跡と重複し、その関係は33号（旧）→25号（新）である。

（形状）歪みのある隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西2.7~3.1m×南北4.4m。床面までの深さは南壁で37cm、北壁では33cmとなっている。

（床面）床面標高は376.83mのカマド前面部と他（床面標高は376.90m）を画すような形で矩の手状に、24号住居跡と同様な段差が見られた。

(施設) 壁溝、柱穴およびカマド以外の施設は確認されていない。カマドは、北東コーナーに付設された石組みカマドだが、解体がなされ、両側に袖石が部分的に残る程度であった。

(遺物) 遺物量は豊富で、住居内全般に散見され、焼土層にあるものは二次的な被熱を受けたと観察されるものも見られた。土師器では壺に外側調整にヘラケズリのあるもの(1・2・4)といもの(8・19・25)が混在し、皿にも前者(3・7)と後者(20・24)がある。5は墨書き土器で、体部外面に複数の文字が認められるが、判読困難なものである。6・26・27についても、いずれも壺の小破片だが墨書きが見られる。他に高足高台付壺(28)、小型甕(33)、甕(32・34)などがあった。須恵器には二次的な利用が認められる甕の破片(30)や「壺G」(29)があり、また良質な縄釉陶器碗(31)も覆土焼土層中より出土している。このほか凝灰岩製の砥石1点(第82図3)、第80図8・9の鉄鎌等も検出されている。

26号住居跡（遺構：第17図、遺物：第53図・第81図7）

(概要) 調査区の中央部東寄りのF-17・F-18・G-17・G-18グリッドにかかる位置に確認された、比較的小ぶりの竪穴住居跡である。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西2.7m×南北2.6m。床面までの深さは南壁、北壁それぞれで28cm程度となっている。

(床面) 床面標高は377.28mを測る。中央部を中心にさほど強くないが硬化面が確認された。なお、カマド前面の床面上には、間層をほとんど置かない状態で、その形や煤の付着状況などからカマドの芯として用いられていた礫が重なり合うように見られたことが注意された。本住居跡のカマド石組みは、次にも触れる通り解体された状況にないことから、他の竪穴住居跡のものを投入したと見られる。

(施設) 壁溝や柱穴などは見られない。カマドは東壁の中央部から南寄りに付設された石組みカマドで、前後の梁石まで残っていて、石組み構造の残存状態はたいへん良好であった。焚き口部での袖石の間隔は内法で45cmとなっている。

(遺物) 土師器が主で、壺(1~6)および甕(7・8)などがある。ほかに第81図7の石杵も見られた。

27号住居跡

(概要) 調査区のほぼ中央の、G-14・G-15・H-14・H-15グリッドにあって、東西3m、南北4mの範囲に遺物の分布が認められたため、27号住居跡として調査を進めたが、明確な床面やカマド等が確認されず、また遺物も図化困難な13点ほどの土師器が得られたのみであったため、整理段階の検討により、住居跡でなくゴミ捨て場的な遺物だまりとして扱うこととし、27号は欠番とした。

28号住居跡（遺構：第17図、遺物：第53図）

(概要) 調査区の中央部北東寄り、I-15・I-16グリッドに位置する竪穴住居跡である。調査区を細分した調査行程の関係で、西側3分の1(94/5月)と東側残り部分(94/11月)と、二時期に分けて調査した。なお、覆土中にはカマド前を除いて、多量の礫が入っているのが特筆される。礫は人頭大かそれ以上の大きさのものもあるが、拳大までの大きさの石が多く、カマド用材の投げ込みとは様相を異にするよう受け止められるものであった。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 東西に長い隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.3m×南北2.4m。床面までの深さは南壁で18cm、北壁で10cmを測る。

(床面) 床面標高は376.86m。カマド前から住居中央部にかけて硬化が見られた。

(施設) 壁溝や柱穴などは見られない。カマドは南東コーナーに付設される。残存状況が良くなく、袖石などは見られないが、おそらく石組みカマドであったと思われる。煙出し側に露頭した地山の礫が黒くすすぐれた状態になっているのが観察された。

(遺物) 遺物量はそう多くなく、図示したものも小片が多い。土師器の壺(1~3・5)、皿(4)などがそれである。5は壺の小破片だが、底部外面に墨書きが見られる。

29号住居跡（遺構：第17図、遺物：第53図）

(概要) 調査区のほぼ中央部で、H-14からI-14グリッドかけて確認された。本遺跡では大きい部類の竪穴住居跡である。

(重複) 本住居跡の東北コーナー部に、出土遺物から中世のものと見られる50号土坑が掘り込まれている。また住居内の北西よりの部分に2つの、推定径50cmほどの掘り込みが存在した。これらもセクション観察こそできなかつたが、内部の礫の詰まり方などから後世の土坑であったと考えられる。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.5m×南北4.9m、床面までの深さは南壁で22cm、北壁で15cmを測る。

(床面) 床面標高は377.12m。貼床は認められず、平坦な床面は、周辺部を除いて硬化していた。

(施設) 壁溝や柱穴などは見られない。カマドは南壁の南東コーナーに付設される。石組みカマドで、両側の袖石の配列の遺存が良好であった。両袖石の間隔は、焚き口部で45cm程度と広めである。

(遺物) 土師器が主で、壺(1)、皿(2~5)、高足高台付壺(6~9)、甕(10~12)などがある。

30号住居跡（造構：第18図、遺物：第54図・第80図11）

(概要) 調査区の中央北側、J-15・J-16グリッドにまたがって位置する竪穴住居跡で、本住居跡も28号住居跡と同様に94年5月と12月の2回に分けて調査することを余儀なくされたものである。

(重複) 本住居跡の南東コーナー部に、より新しいと見られる129号土坑が半分重複して存在した。

(形状) やや東西に長い隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.5m×南北3.3m、床面までの深さは南壁で22cm、北壁で18cmを測る。

(床面) 床面標高は376.48m。貼床は見られず、とくに中央部付近が踏み固められていた。住居内の中央やや東寄りの床面上に、17~8点の人頭大もしくはそれ以上の礫のまとまりが認められた。

(施設) 壁溝や柱穴などは見られなかった。カマドは北壁の北東コーナーに付設されていた。残存状況は良好でなく、本来は石組みカマドであって、おそらく解体を受けたものと思われる。

(遺物) 土師器で壺(1)、高足高台付壺(3~5)、壺系鉢(2)、甕(7)があり、灰釉陶器で椀(6)があった。また第80図11の用途不明の鉄製品が、西壁寄りの床面上より出土している。

31号住居跡（造構：第18図、遺物：第54図・第80図10・第82図4）

(概要) 調査区中央部の北側、J-14からK-14グリッドにかけ位置する竪穴住居跡である。

(重複) 東壁側において35号住居跡と重複し、関係は35号(旧)→31号(新)である。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西2.8m×南北3.0m、床面までの深さは南壁、北壁とともに35cm前後となっている。

(床面) 床面標高は376.18m。薄い貼床が認められた。住居内には床面に接する形で人頭大の礫が点在していた。なお北壁際の貼床の下部から刀子の先端と柄側が破損したものが検出されている。

(施設) 壁溝や柱穴などは見られない。カマドは南東コーナーに付設される。石組みカマドで、両側の袖石の配列が大変よく遺存していた。丁寧な組み方の袖石には、煤の付着も明瞭に看取された。

(遺物) 土師器で壺(1~9)、高足高台付壺(10)などのほか、甕(12)と置きカマドの残欠(11)が見られた。また第80図10は、先に見た貼床下部からの刀子である。このほか砂岩製の砥石も1点(第82図4)検出されている。

32号住居跡（造構：第18図、遺物：第55図）

(概要) 調査区の中央部東寄り、F-15・F-16・G-15・G-16グリッドにかけて確認された竪穴住居跡である。

(重複) ほぼ中程で51号土坑と、東壁部分で52号土坑と重複する。どちらも本住居跡より新しい。

(形状) 東西に長い長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.2m×南北2.8m、床面までの深さは南壁で16cm、北壁で20cmを測る。

(床面) 床面標高は377.05m。西壁寄りで部分的に貼床が確認されている。カマド前の床面上には、40cm大のものを主とする礫がまとまって見られた。

(施設) 壁溝や柱穴などは確認されない。カマドは北東コーナーに付設される。石組みカマドで、両側の袖石が原位置を保っていた。焚き口部での袖石の間隔は内法で30cm程度である。

(遺物) 土師器で壺(1~5)、高足高台付壺(6)、甕(8)があり、灰釉陶器で瓶の破片資料(7)が出土した。

33号住居跡（遺構：第19図、遺物：第55・56図）

- （概要）調査区中央部やや東寄り、F-14・F-15・G-14・G-15の各グリッドにかけて存在した竪穴住居跡である。
- （重複）東側半分近くを25号住居跡に切られている。すなわち重複関係は、33号（旧）→25号（新）である。
- （形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。
- （規模）東西2.7m（推定）×南北3.3m、床面までの深さは南壁で36cm、北壁で34cmを測る。
- （床面）床面標高は376.83m。貼床は認められず、床面の硬化はさほど強くないものであった。
- （施設）カマドは北壁の西寄りに付設されていた。石組みカマドで、両側の袖石がのこり、焚き口部での袖石の間隔は内法で55cmとなっている。カマド内には、土師器甕類を主に遺物が多く、またカマド内の中には支脚の割剝を果たしていたと見られる立石が存在した。
- （遺物）土師器が主体で、壺（1～6）、皿（7～10）、小型甕（11・12）、羽釜（13・14）、甕（15・16）および甕系鉢（17・18）などがあった。10の皿には底部外面に墨書きが認められる。

34号住居跡（遺構：第19図、遺物：第56図・第76図7）

- （概要）調査区の中央部北端、K-14グリッドに位置する竪穴住居跡である。
- （重複）他の遺構との重複関係はない。
- （形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。
- （規模）東西3.3m×南北3.0m、床面までの深さは南壁で37cm、北壁で25cmを測る。
- （床面）床面標高は376.09m。貼床は見られない。周辺部を除いて硬化が見られた。石組みカマドの用材であったと見られる人頭大前後の大きさの礫が、カマド前と北壁側の床面上にまとまって確認されている。
- （施設）カマドは東壁の南寄りに付設される。石組みカマドで、染石を失い、左側の袖石も2個程度抜き去られているが、右側には袖石の脇を固める貼り石がよく現状を保っていた。焚き口部の幅は、据え方などから45cm前後と見られる。
- （遺物）いずれも土師器で、壺（1～3）、皿（4・5）、壺系鉢（6・7）、羽釜（8～10）、甕（11）および置きカマドの破片資料（12）などがある。このうち5の皿は、特異な形態で、見込みに貫通しない2つの小孔が認められるが、他に類例を知らず、用途についても不明である。またカマド内より平瓦片（第76図7）が出土している。

35号住居跡（遺構：第19図、遺物：第57図・第82図5・6）

- （概要）調査区の中央部北側、J-14からJ-15グリッドにかけて位置する竪穴住居跡である。
- （重複）西側3分の1近くを31号住居跡に切られている。すなわち重複関係は、35号（旧）→31号（新）である。
- （形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。
- （規模）東西3.2m（推定）×南北3.8m、床面までの深さは南壁で56cm、北壁で35cmを測る。
- （床面）床面標高は376.25m。貼床は確認されず、床面の顕著な硬化も認められなかった。カマドの前面に、煤で黒ずんだ礫が床面直上で2～3点見られた。
- （施設）壁溝、柱穴は見られないが、住居の中央東寄りに、径20cm、深さ18cmほどの小ピットが存在したが、性格は不明である。カマドは南東コーナーに付設されていた。残存状況のよくなかったが、おそらく石組みカマドであったと見られる。
- （遺物）土師器がほとんどで、図示したものに壺（1～5）、皿（6）、羽釜（7）および甕（8・9・10）などがある。このほか砂岩製の砥石も2点（第82図5・6）検出されている。

36号住居跡（遺構：第20図、遺物：第57図）

- （概要）調査区の東北端、J-21・J-22・K-21・K-22グリッドに位置する。全体的に激しく削平を受け、果樹の苗の植え込み用の穴による搅乱もあったりして、たいへん残存状況が悪い竪穴住居跡であった。とりわけ西半は削平の影響が床面まで達している。
- （重複）2つの土坑が重複する。いずれも本住居跡より新しい。
- （形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。
- （規模）東西3.3m（推定）×南北2.9m、床面までの深さは南壁で13cm、北壁では数cm程度となる。
- （床面）床面標高は377.60m。床面の遺存状態は悪く、硬化面の分布などは確認しえなかった。住居周辺が地山

の跡の露頭する範囲に当たっており、生活時の床面にも疊の露頭があったと推定される状況である。

(施設) 壁溝、柱穴などは存在しなかったと見られる。カマドは南東コーナーに付設され石組みカマドであったが、袖石が押し倒されているような状況が見受けられる。本来は焚き口の幅45cm前後の規模の石組みカマドであったと推定される。

(遺物) カマド内とその前面周辺からの出土で、図示したもののとして、土師器の壺（1～3）、皿（4）などがある。

37号住居跡（遺構：第20図、遺物：第57図）

(概要) 調査区東北部、J-20からJ-21グリッドにかけ位置する竪穴住居跡である。

(重複) 他の遺構との重複関係は見られない。

(形状) 異丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.0m×南北3.1m、床面までの深さは南壁で25cm、北壁で17cmを測る。

(床面) 床面標高は377.08m。周辺部を除いて良好な床面が形成されていた。床面上には、カマド前を中心とする、カマド用材であったと見られる疊が散乱していた。

(施設) 壁溝、柱穴などは確認されない。カマドは南東コーナーに付設される。焚き口側に疊が積まれるなど、ある程度解体の進んだものではあるが、左右の袖石列のほか煙出し側の梁石も1つほど現状を留めるなど、比較的遺存の良好な石組みの状況が確認された。焚き口部での幅は30cmほどである。

(遺物) 土師器の壺（1・2）、皿（3・4）、小型甕（5）、甕（6）などがある。

38号住居跡（遺構：第20図、遺物：第58図）

(概要) 調査区の中央部北端、J-11からK-11グリッドにかけて位置する竪穴住居跡である。

(重複) 北側に43号住居跡が重複し、新旧関係は38号（旧）→43号（新）である。

(形状) いくぶん東西に長い異丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形であった。

(規模) 東西3.7m×南北2.9m（推定）、床面までの深さは東壁で23cmを測る。

(床面) 床面標高は375.63m。基本的に貼床は確認されず、床面の硬化もさほど強くはない。カマド前面に径1m余り、深さ30cmほどの掘り込みがあり、長さ約70cmの石が埋め込まれた状態になっていたが、竪穴住居跡の構築時に邪魔な大石を埋め込んで処理したものかと推察される。

(施設) 壁溝、柱穴などは見られない。カマドは東壁の南東コーナー寄りに付設されていた。石組みカマドと推定されるが、石組みはほとんど原形を留めない。

(遺物) 土師器で壺（1～7・9）、皿（8）、环系鉢（10）、甕（16～18）などがあり、9の環の小片には体部外面に正位で墨書きが見られる。須恵器はいずれも破片で壺（11）、「壺G」（12）がある。さらに、灰釉陶器の皿（13）および瓶（14）や綠釉陶器の輪花皿（15）も出土している。

39号住居跡（遺構：第21図、遺物：第58～59図・第76図8・第82図7）

(概要) 調査区の中央部北寄り、I-11からI-12グリッドにかけて確認された竪穴住居跡である。

(重複) 住居の北辺中央に、より新しい65号土坑が重複している。

(形状) 異丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.7m×南北3.2m、床面までの深さは南壁で36cm、北壁で35cmを測る。

(床面) 床面標高は375.85m。貼床が認められ、床面はほぼ平坦で、壁際を除き硬化していた。

(施設) 壁溝、柱穴などは認められなかったが、南辺中央付近によって径約80cm、深さ20cm弱の皿上の掘り込みが存在した。カマドは北壁に2ヵ所確認された。便宜上、西側隅寄りに付設されたものをAカマド、北壁のほぼ中央に確認されたものをBカマドとした。後者は65号土坑が掘り込まれている影響もあってか、若干の焼土が認められた程度で、遺物も伴わない。このため、両者の前後関係は断定できないが、状況から後者から前者に造り替えられたのではないかと見られる。前者のAカマドは石組みカマドであったと見られるが、残存状況はよくない。

(遺物) 土師器で壺（1～5）、皿（6）、小型甕（9）、甕系鉢（10）、甕（11～14）など、須恵器で壺（7）、灰釉陶器の瓶（8）などが見られ、また第76図8に示した丸瓦の破片や第82図7に示した緑色凝灰岩製の砥石も覆土中より出土している。

40号住居跡（遺構：第21図、遺物：第59図・第82図8）

（概要）調査区の中央部北寄りで、H-9・H-10・I-9・I-10の各グリッドにかけて位置する竪穴住居跡である。

（重複）西半で54号住居跡と重複し、関係は40号（旧）→54号（新）である。また北辺のカマド付近では、85号土坑も本住居跡を切り込む形で重複している。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.1m×南北2.9m、床面までの深さは南壁で47cm、北壁で41cmを測る。

（床面）床面標高は375.68m。貼床は確認されず、床面の硬化もさほど強くはなかった。床面上にはやや浮いた状態で、大小の礫が点在している。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは北壁の中央やや東寄りに付設されていた。カマドに差しかかって85号土坑が掘り込まれていることもあるが、左側に袖石と思われる石が1点検出されたのみで、石組みカマドのかなり解体が進んだものではなかったと見られる。

（遺物）土師器の壺（1～5）、須恵器の壺（7）と壺蓋（6）、「壺G」（8）などがある。土師器の1～4はいずれも墨書きを有する壺で、1は底部外面に「三」が、2は「大」が底部外面に、3は「有」と判読されるものが底部外面に、4は体部外面に「行」かと判読されるものが逆位で、それぞれ墨書きされている。なお3の壺には見込みに漆らしい付着物が目につく。これら4点の墨書き土器のうち、1が北西隅、2が北東隅、3が南東隅寄りの、それぞれ壁際床面上に上向きで出土した、完形ないしはほぼ完形に近いものであり。この3点の在り方は住居の魔絶行為と結びついたものではないかと考えられるものである。須恵器の壺身と壺蓋は前者の方が口径が大きく組み合うものではない。また8はいわゆる壺Gの口縁と底部を欠いた残欠だが、カマド前面から出土した5片が接合したものである。このほか花崗岩製の砥石も1点（第82図8）検出されている。

41号住居跡

（概要）調査区の北側、K-10グリッドにおいて、その一部を確認したもので、大部分が調査区外に続く。調査段階で住居跡として進めたものの、床面がたいへん不安定で、直接的な遺物も見られることなどから、最終的には竪穴住居跡ではない可能性が高いと判断される。

42号住居跡（遺構：第21図、遺物：第60図）

（概要）調査区の中央部北寄り、H-12・I-12グリッドに位置する竪穴住居跡である。

（重複）他の遺構との重複関係はない。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.3m×南北3.0m、床面までの深さは南壁で26cm、北壁で24cmを測る。

（床面）床面標高は376.12m。貼床は見られない。床面はほぼ平坦で、さほど強くないが硬化が認められた。住居のほぼ中央にひとときわ大きな礫が床面上に転じていたほか、南半にいくつか礫が点在している。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは南東コーナーに造られた石組みカマドで、両側の袖石の並びが残るが、解体の影響か、使用時のまとは言い難い状況にある。焚き口部での幅は40cm前後になる。

（遺物）土師器が中心で、壺（1～9）、皿（10～13）、小型甕（14・15）、甕（16・17）などがある。

43号住居跡（遺構：第22図、遺物：第60図・第82図10）

（概要）調査区の中央部の北端で、K-11グリッドに位置する竪穴住居跡で、北側半分程が調査区外になる。

（重複）38号住居跡と重複しており、土層観察により新旧関係は、38号（旧）→43号（新）である。

（形状）南半を調査したのみであるが、隅丸方形の平面形を取るものと見られる。断面形状は箱形。

（規模）東西2.9m×南北1.2m以上。床面までの深さは南壁で14cmを測る。

（床面）床面標高は375.50mで重複する38号住居跡に比して10cm余り深い。南西側で地山の礫が床面上に露頭しているもののほぼ平坦で、安定された床面が形成されていたが、貼床は観察されなかった。床面に接するように、中央やや西寄りとカマド前面に長さ50cm前後の石があり、また人頭大の礫が両者の間にまとまって見られた。人頭大の礫の集中の周りには炭が多く散っていたのが注意された。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは南東コーナーに付設される石組みカマドであるが、かなり解体が進み、右側の袖石が1つ残る程度であった。

（遺物）出土点数はそう多くなく、図示できた遺物としては、土師器の壺（1）、甕（4）のほか、灰釉陶器の

椀（2）、瓶（3）などで、いずれも覆土中からの破片資料である。また砂岩製の砥石（第82図10）も見られた。

44号住居跡（遺構：第22図、遺物：第61～62図・第80図12・13）

（概要）調査区の中央部の北端、K-12グリッドに位置する竪穴住居跡である。

（重複）北西側に1m程度ずれて45号住居跡が重複しており、土層観察から44号（旧）→45号（新）の切り合いが確認された。

（形状）南半のみ確認であるが、隅丸方形の平面形を有し、断面形状は箱形を呈すものと見られる。

（規模）東西3.1m×南北1.5m以上、床面までの深さは南壁で39cmを測る。

（床面）床面標高は375.55m。さほど強くないがカマド前を中心へ硬化が認められた。45号住居跡との切り合いの関係もあって明確にはとらえきれなかったが、土層観察によるとカマド周辺に比べて7cmほど西側が高い、24・25号住居跡などで確認されたような段差が認められる。また床面上にはいくつか礫の点在が見られた。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは、石組みカマドで、東壁の南東コーナー寄りに付設されている。焚き口側の梁石を失う程度で、比較的良好な遺存状態である。焚き口部の幅は約40cmとなっている。右側の袖には、34号住居跡の場合と同様なカマド脇を固める貼り石が設けられている。

（遺物）遺物量は豊富で、図示できたものだけでも38点になる。このうち土師器では、壺（1～11・13～18・24～27）、皿（12・19～23）、高足高台付壺（28～31）、羽釜（35）、甕（36～38）などがあり、灰釉陶器で椀（32）、瓶（33・34）などがある。このうち土師器の壺の24～27の4点は、いずれも細片で判読困難だが、墨書が確認されるものである。また32の椀の見込みに、擦って平滑になった範囲が認められる。33の瓶は体部下半の大型破片で、そのまま火にかけ、鍋として再利用したような状況が観察される。このほか、第80図12に示した刀子、同図13の釘などの鉄製品の出土も見られた。

45号住居跡（遺構：第22図、遺物：第62図・第76図9・第82図9・第81図1）

（概要）調査区の中央部の北端、K-12グリッドに位置し、北側の大部分は調査区外になる竪穴住居跡である。

（重複）あとから南西側に寄って設営された44号住居跡と重複している。

（形状）これも南半のみ確認であるが、隅丸方形の平面形を有し、断面形状は箱形を呈すものと見られる。

（規模）東西3.4m×南北1.2m以上、床面までの深さは南壁で42cmを測る。

（床面）床面標高は375.45mで、重複する44号住居跡のカマド側床面に比べ10cmほど低い。貼床は確認されず、床面の硬化もさほど強くはなかった。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは南東コーナーに付設されていた。44号住居跡との切り合いの関係により、たいへん残りが悪い。

（遺物）土師器が主で、壺（1～9・13～15）、皿（10～12）、小型甕（16）、甕（17・18）などがある。このうち土師器の壺の13～15の3点は墨書き土器で、13は体部外面に倒位で「面」と読める。他は細片で判読困難であるが、体部外面に逆位に記されたものと見られる。またこのほか丸瓦の破片1点（第76図9）と砂岩製の砥石1点（第82図9）、フイゴの羽口（第81図1）も検出された。

46号住居跡（遺構：第23図、遺物：第63図）

（概要）調査区の西北端、K-3からL-3グリッドにかけて確認された竪穴住居跡である。西側の大半は調査区外に及んでいる。

（重複）東辺で47号住居跡と重複し、関係は47号（旧）→46号（新）で、さらに89号土坑と重複する。

（形状）東半のみ確認であるが、隅丸方形の平面形を有し、断面形状は箱形を呈すものと見られる。

（規模）東西1.6m以上×南北4.3m、床面までの深さは南壁で39cm、北壁で20cmを測る。

（床面）床面標高は375.46m。貼床は認められず、床面の硬化もさほど強くはなかった。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは北壁の北東コーナー寄りに付設される。焚き口側の梁石を失う程度の、やや良好な遺存状態の石組みカマドであった。焚き口部の幅は23cmで比較的狭く、煙出し側に細長く伸びる構造となっている。

（遺物）出土点数は少なく、図示できた遺物も土師器の壺（1）と皿（2）のみで、いずれもカマド内からの出土である。

47号住居跡（遺構：第23図、遺物：第63図・第83図11）

（概要）調査区の西北、K-3・L-3グリッドに位置する竪穴住居跡である。

（重複）西側に46号住居跡が重複していて、この住居跡に切られている。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.4m×南北3.1m、床面までの深さは南壁で23cm、北壁で20cmを測る。

（床面）床面標高は375.53mで、切り合い関係にある46号住居跡に比べて7cmほど高くなっている。床面は平坦で、周辺部以外は硬化が認められている。住居の中ほどに径75~65cm、深さ40cmの掘り込みがあり、上面が平坦な長さ45cmの平石が床面から2~3cm出る程度に水平に据えられ、平石の周りには貼り床が形成されていたのが注目される。礎石と理解することも可能だが、状況的に見て工作台的な性格を優先して考えたい。

（施設）壁溝、柱穴等は見られない。カマドは南東コーナーに付設された石組みカマドで、両側の袖石の並びを残していた。焚き口部の幅は40cmである。

（遺物）土師器の壺（1~4）、皿（5~6）、高足高台付壺（7）、甕（8~9）があり、砂岩製の砥石（第83図11）も出土している。

48号住居跡（遺構：第24図、遺物：第63図・第76図10・第77図11・第80図14）

（概要）調査区の北西、K-4・K-5・L-4・L-5グリッドに位置する。

（重複）49号・50号住居跡と重複し、関係は古い順に50号→48号→49号である。またさらに95号土坑が北壁東寄りに重複するが、土坑がより新しい。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西5.6m×南北3.9m、床面までの深さは南壁で40cm、北壁で30cmを測る。

（床面）床面標高は375.30m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは2ヶ所確認され、双方共に石組みカマドで、南西コーナー、南東コーナーに付設される。

（遺物）土師器で壺（1）、羽釜（2）などがとともにBカマドに見られた。土師器の壺には、見込みに刻書があり、「女」と見られる文字ではないかと思われる。ほかに瓦および釘かと見られる鉄製品がある。

49号住居跡（遺構：第24図、遺物：第63図・第80図15）

（概要）調査区の北西、L-45グリッドに位置する。

（重複）48号・50号住居跡と重複し、48号・50号の両住居跡より新しい。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西6.0m×南北2.8m以上、床面までの深さは南壁で35cmを測る。

（床面）床面標高は375.30m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。またカマドも確認されなかった。

（遺物）土師器で壺（1）、壺と見られる土器（2）はとともに墨書き土器で、判読困難ではあるが1は底部外面に、2は体部外面に墨書きが認められる。また第80図15の釘も出土している。

50号住居跡（遺構：第24図、遺物：第64図・第77図12）

（概要）調査区の北西、K-4・K-5・L-4・L-5グリッドに位置し、48号住居跡の下部に確認された竪穴住居跡である。

（重複）48号・49号住居跡と重複し、関係は古い順に50号→48号→49号である。また95号土坑が住居床面を掘り抜いて存在する。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.5m×南北3.1m。床面までの深さは、確認面である48号住居跡の床面からの計測で、20cmとなっている。

（床面）床面標高は375.10m。貼床はほとんど見られることなく、中央部を中心にそれほど強くない硬化面が確認されている。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは東壁のほぼ中央に付設される。残存状況は不良で、構造等は不明。

（遺物）土師器で壺（1~9）、甕（10）が見られた。このうち1・2は墨書き土器で、1は判読困難であるが底部外面に記せられ、2も底部外面でこちらは「上」と読める。また第77図12の丸瓦の完形のものが焼土

を被るように検出されている。このほか焼土に混じて多量の粘土塊が確認されているが、スサが入っているものもあり、また一部でかなりの高温を受け表面が溶融するほどのものも見られる。焼き物の焼成窯に相当するような施設を構成していたものが解体され、住居の廃絶とともに投棄されたものと考えられるが、この点は第5章で再度検討する。

51号住居跡（遺構：第23図、遺物：第64図）

（概要）調査区の北西寄り、I-5からJ-5グリッドにかけて確認されたもので、残りのよくない浅い竪穴住居跡である。

（重複）東壁側の一部を52号住居跡に切られている。

（形状）やや歪んだ隅丸方形の平面形をもつ。断面形状は、浅いので確かなことはいえないが箱形と見られる。

（規模）東西3.2m×南北3.3m、床面までの深さは南壁で8cm、北壁で7cmとなっている。

（床面）床面標高は375.87m。貼床は確認されず、平坦な床面にはしっかりした硬化は見られない。

（施設）壁溝や柱穴と見らるものはないが、中央に径25cm、深さ15cmのピットが存在した。カマドは不明で、52号住居跡と切合う部分に存在した可能性もある。

（遺物）出土点数は多くない。図示できたものに、土師器の壺（1・2）、皿（3）がある。

52号住居跡（遺構：第23図、遺物：第64図）

（概要）調査区の北西寄りで、I-5・I-6・J-5・J-6の各グリッドにかけて位置する。調査段階で竪穴住居跡としての扱いで調査を進めたが、カマドが確認されないことや遺物に確かなものが見られないことなどにより、住居跡でない可能性を残すものである。

（重複）西側で51号住居跡と重複し、関係は51号（旧）→52号（新）である。

（形状）やや東西に長い隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.2m×南北2.7m、床面までの深さは南壁で13cm、北壁で11cmを測る。

（床面）床面標高は375.66m。貼床は見られず、中央が低くなる挿り鉢状的な床面で、安定した床面とは認められないものであった。

（施設）壁溝、柱穴はもとより、カマドも確認されなかった。

（遺物）ここでも遺物は少なく、図示できた土師器の壺（1・2）も、いずれも細片である。

53号住居跡（遺構：第25図、遺物：第64図・第83図12）

（概要）調査区のほぼ中央のG-11からG-12グリッドにかけて確認された竪穴住居跡である。住居のやや西寄りを南北に横切る烟突送水管の埋設による搅乱が見られるが、床面に達するほどのものではなかった。

（重複）他の遺構との重複関係はない。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.0m×南北2.7m、床面までの深さは南壁で17cm、北壁で11cmを測る。

（床面）床面標高は376.68m。貼床は確認されていない。中央部を中心に硬化した面が見られた。なおカマド前から中央部にかけて40~15cm大の礫が分布していた。

（施設）壁溝、柱穴は見られない。カマドは南壁の中央部からやや東寄りに付設される。石組みカマドで、一部の袖石と思われるものが見られるが、原位置から動いているようである。

（遺物）土師器の壺（1）、高足高台付壺（2）、灰釉陶器の椀（3）と壺（4）などがある。またこのほかに砂岩製の砥石（第83図12）も出土している。

54号住居跡（遺構：第25図、遺物：第65図・第77図13）

（概要）調査区の中央部北西寄り、H-9・H-10・I-9・I-10の各グリッドにかけて位置する竪穴住居跡である。細分された調査区の境界に当たった関係で、工事行程との調整上の不備により、西端を確認することができなかった。なお覆土中には大小の礫が多量に含まれていた。

（重複）40号住居跡と重複し、新旧関係は40号（旧）→54号（新）となっている。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西1.9m以上×南北3.0m。床面までの深さは南壁で40cmであった。

（床面）床面標高は375.85mで、重複する40号住居跡とより15cmほど上位にある。先行して確認された40号住居跡の調査途上にこの住居の存在が判明したという状況のため、床面の状態等については明確に把握しえ

なかった。

(施設) 壁溝、柱穴は見られない。カマドは南東コーナーにあって、石組みカマドで、残存状況のかなり悪いものであった。

(遺物) 土師器が中心で、壺（1～3・5）、皿（4）、高足高台付壺（6）、甕（7）がある。このほか丸瓦の破片（第77図13）が出土している。

55号住居跡（遺構：第25図、遺物：第65図）

(概要) 調査区の南西、中央部西寄り、E-2からE-3グリッドにかけ確認された竪穴住居跡で、東半は第1次調査と第2次調査の境界に当たる。第1次調査での調査範囲の西端に出ていた18号住居跡は、東西が2.4m分確認され、さらに西に延長が見込まれていたため、第2次調査においてそれに該当する位置で精査を進めたところ本住居跡が確認された。当初は18号住居跡の延長として見ていたが、床面標高と南北幅が合わないので、東側を再精査したところ、本住居跡床面の15cmほど下位から18号住居跡の西壁の立ち上がりが見出され、切り合い関係にある2軒の住居跡であることが認識された経過がある。この段階でそれ以上東側は工事が行われており、本住居跡の東半を確認することは不可能であった。

(重複) 東側に18号住居跡と重複し、18号住居跡に切られている。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西2.5m以上×南北4.6m、床面までの深さは南壁で13cm、北壁で17cmを測る。

(床面) 床面標高は376.25m。貼床は確認されず、硬化状況もそう確かなものではなかった。

(施設) 壁溝、柱穴は見られない。カマドは確認できなかった。

(遺物) 図示できたものに、土師器の壺（1）、皿（2・3）、高足高台付壺（4）、甕（6・7）、灰釉陶器の椀の破片資料（5）などがある。

56号住居跡（遺構：第25図、遺物：第65図）

(概要) 調査区の南西端、B-6からC-6グリッドにかけて位置する竪穴住居跡である。21号住居跡などと同様に削平され残存状況が悪い。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は残りが悪いのではっきりしないが箱形を呈していたと見られる。

(規模) 東西2.8m（推定）×南北3.9m、床面までの深さは南壁で17cm、北壁で21cmを測る。

(床面) 床面標高は377.16m。貼床は確認されず、部分的に地山の礫が露頭する床面はあまり良好ではない。

(施設) 壁溝、柱穴は見られない。カマドは北東コーナーに付設される。残りがたいへん悪く焼土の分布が確認される程度のもので、詳細は不明である。

(遺物) 図示できたものに、土師器の壺（1・3）、甕（4）、灰釉陶器の段皿（2）などがある。3は小片のために皿である可能性も否定しきれないものであるが、とくに判読はできないものの、体部外面に逆位で墨書きが行われている。

57号住居跡（遺構：第26図、遺物：第65図）

(概要) 調査区の南西、B-5・C-5グリッドにかけて位置する竪穴住居跡である。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西2.9m（推定）×南北3.4m、床面までの深さは南壁で10cm、北壁で3cmを測る。

(床面) 床面標高は377.05m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) 壁溝、柱穴は見られない。カマドは北壁の北東コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で甕（1）が見られた。

58号住居跡（遺構：第26図、遺物：第66図、第83図13）

(概要) 調査区の北西寄り、J-6・J-7・K-6・K-7グリッドに位置する。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西2.8m×南北2.9m、床面までの深さは南壁で21cm、北壁で16cmを測る。

(床面) 床面標高は375.61m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) 壁溝、柱穴は見られない。カマドは東壁の2ヶ所にみられ、Aカマドは南東コーナー寄りに、Bカマドは中央部やや南寄りに付設される。

(遺物) 土師器で壺(1~4)、皿(5)、高足高台付壺(6)、羽釜(8・9)、小型甕(10・11)、甕(12~14)があり、また灰釉陶器では瓶(7)があった。ほかに第83図13の砥石が見られた。

59号住居跡（遺構：第26図、遺物：第66図・第83図14）

(概要) 調査区の北西寄り、J-7・J-8・K-7・K-8グリッドに位置する。

(重複) 71号住居跡と重複し、関係は71号（旧）→59号（新）である。

(形状) 四角形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西2.7m×南北4.1m、床面までの深さは南壁で26cmを測る。

(床面) 床面標高は375.58m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは南壁の南東コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で壺(1)、高足高台付壺(3)、壺系鉢(2)があり、須恵器では蓋(4)が見られた。

60号住居跡（遺構：第27図、遺物：第66・67図）

(概要) 調査区の中央部北西寄り、J-8・J-9・K-8・K-9グリッドに位置する。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 四角形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.8m×南北4.5m、床面までの深さは南壁で27cm、北壁で18cmを測る。

(床面) 床面標高は375.67m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは北壁の北東コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で壺(1~7)、皿(8~10)、甕(13・14)、灰釉陶器の瓶(11・12)がある。

61号住居跡（遺構：第27図、遺物：第67図）

(概要) 調査区の中央部西寄り、H-7・H-8・I-7・I-8グリッドに位置する。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 四角形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西2.9m×南北3.5m、床面までの深さは南壁で26cm、北壁で18cmを測る。

(床面) 床面標高は375.85m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは北壁の中央部から西寄りに付設される。

(遺物) 土師器で壺(1~10)、皿(11~13)、甕(15~18)があり、壺のうち7は墨書き土器で判読困難ではあるが体部外面正位にその文字が認められる。また灰釉陶器で瓶(14)がある。

62号住居跡（遺構：第27図、遺物：第68図・第80図16~19）

(概要) 調査区の東寄り、I-18・I-19・J-18・J-19グリッドに位置する。

(重複) 63住、77住、72住。

(形状) 四角形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.2m×南北3.4m、床面までの深さは南壁で5cm、北壁で5cmを測る。

(床面) 床面標高は376.62m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは東壁のほぼ中央部に付設される。

(遺物) 土師器で皿(1~7)、壺系鉢(8)、甕(9)など、また第80図16~19に鉄斧ほかの鉄製品がある。

63号住居跡（遺構：第28図、遺物：第68図・第80図20）

(概要) 調査区の東寄り、I-18・I-19グリッドに位置する。

(重複) 62住、72住、77住？

(形状) 四角形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.9m×南北4.4m、床面までの深さは南壁で33cmを測る。

(床面) 床面標高は376.89m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは北壁の中央部から北東寄りに付設される。

(遺物) 土師器では壺(1~3)、皿(4~8)、高足高台付壺(9)、羽釜(12)、壺系鉢(15・16)、甕(13・

14) など、灰釉陶器では椀(11)、輪花椀(10)などがあった。第80図20の用途不明の金具も見られた。

64号住居跡（遺構：第28図、遺物：第69図・第78図14・第80図21～23）

（概要）調査区の西北寄り、H-7からI-7グリッドにかけて位置する竪穴住居跡である。

（重複）73号住居跡と重複し、新旧関係は64号（旧）→73号（新）である。また116・123・124号土坑とも重複する。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西4.5m（推定）×南北4.1m、床面までの深さは南壁で47cmとなっている。

（床面）床面標高は374.68m。床面は大部分が73号住居跡に切られていって、貼床や硬化の状況については詳細に把握し得なかった。

（施設）カマドは東壁の南隅寄りに付設される。石組みカマドで、部分的に構造が残り、甕の破片などが点在した。カマド以外の壁溝、柱穴等の施設は見られない。

（遺物）土師器で、壺（1-4・7-11）、皿（5・6）、羽釜（13）、小型甕（14・15）、甕（16）などがあり、灰釉陶器で蓋（12）などが見られた。壺のうち7-11は墨書き土器で、7は底部外面に、8-11は体部外面にそれぞれ文字が認められる。ほかに第78図14に平瓦、第80図21-23に鉄製品がある。

65号住居跡（遺構：第28図、遺物：第69・70図・第78図15～21）

（概要）調査区の西寄り、I-6・I-7・J-6・J-7グリッドに位置する。

（重複）73号住居跡と重複し、関係は65号（旧）→73号（新）である。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西4.2m×南北3.8m、床面までの深さは北壁で47cmを測る。

（床面）床面標高は375.41mとなっている。貼床はとくに確認されていない。

（施設）カマドは南東コーナー部にあったものと推定されるが、73号住居跡との切り合いによって失われたものらしく、確認されていない。

（遺物）土師器で壺（1-3・7）、皿（4-6）、高足高台付壺（8）、小型甕（13・15）、羽釜（11・12）、甕（14・16）、須恵器で甕（9・10）などがある。壺のうち2の見込みには線刻が見られる。これは破片で多くを失っており、このため全体的にはよくわからないが、文字というより絵画的なものの可能性が高い。また7は壺と思われる小片であるが墨書き土器で、体部外面に文字が認められる。判読はできない。須恵器で甕のうち10は転用鏡と思われる。また第78図に平瓦（15・16）、丸瓦（17-21）がある。

66号住居跡（遺構：第29図、遺物：第70図・第80図24・25・第83図15・16）

（概要）調査区の中央部東寄り、I-16・I-17グリッドに位置する。

（重複）他の遺構との重複関係はない。

（形状）隅丸形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.6m×南北3.8m、床面までの深さは南壁で27cm、北壁で18cmを測る。

（床面）床面標高は376.76m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）カマドは東壁の南2コーナー付設される。

（遺物）土師器で、壺（1-7）、高足高台付壺（8-11）、蓋（12）、羽釜（14）、甕系鉢（15）、甕（16-20）があり、また灰釉陶器では椀（13）などが見られた。8の高足高台付壺は脚端打欠きが顕著である。このほか第80図24・25に鉄製品、第83図15・16に砥石がある。

67号住居跡（遺構：第29図、遺物：第71図・第80図26）

（概要）調査区の西、I-20グリッドに位置する。

（重複）他の遺構との重複関係はない。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西2.8m×南北2.6m、床面までの深さは南壁で25cm、北壁で30cmを測る。

（床面）床面標高は376.97m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）カマドは南東コーナー付設される。

（遺物）土師器で、壺（1-3）、皿（4）、高足高台付壺（5-8）、甕（9）がある。なお高足高台付壺については体部内外面にタールが付着しているものがある（5・6）。ほかに用途不明の鉄製品がある。

68号住居跡（遺構：第29図、遺物：第71図・第78図22・23・第79図24）

（概要）調査区の中央部西寄り、G-6・G-7グリッドに位置する。

（重複）7、9、14、15号と重複する。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.9m×南北3.5m、床面までの深さは北壁で13cmを測る。

（床面）床面標高は375.25m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）カマドは北東コーナーに付設される。

（遺物）土師器で、环（1）、小型甕（4）、羽釜（3）、甕（5）などが見られた。また灰釉陶器で碗（2）があるが、これは灯明皿と思われ、灯明芯の痕を示す煤が明瞭に付着している。

69号住居跡（遺構：第30図、遺物：第71図・第79図25・26）

（概要）調査区の中央部西寄り、G-8・H-8グリッドに位置する。

（重複）9住、10住と重複し、これらに先行する。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西4.0m×南北3.0m、床面までの深さは北壁で12cmを測る。

（床面）床面標高は376.28m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）カマドは東壁の中央部から南寄りに付設される。

（遺物）土師器で、环（2）、皿（1）、甕（4）、羽釜（3）がある。なお2の环については、見込みに放射状の線刻があり、摺鉢の機能が与えられていた可能性もある。ほかに第29図25・26の瓦片もある。

70号住居跡（遺構：第30図、遺物：第72図・83図17）

（概要）調査区の中央部西寄り、H-9・I-9グリッドに位置する。

（重複）119、120、121、122号土坑に切られている。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.4m×南北4.3m、床面までの深さは南壁で35cm、北壁で8cmを測る。

（床面）床面標高は375.87m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）カマドは南東コーナーに付設される。

（遺物）土師器で环（1）、高足高台付环（2・3）、甕（5～7）、灰釉陶器の段皿（4）や砥石（第83図17）などが見られた。とくに2の高足高台付环については、脚端部に打欠きした状況が顕著に観察される。

71号住居跡（遺構：第30図、遺物：第72図）

（概要）調査区の中央部北西寄り、J-7・J-8・K-7・K-8グリッドに位置する。

（重複）59号竪穴住居跡と重複し、関係は71号（旧）→59号（新）である。

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西3.6m×南北4.8m、床面までの深さは北壁で22cmを測る。

（床面）床面標高は375.59m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）カマドは東壁のほぼ中央部に付設される。

（遺物）出土点数はたいへん少なく、図化できたのは1の縁釉陶器の耳皿の残欠の1点のみである。

72号住居跡（遺構：第31図、遺物：第72図）

（概要）調査区の東寄り、I-18・I-19グリッドに位置する。

（重複）他の遺構との重複関係は62号、63号、77号

（形状）隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模）東西2.4m×南北2.5m、床面までの深さは東壁で50cmを測る。

（床面）床面標高は376.78m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

（施設）カマドは東壁の中央に付設される。

（遺物）図化できたのは土師器の甕（1）の1点のみである。

73号住居跡（遺構：第31図、遺物：第72図）

（概要）調査区の西寄り、I-6・I-7グリッドに位置する。

(重複) 南壁側に64号住居跡が、また北壁側に65号住居跡が重複し、いずれの住居跡よりも新しい。また西壁側で125-127号土坑と重複し土坑より古いことが土層観察により確認された。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.9m×南北4.8m、床面までの深さは東壁で47cmを測る。

(床面) 床面標高は375.68m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは北東コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で壺(1)、皿(2~4)、柱状高台付皿(5)、羽釜(9・10)、小型甕(11)、甕(12)、灰釉陶器で瓶(6)などが見られた。また7と8は須恵器甕の破片で、内面に磨痕が認められる。

74号住居跡（遺構：第31図、遺物：第73図・第80図27・第81図2）

(概要) 調査区の北東寄り、J-18・J-19・K-18・K-19グリッドに位置する。火災住居と見られる。

(重複) 他の遺構との重複関係はない。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.9m×南北4.3m、床面までの深さは南壁で27cm、北壁で25cmを測る。

(床面) 床面標高は376.62m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは南東コーナーに付設される。たいへん遺存状態のよい石組カマドであった。

(遺物) 土師器で壺(1・2・5)、高足高台付壺(3・4)、甕系鉢(8・9・11)、甕(7・10)、灰釉陶器の椀(6)などが見られた。とくに5の壺は、体部から底部外面にかけてタールが付着している。また3の高足高台付壺は、体部周辺と脚端を再調整した状況が見られる。ほかに鉄製品で刀子(第80図27)やフィゴ羽口(第81図2)もあった。

75号住居跡（遺構：第32図、遺物：第74図・第83図18）

(概要) 調査区の北東寄り、K-16・K-17グリッドに位置する。

(重複) 76号竪穴住居跡と重複し、関係は76号(旧)→75号(新)である。

(形状) 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西4.9m×南北2.5m、床面までの深さは南壁で21cmを測る。

(床面) 床面標高は376.30m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは南東コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で壺(1~7)、皿(8~13)、高足高台付壺(14・15)、灰釉陶器で椀(16)など、また緑色凝灰岩製の砥石(第83図18)も見られた。

76号住居跡（遺構：第32図、遺物：第74図）

(概要) 調査区の北東寄り、K-17グリッドに位置する。

(重複) 75号住居跡と重複し、関係は76号(旧)→75号(新)である。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西1.0m以上×南北1.7m以上、床面までの深さは東壁で38cmを測る。

(床面) 床面標高は376.33m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは南東コーナーに付設される。

(遺物) 土師器で壺(1~4)、皿(5)、甕(6・7)などが見られた。

77号住居跡（遺構：第32図）

(概要) 調査区の東寄り、I-18・I-19・J-18・J-19グリッドに位置する4つの竪穴住居跡の重複の中に確認されたもので、切り合いのため残存状況のよくないう住居跡である。

(重複) 62号、63号、72号の各住居跡と重複し、前後関係はそれらに先行するものである。

(形状) 隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

(規模) 東西3.9m×南北3.9m、確認面から床面までの深さは、北壁で41cmを測る。

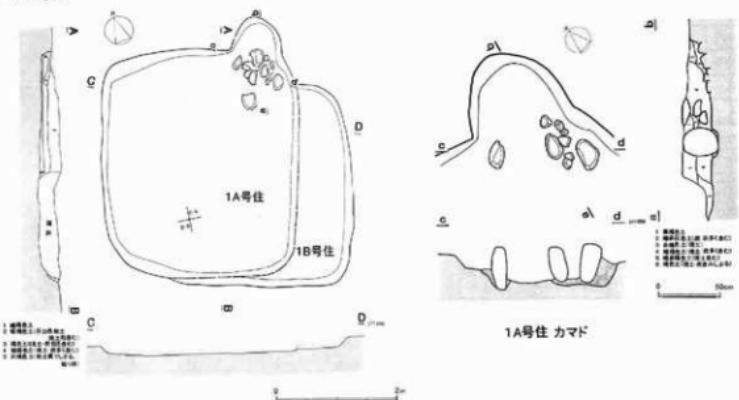
(床面) 床面標高は376.68m。貼床・硬化面は全く確認されていない。

(施設) カマドは東壁の中央部から南寄りに付設される。大部分72号住居跡に切られていることもあって残りがわるい。

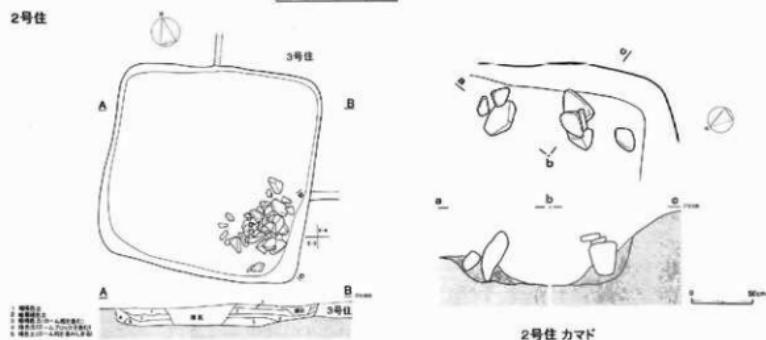
(遺物) 出土遺物はわずかで、図示できるものはなかった。

第1表 積穴住居跡一覧表

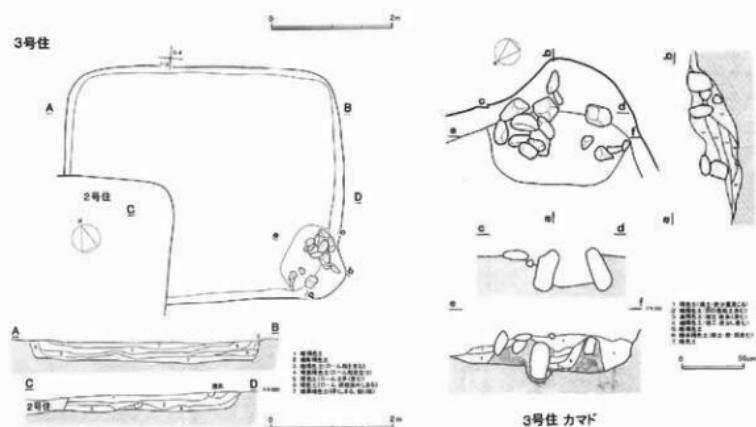
1A・B号住



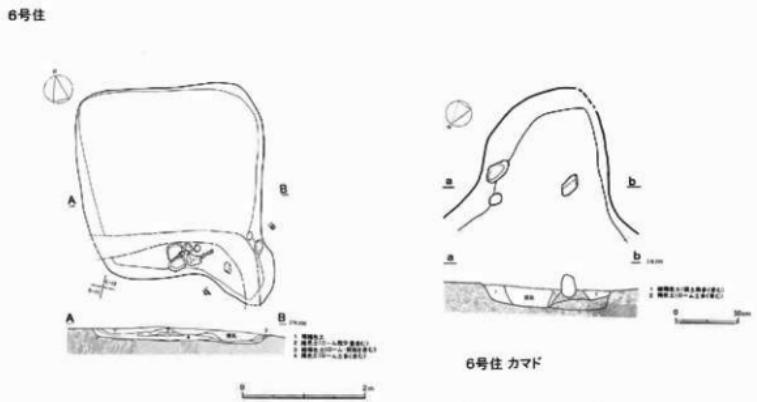
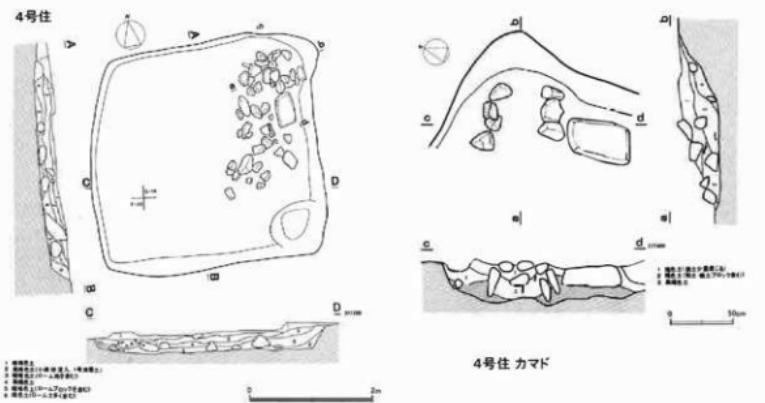
2号住



3号住

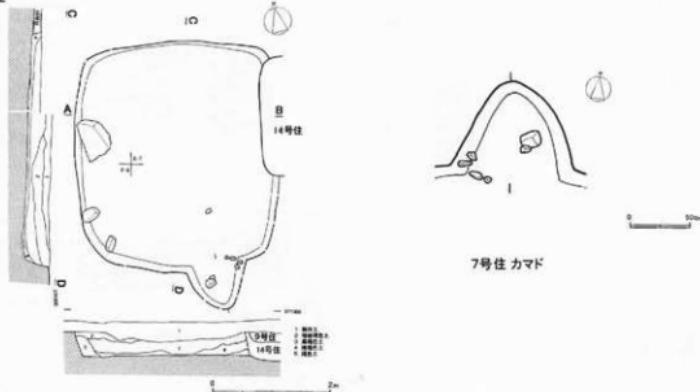


第9図 1A号・1B号・2号・3号住居跡 (1/80・1/40)



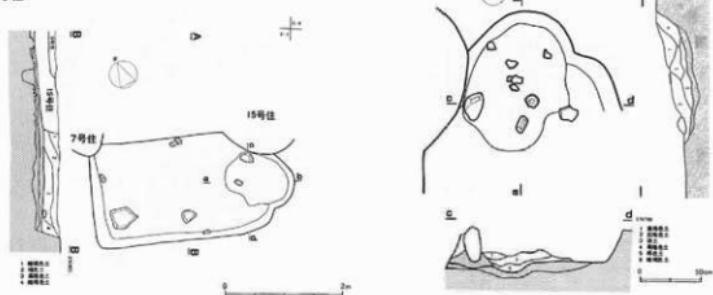
第10図 4号・5A号・5B号・6号住居跡 (1/80・1/40)

7号住



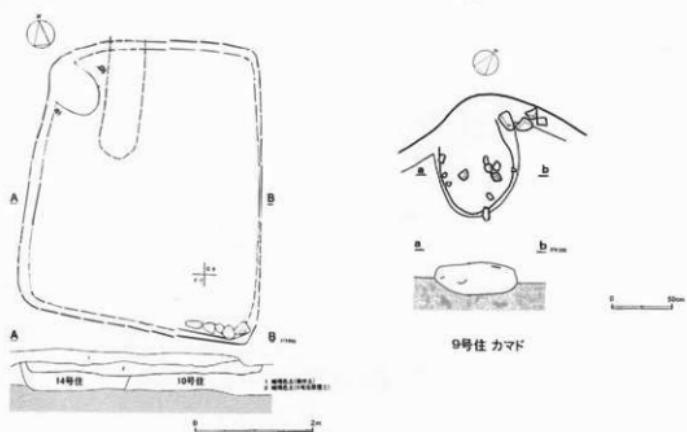
7号住 カマド

8号住



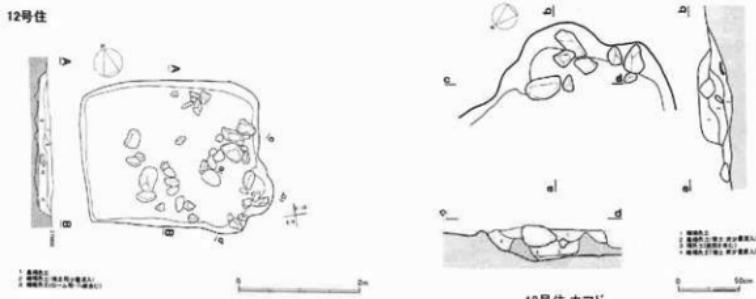
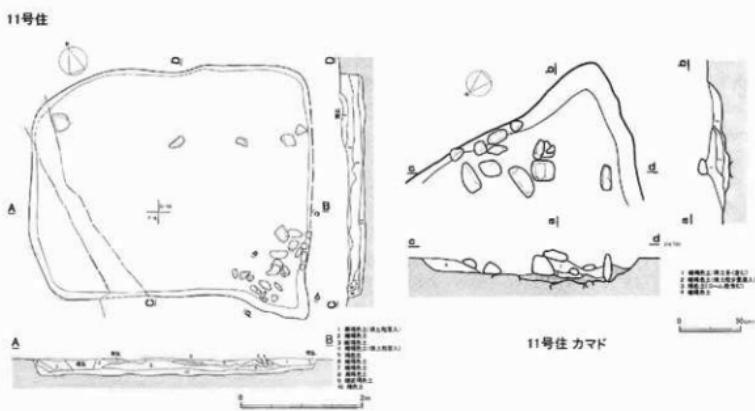
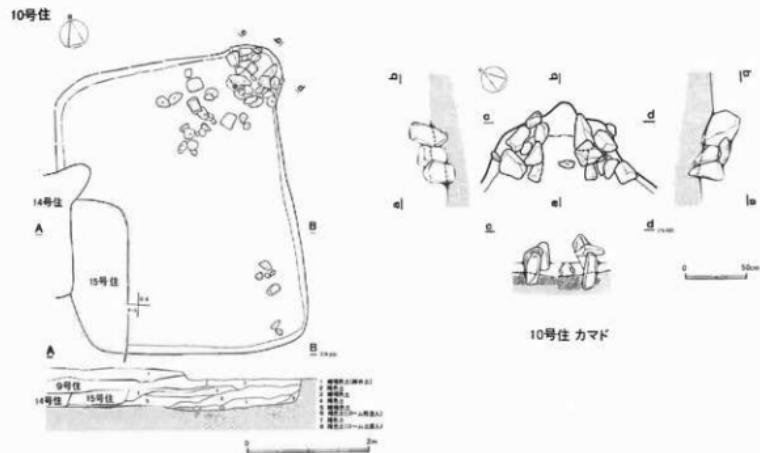
8号住 カマド

9号住



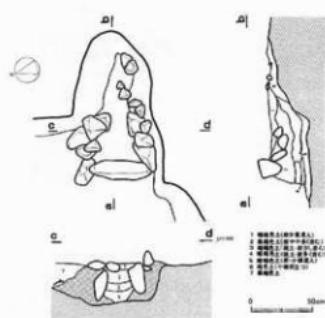
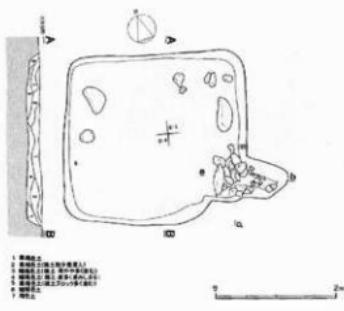
9号住 カマド

第11図 7号～9号住居跡 (1/80・1/40)

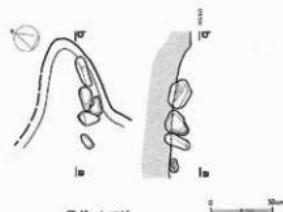
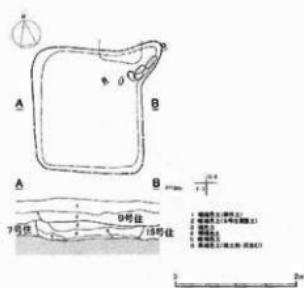


第12図 10号～12号住居跡 (1/80・1/40)

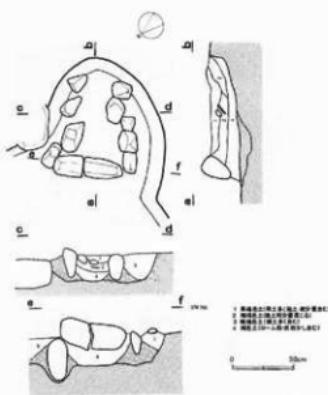
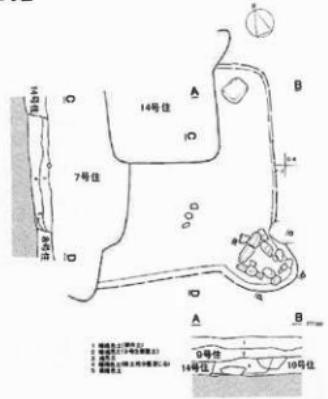
13号住



14号住

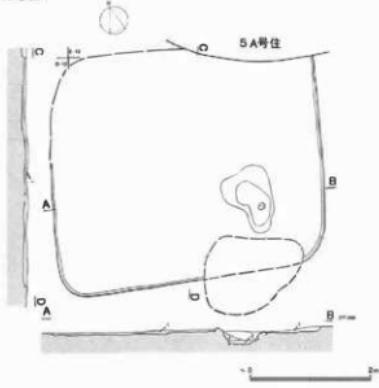


15号住

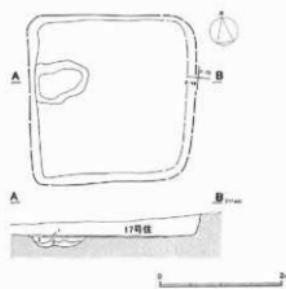


第13図 13号～15号住居跡 (1/80・1/40)

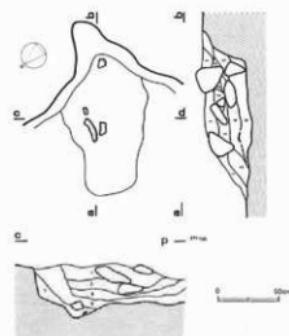
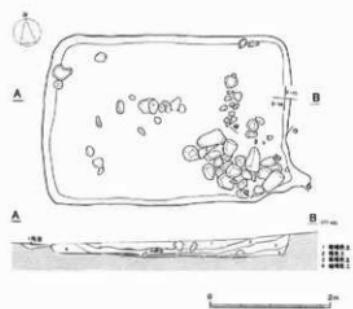
16号住



20号住

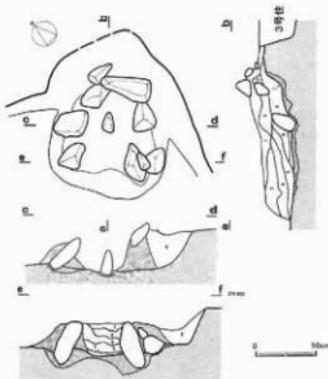
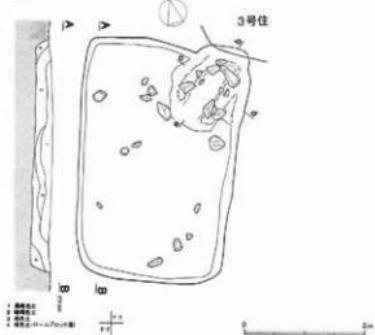


17号住



17号住 カマド

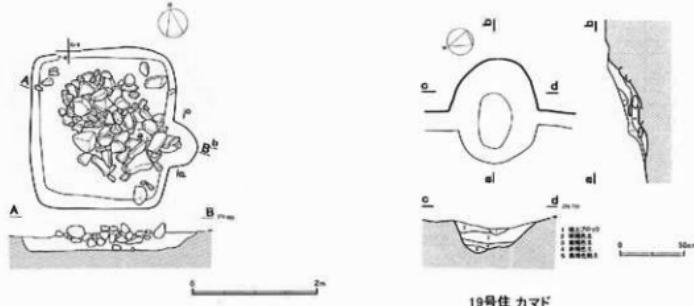
18号住



18号住 カマド

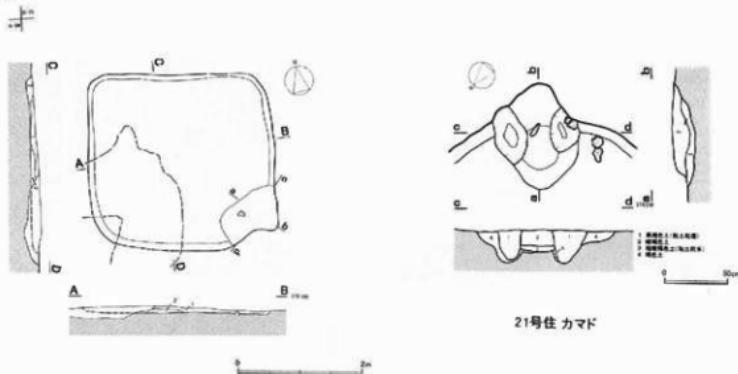
第14図 16号～18号・20号住跡 (1/80・1/40)

19号住



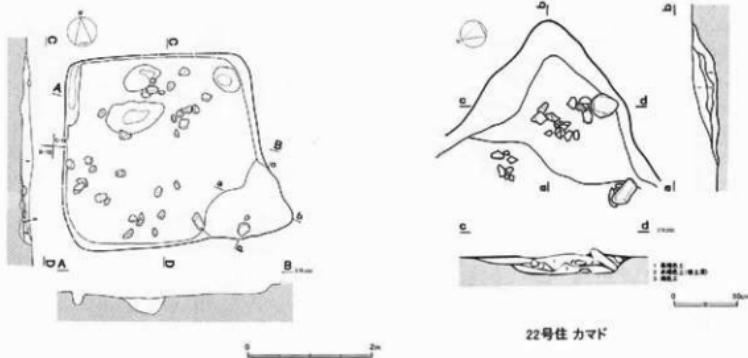
19号住 カマド

21号住



21号住 カマド

22号住

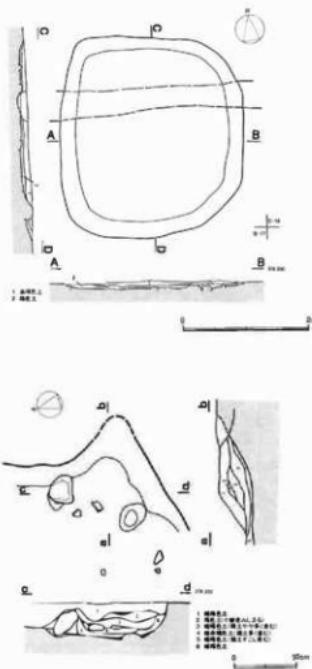
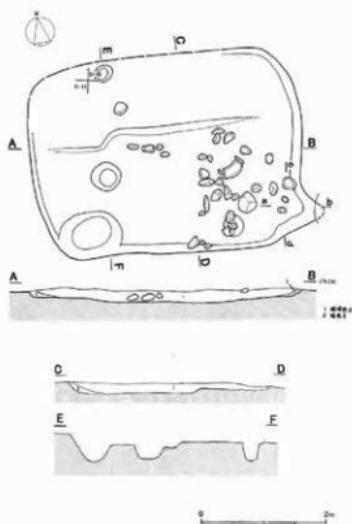


22号住 カマド

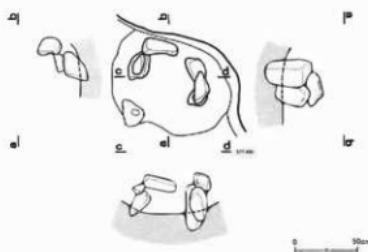
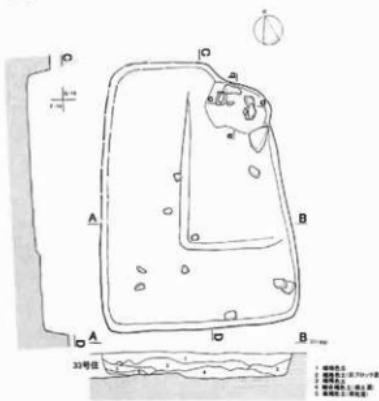
第15図 19号・21号・22号住居跡 (1/80・1/40)

23号住

24号住

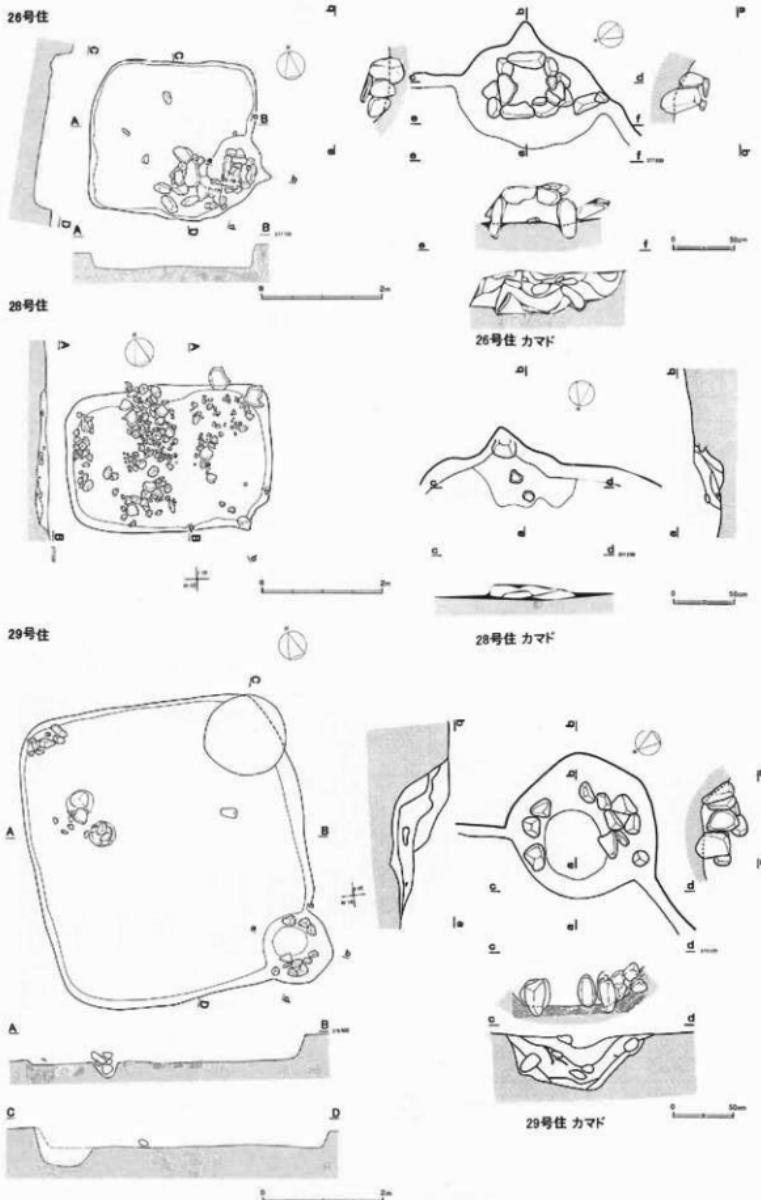


25号住



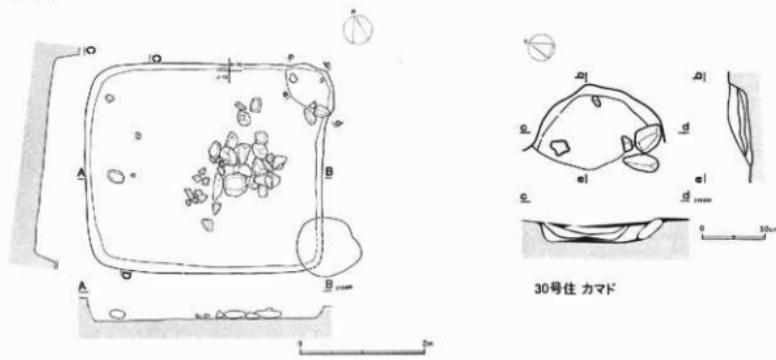
25号住 カマド

第16図 23号～25号住居跡 (1/80・1/40)



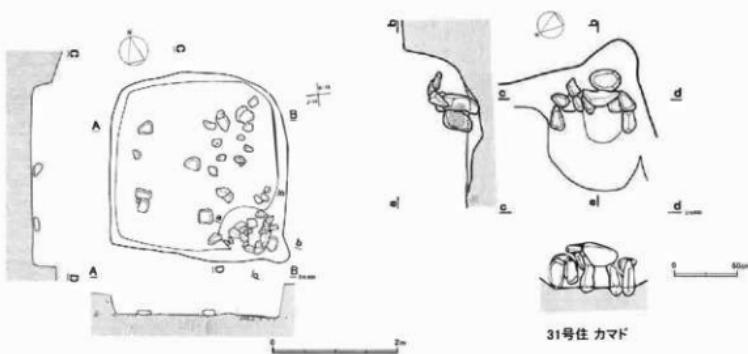
第17図 26号・28号・29号住居跡 (1/80・1/40)

30号住



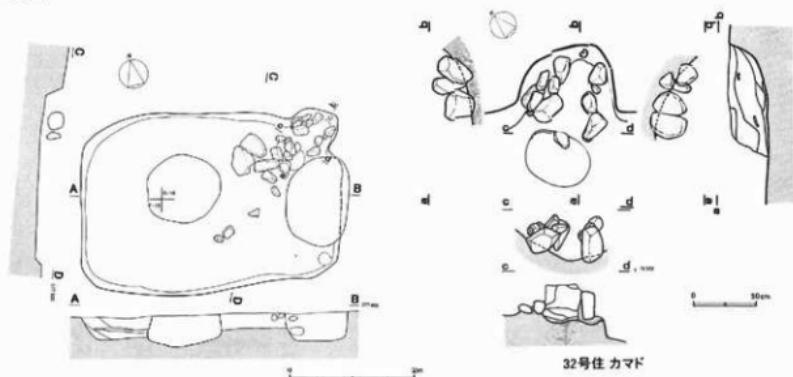
30号住 カマド

31号住



31号住 カマド

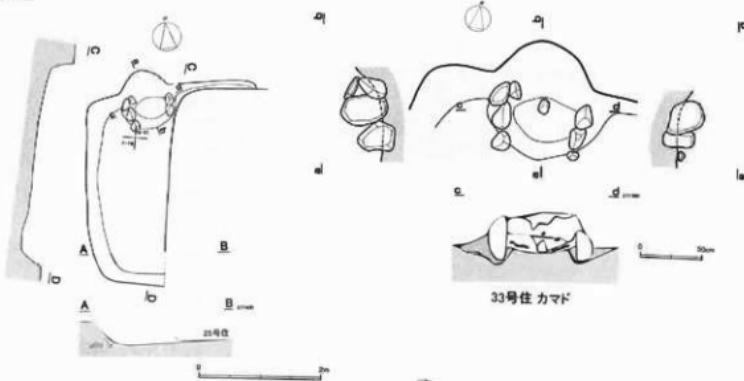
32号住



32号住 カマド

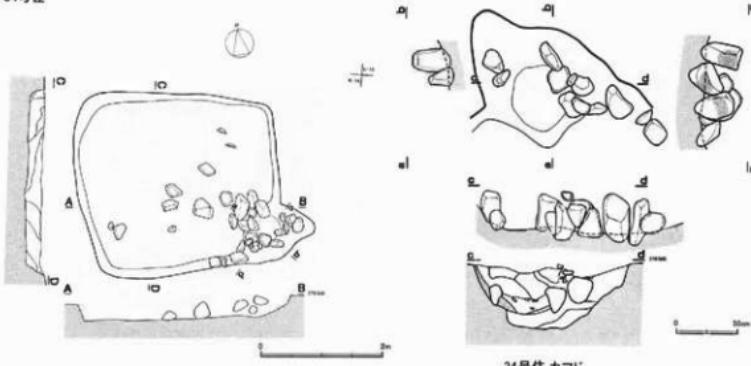
第18図 30号～32号住居跡 (1/80・1/40)

33号住



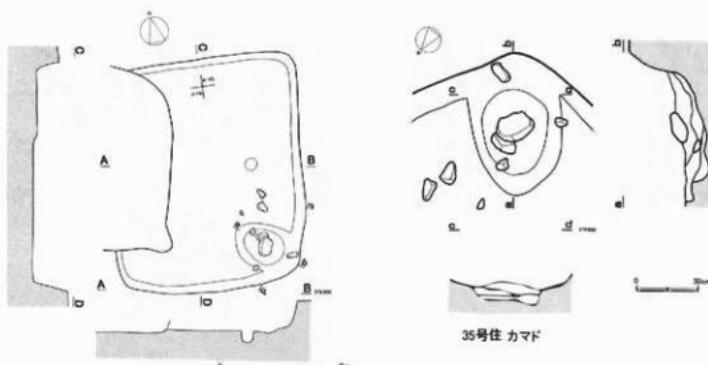
33号住 カマド

34号住



34号住 カマド

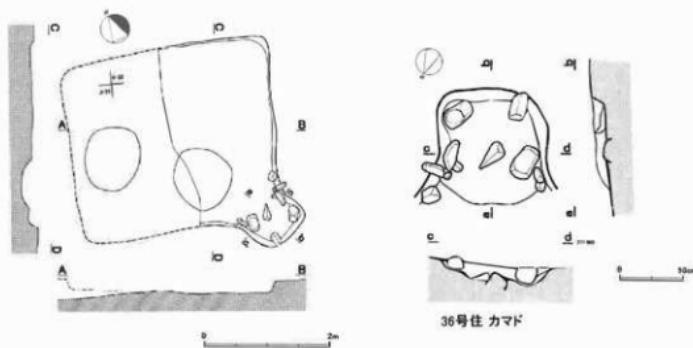
35号住



35号住 カマド

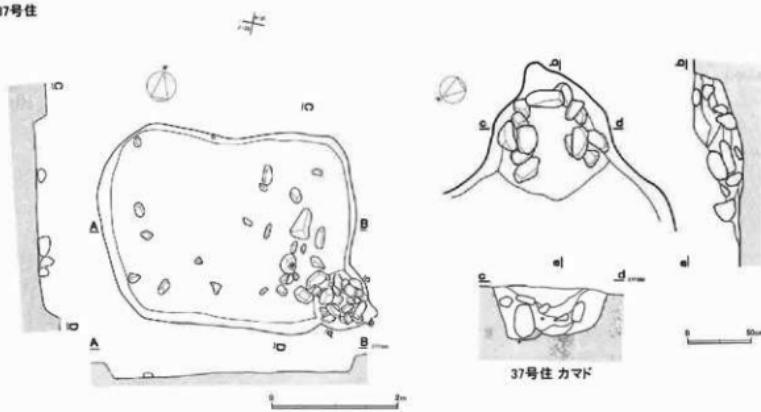
第19図 33号～35号住居跡 (1/80・1/40)

36号住



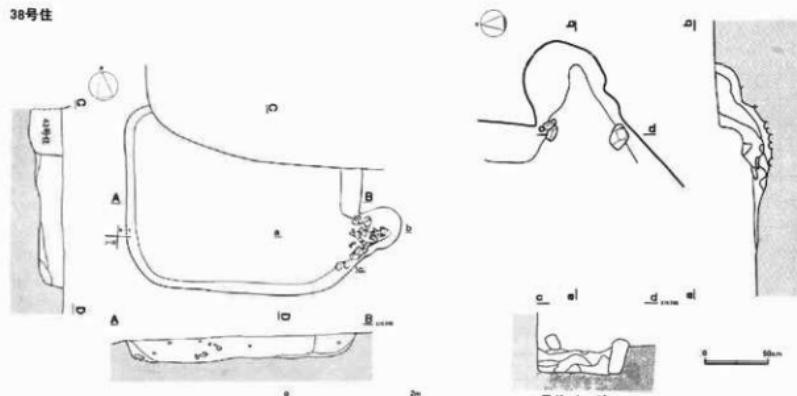
36号住 カマド

37号住



37号住 カマド

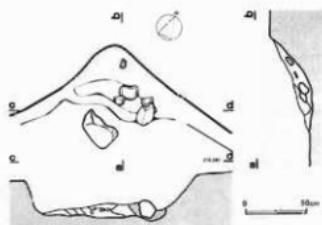
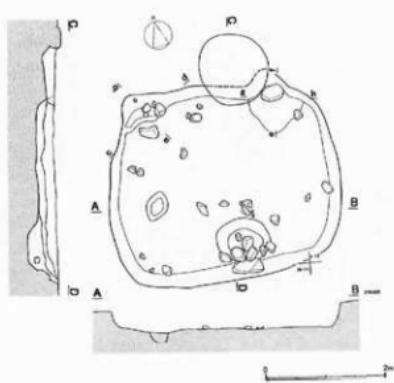
38号住



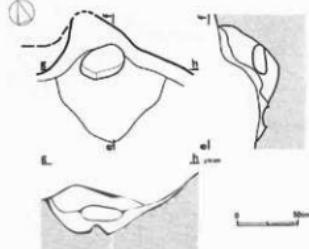
38号住 カマド

第20図 36号～38号住居跡 (1/80・1/40)

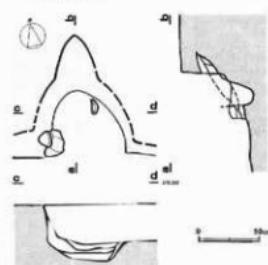
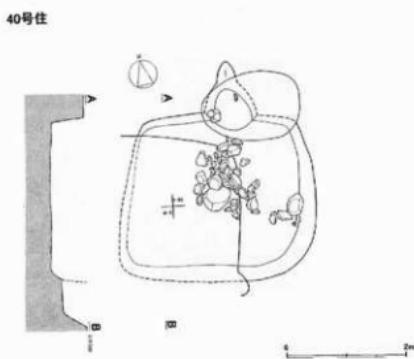
39号住



39号住Aカマド

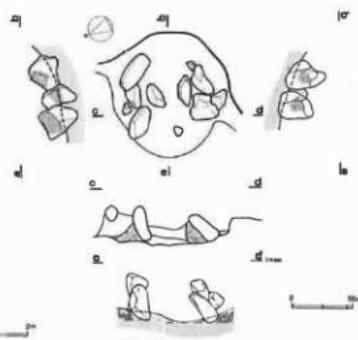
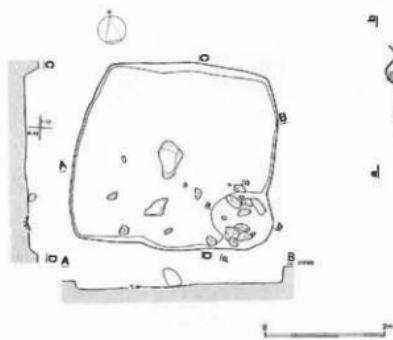


39号住Bカマド



40号住 カマド

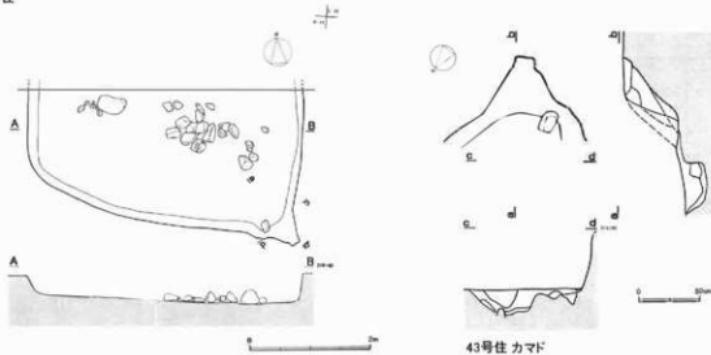
40号住



40号住 カマド

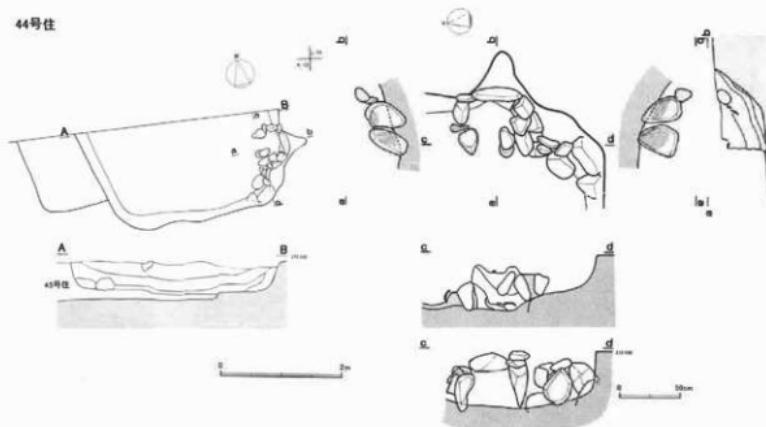
第21図 39号・40号・42号住居跡 (1/80・1/40)

43号住



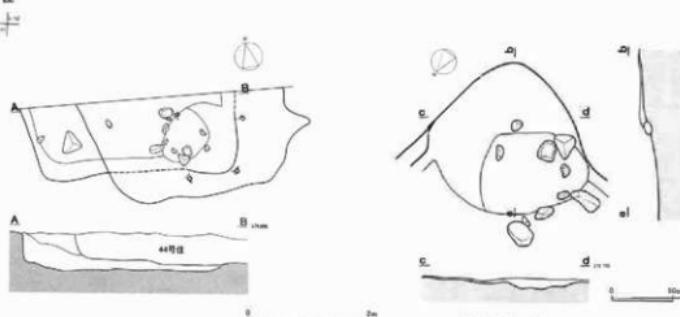
43号住 カマド

44号住



44号住 カマド

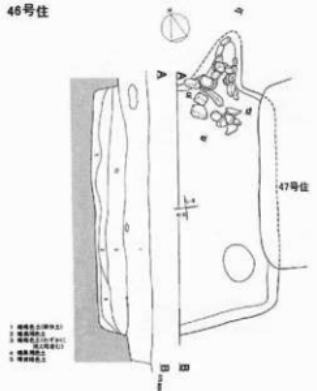
45号住



45号住 カマド

第22図 43号～45号住居跡 (1/80・1/40)

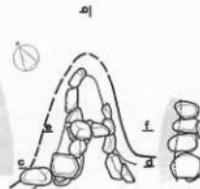
46号住



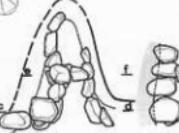
a



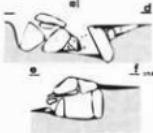
b



c



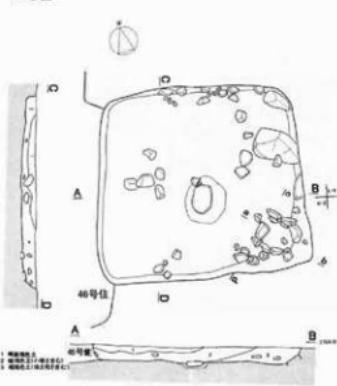
d



■ 横筋膜 (Transverse muscle membrane)
● 筋 (Muscle)
△ 等厚筋 (Isotomous muscle)
○ 脂肪 (Fat)
□ 血管 (Blood vessel)

46号住 カマド

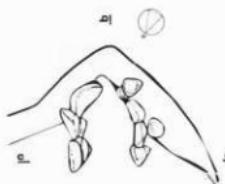
47号住



a



b



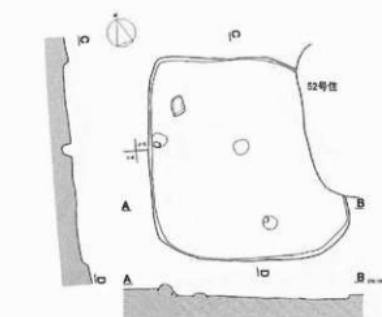
c



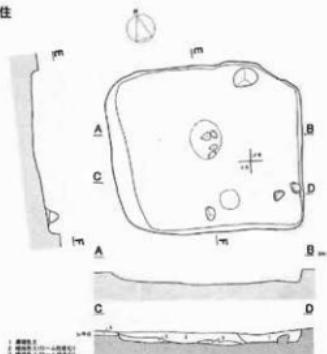
d

47号住 カマド

51号住

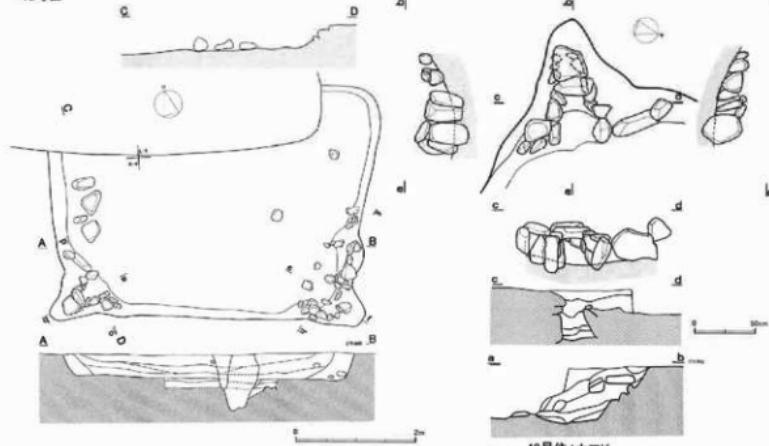


52号住

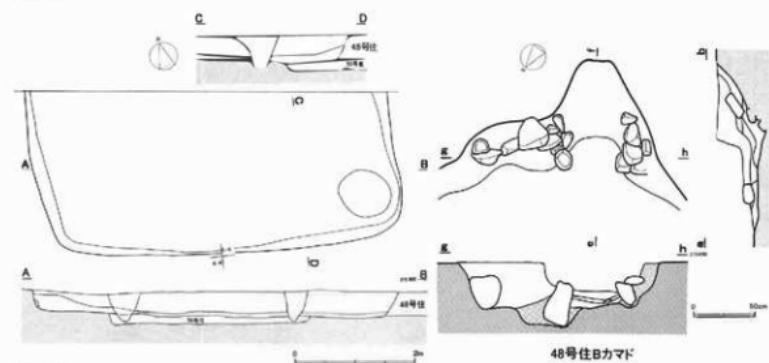


第23図 46号・47号・51号・52号住居跡 (1/80・1/40)

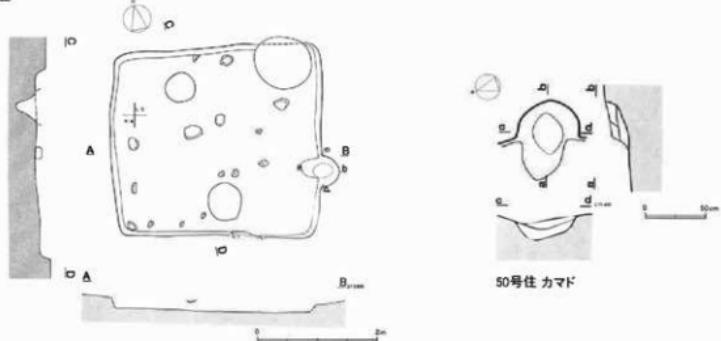
48号住



49号住

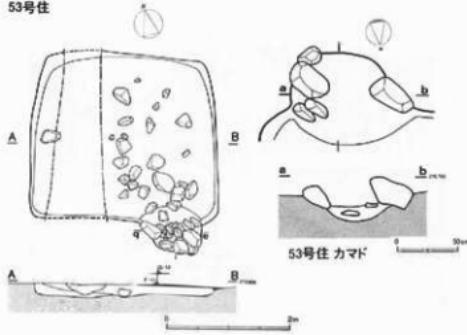


50号住

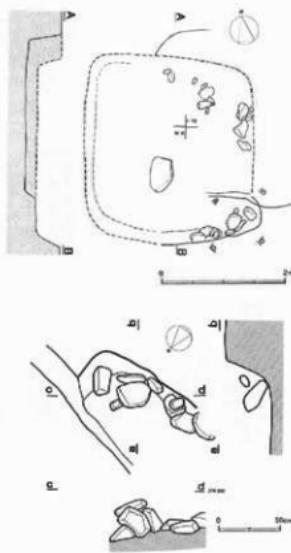


第24図 48号～50号住居跡 (1/80・1/40)

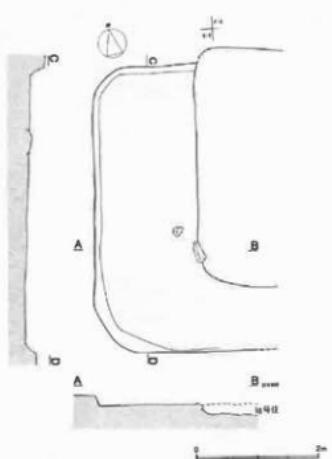
53号住



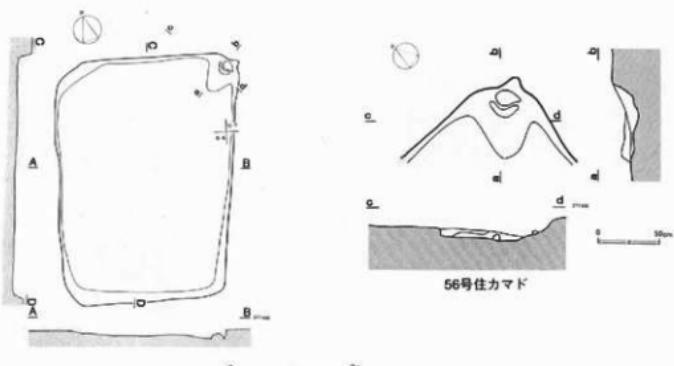
54号住



55号住

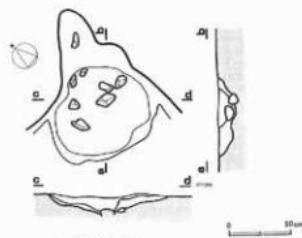
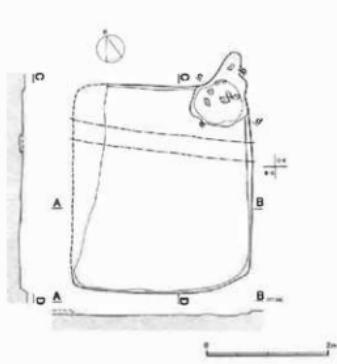


56号住



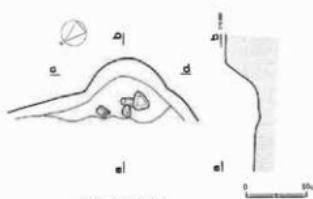
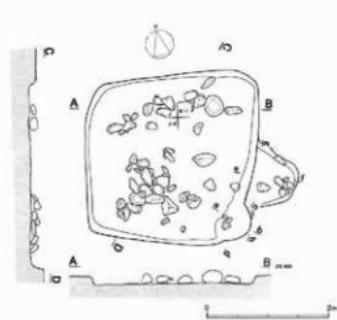
第25図 53号～56号住居跡 (1/80・1/40)

57号住



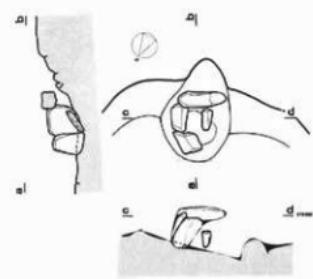
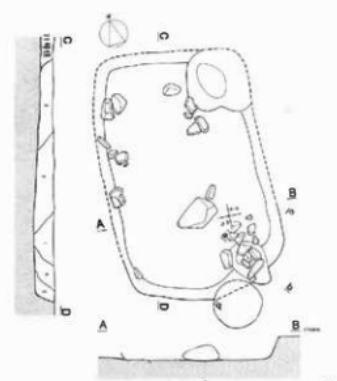
57号住 カマド

58号住



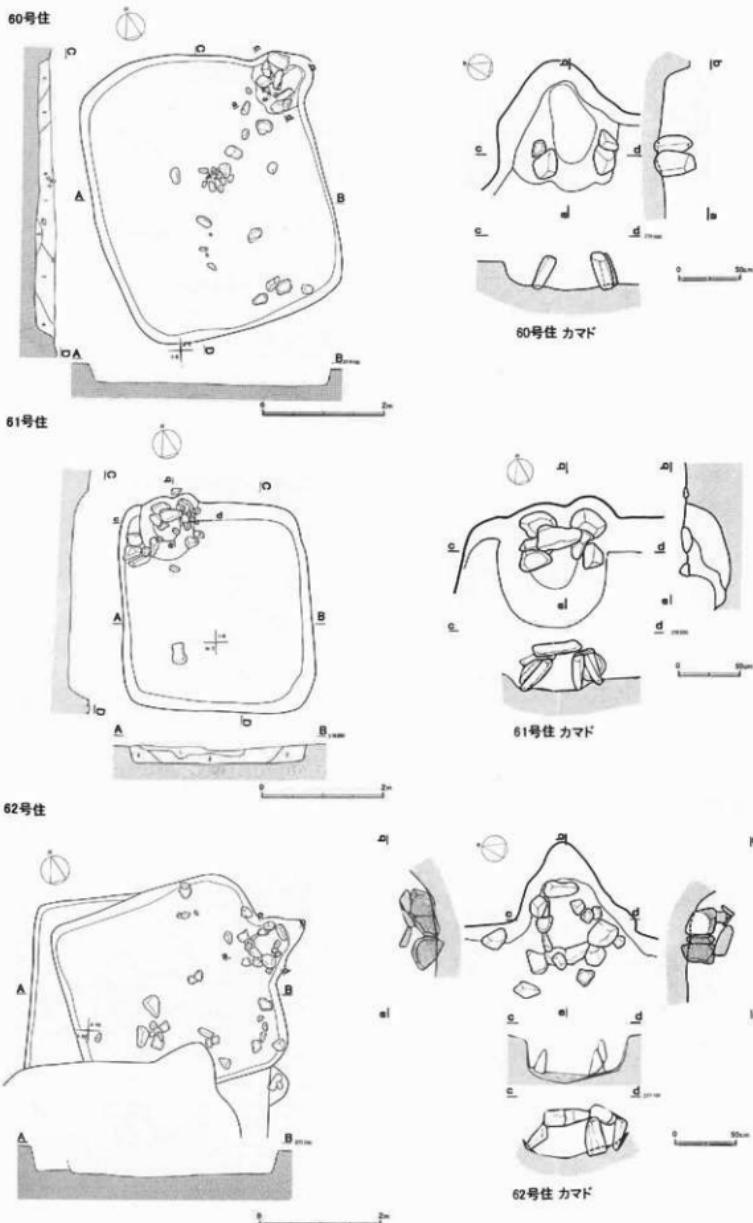
58号住 Aカマド

59号住



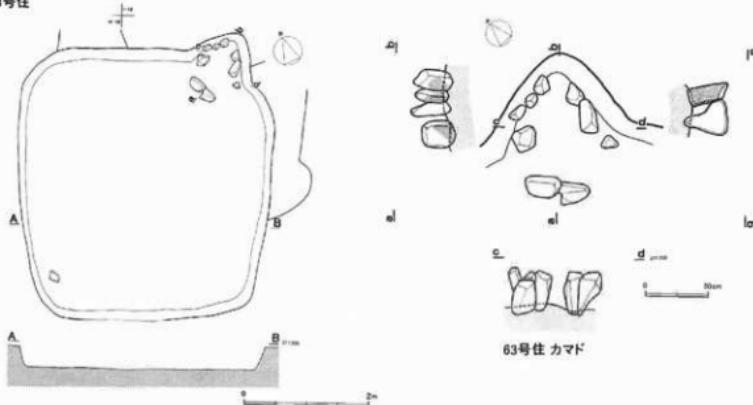
59号住 カマド

第26図 57号～59号住居跡 (1/80・1/40)



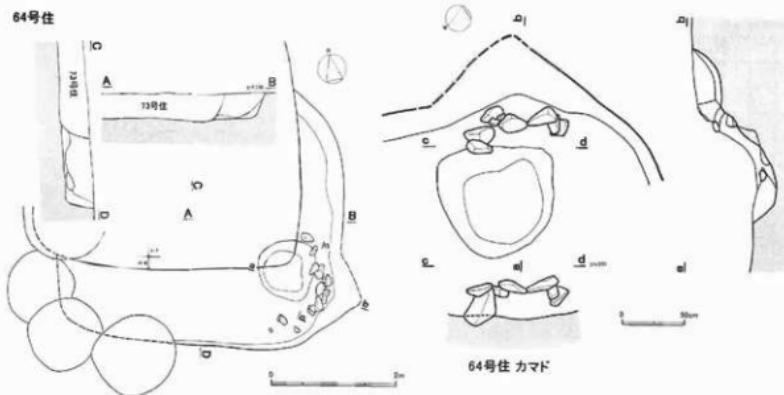
第27図 60号～62号住居跡 (1/80・1/40)

63号住



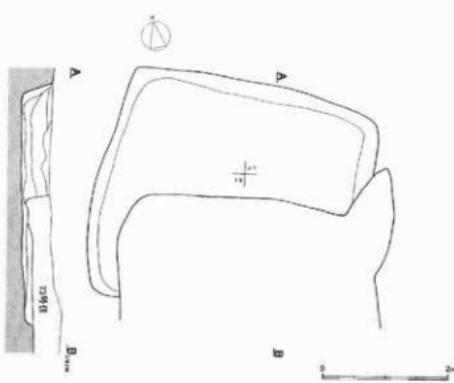
63号住 カマド

64号住



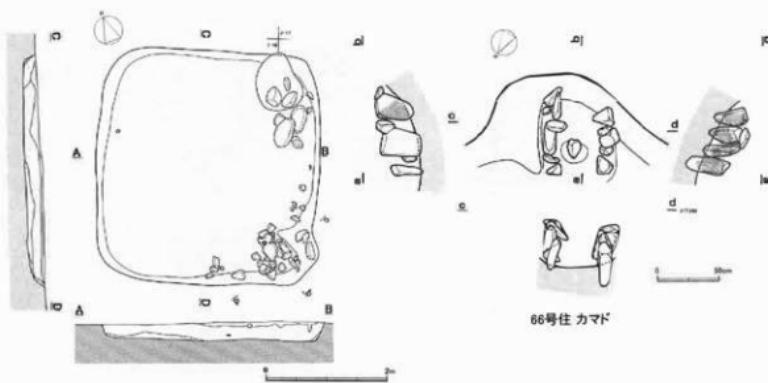
64号住 カマド

65号住



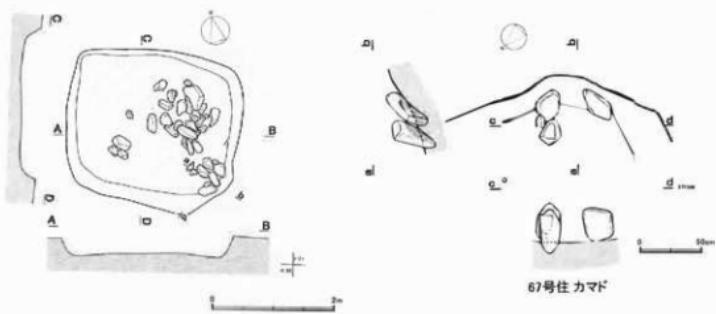
第28図 63号～65号住居跡 (1/80・1/40)

66号住



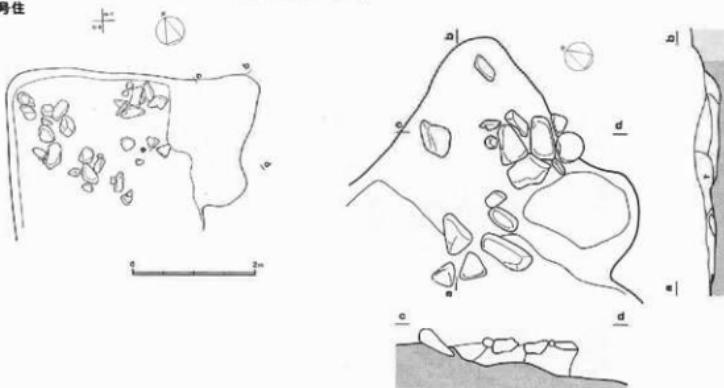
66号住 カマド

67号住



67号住 カマド

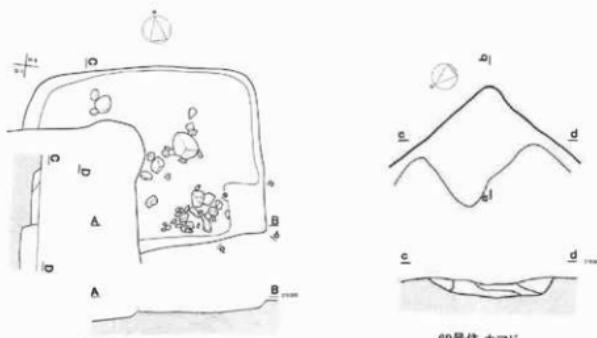
68号住



68号住 カマド

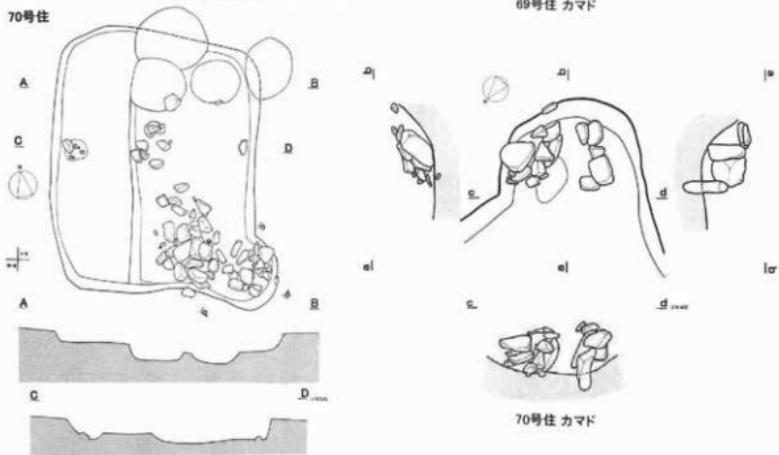
第29図 66号～68号住居跡 (1/80・1/40)

69号住



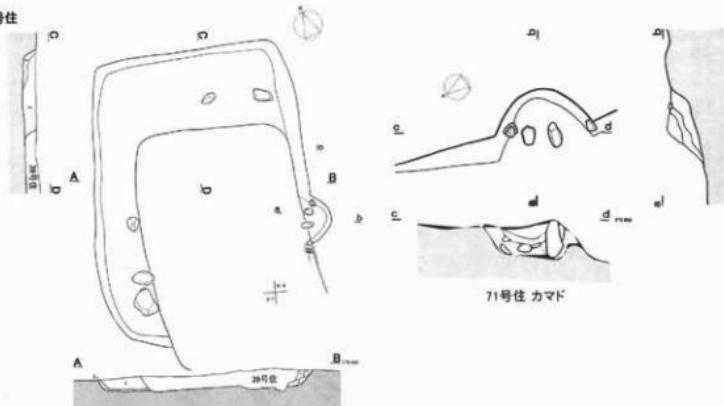
69号住 カマド

70号住



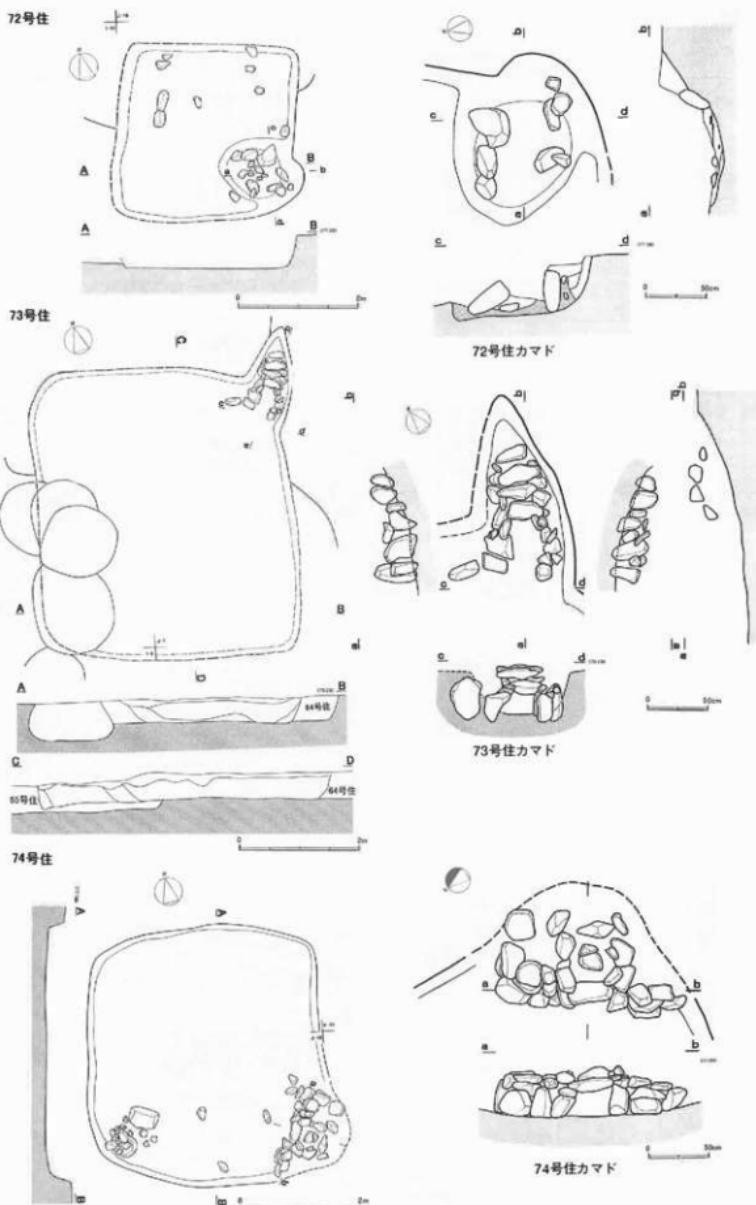
70号住 カマド

71号住



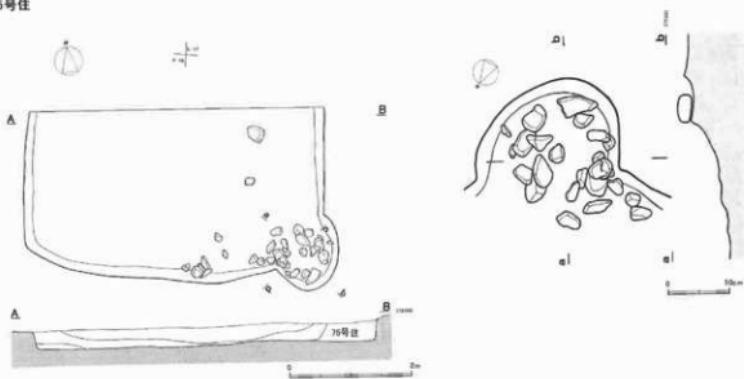
71号住 カマド

第30図 69号～71号住居跡 (1/80・1/40)

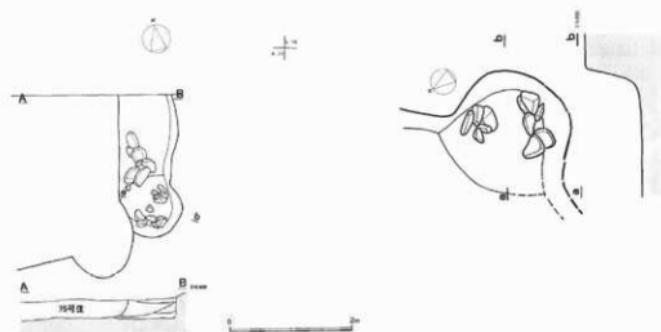


第31図 72号～74号住居跡 (1/80・1/40)

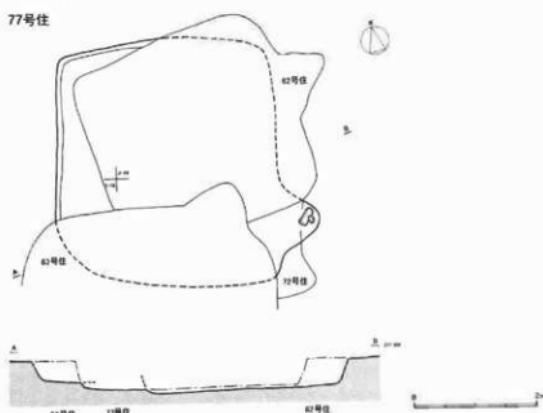
75号住



76号住



77号住



第32図 75号～77号住居跡 (1/80・1/40)

(2) 土坑

発見された土坑は、全部で130基ほどである。形状や性格、また年代的にも幅があると見られるが、伴出する遺物もたいへん少なく、個々明確に把握することはできなかった。年代的に大別すると、

土坑A=縄文時代の所産になる土坑。数は多くないが、15号土坑、69号土坑などがそれである。

土坑B=住居群の年代にやや遅れて造られたもの。すなわち古代末から中世の初めと推定される。大部分の土坑がこれに含まれる。62号土坑などはその典型で、袋状の形態になるものが多い。32号住居跡を掘り込んで造られた51号および52号土坑のように、平安期の住居を切るものもある。

土坑C=中世の土坑で、50号土坑や95号土坑などがある。

土坑D=近世の土坑で、30号土坑、96号土坑などがある。

これらの一つひとつの土坑についての状況は、第2表にまとめたものにゆずり、以下にとくに注目されたものについてのみ概観する。

15号土坑（造構：第35図、遺物：第75図9～12）

（概要）調査区の南西寄り、D-5に位置する。

（形状）長径1.5m、短径1.0mほどの、東西方向に長軸を持つ不整形の平面形で、確認面からの深さは約20cmを測る。

（特記）この土坑の覆土からは第81図9～12をはじめ若干の諸磯B期の縄文土器の破片資料が見られ、土坑自体、縄文時代前期の所産と見られる。

30号土坑（造構：第36図、遺物：第75図8）

（概要）調査区の東南端、B-16グリッドに位置する。29号土坑と重複し、それより新しい。

（形状）長径2.0m、短径1.5mほどの、南北方向に長軸を持つ梢円の平面形で、確認面からの深さは約10cm程度とごく浅いものであった。

（特記）この土坑からは内耳土器の焰烙の残欠が出土している。おそらく近世の所産と見られる。

36号土坑（造構：第37図）

（概要）調査区の東南端、B-20グリッドとC-20グリッドにまたがって位置する。

（形状）径1.2mほどの円形の平面形で、確認面からの深さは約40cmを測り、いくぶん袋状気味の形態をしている。

（特記）この土坑の辺りを南北にとおって確認されている道路状造構と重複しており、中世前半の時期が予想される1号道路状造構は、この36号土坑を貼って構築されていることが土層観察により確認され、本遺跡における大部分の同様な土坑の年代を考える手掛かりとなるものと見られる。またこの北側5m前後には20基近くの土坑が重なり合って密集しているのが確認されたが、それらもみな36号土坑同様、道路状造構の下に造られたものであることが判明している。

50号土坑（造構：第36図）

（概要）調査区のほぼ中央部で、I-14グリッドに位置し、29号住居を切る。

（形状）長径1.4m、短径1.1mの、東西方向に長軸を持つ梢円の平面形と、確認面から66cmほどの深さを有し、やや擂鉢状の形態を呈している。

（特記）この土坑は29号住居跡と重複しており、この竪穴住居跡を一部掘り込んで構築されている。土坑覆土からは常滑焼と見られる陶器などが出土しており、本遺跡における土坑の中では比較的新しい部類に属するものと思われる。

52号土坑（造構：第36図）

（概要）調査区のほぼ中央部やや東寄り、G-16グリッドに確認された土坑である。

（形状）長径1.4m、短径1.0mほどの長円形の平面形で、深さは約40cm。

（特記）32号住居跡のカマド近くに、この住居を切り込む形で造られている。この土坑は、もともと住居内に投棄されていたと見られ、この土坑を掘るに当たって、掘り出されたと判断される礫3個が、堆積土の下部に入っていた。ほかに51号土坑も同様にこの住居を切っている。

第2表 土坑一覧表

土坑名	アリ→ヨリ	下限部	上限部 (cm)	幅(cm)	奥行き (cm)	深さ (cm)	底面形状	備考
1号土坑	D-3	ヨリ部	70	50	23			
2号土坑	E-10	ヨリ部	100	80	35			
3号土坑	E-10	ヨリ部	200	130	45			
4号土坑	F-11	ヨリ部	130	130	30			
5号土坑	F-11	ヨリ部	125	115	17			
6号土坑	F-11-G-11	ヨリ部	160	120	45	不規則形		
7号土坑	F-10-F-11	ヨリ部	120	90	35			
8号土坑	F-12	ヨリ部	140	130	40			
9号土坑	F-12-G-12	ヨリ部	120	120	40			
10号土坑	F-12-G-12	ヨリ部	110	110	35			
11号土坑	F-13	ヨリ部	200	130	30			
12号土坑	D-6	ヨリ部	110	90	35			
13号土坑	F-12	ヨリ部	140	120	35			
14号土坑	C-4-D-4	ヨリ部	150	140	30			
15号土坑	D-5	ヨリ部	140	90	30	不規則形		
16号土坑	D-5	ヨリ部	50	32	30			
17号土坑	D-5	ヨリ部	60	45	30			
18号土坑	C-5-D-5	ヨリ部	95	73	30			
19号土坑	C-5	ヨリ部	90	62	30			
20号土坑	C-5	ヨリ部	70	62	30			
21号土坑	C-5	ヨリ部	70	57	30			
22号土坑	D-5	ヨリ部	60	36	30			
23号土坑	D-4	ヨリ部	92	49	40			
24号土坑	E-3-E-4	ヨリ部	100	65	37			
25号土坑	E-3	ヨリ部	84	90	30			
26号土坑	E-3	ヨリ部	102	92	30			
27号土坑	E-3	ヨリ部	55	40	30			
28号土坑	E-3	ヨリ部	130	87	40			
29号土坑	E-16	ヨリ部	125	94	30			
30号土坑	E-16	ヨリ部	200	120	30	不規則形	F-13	
31号土坑	E-16	ヨリ部	90	90	35	圓錐形		
32号土坑	E-16	ヨリ部	70	30	30			
33号土坑	F-19	ヨリ部	100	90	30	圓錐形		
34号土坑	G-19	ヨリ部	100	80	27			
35号土坑	G-19	ヨリ部	60	50	25			
36号土坑	B-20-C-20	ヨリ部	125	90	30	1号底面直線形上右斜		
37号土坑	C-21	ヨリ部	135	130	34	-		
38号土坑	C-20-C-21	ヨリ部	107	92	30			
39号土坑	C-22-C-23	ヨリ部	80	60	18			
40号土坑	C-22	ヨリ部	102	80	25			
41号土坑	C-21	ヨリ部	120	80	40	1号底面直線形上右斜		
42号土坑	C-21	ヨリ部	120	60	40	1号底面直線形上右斜		
43号土坑	C-21	ヨリ部	120	60	43	-		
44号土坑	D-21	ヨリ部	112	100	42	-		
45号土坑	D-21	ヨリ部	100	80	47			
46号土坑	E-21	ヨリ部	140	100	50	-		
47号土坑	E-21	ヨリ部	145	100	50	-		
48号土坑	E-21	ヨリ部	130	100	56	-		
49号土坑	E-21	ヨリ部	100	95	30	30号底面直線形上右斜		
50号土坑	J-21-J-22	ヨリ部	100	95	35	-		
51号土坑	D-21	ヨリ部	110	100	37	1号底面直線形上右斜		
52号土坑	D-21	ヨリ部	100	80	47	-		
53号土坑	D-21	ヨリ部	90	60	38	-		
54号土坑	D-21	ヨリ部	100	80	58	-		
55号土坑	D-21	ヨリ部	100	80	58	-		
56号土坑	D-21	ヨリ部	100	100	57	-		
57号土坑	I-11	ヨリ部	130	112	35	-		
58号土坑	I-10	ヨリ部	125	120	30			
59号土坑	I-10	ヨリ部	140	130	35	圓錐形		
60号土坑	J-10	ヨリ部	100	95	30			
61号土坑	J-10	ヨリ部	100	95	30			
62号土坑	J-10	ヨリ部	100	90	35	3号底面直線形上右斜		
63号土坑	I-11	ヨリ部	110	117	28	30号底面直線形上右斜		
64号土坑	G-10-H-10	ヨリ部	100	90	34	4号底面直線形上右斜		

土坑名	アリ→ヨリ	下限部	上限部 (cm)	幅(cm)	奥行き (cm)	深さ (cm)	底面形状	備考
65号土坑	H-10	ヨリ部	100	90	42			
66号土坑	H-10-H-10	ヨリ部	110	95	30			
67号土坑	G-10-H-10	ヨリ部	200	110	30	4号底面直線形上右斜		
68号土坑	H-11	ヨリ部	100	94	30			
69号土坑	G-10-H-10	ヨリ部	40	35	30			
70号土坑	G-10	ヨリ部	40	35	30			
71号土坑	G-10	ヨリ部	40	35	30			
72号土坑	G-10-H-10	ヨリ部	127	127	50			
73号土坑	G-11	ヨリ部	80	70	35			
74号土坑	G-10	ヨリ部	100	100	35			
75号土坑	G-10	ヨリ部	110	90	30			
76号土坑	G-10	ヨリ部	100	90	35			
77号土坑	G-11	ヨリ部	80	100	37			
78号土坑	G-11	ヨリ部	120	125	32			
79号土坑	G-11	ヨリ部	130	125	40			
80号土坑	G-11	ヨリ部	140	100	40			
81号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
82号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
83号土坑	G-11	ヨリ部	90	90	40			
84号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
85号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
86号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
87号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
88号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
89号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
90号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
91号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
92号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
93号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
94号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
95号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
96号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
97号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
98号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
99号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
100号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
101号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
102号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
103号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
104号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
105号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
106号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
107号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
108号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
109号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
110号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
111号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
112号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
113号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
114号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
115号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
116号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
117号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
118号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
119号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
120号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
121号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
122号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
123号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
124号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
125号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
126号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
127号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
128号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
129号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
130号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
131号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
132号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
133号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
134号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
135号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
136号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
137号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
138号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
139号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
140号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
141号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
142号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
143号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
144号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
145号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
146号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
147号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
148号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
149号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
150号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
151号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
152号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
153号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
154号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
155号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
156号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
157号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
158号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
159号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
160号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
161号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
162号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
163号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
164号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
165号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
166号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
167号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
168号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
169号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
170号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
171号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
172号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
173号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
174号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
175号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
176号土坑	G-11	ヨリ部	100	90	40			
177号土坑	G-11	ヨリ部	100	90				

62号土坑（遺構：第38図）

（概要）調査区のほぼ中央部の北西寄り、I-10グリッドに確認された土坑である。

（形状）確認面での口径が1.25mほどの円形の平面形で、深さは約70cm。プラスコ状の形態をもち、底から10cm上にある最大径は1.4mを測る。

（特記）この土坑の周辺は地山の礫層までが深く、したがって礫層上の黄褐色砂層が厚いため土坑などを掘るのは比較的容易だったと見られ、たいへん丁寧に掘り込まれている。土坑覆土中に丸瓦の破片が1点見られた。この土坑についても性格不明といわざるを得ないもので、何らかの手がかりを求めるため、埋め戻しに要した土の量を測ることによってその容量を確認したところ、およそ800リットルという数字が得られている。

69号土坑（遺構：第36図）

（概要）調査区の東寄り、G-19からH-19グリッドにかけて見られた土坑である。

（形状）長径2.5m、短径1.1mほどの長円形の平面形で、深さは約80cmを測る。

（特記）この土坑の周辺には櫛文前期、諸磲B式期の遺物が比較的濃密に分布しており、この土坑内からも数点確認されていることから、本土坑は櫛文前期の所産と見られる。

95号土坑（遺構：第33図）

（概要）調査区の北西端で、L-5グリッドに位置する土坑である。48・49・50号住居跡と重複し、それらを切り込んで構築されている。

（形状）径0.8mほどのほぼ円形の平面形で、確認面からの深さは約109cmを測り、円筒形に近い形態である。

（特記）この土坑はほぼ同じレベルで切り合う48・49号住居跡およびさらにその下層にある50号住居と重複するもので、最下層の50号住居の床面をさらには50cmほど掘削して底面に達する。時期的には中世以降の所産と見られるが、土坑の形態や砂の堆積が見られた底面の状況から井戸の可能性が推測されるものである。

96号土坑（遺構：第35図、遺物：第81図4）

（概要）調査区の南西寄り、C-7グリッドに確認された土坑である。

（形状）径約1.0mの円形の平面形で、確認面からの深さは約20cm程度の浅めの土坑。底面には礫の路頭が見られる。

（特記）この土坑からは「寛永通寶」が1点出土している。確認面からの深さは浅いものであったが、かなり削平を受けていると見られ、状況的に見て近世の墓坑の可能性が考えられるものである。94号土坑なども伴う遺物は見られなかったが、同様な性格が考えられそうなものであった。

（3）特殊小坑

土坑と呼ぶほどの規模でなく、半完形の遺物が収まっている程度の大きさの小ピットを特殊坑と仮称し、それらの検出状況を報告する。

1号特殊小坑（遺構：第40図、遺物：第75図3）

（概要）調査区の北東部、K-20グリッドに確認された小さな掘り込みで、土師器の半完形の壺が1点出土している。37号住居跡の北壁の中央から70cmほど北に位置しており、性格は不明だが、その位置関係からして37号住居跡と何らかの関連を持つかと考えられる。

（形状）調査小区塊に当たっていたため西端を確認し得なかったが、長さ80cm（推定）、幅30cmの東西に細長い平面形を有し、黄褐色深さは3~4cm程度であった。

（遺物）土師器で残存立50%余りの壺（第75図3）が1点見られた。

2号特殊坑（遺構：第40図、遺物：第75図5）

（概要）調査区の中央北寄り、J-13グリッドに位置する。3号溝の東側の脇に接して確認されている。これについては、位置関係から溝跡との関連がありそうにもとれるが、遺物の時期等から両者は年代的に隔たりが見られ、溝跡との関係とは別にその意味が検討されようが、その性格を明らかにはしない。

（形状）径30cmほどの不整円形の平面形を呈し、断面形状はすり鉢形の小土坑である。

（遺物）土師器の羽釜の1/3程度の残存率のものが1点（第75図5）が見られた。

(4) 穴状遺構（遺構：第40図）

一つだけではあるが、通常の穴状住居に類似した形態ではあるが、詳細に見ると次ぎに見るような諸点で得意な様相が見られるため、穴状遺構として区別した。

1号穴状遺構

（概要）調査区の北東寄り、I-17・I-18からJ-17・J-18グリッドにかけて確認された穴状の遺構である。

（形状）やや歪んだ隅丸方形の平面形を呈し、断面形状は皿形を呈す。

（規模）東西2.4m×南北2.6m。床面までの深さは南壁で28cm、北壁で10cmを測る。

（床面）床面標高は、南側で376.70m、北側で376.80mとなっており、中央部で10cmほどの段差が見られる。覆土中には人頭大程度の礫が多く見られたが、カマドの構築材のような煤の付着や被熱痕等は認められなかった。床面はかなり強く硬化しており、皿状にゆるやかに立ち上がる壁面の下部まで続く効果状況が見られた。また床面中央部に柱穴と見られるピットが確認されている。

（遺物）覆土中に土器師の小片等が若干見られたが、それらは埋没過程で混入したもので、確実にこの遺構に伴う遺物は確認されていない。

（特記）遺物が伴わないため、明確には言い切れないが、中世の遺構で、床面の状況などから工房的なもの的可能性が推定されるものであった。類似したものが近隣の笠本地蔵遺跡などにおいても確認されている。

（5）柱穴群

調査区の中央部やや南西に偏った位置に確認されたもので、建物跡の可能性もあるが、その配列に乱れがあり、確実なことはいえない状況にあった。ピットは確認面で径20cm程度、深さ30~50cmとなっている。建物であるとすれば、3間×2間の大きさで東側に柵列が取り付くかたちになる。直接伴う遺物が認められなかったので時期は明確にしがたいが、主軸方位などから平安時代のものと推定される。

（6）溝状遺構

1から5号までの5本の溝状遺構が確認された。とくに1号溝と3号溝は調査年次がことなったため、はじめ別な溝と考えられたが、最終的に連続する1本の溝であることが確認されている。

1号溝から3号溝は、調査区中央にほぼ南北方向で検出されたもので、いずれも幅50~70cm、深さ20~30cmで、あった。1・3号溝は延長が約30mで、これと平行する2号溝は約10mの長さが確認されている。2号溝と3号溝の北側は途中で確認が出来なくなってしまい、1号溝と2号溝の南側は続きは削平を受け消滅している。これらの溝の覆土からは平安期の遺物が多く、わずかながら中世に係ると見られる土器・陶器片が認められている。1・3号溝は4号住居跡と重複しており、住居跡を切っていることもあり、遺物の状況も合わせ見て中世の溝と見られる。なおこれらの溝は、當時水流があったとは考えられない。

4号溝はB-12グリッドに、5号溝はH-5・H-6グリッドに確認されたどちらかというと東西方向の溝で、これらは1~3号溝とは方向も異なり、遺物をほとんど含まないことや断面形などの点でも様相を異にしており、1~3号溝より新しいものと見られる。

（7）道路状遺構

1つだけ、調査区のやや東寄りのところを南北に、直線的に横切るかたちで確認されており、初めは性格不明遺構（SX05）として、調査を進めたが、後で以下の諸点を勘案して1号道路状遺構と改めた。

その幅は約4mで、長さ約29mにわたって確認された。南側の延長はさらに調査区外に続くと見られる。北側については途中から確認できなくなったが、おそらく真っ直ぐ北に続いていたものと推定される。部分的に側溝が確認されたが、基本的には浅い皿状の断面形をしており、幅の中程では良好な硬化面が認められたが、両側寄りでは硬化が弱くなるといった状況のものであった。これを道路と見たのは、道路以外の遺構としては考えられないような長さと幅をもち、加えてほとんど平坦な底面に強い硬化面が形成されているからで、積極的に道路跡と呼称してもよいかとも思われる。

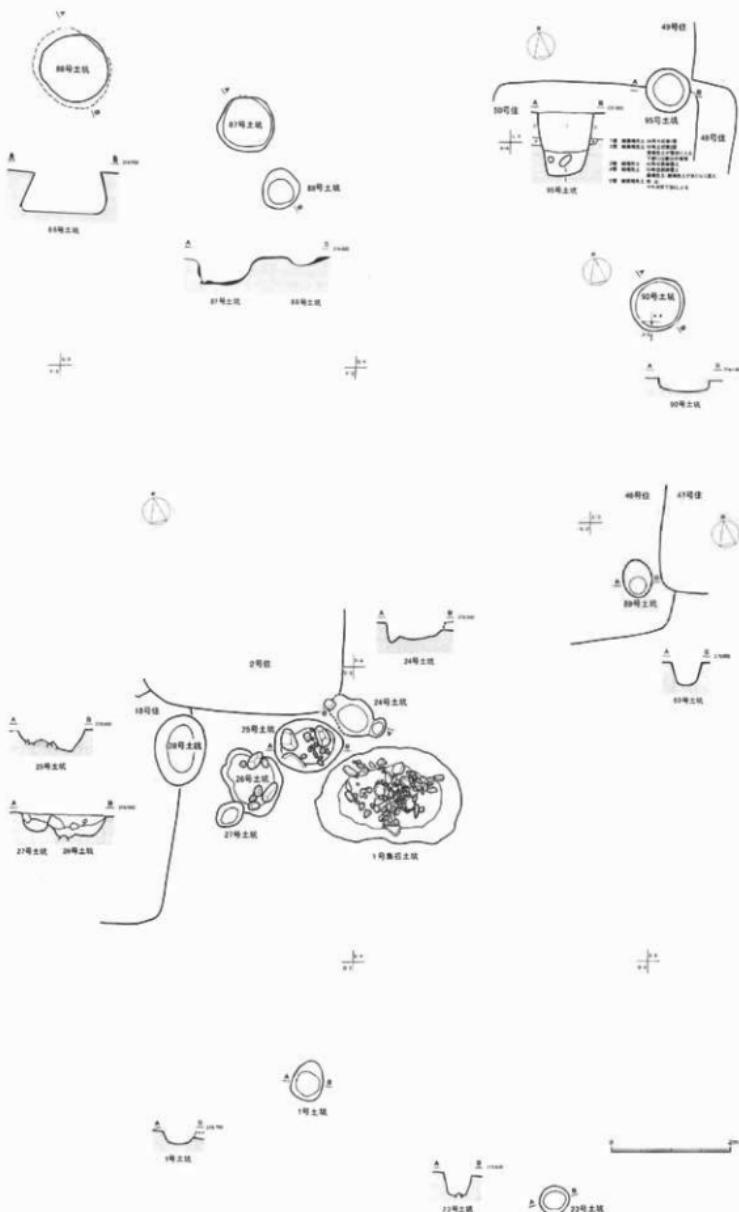
この道路状遺構の年代は、一部で平安末ないし中世の初めと見られる土坑を覆うように造られていることや、硬化面近くで蓮弁文青磁碗片（第74図7）が出土していることなどから、中世の所産で、細かくは14世紀前後くらいではないかと推定される。周辺地形に合わせて南から北に傾斜を持つものの、直線的に通過していく点に特徴があるといえよう。

(8) 遺物集中区（遺構：第42図、遺物：第84・85図、第88図1～3）

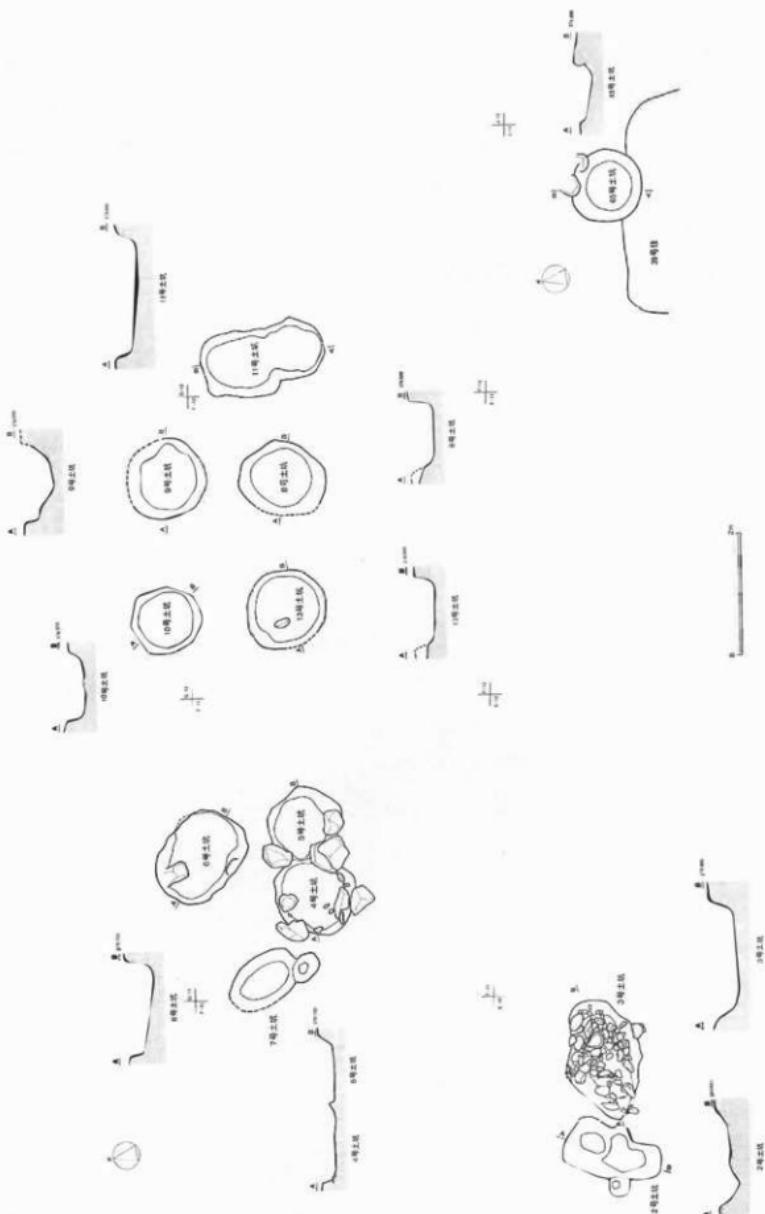
調査区東北寄りのH-21グリッド周辺に見られる小さな谷状の地形に、縄文時代前期の諸磯B式段階の薄い包含層が見られ、これを中心にさらに周辺に土器の分布が見られた。谷状地形以外では中期や晚期の土器も混在し、具体的な遺構の把握も、層的な分離もできなかった。出土遺物は、土器（第84・85図）、石器（第88図1～3）がある。

(9) 集石土坑（遺構：第42図）

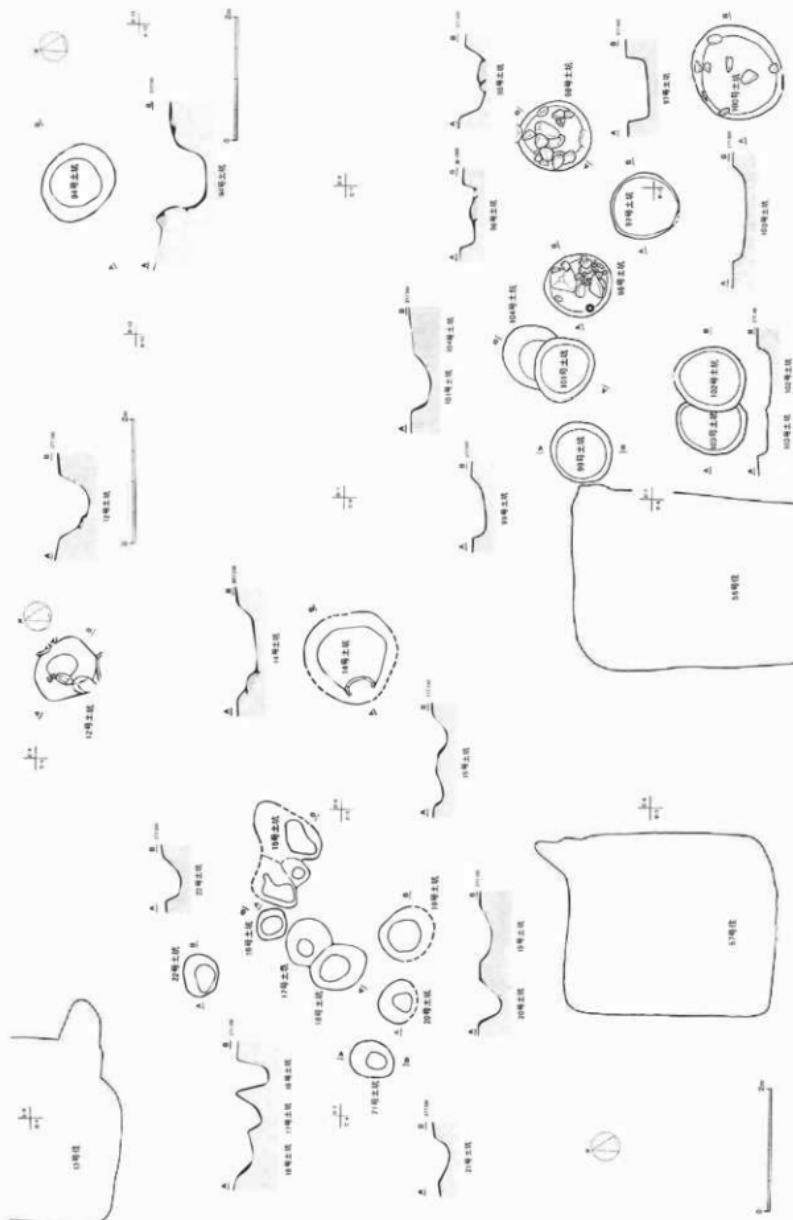
調査区の南西部のE-3グリッドに、長径2.5m、短径1.6m、深さ55cmの土坑が確認され、覆土中には礫が集中して詰まっていたため、確認段階から集石遺構としていたものを途中から1号集石土坑に改めた。縄文時代前期（諸磯B式か）の遺物が認められたが、図示しうるほどのものはなかった。



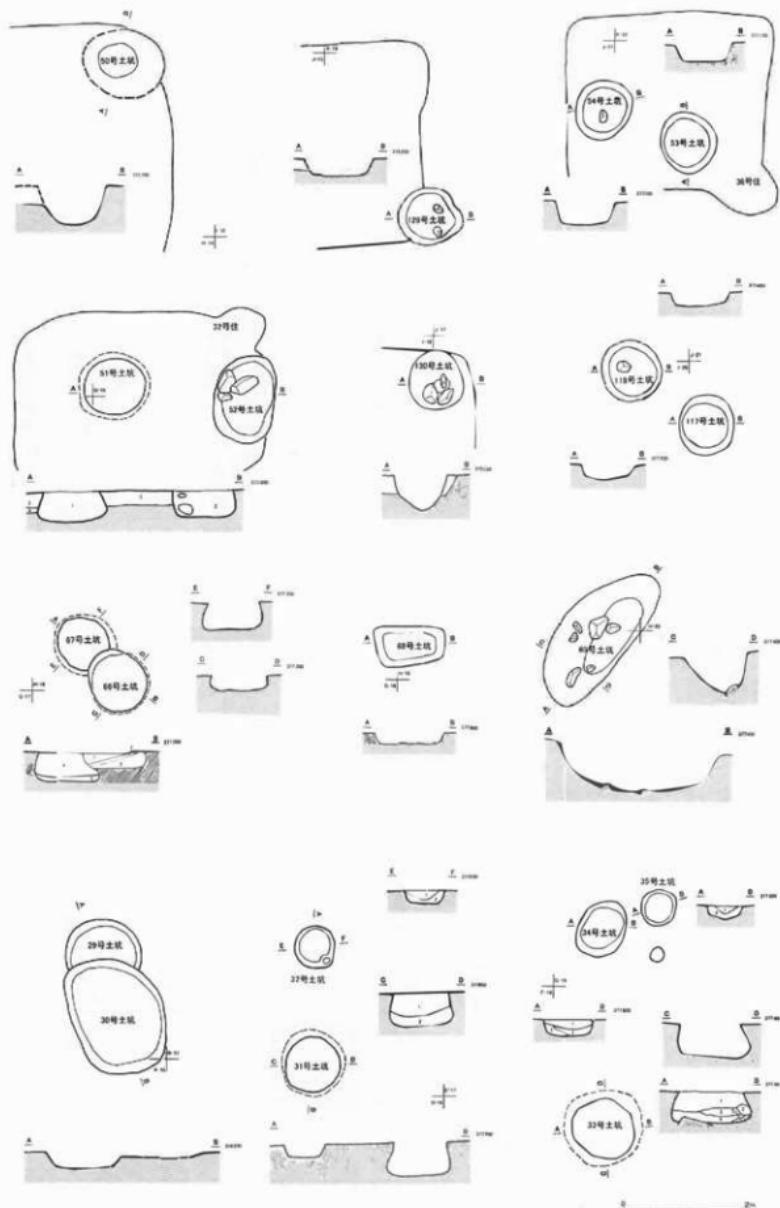
第33図 1号・23~28号・86~90号・95号土坑 (1 / 80)



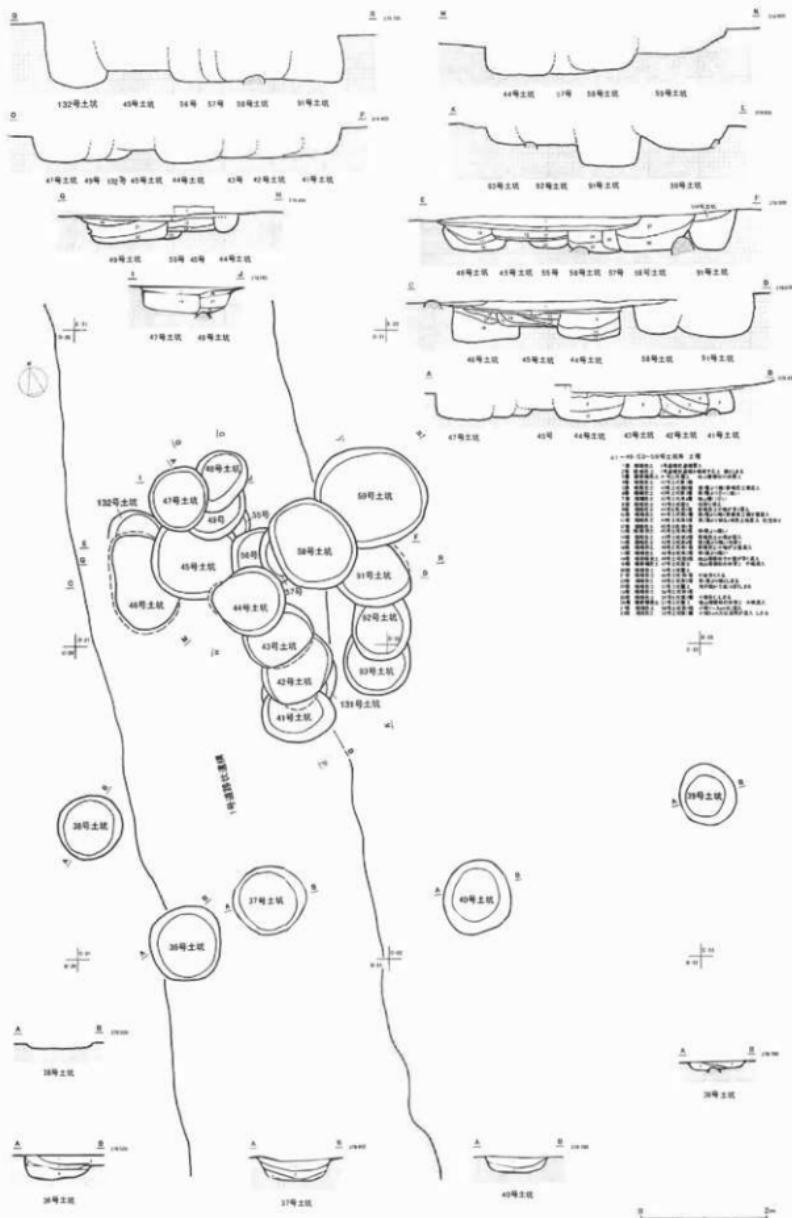
第34回 2~11号・13号・65号土坑 (1 / 80)



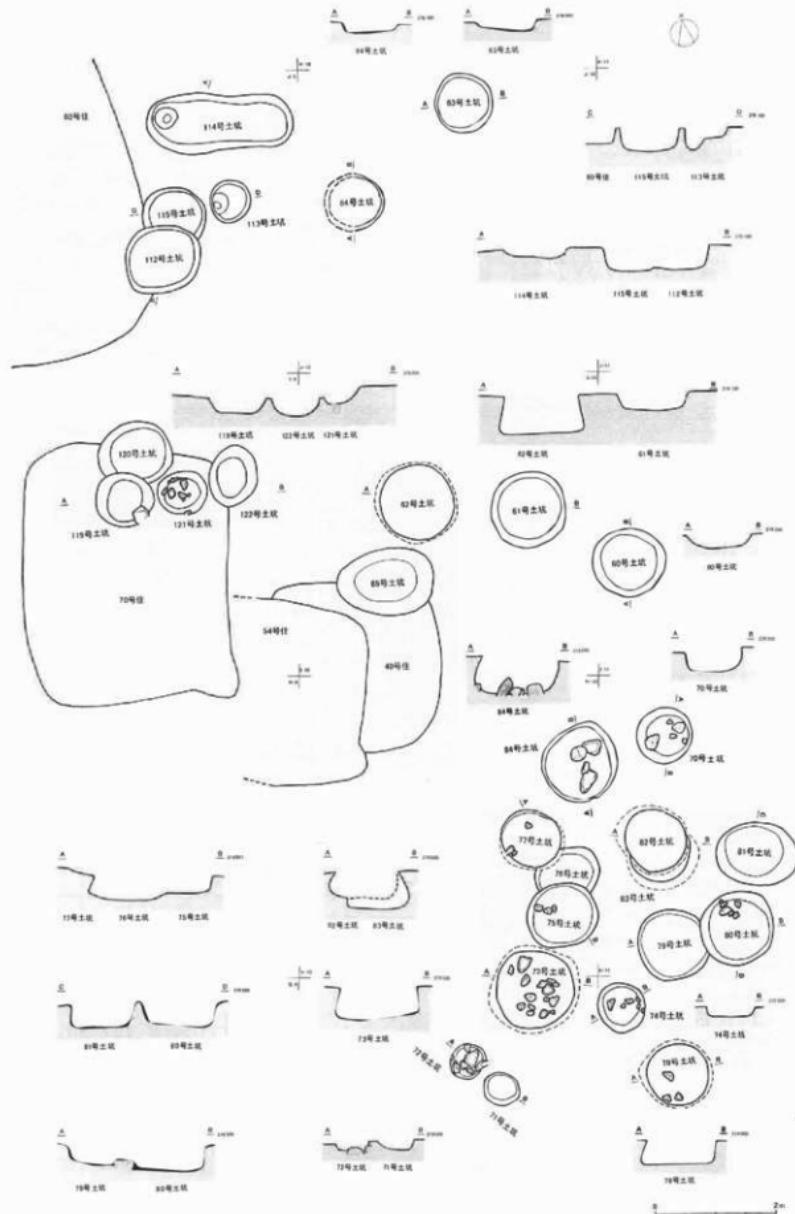
第35図 12号・14~22号・94号・96~104号土坑



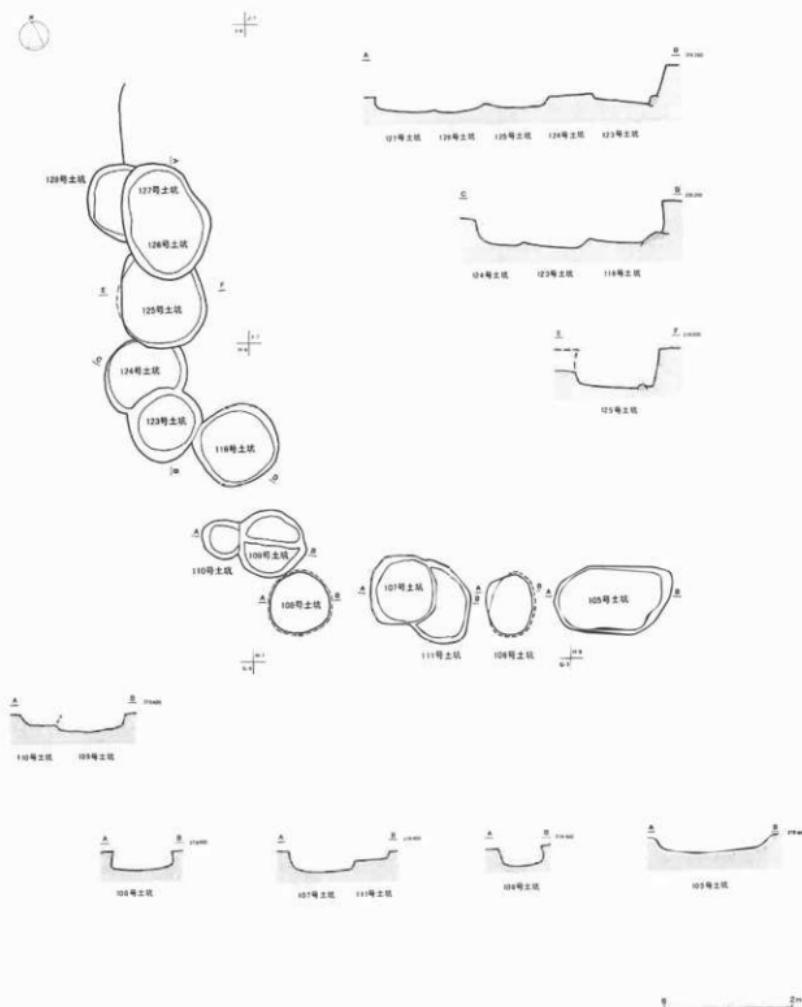
第36図 29~35号・50~52号・66~69号・117号・118号・129・130号土坑 (1 / 80)



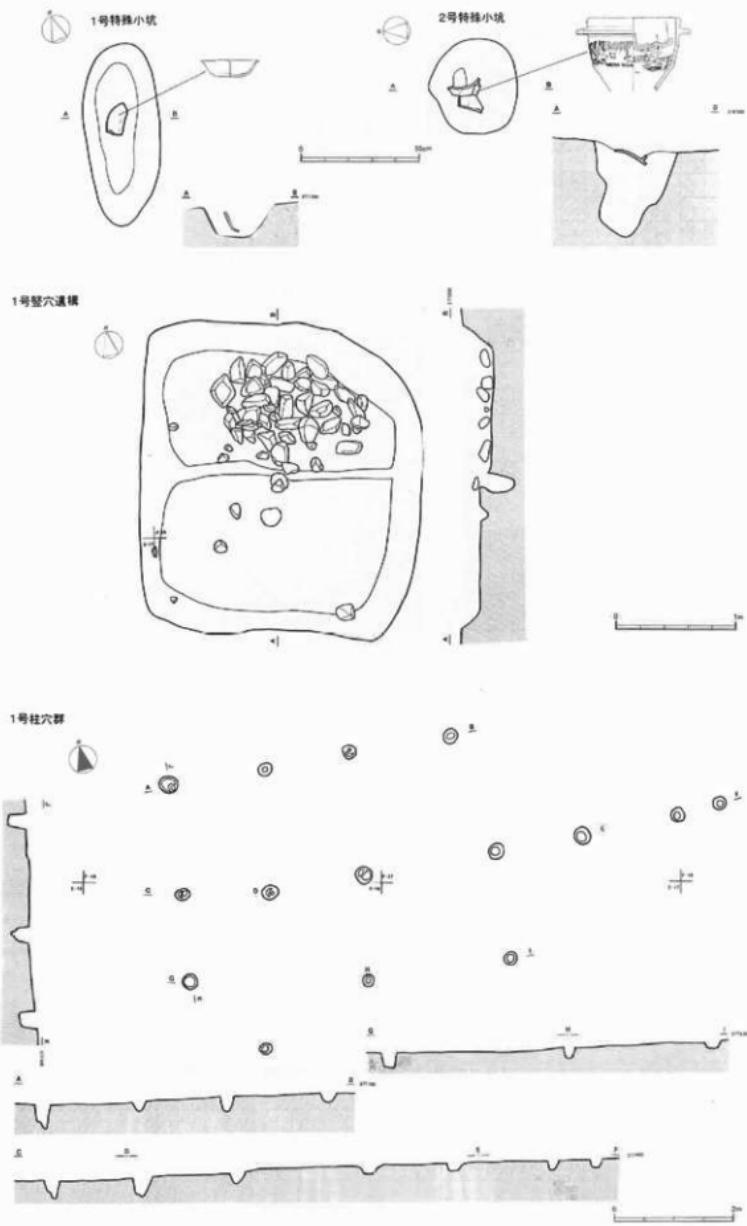
第37図 36~49号・53~59号・91~93号・131号・132号土坑 (1 / 80)



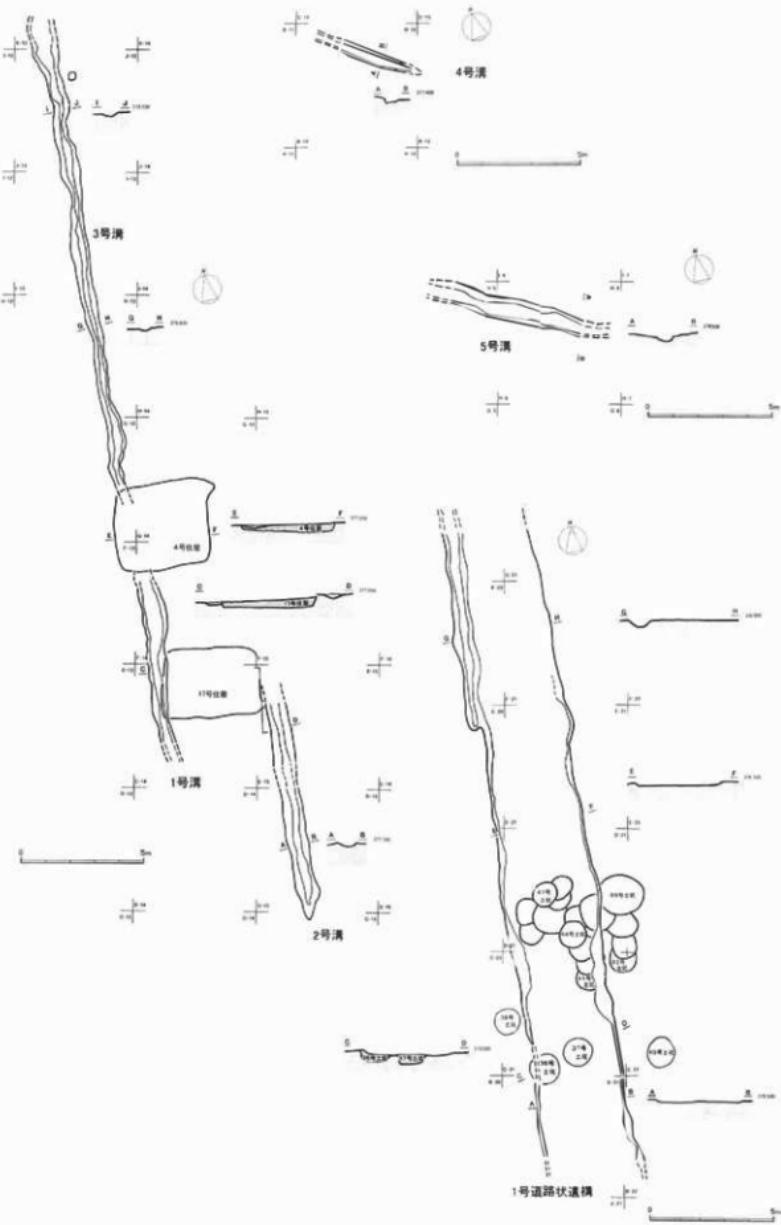
第38図 60~64号・70~85号・112~115号・119~122号土坑 (1 / 80)



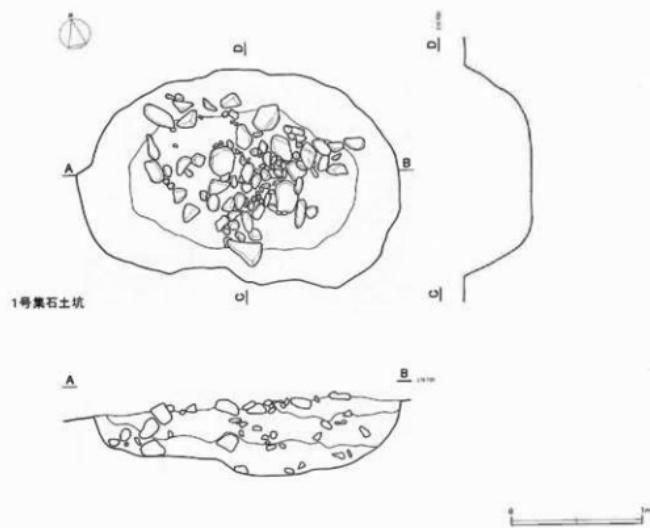
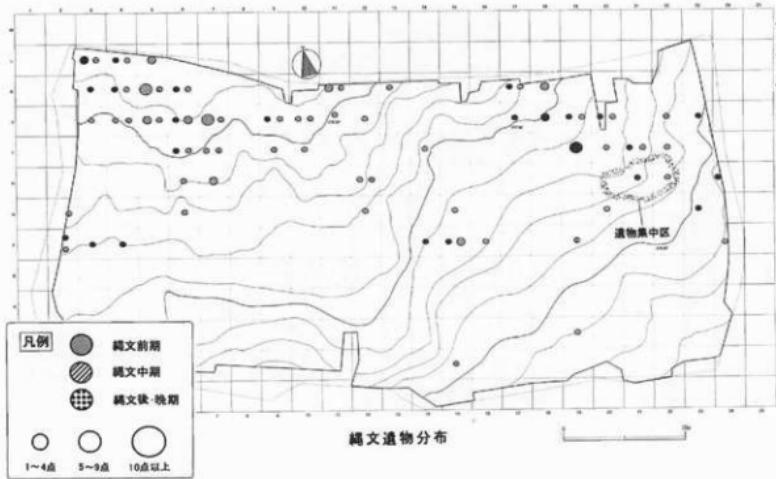
第39図 105~111号・116号・123~128号土坑 (1 / 80)



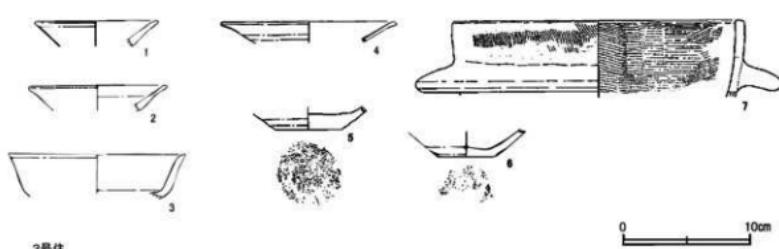
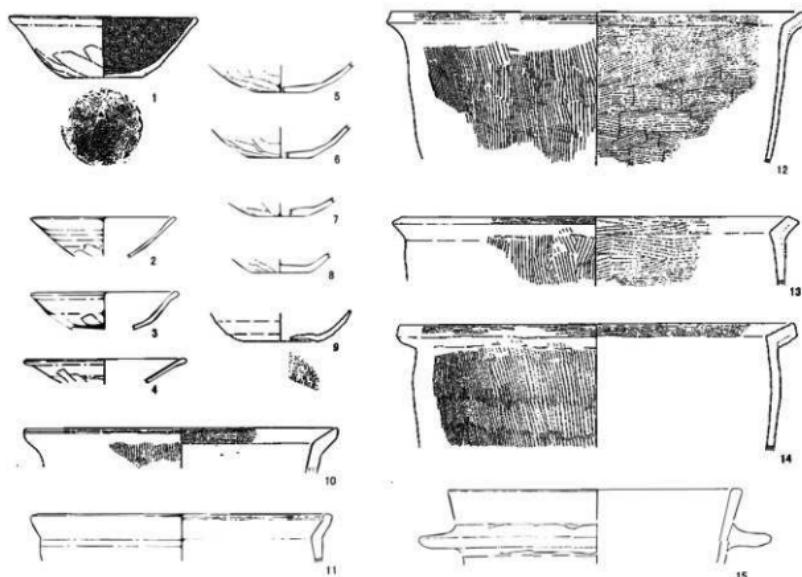
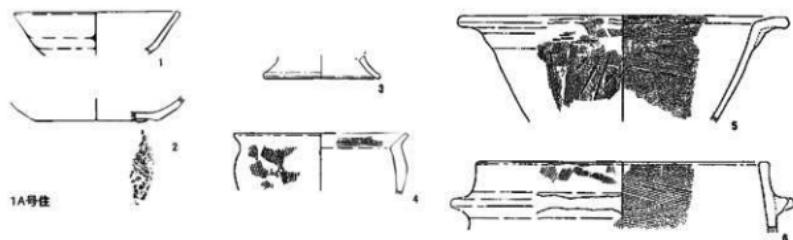
第40図 1～2号特殊小坑 (1/20)・1号竖穴道構 (1/40)・1号柱穴群 (1/80)



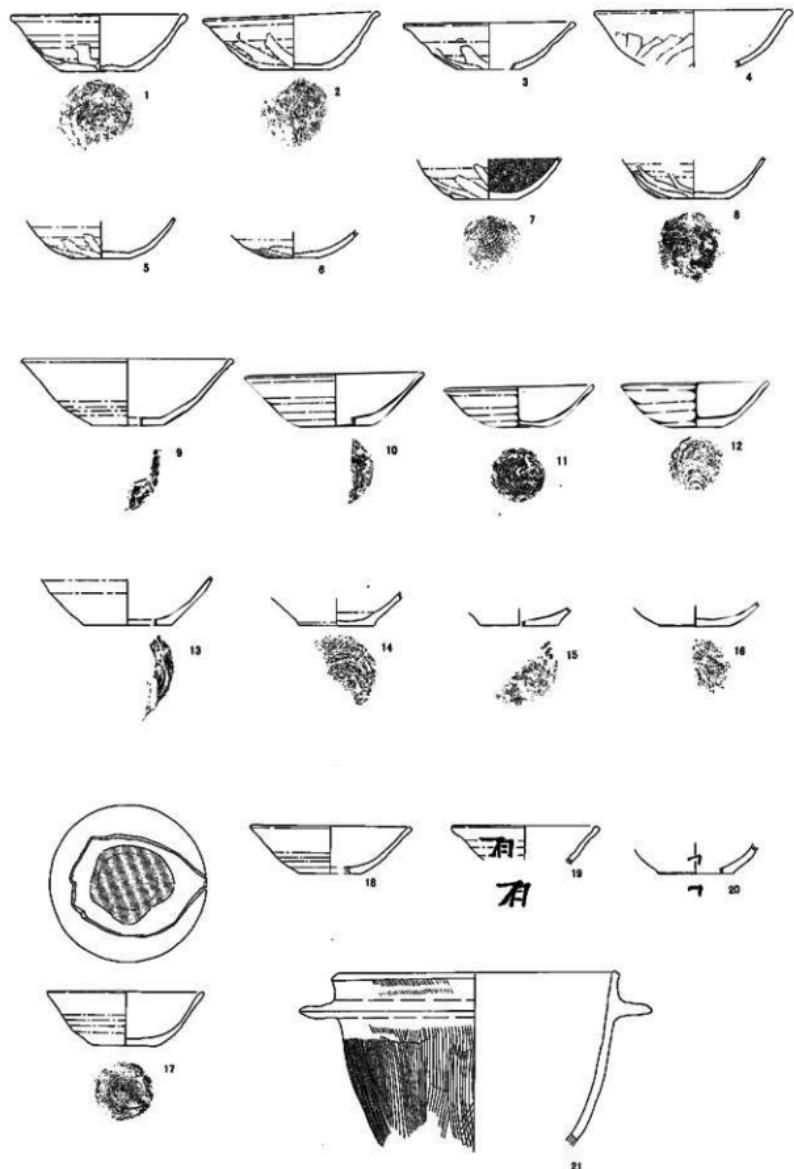
第41図 1～5号溝・1号道路状遺構 (1/200)



第42図 1号集石土坑 (1/40)・縄文遺物分布 (1/500)



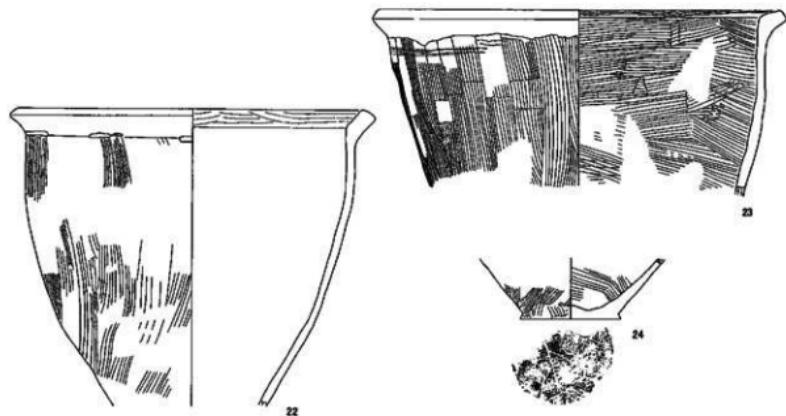
第43図 1 A号・2号・3号住居跡出土土器 (1/4)



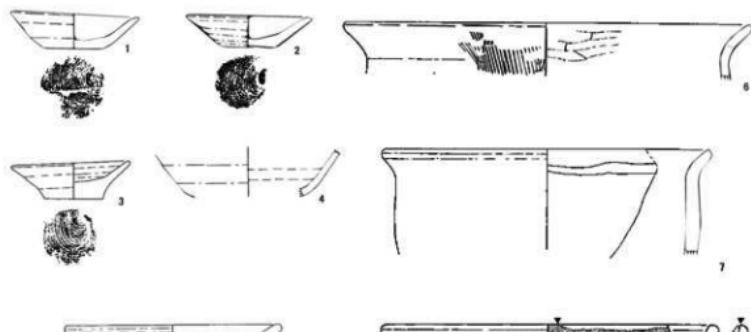
4号住

0 10cm

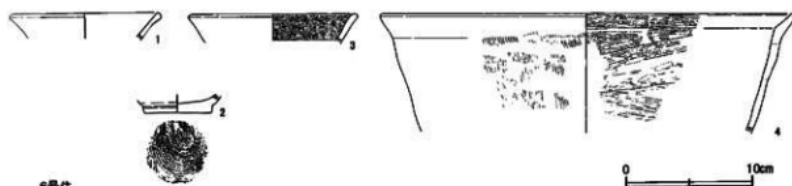
第44図 4号住居跡出土土器 (1/4)



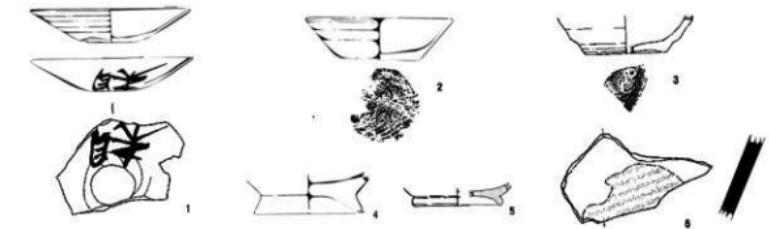
4号住



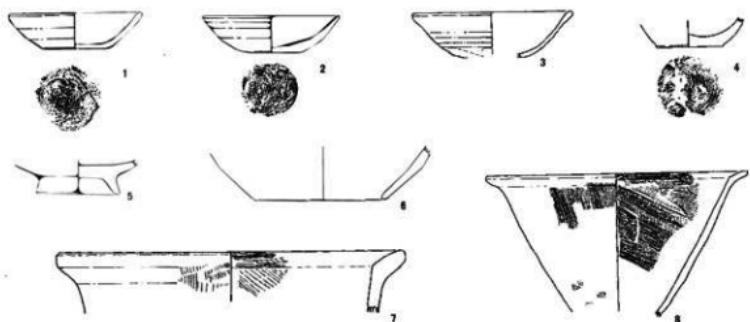
5A号住



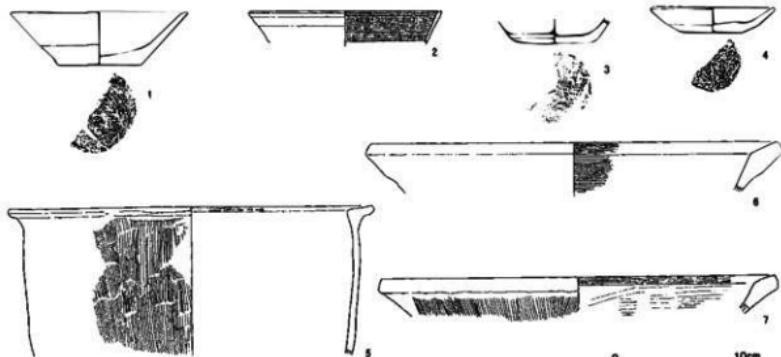
第45図 4号・5A号・6号住居跡出土土器 (1/4)



7号住



8号住

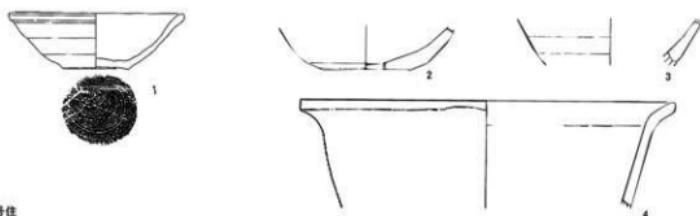


0 10cm

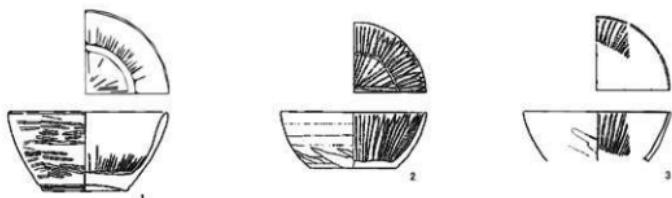
第46図 7号・8号・9号住居跡出土土器 (1/4)



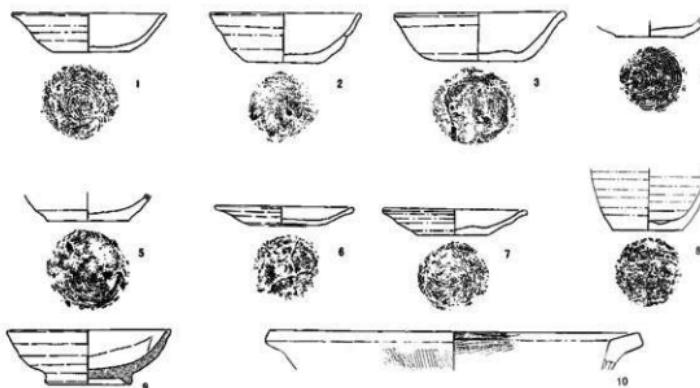
10号住



11号住

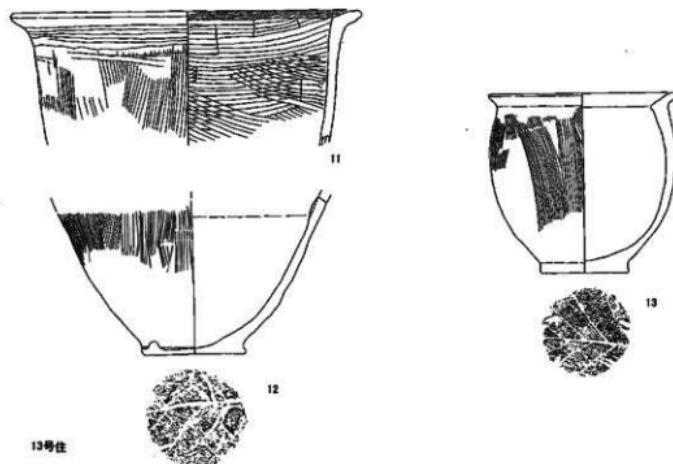


12号住



0 10cm

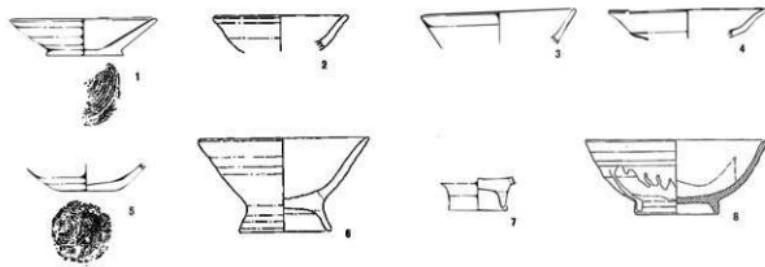
第47図 10号・11号・12号・13号住居跡出土土器 (1/4)



13号住



14号住

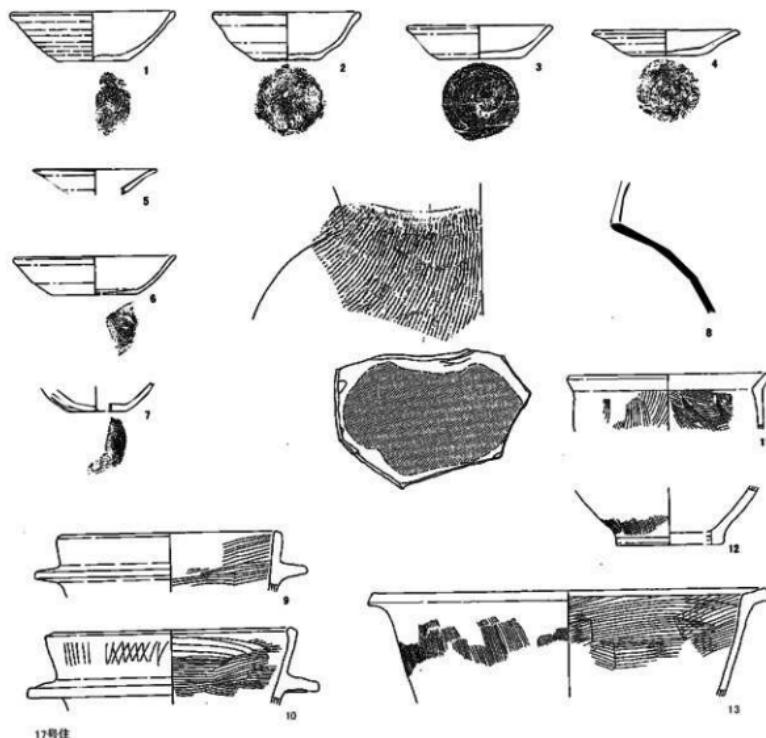


15号住

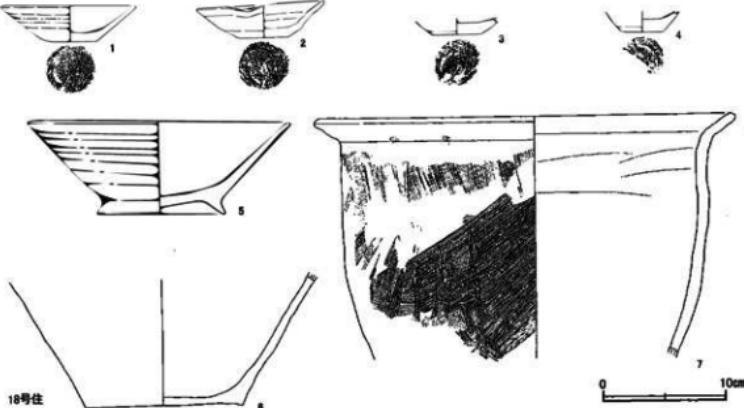


0 10cm

第48図 13号・14号・15号・16号住居跡出土土器 (1/4)



17号住



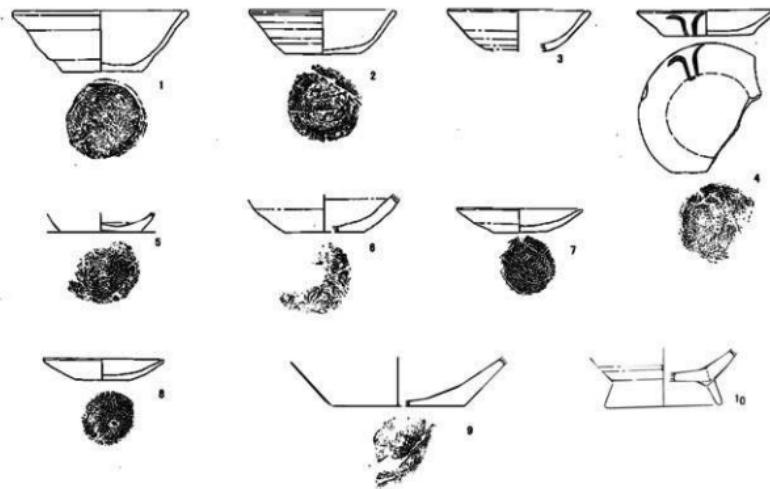
第49図 17号・18号住居跡出土土器 (1/4)



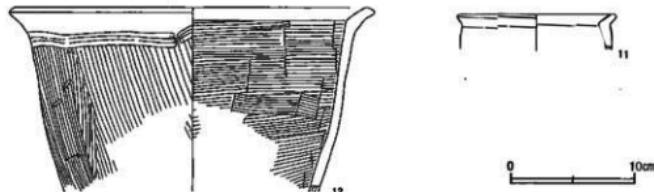
19号住



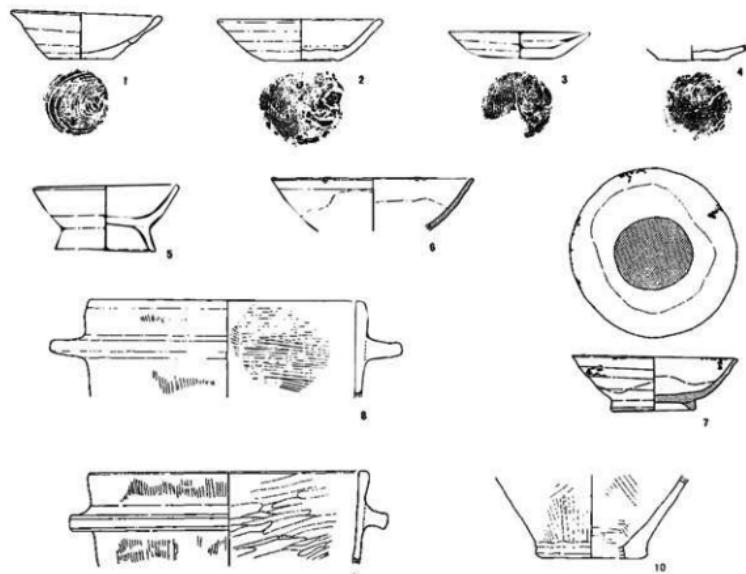
21号住



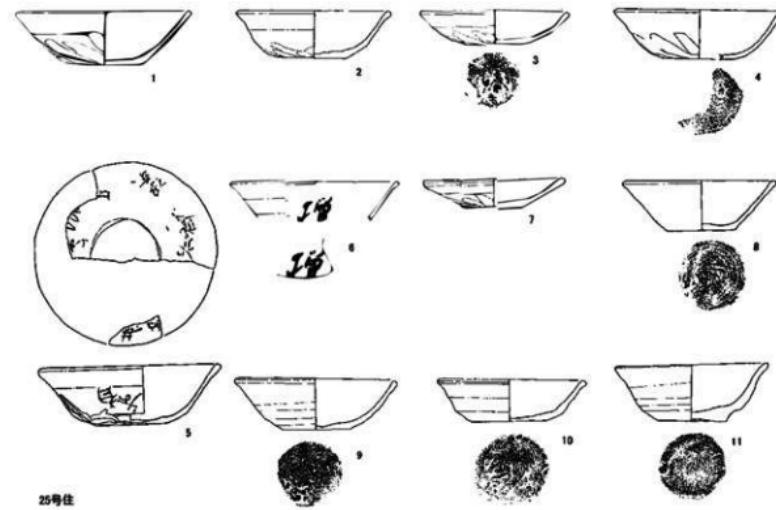
22号住



第50図 19号・21号・22号住居跡出土土器 (1 / 4)

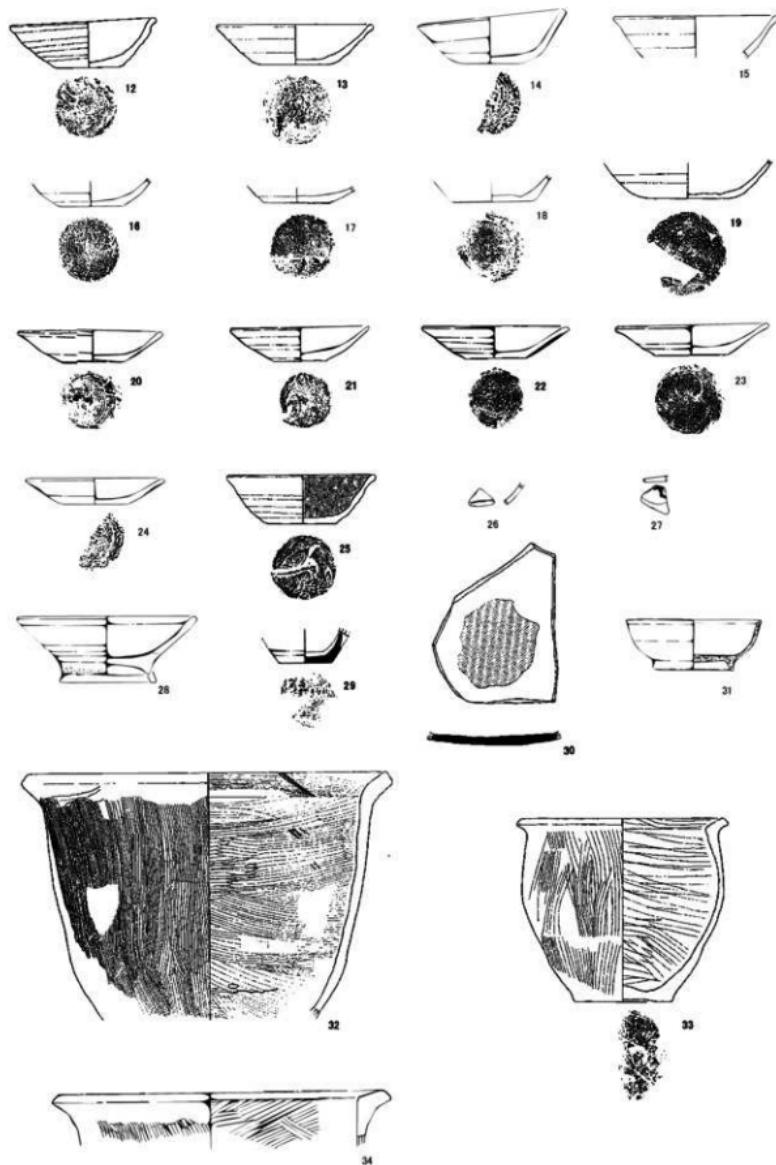


24号住



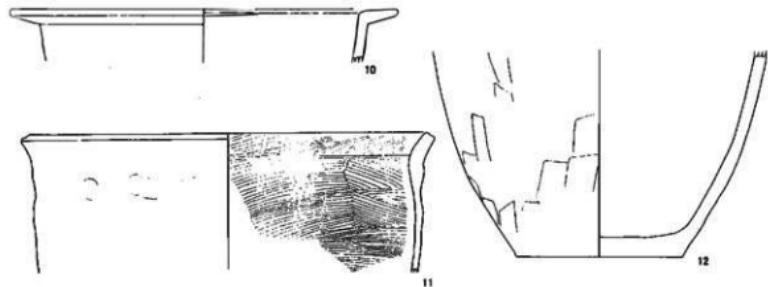
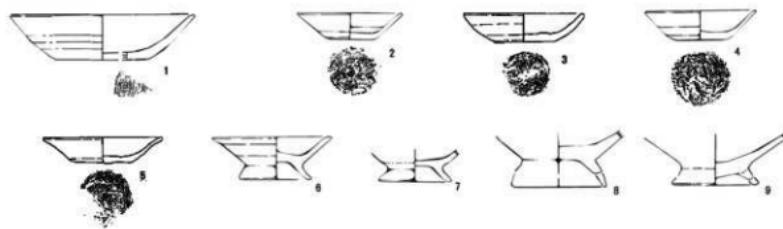
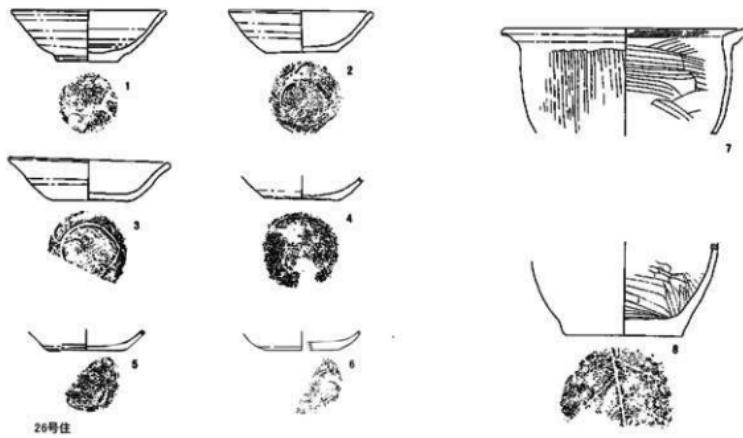
0 10cm

第51図 24号・25号住居跡出土土器 (1/4)



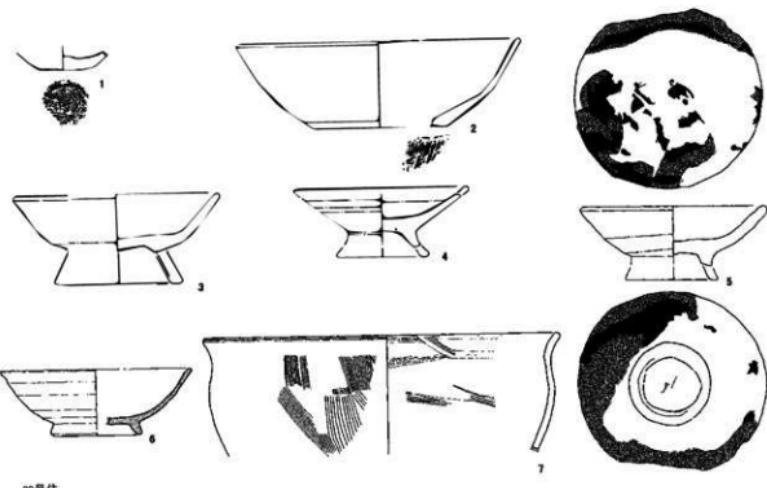
25号

第52図 25号住居跡出土土器 (1 / 4)

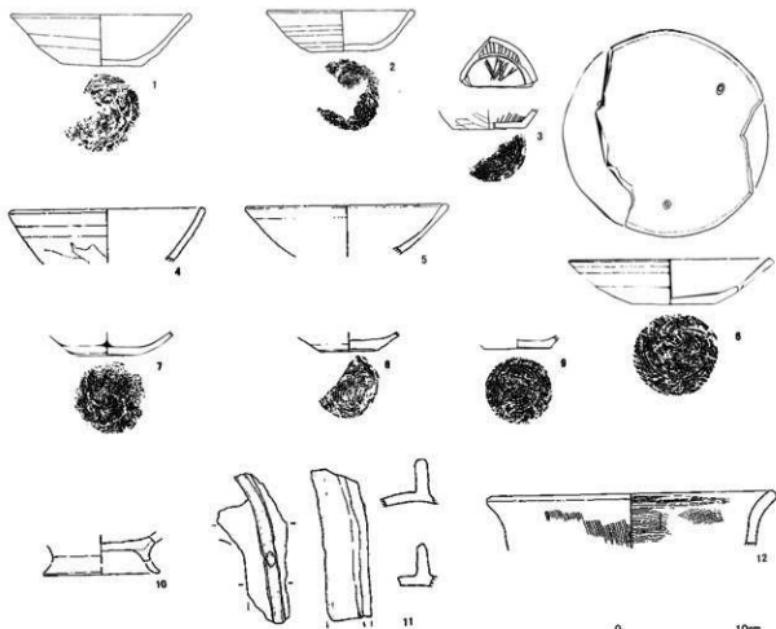


0 10cm

第53図 26号・28号・29号住跡出土土器 (1/4)



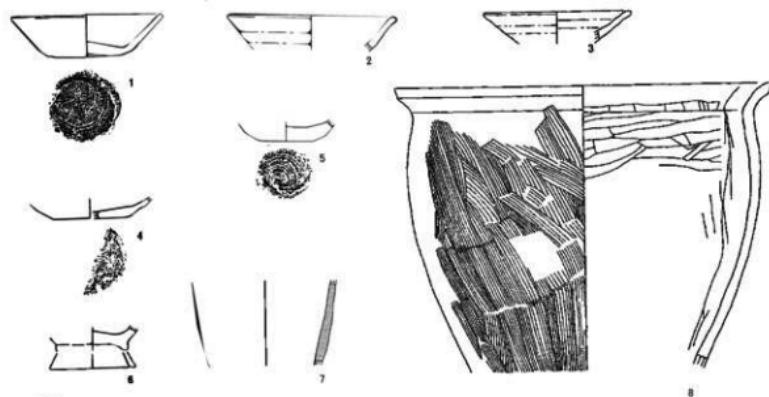
30号住



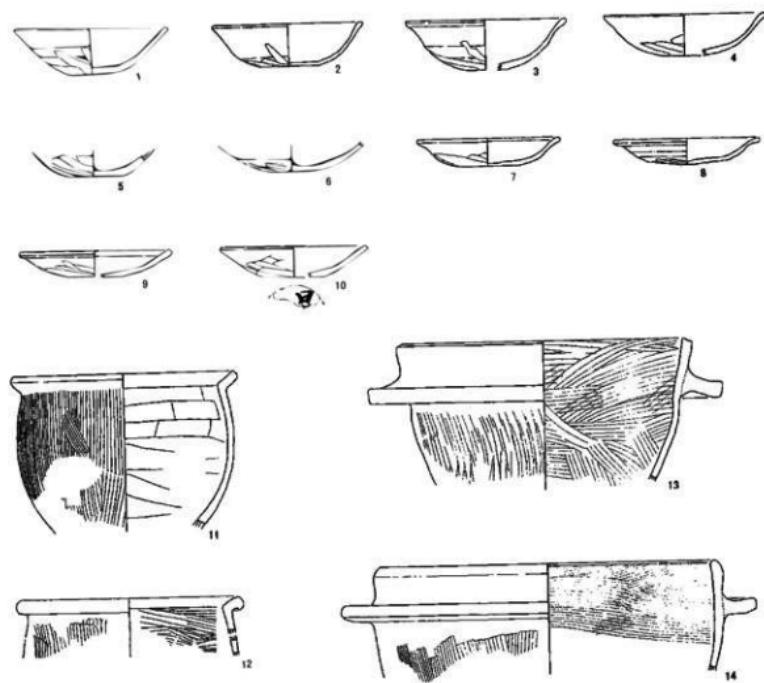
31号住

第54図 30号・31号住居跡出土土器 (1/4)

0 10cm



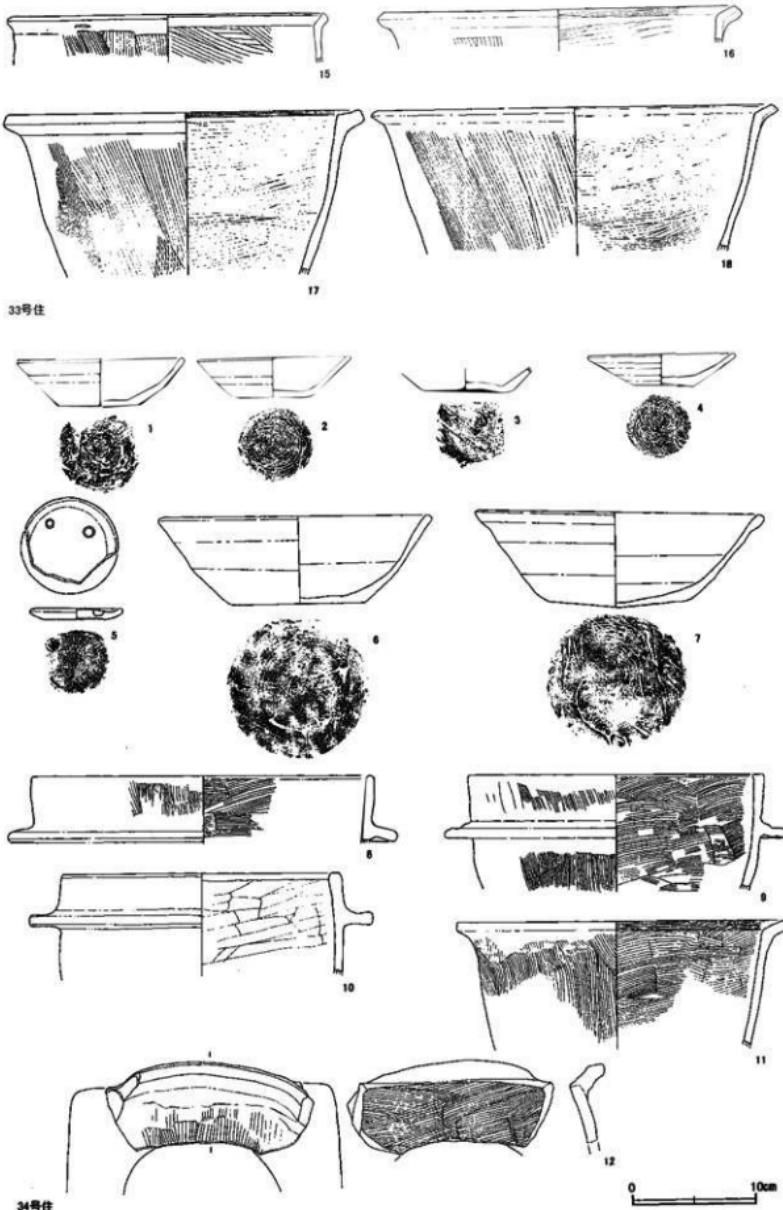
32号住



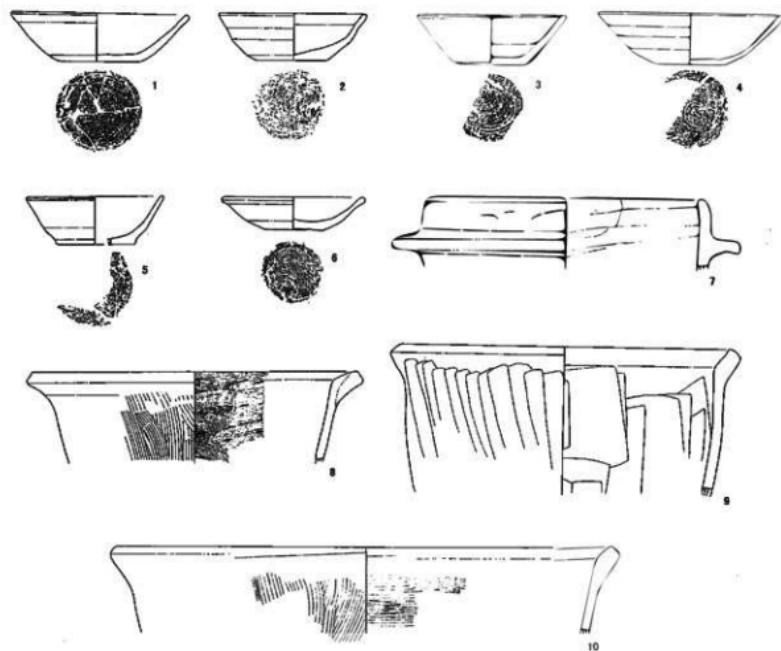
33号住

第55図 32号・33号住居跡出土土器 (1/4)

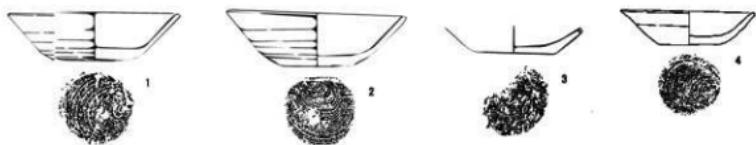




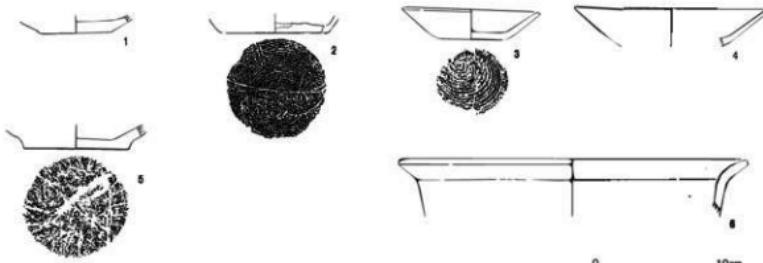
第56図 33号・34号住居跡出土土器 (1 / 4)



35号住

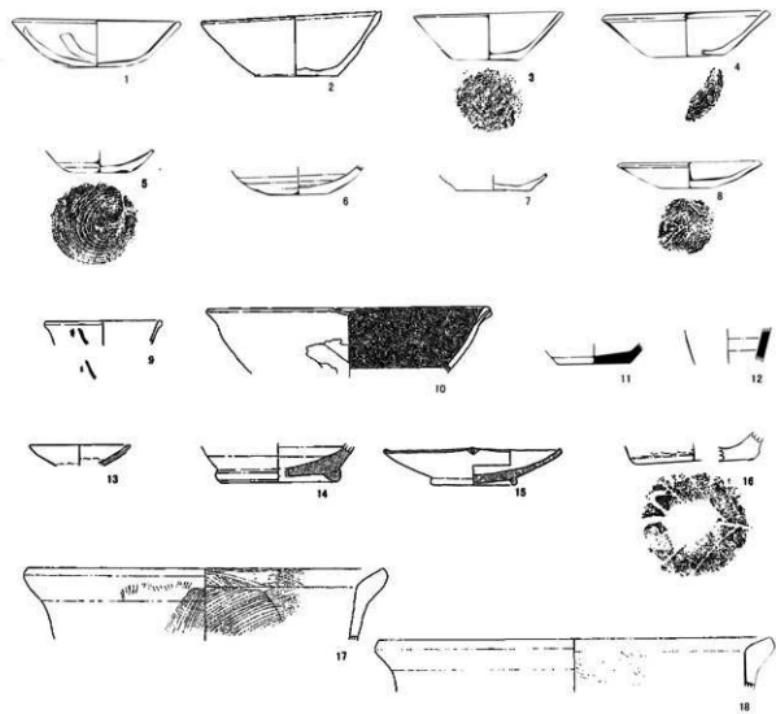


36号住

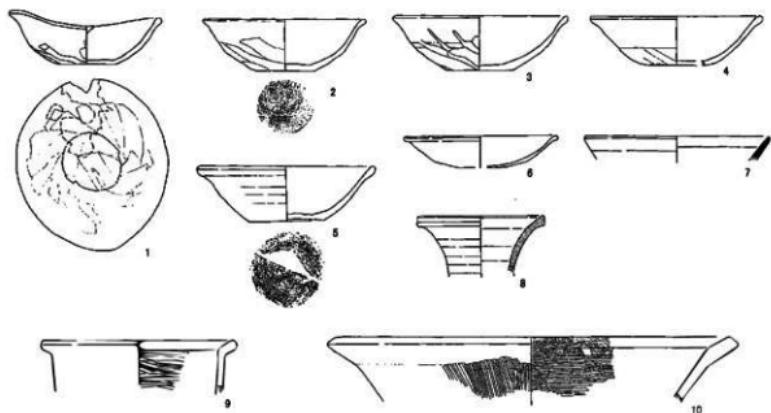


0 10cm

第57図 35号・36号・37号住居跡出土土器 (1/4)



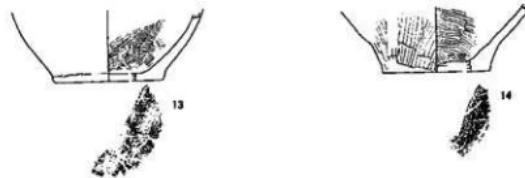
38号住



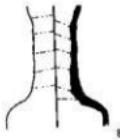
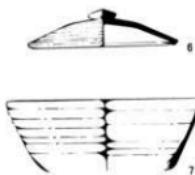
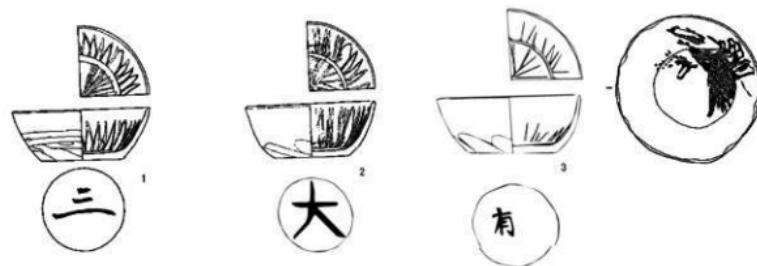
39号住

第58図 38号・39号住居跡出土土器 (1/4)

0 10cm



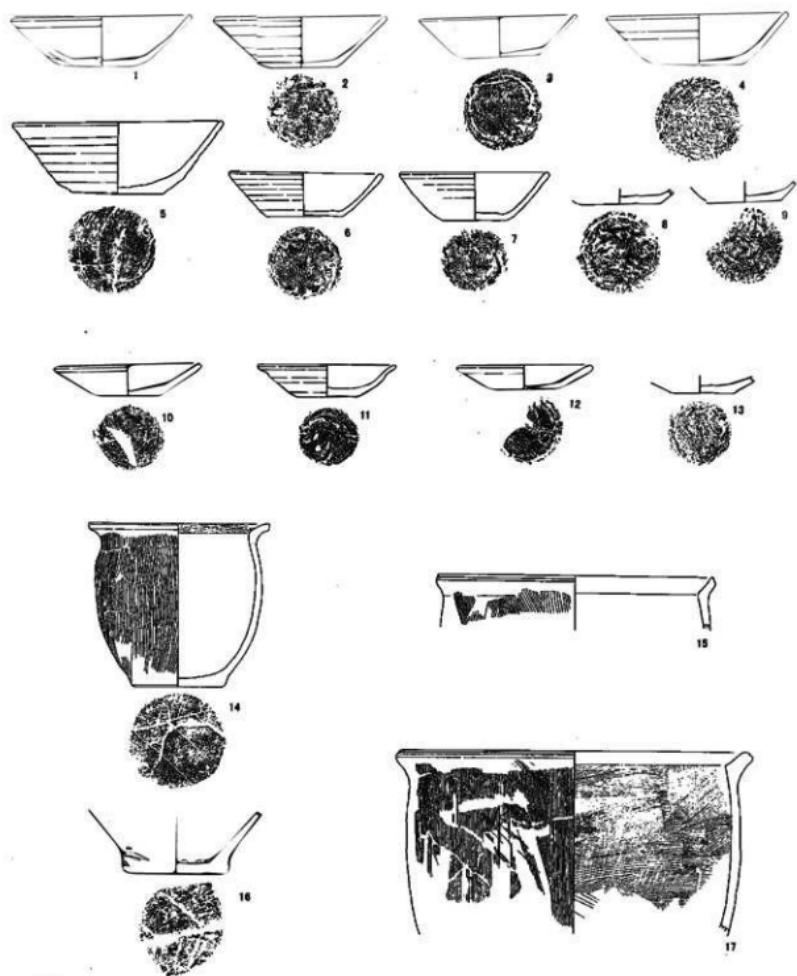
39号住



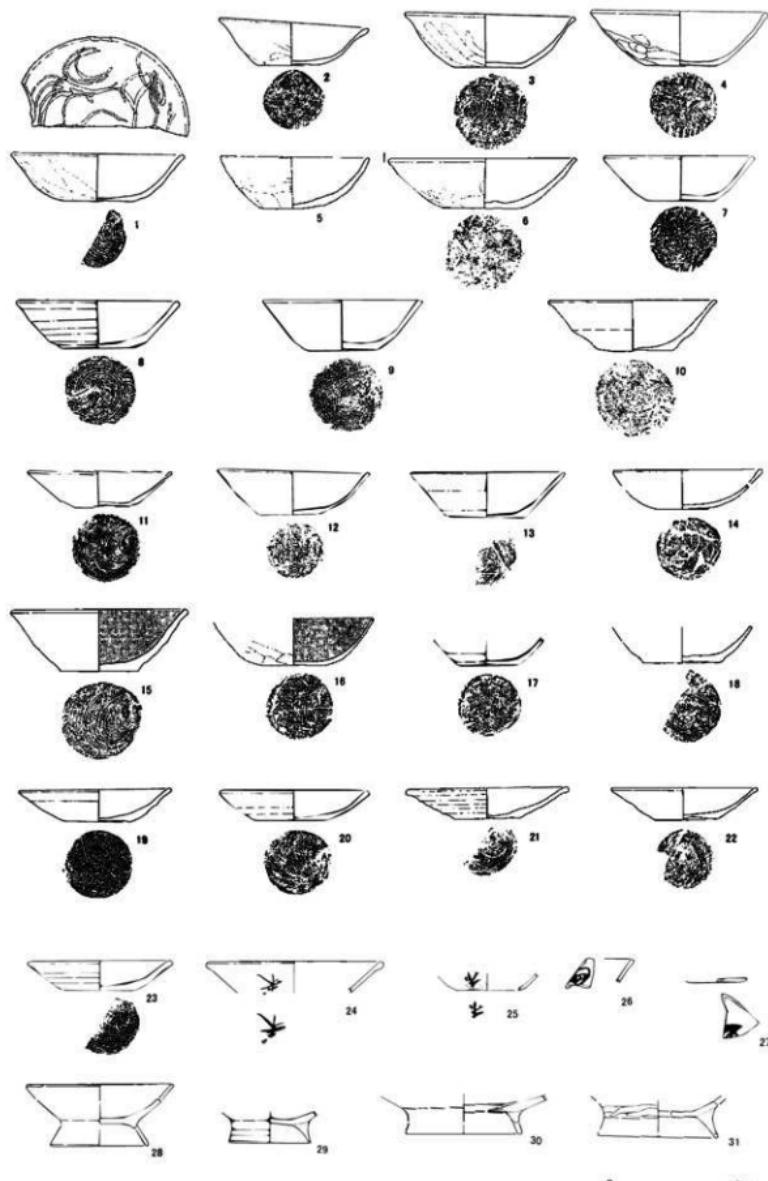
40号住



第59図 39号・40号住居跡出土土器 (1/4)

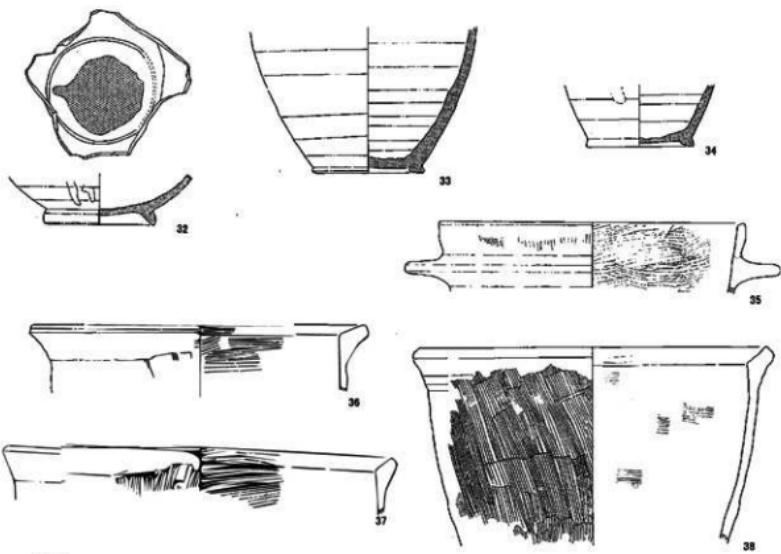


第60図 42号・43号住居跡出土土器 (1/4)

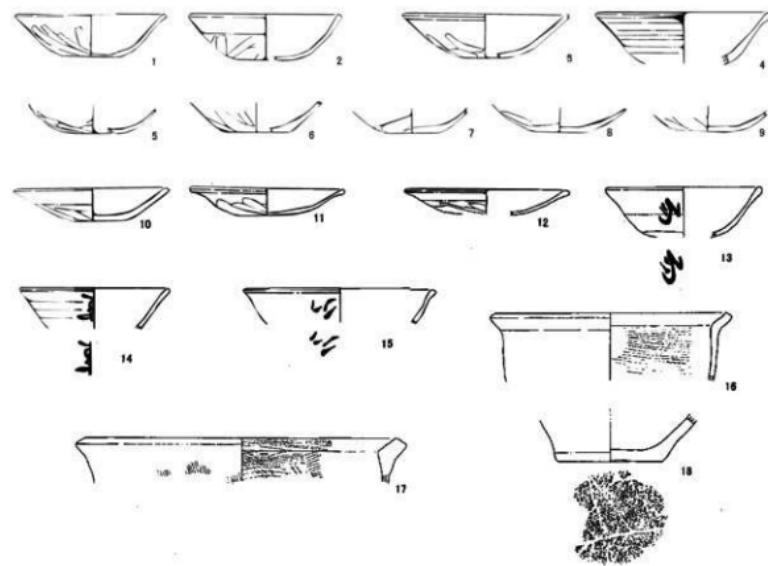


44号住

第61図 44号住居跡出土土器 (1/4)



44号住

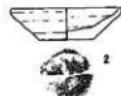


45号住

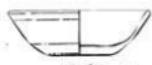
第62図 44号・45号住居跡出土土器 (1/4)



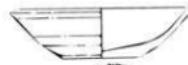
46号住



46号住



46号住



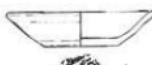
46号住



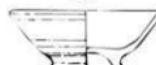
46号住



46号住



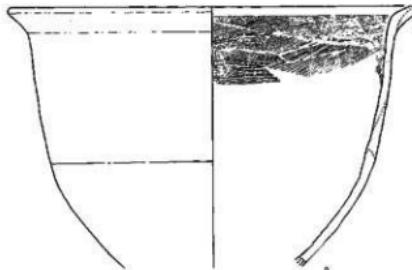
46号住



46号住



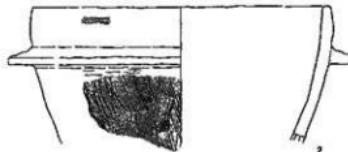
46号住



47号住



48号住



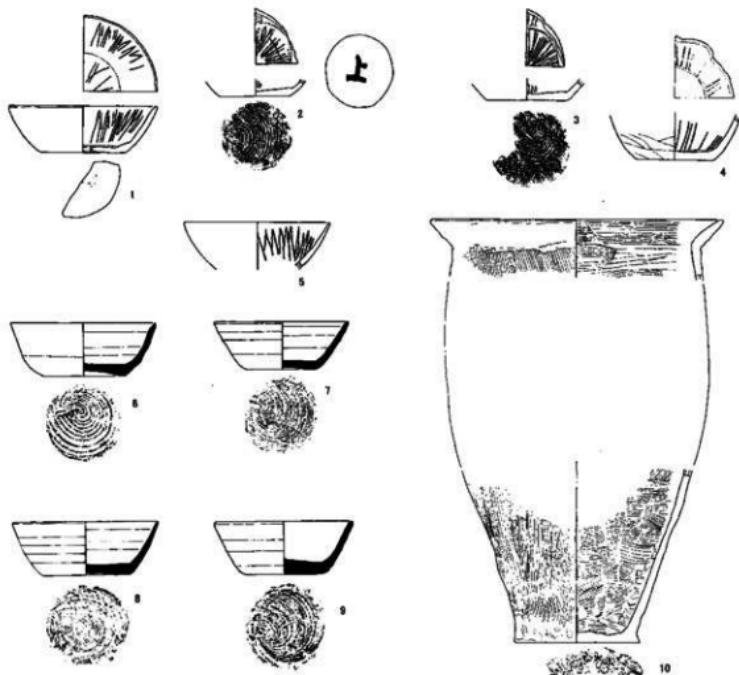
48号住



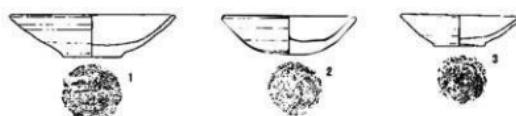
49号住



第63図 46号・47号・48号・49号住居跡出土土器 (1/4)



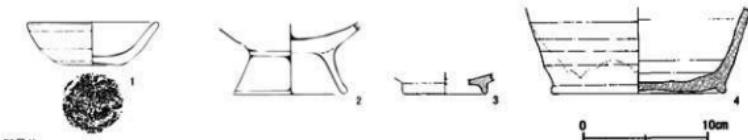
50号住



51号住

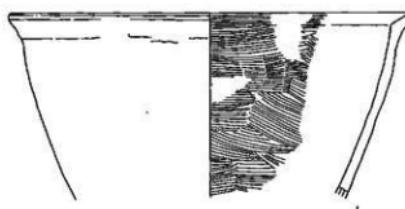
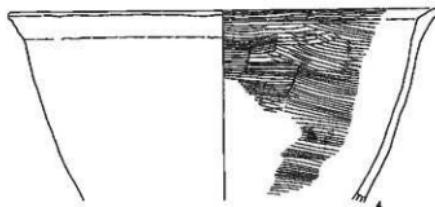
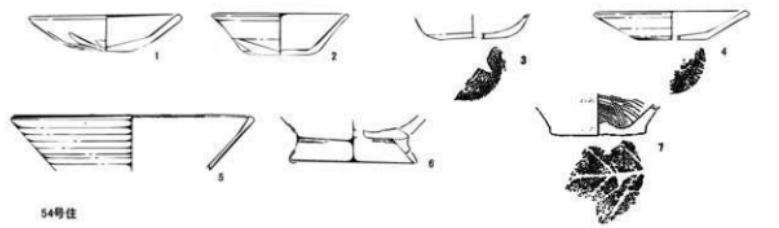


52号住



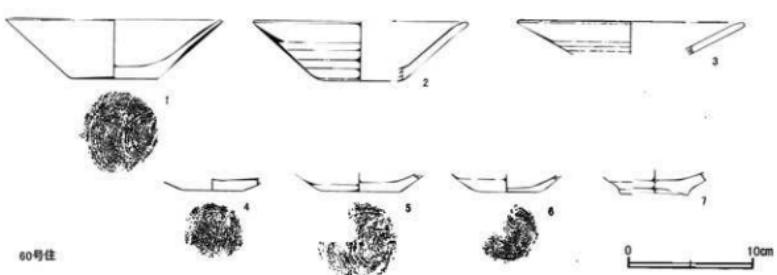
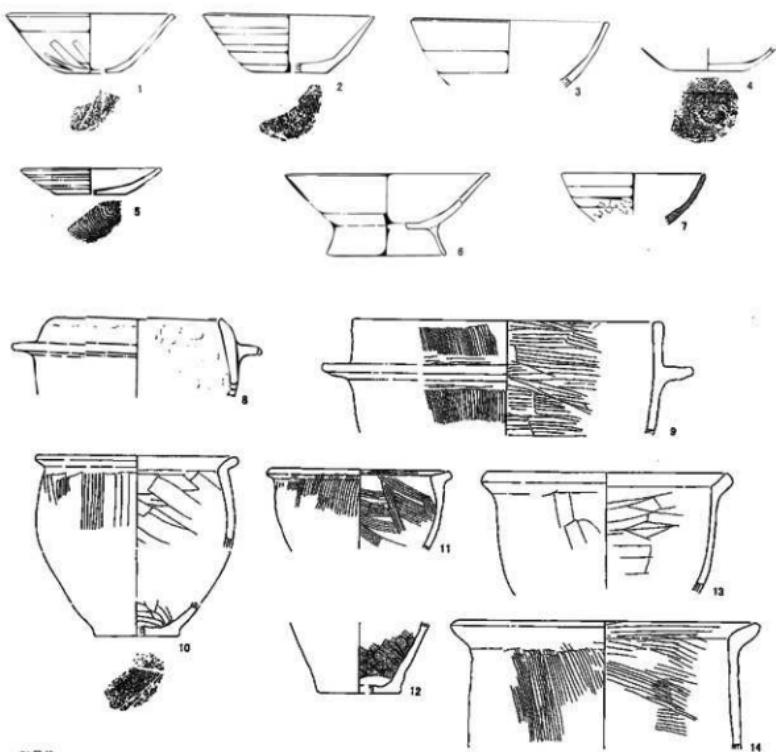
0 10cm

第64図 50号・51号・52号・53号住居跡出土土器 (1/4)

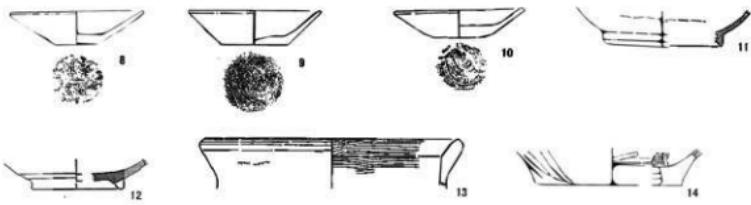


0 10cm

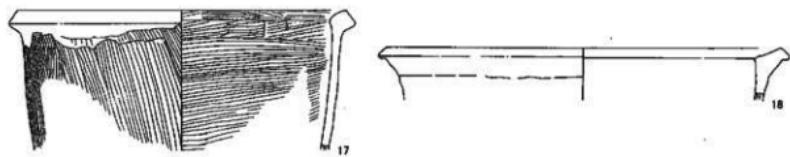
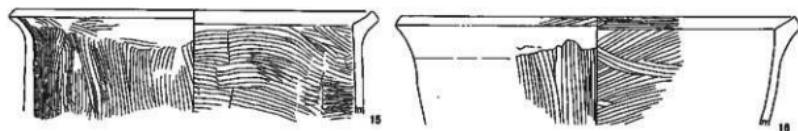
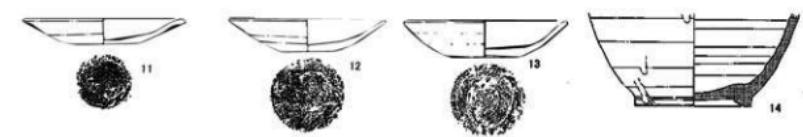
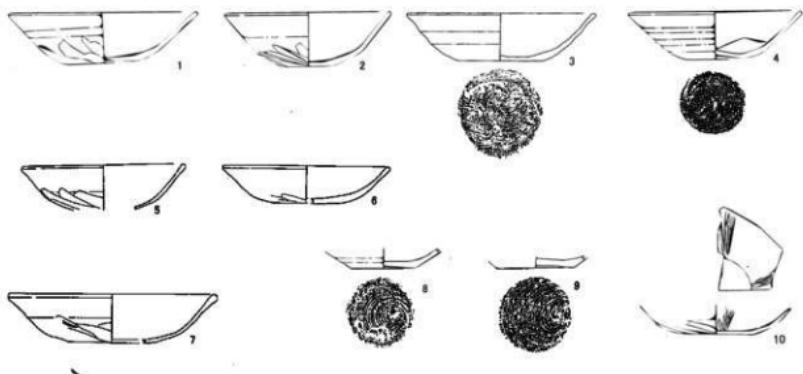
第65図 54号・55号・56号・57号住居跡出土土器 (1/4)



第66図 58号・59号・60号住居跡出土土器 (1 / 4)



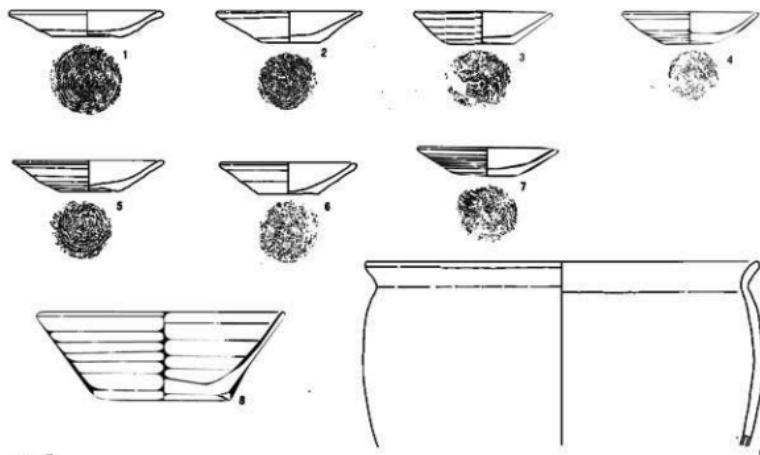
60号住



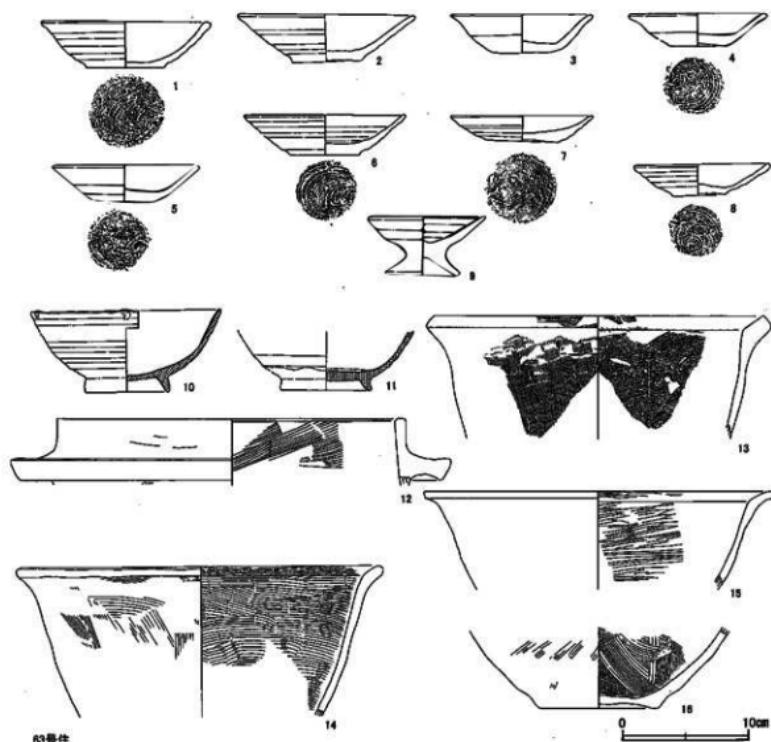
61号住

0 10cm

第67図 60号・61号住居跡出土土器 (1 / 4)

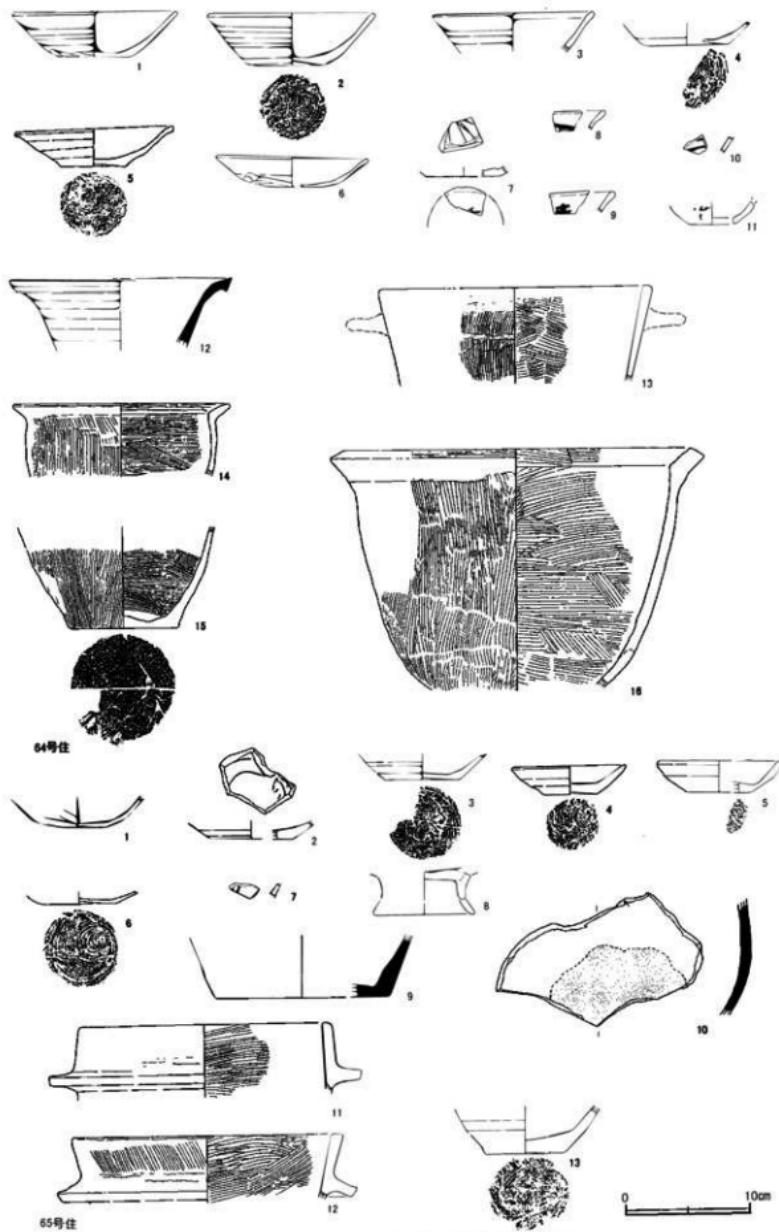


62号住

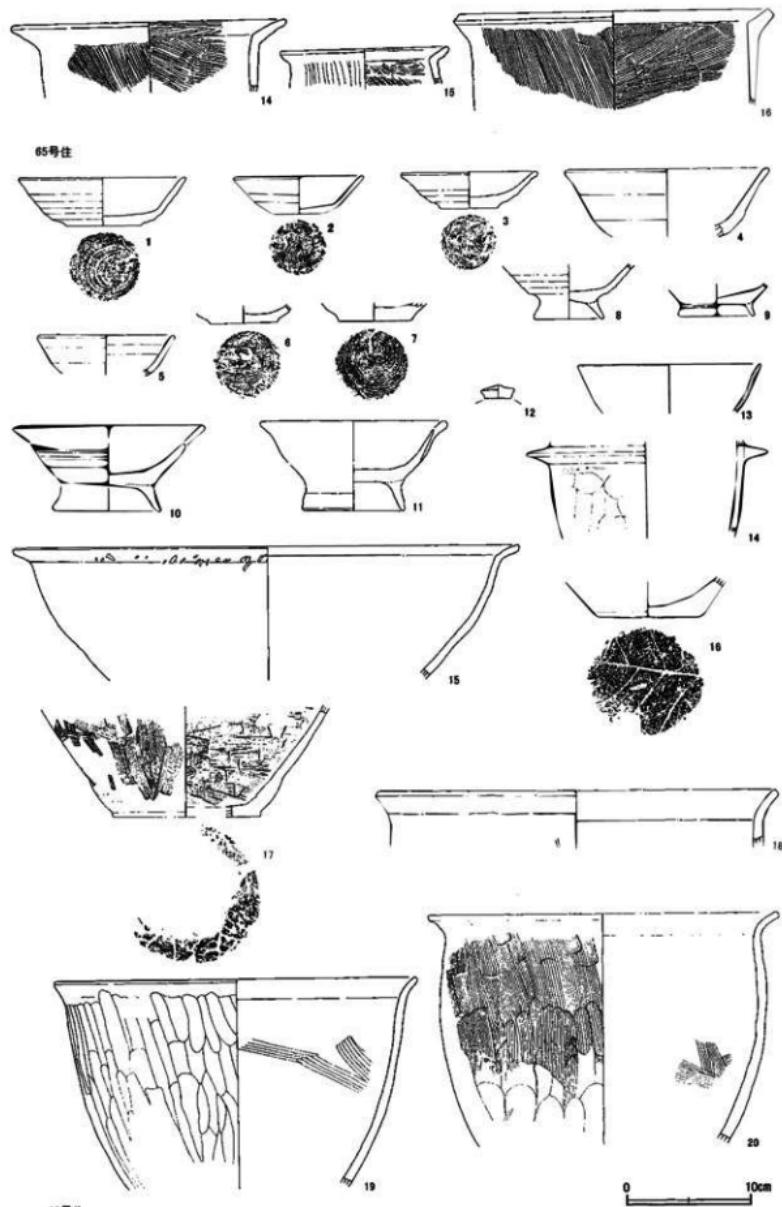


63号住

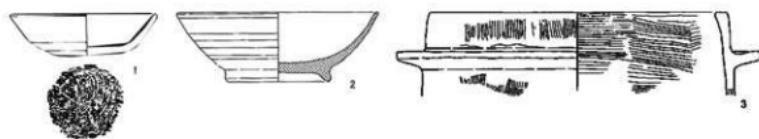
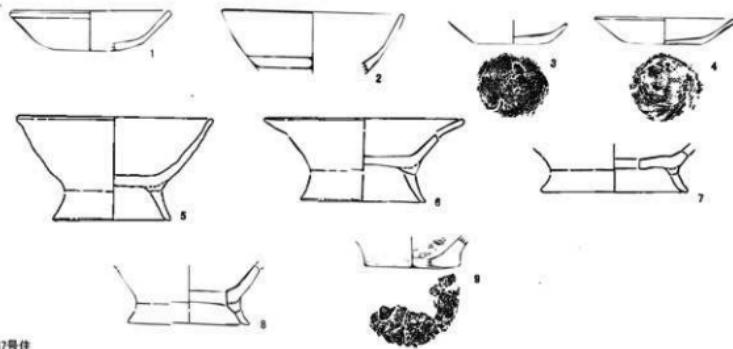
第68図 62号・63号住居跡出土土器 (1 / 4)



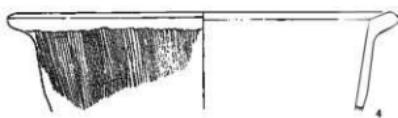
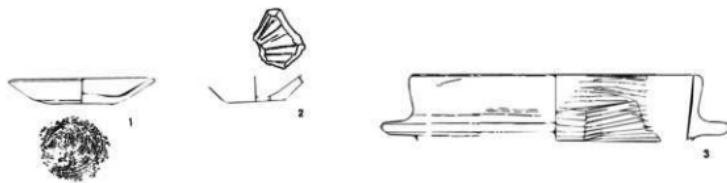
第69図 64号・65号住居跡出土土器 (1/4)



第70図 65号・66号住居跡出土土器 (1/4)



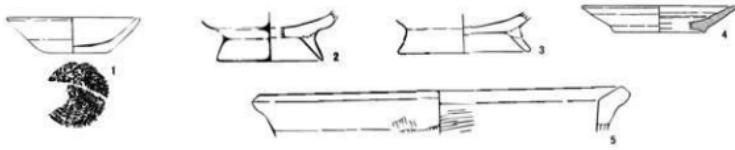
68号住



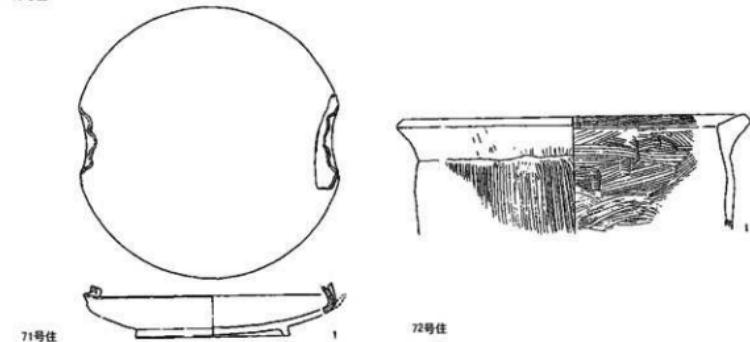
69号住



第71図 67号・68号・69号住居跡出土土器 (1/4)

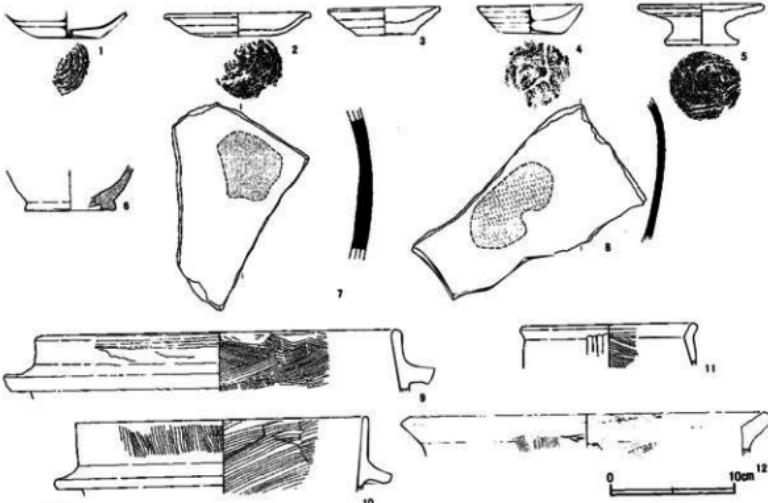


70号住



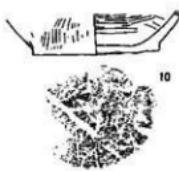
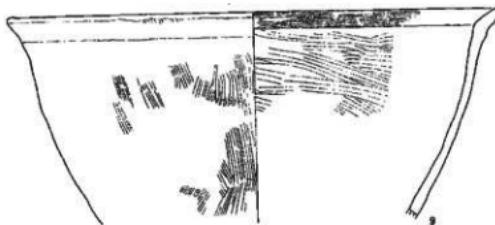
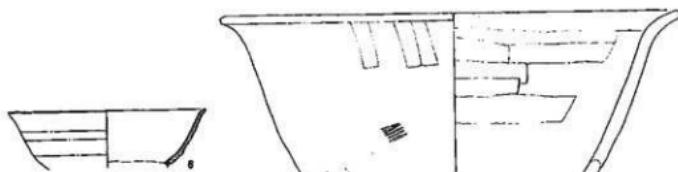
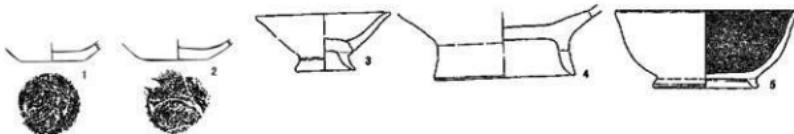
71号住

72号住



73号住

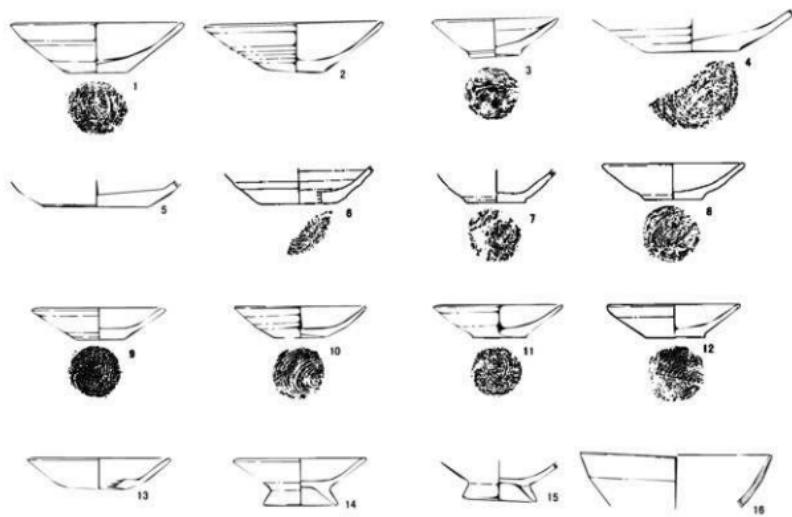
第72図 70号・71号・72号・73号住居跡出土土器 (1/4)



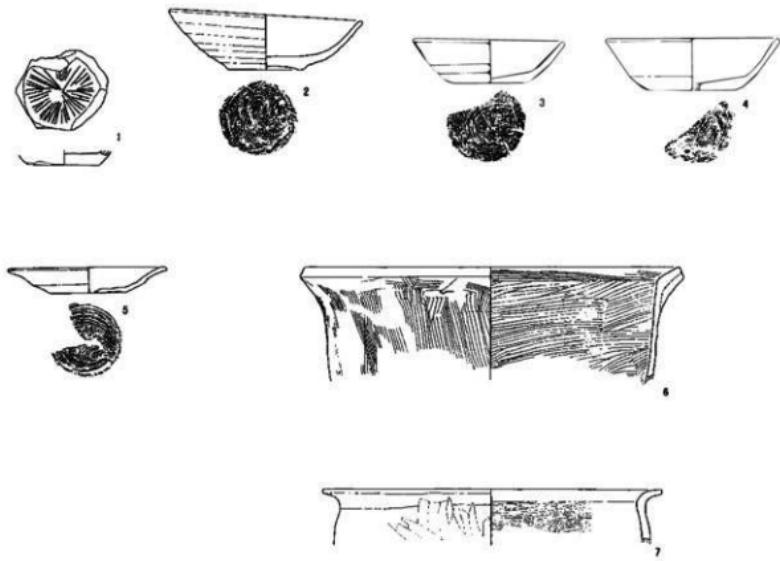
74号住

0 10cm

第73図 74号住居跡出土土器 (1 / 4)



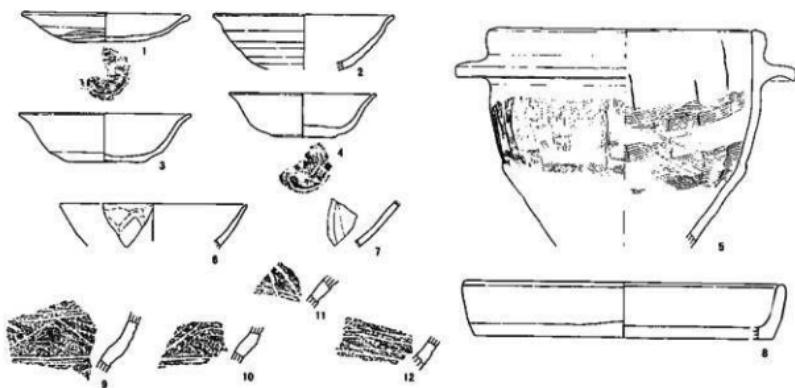
75号住



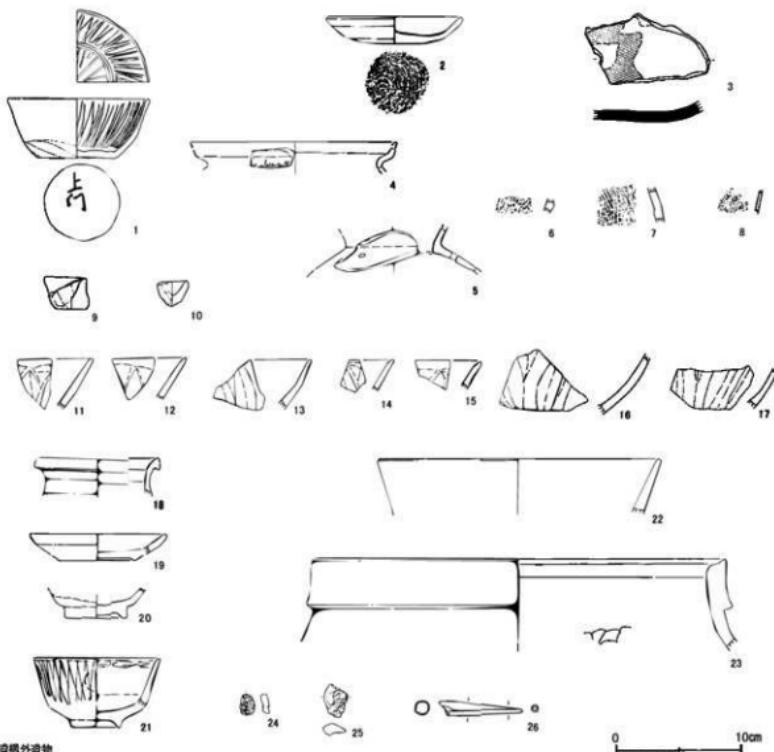
76号住

第74図 75・76号住居跡出土土器 (1/4)

0 10cm

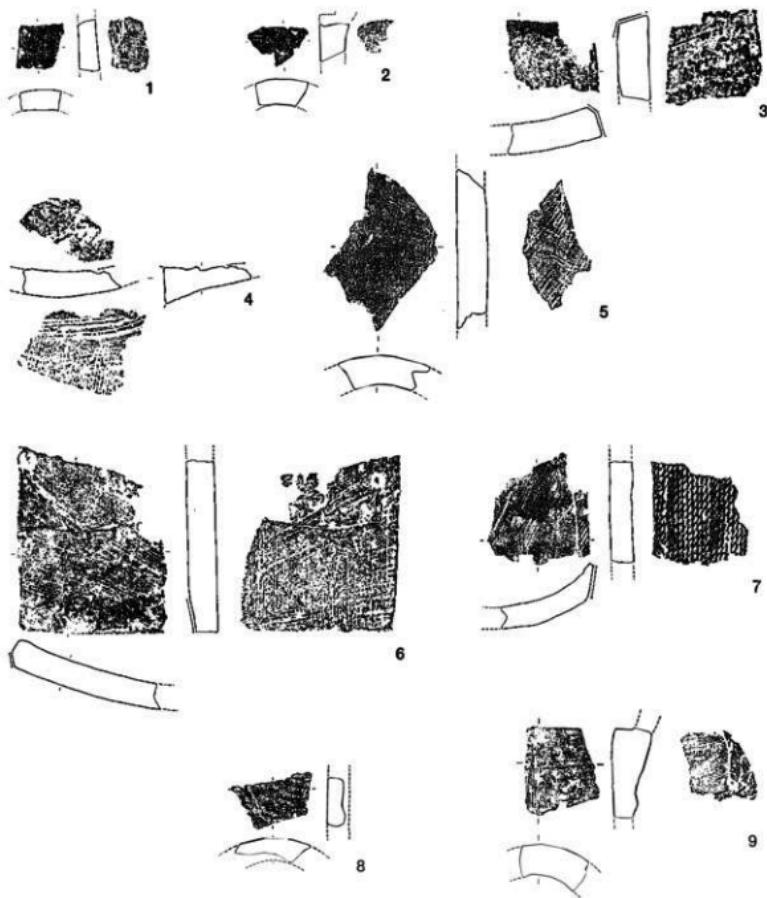


住居跡以外の遺構出土遺物



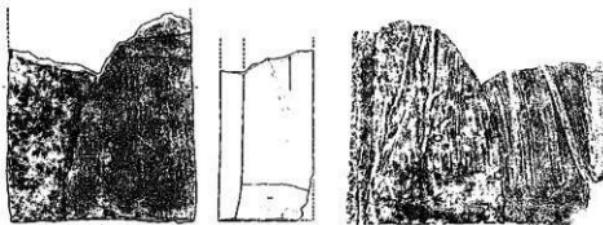
遺構外遺物

第75図 住居跡以外の遺構および遺構出土土器 (1 / 4)

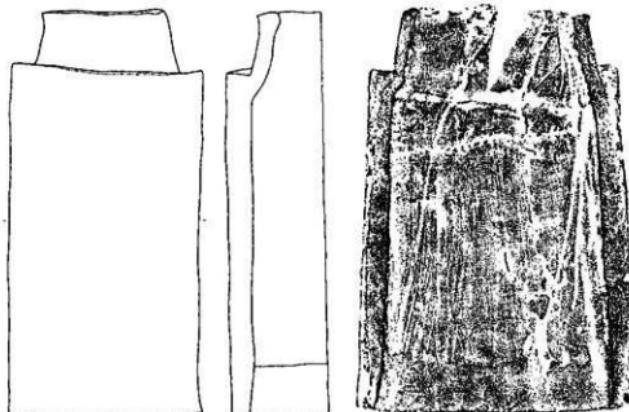
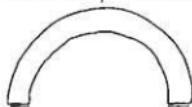


第76図 瓦類—その1 (1/4)

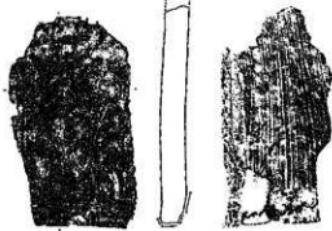
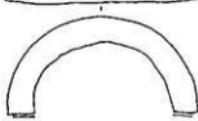
0 10cm



11



12

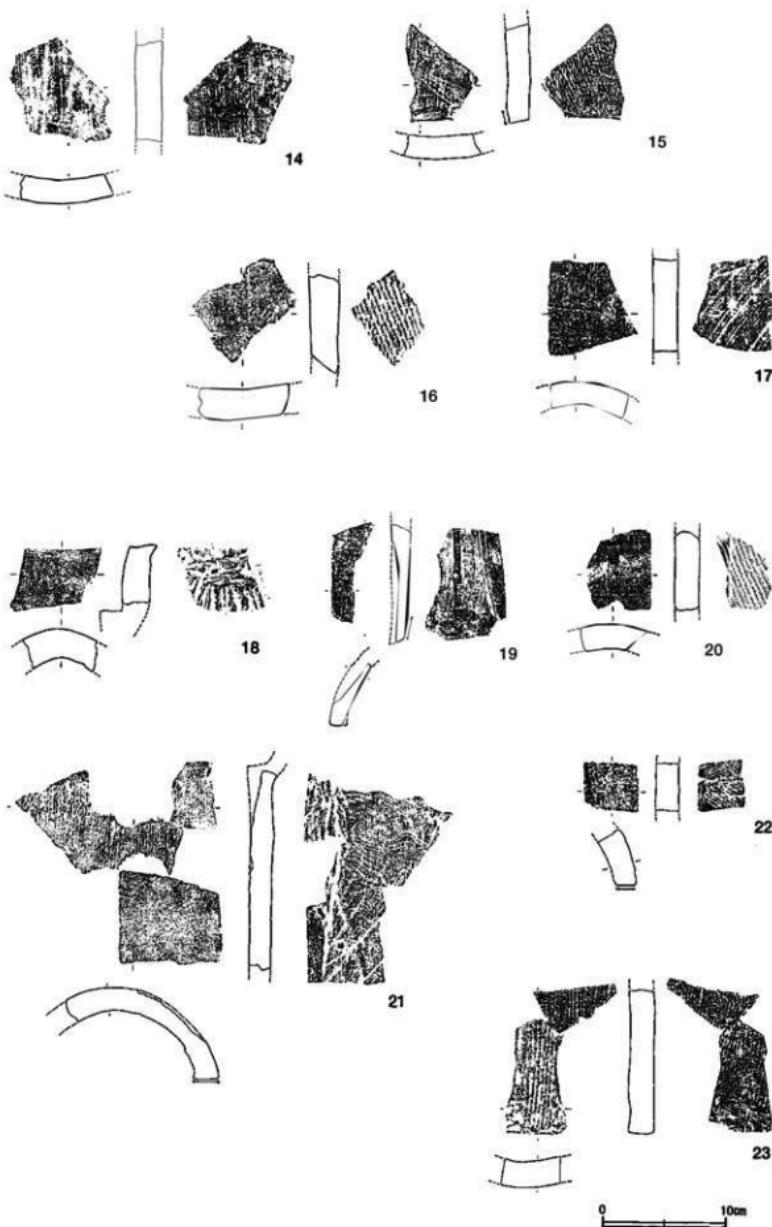


13

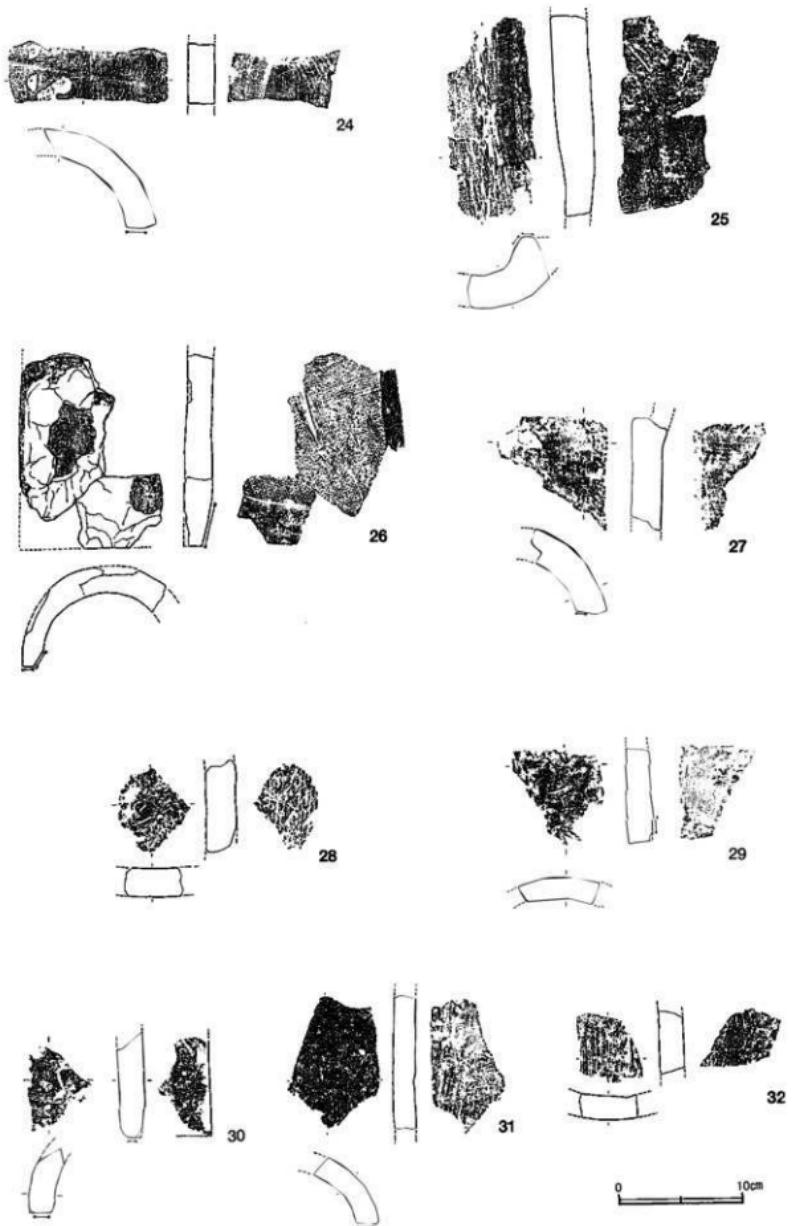


0 10cm

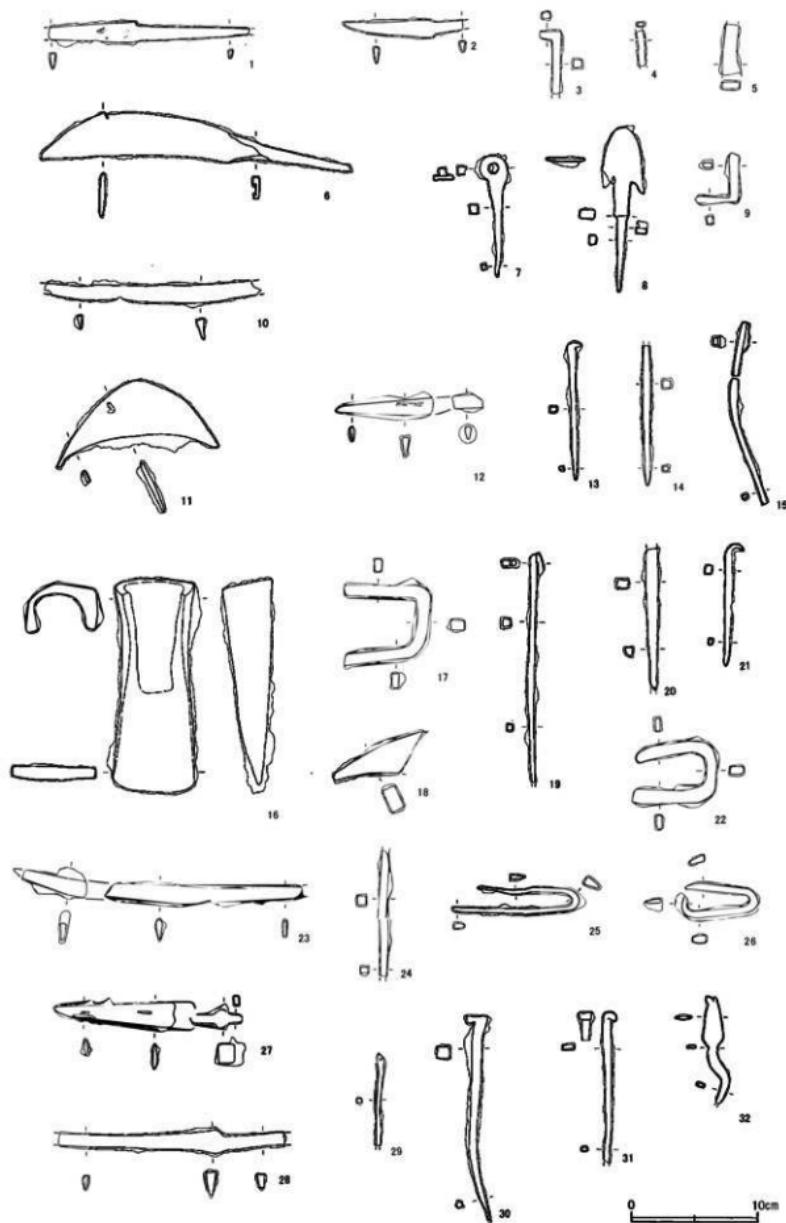
第77図 瓦類一その2 (1/4)



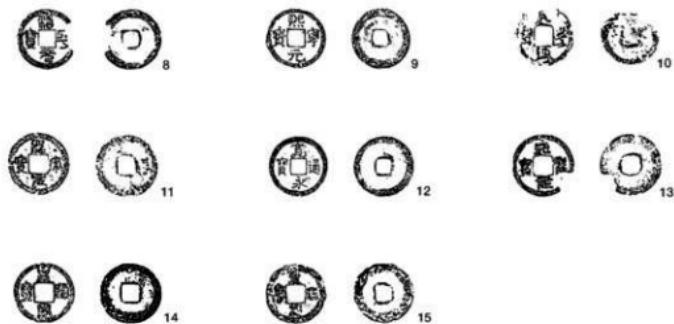
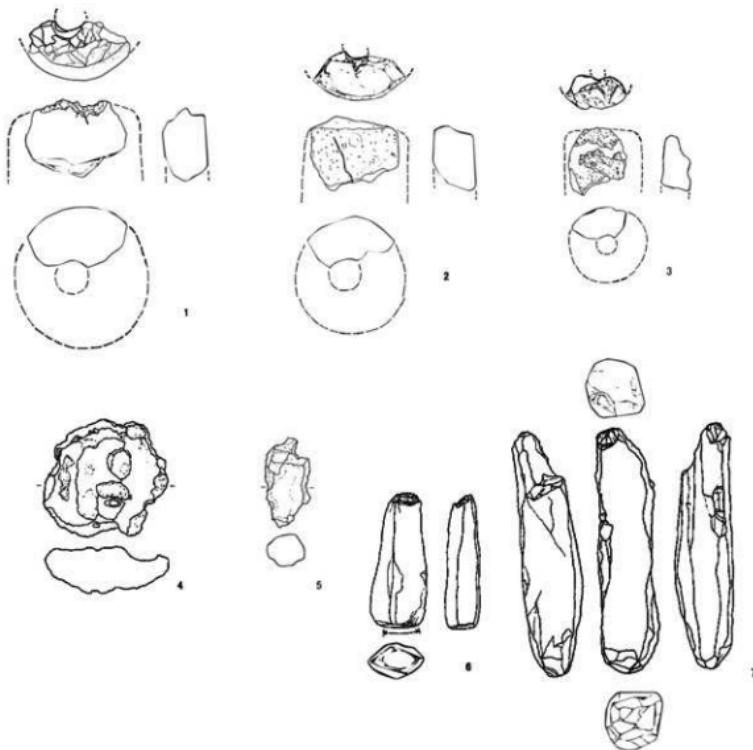
第78図 瓦類一その3 (1/4)



第79図 瓦類—その4 (1/4)

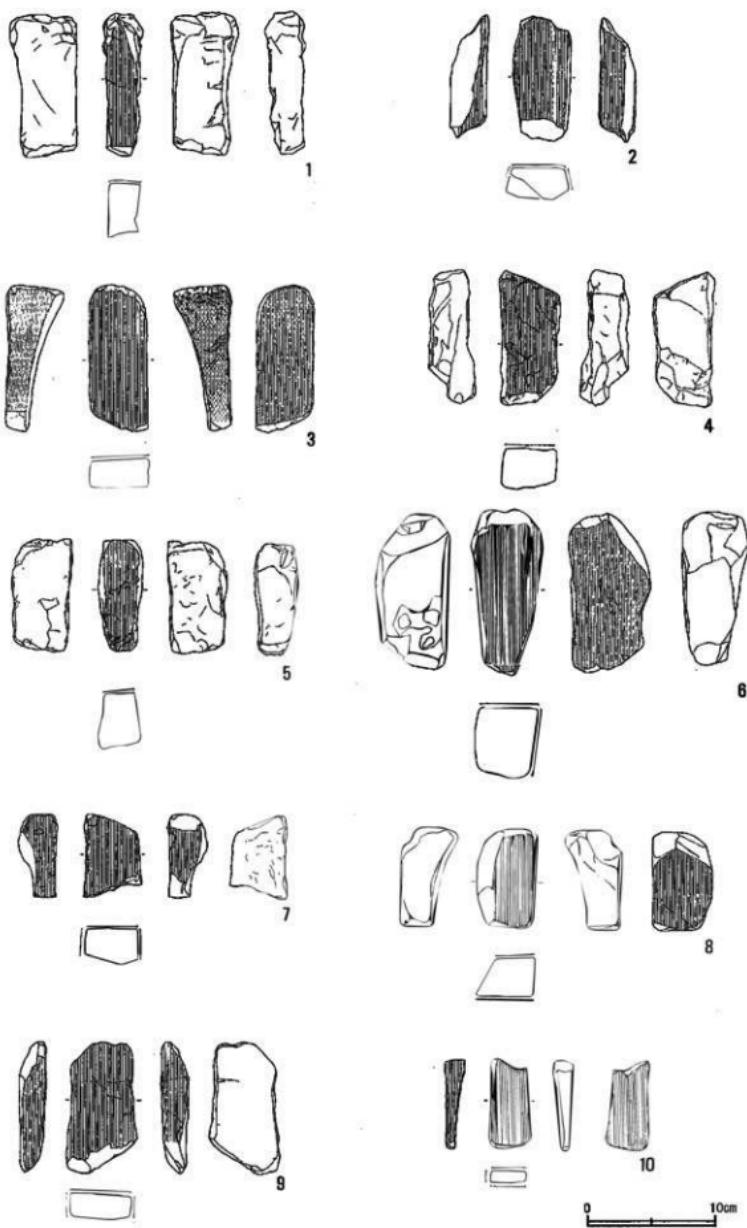


第80図 鉄製品 (1 / 4)

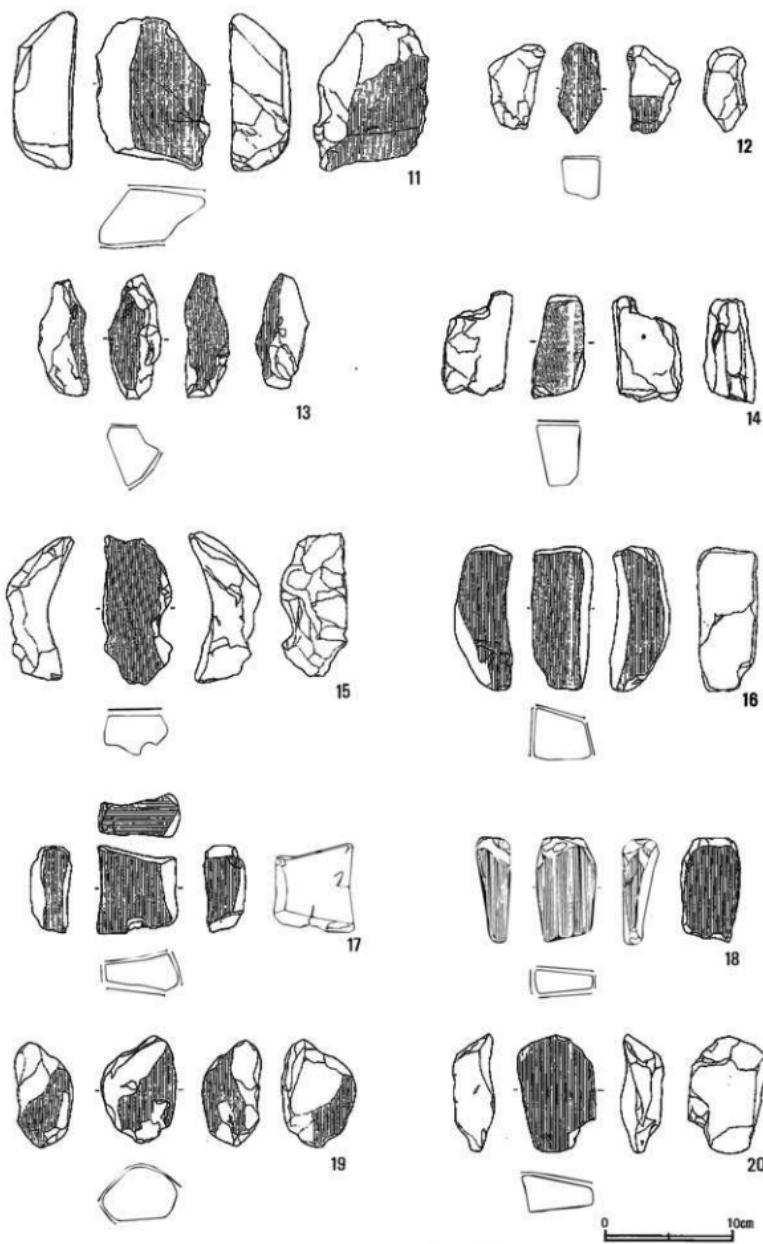


0 10cm

第81図 羽口・鐵滓・石製品（1／4）および錢貨（1／2）



第82図 砥石—その1 (1 / 4)



第83図 砧石一その2 (1/4)

第3表 土器類觀察表(1)

第4表 土器類觀察表(2)

注解・脚注 () 内数字は上欄による算定値。既存率の 5% は 5% を基

第5表 土器類觀察表（3）

1回・範囲の()内数字は反響による相違地、相違率の±5%は±5%を基

第6表 土器類觀察表(4)

1月1日 - 四四の(+)内数誤認は4件に及ぶが既定地、残存率の<5%は5%未満

第7表 土器類觀察表(5)

（問）統計的（？）内数値は既報による統計地、現存率の内数値は5%と異

第8表 土器類觀察表(6)

登録年 月	登録名	車両記号	車種	年	月	日	走行 距離 (km)	積載 量(kg)	積載 率(%)	積載 率(%)	積載 率(%)	輸出・貿易の分類		色	前 走 行 距離 (km)	備 考	
												積載 率(%)	積載 率(%)				
2008/01/01	7 駐(P-0420)	00000000	ヘ	1000	00	00	100.0	—	—	40	20%	70 - P0 ロクロイスピキ	新規登録: 5Y 5/2	黒	0	新規登録: 5Y 5/1	
—	8 駐(P-3780)	00000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	138	40%	70 - P0 ロクロイスピキ	新規登録: 5Y 5/1	黒	0	新規登録: 5Y 5/1	
2008/01/01	1 カマツ(P-2)	10000000	ヘ	1000	00	00	104.0	5.2	4.1	58	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/6	黒	0	新規登録: 2BY 8/6	
—	2 駐(P-05)	10000000	ヘ	1000	00	00	104.0	5.7	4.1	400	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/5	黒	0	新規登録: 2BY 8/5	
—	3 カマツ(P-11)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.0	6.0	3.3	37	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/5	黒	0	新規登録: 2BY 8/5	
—	4 駐(P-2658)	10000000	ヘ	1000	00	00	14.0	7.0	4.2	122	70%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/4	黒	0	新規登録: 2BY 8/4	
—	5 カマツ(P-07)	10000000	ヘ	1000	00	00	16.0	7.2	5.8	260	80%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/4	黒	0	新規登録: 2BY 8/4	
—	6 駐(P-76)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.0	6.0	3.8	130	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/3	黒	0	新規登録: 2BY 8/3	
—	7 カマツ(P-1)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.0	5.0	4.0	400	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/4	黒	0	新規登録: 2BY 8/4	
—	8 駐(P-1)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	45	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/3	黒	0	新規登録: 2BY 8/3	
—	9 駐(P-3338)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	45	30%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6	
—	10 駐(P-8202)	10000000	ヘ	1000	00	00	11.0	4.1	2.1	85	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/4	黒	0	新規登録: 2BY 8/4	
—	11 駐(P-9300)	10000000	ヘ	1000	00	00	01.4	4.9	2.8	72	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/8	黒	0	新規登録: 5Y 5/8	
—	12 駐(P-2680)	10000000	ヘ	1000	00	00	11.0	3.0	1.0	40	40%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/5	黒	0	新規登録: 2BY 8/5	
—	13 駐(P-61)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	54	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/5	黒	0	新規登録: 2BY 8/5	
—	14 駐(P-8440)	10000000	ヘ	1000	00	00	04.0	7.0	1.1	131	40%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/4	黒	0	新規登録: 2BY 8/4	
—	15 駐(P-7)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	78	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/3	黒	0	新規登録: 2BY 8/3	
—	16 カマツ(P-1)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	100	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/3	黒	0	新規登録: 2BY 8/3	
—	17 カマツ(P-25)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	300	10%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/3	黒	0	新規登録: 2BY 8/3	
45/01/01	1 駐(P-5338)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	20	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6	
—	2 駐(P-6)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	30	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/5	黒	0	新規登録: 2BY 8/5	
—	3 駐(P-10)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	42	10%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 8/4	黒	0	新規登録: 2BY 8/4	
—	4 駐(P-1)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	100	70%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 10Y 8/3	黒	0	新規登録: 10Y 8/3	
2008/01/01	1 駐(P-245)	10000000	ヘ	1000	00	00	04.0	5.7	5.0	83	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 4/6	黒	0	新規登録: 5Y 4/6	
—	2 カマツ(P-24)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.4	5.0	4.0	82	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 4/4	黒	0	新規登録: 5Y 4/4	
—	3 カマツ(P-21)	10000000	ヘ	1000	00	00	14.0	5.0	4.0	30	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 4/4	黒	0	新規登録: 5Y 4/4	
—	4 駐(P-367)	10000000	ヘ	1000	00	00	04.0	5.7	4.5	83	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6	
—	5 駐(P-300)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.0	5.2	4.5	135	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 6/6	黒	0	新規登録: 5Y 6/6	
—	6 駐(P-241)	10000000	ヘ	1000	00	00	15.6	4.4	4.1	111	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 4/2	黒	0	新規登録: 2BY 4/2	
—	7 駐(P-1478)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.0	5.0	3.7	82	70%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/8	黒	0	新規登録: 2BY 5/8	
—	8 カマツ(P-1)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.7	4.3	4.0	145	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/8	黒	0	新規登録: 2BY 5/8	
—	9 駐(P-2800)	10000000	ヘ	1000	00	00	03.0	4.9	4.2	65	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6	
—	10 カマツ(P-3)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.7	5.0	4.2	82	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 6/6	黒	0	新規登録: 2BY 6/6	
—	11 カマツ(P-2)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.0	4.7	3.2	88	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 6/6	黒	0	新規登録: 2BY 6/6	
—	12 駐(P-3240)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.2	5.2	3.0	90	55%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 6/6	黒	0	新規登録: 2BY 6/6	
—	13 駐(P-61)	10000000	ヘ	1000	00	00	02.7	6.2	3.6	29	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 6/5	黒	0	新規登録: 2BY 6/5	
—	14 駐(P-222)	10000000	ヘ	1000	00	00	02.0	4.3	3.2	68	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 4/6	黒	0	新規登録: 5Y 4/6	
—	15 駐(P-2148)	10000000	ヘ	1000	00	00	04.0	6.4	5.1	130	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 4/6	黒	0	新規登録: 5Y 4/6	
—	16 駐(P-3100)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	73	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 6/6	黒	0	新規登録: 2BY 6/6	
—	17 駐(P-110)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	20	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6	
—	18 カマツ(P-8)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	67	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6	
—	19 駐(P-2240)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.0	5.4	2.8	95	70%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 4/3	黒	0	新規登録: 2BY 4/3	
—	20 駐(P-2000)	10000000	ヘ	1000	00	00	03.0	5.4	2.7	70	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 4W 4/6	黒	0	新規登録: 4W 4/6	
—	21 カマツ(P-35)	10000000	ヘ	1000	00	00	11.0	0.0	2.0	45	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/8	黒	0	新規登録: 2BY 5/8	
—	22 駐(P-300)	10000000	ヘ	1000	00	00	12.0	0.0	2.7	75	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6	
—	23 駐(P-47)	10000000	ヘ	1000	00	00	02.0	0.0	2.4	37	60%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/3	黒	0	新規登録: 2BY 5/3	
—	24 駐(P-48)	10000000	ヘ	1000	00	00	04.0	0.0	—	7	40%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6	
—	25 駐(P-2700)	10000000	ヘ	1000	00	00	02.0	0.0	2	45%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/6	黒	0	新規登録: 5Y 5/6		
—	26 駐(P-1)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	2	35%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 6/6	黒	0	新規登録: 5Y 6/6	
—	27 駐(P-158)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	3	15%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/4	黒	0	新規登録: 2BY 5/4	
—	28 駐(P-160)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	33	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/4	黒	0	新規登録: 5Y 5/4	
—	29 駐(P-25)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	33	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/4	黒	0	新規登録: 5Y 5/4	
—	30 駐(P-29)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	40	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/4	黒	0	新規登録: 2BY 5/4	
—	31 カマツ(P-160)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	35	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/4	黒	0	新規登録: 2BY 5/4	
—	32 駐(P-300)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	35	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/4	黒	0	新規登録: 2BY 5/4	
—	33 駐(P-242)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	60	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/4	黒	0	新規登録: 2BY 5/4	
—	34 駐(P-299)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	60	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/4	黒	0	新規登録: 2BY 5/4	
—	35 駐(P-234)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	231	10%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 5/4	黒	0	新規登録: 2BY 5/4	
—	36 カマツ(P-200)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	100	10%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/2	黒	0	新規登録: 5Y 5/2	
—	37 駐(P-36)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	60	15%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/2	黒	0	新規登録: 5Y 5/2	
—	38 カマツ(P-4)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	300	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 10Y 5/4	黒	0	新規登録: 10Y 5/4	
45/01/01	1 駐(P-4150)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	2.3	34	10%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 7/6	黒	0	新規登録: 2BY 7/6
—	2 駐(P-419)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	0.0	40	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 6/6	黒	0	新規登録: 5Y 6/6
—	3 駐(P-200)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	0.0	35	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 2BY 6/6	黒	0	新規登録: 2BY 6/6
—	4 カマツ(P-11)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	—	30	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 7/6	黒	0	新規登録: 5Y 7/6
—	5 駐(P-420)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	—	27	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/4	黒	0	新規登録: 5Y 5/4
—	6 駐(P-1250)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—	—	—	20	20%	70 - K1 ハラタギ	新規登録: 5Y 5/4	黒	0	新規登録: 5Y 5/4
—	7 駐(P-1300)	10000000	ヘ	1000	00	00	—	—									

1997・朝日新聞(1)内閣府は規制による各種定額、現行率のうち既往を削除

第9表 土器類觀察表（7）

例：既述の「1 内閣は内閣による指定地、内閣令の 5 倍は 5 倍未満

第10表 土器類観察表(8)

器種名	No.	出土位置	規 則	基 骨	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	底面形	底面・側面の特徴	色 調		附 上	備 考
										底面	側面		
新石器	10	カマツ内 (P-15) 磁	上部縦	小切端	(26.4)	-	-	170	外・内・ハナメ、底・側面	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 4			
-	11	同じ (P-15)	上部縦	小切端	(23.0)	-	-	165	外・内・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 3 / 3			
-	12	カマツ内 (P-7)	上部縦	端	-	(16.0)	-	53	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 3 / 3			
-	13	同じ (P-8) 磁	上部縦	端	(20.0)	-	-	55	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 4			
-	14	カマツ内 (P-5) 磁	上部縦	端	(20.0)	-	-	250	外・内・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 4			
新石器	1	同じ (P-20) 磁	上部縦	端	(20.0)	-	-	34	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 4			
-	2	カマツ内 (P-1) 磁	上部縦	端	(20.0)	-	-	202	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	3	同じ (P-3)	上部縦	端	(20.0)	-	-	53	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6	縫合内に縫合孔		
-	4	同じ (P-5) 磁	上部縦	端	(20.0)	-	-	36	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6	縫合内に縫合孔		
新石器	1	同じ (P-9)	上部縦	端	(23.3)	7.0	4.7	275	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	2	同じ (P-9)	上部縦	端	(22.7)	6.6	4.9	43	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	3	同じ (P-9)	上部縦	端	(20.0)	-	-	36	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	4	カマツ内 (P-8)	上部縦	端	-	-	-	53	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	5	カマツ内 (P-5)	上部縦	端	-	-	-	73	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	6	同じ (P-8)	上部縦	端	-	-	-	22	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	7	同じ (P-5)	上部縦	端	-	-	-	55	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
新石器	8	同じ (P-5)	上部縦	端	(20.7)	3.8	21	60	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	9	同じ (P-8)	上部縦	端	(20.7)	5.0	3.7	83	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	10	同じ (P-5)	上部縦	端	(20.3)	4.0	3.2	57	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	11	同じ (P-7)	上部縦	端	-	(18.0)	-	11	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	12	同じ (P-34)	上部縦	端	-	-	-	16	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	13	同じ (P-10) 磁	上部縦	端	(20.0)	-	-	48	外・内・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	14	カマツ内 (P-25)	上部縦	端	-	-	-	122	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
新石器	1	同じ (P-16)	上部縦	端	(16.4)	5.0	4.0	181	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	2	同じ (P-12)	上部縦	端	(16.1)	4.2	4.2	67	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	3	同じ (P-8)	上部縦	端	(16.0)	6.0	3.5	92	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	4	同じ (P-37)	上部縦	端	(16.2)	5.0	3.0	62	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	5	同じ (P-37)	上部縦	端	(16.0)	-	-	16	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	6	同じ (P-10)	上部縦	端	(16.0)	-	-	120	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	7	同じ (P-12)	上部縦	端	(16.0)	6.0	3.5	46	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	8	同じ (P-25)	上部縦	端	-	5.0	-	31	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	9	同じ (P-16)	上部縦	端	-	5.4	-	31	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	10	同じ (P-7)	上部縦	端	-	5.7	-	27	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	11	同じ (P-49)	上部縦	端	(12.8)	5.0	2.5	70	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	12	同じ (P-39)	上部縦	端	(12.3)	4.2	2.7	66	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	13	同じ (P-42)	上部縦	端	(12.6)	5.0	2.5	115	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	14	同じ (P-52)	上部縦	端	-	9.0	-	302	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	15	カマツ内 (P-18)	上部縦	端	(20.0)	-	-	297	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	16	同じ (P-26)	上部縦	端	(20.0)	-	-	97	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	17	同じ (P-15)	上部縦	端	(20.0)	-	-	82	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
-	18	カマツ内 (P-27)	上部縦	端	(20.0)	-	-	68	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 2			
新石器	1	同じ (P-17)	上部縦	端	(12.3)	5.0	2.2	91	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	2	同じ (P-15)	上部縦	端	(11.8)	4.0	2.7	97	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	3	同じ (P-14)	上部縦	端	(11.0)	5.0	2.5	60	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	4	同じ (P-30)	上部縦	端	(10.0)	4.0	2.5	26	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	5	同じ (P-14)	上部縦	端	(10.0)	4.0	2.5	55	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	6	同じ (P-30)	上部縦	端	(11.0)	5.0	2.5	43	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	7	同じ (P-16)	上部縦	端	(11.3)	4.0	2.2	73	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	8	同じ (P-16)	上部縦	端	(20.0)	8.0	7.2	473	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	9	カマツ内 (P-5)	上部縦	端	(20.0)	-	-	464	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
新石器	1	同じ (P-14)	上部縦	端	(12.5)	6.0	3.7	118	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	2	同じ (P-28)	上部縦	端	(14.0)	5.0	4.1	165	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	3	同じ (P-13)	上部縦	端	(12.3)	4.2	3.1	155	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	4	同じ (P-15)	上部縦	端	(11.0)	4.5	2.5	62	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	5	同じ (P-10)	上部縦	端	(11.8)	4.0	2.5	70	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	6	同じ (P-16)	上部縦	端	(12.0)	5.5	3.5	80	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	7	同じ (P-17)	上部縦	端	(12.0)	5.0	2.2	77	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	8	同じ (P-13)	上部縦	端	(11.0)	4.0	2.5	94	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	9	同じ (P-5)	上部縦	端	(9.5)	5.0	4.2	105	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	10	同じ (P-16)	上部縦	端	(10.0)	6.0	6.0	163	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	11	同じ (P-15)	上部縦	端	-	8.2	-	161	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	12	同じ (P-17)	上部縦	端	(10.0)	-	-	230	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 4			
-	13	同じ (P-18)	上部縦	端	(20.0)	-	-	200	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	14	同じ (P-16)	上部縦	端	(20.0)	-	-	340	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	15	同じ (P-20)	上部縦	端	(22.0)	-	-	380	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
-	16	カマツ内 (P-8)	上部縦	端	(10.0)	-	-	234	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 4 / 6			
新石器	1	カマツ内 (P-20)	上部縦	端	(12.0)	5.0	3.0	43	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	2	同じ (P-10)	上部縦	端	(12.1)	5.4	4.5	130	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			
-	3	同じ (P-10)	上部縦	端	(12.0)	-	-	18	内・外・ハナメ	底面: 黄褐色 S Y R 5 / 6			

EIE-統計の()内は測定による誤差で、括弧内の×は±5%を示す。

第11表 土器類觀察表（9）

測量番 号	測量日	No.	出土位置	種別	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (mm)	重 (g)	性状	目録記載/特徴	地 誌		出土	備考		
											地名	地圖				
10004	6月15	5	縄土 (P-73)	1.0000	直	12.0	5.5	1.2	100	無 (P), 縄 (P) 有切端	昭和町: 5 YR 5/6	日向町: 5 YR 5/6				
-	-	6	縄土 (P-81)	1.0000	直	12.0	4.0	2.4	31	無 (P) - ハサズギ	昭和町: 5 YR 5/6					
-	-	7	縄土 (P-90)	1.0000	直	-	14.0	-	11	+ 5% 縄 (P) - ハサズギ, 絞 (P) 有切端	昭和町: 5 YR 5/6	日向町 (II) (西原田内)				
-	-	8	縄土 (P-100)	1.0000	直	-	-	3	+ 5%	無 (P) - ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/6	日向町 (II) (西原田内)				
-	-	9	縄土 (P-100)	1.0000	直	-	-	6	+ 5%	無 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/5	日向町 (II) (西原田内)				
-	-	10	縄土 (P-100)	1.0000	直	-	-	1	+ 5%	無 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 5/6	日向町 (II) (西原田内)				
-	-	11	縄土 (P-100)	1.0000	直	-	14.0	-	7	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 5/6	日向町: 5 YR 5/6				
-	-	12	縄土 (P-40)	1.0000	直	(18.0)	-	-	73	+ 5% 縄 (P) ロクロナギ	昭和町: 5 YR 7/1					
-	-	13	カマツチ (P-2)	1.0000	直	12.0	1.0	-	10	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/4					
-	-	14	カマツチ (P-1)	1.0000	直	12.0	1.0	-	96	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/5	日向町 (II) (西原田内)				
-	-	15	カマツチ (P-3)	1.0000	直	12.0	1.0	-	383	+ 5% 縄 (P) ハサズギ, 縄 (P) 本筋	昭和町: 5 YR 4/6					
-	-	16	カマツチ (P-20)	1.0000	直	12.0	1.0	-	347	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/4					
10011	1	縄土	-	1.0000	直	-	-	-	-	-	昭和町: 5 YR 5/6		日向町 (II) (西原田内)			
-	-	2	縄土 (P-90)	1.0000	直	-	8.0	-	26	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 5/6	日向町 (II) (西原田内)				
-	-	3	縄土 (P-100)	1.0000	直	-	-	-	35	+ 5% 縄 (P) ハサズギ, 絞 (P) 有切端	昭和町: 5 YR 7/1	日向町 (II) (西原田内)				
-	-	4	縄土 (P-17)	1.0000	直	9.2	4.4	2.3	67	無 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 5/4					
-	-	5	縄土 (P-144)	1.0000	直	0.80	0.60	2.3	11	無 (P) ハサズギ, 絞 (P) 有切端	昭和町: 5 YR 5/4					
-	-	6	縄土 (P-52)	1.0000	直	-	-	5.6	40	+ 5% 縄 (P) ハサズギ, 絞 (P) 有切端	昭和町: 5 YR 5/6					
-	-	7	縄土	1.0000	直	-	-	-	1	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 5/6	日向町 (II) (西原田内)				
-	-	8	縄土 (P-25)	1.0000	直	-	-	-	60	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 5/6					
-	-	9	縄土 (P-90)	1.0000	直	-	(14.0)	-	90	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 10Y 5/1					
-	-	10	縄土	1.0000	直	-	-	-	143	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 1/1					
-	-	11	縄土 (P-15)	1.0000	直	-	-	-	87	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/6					
-	-	12	縄土 (P-18)	1.0000	直	-	-	-	220	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/4					
-	-	13	縄土 (P-4)	1.0000	直	-	4.5	-	142	+ 5% 縄 (P) ハサズギ, 絞 (P) 有切端	昭和町: 12Y 5/6					
10012	14	縄土 (P-37)	1.0000	直	2.00	-	-	-	302	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/3					
-	-	15	縄土 (P-40)	1.0000	直	(13.0)	-	-	-	30	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/4				
-	-	16	縄土 (P-20)	1.0000	直	-	-	-	121	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/6					
10013	1	縄土 (P-28)	1.0000	直	0.80	0.60	3.0	30	70% 無 (P) ハサズギ, 絞 (P) 有切端	昭和町: 10Y 5/4						
-	-	2	縄土 (P-90)	1.0000	直	0.80	0.45	22	73	60% 無 (P) ハサズギ, 絞 (P) 有切端	昭和町: 12Y 5/6				黒塗打づくり	
-	-	3	縄土 (P-40)	1.0000	直	0.80	0.45	2.6	70	60% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	4	カマツチ (P-37)	1.0000	直	0.80	-	-	141	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 10Y 5/3					
-	-	5	縄土 (P-33)	1.0000	直	0.80	0.60	11.0	-	29	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 10Y 6/4				
-	-	6	縄土 (P-35)	1.0000	直	-	-	-	35	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/3				黒塗打づくり	
-	-	7	縄土 (P-23)	1.0000	直	-	0.80	-	65	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/3					
-	-	8	縄土 (P-65)	1.0000	直	-	-	57	-	38	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6				
-	-	9	縄土 (P-3)	1.0000	直	-	-	42	-	52	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6				
-	-	10	縄土 (P-90)	1.0000	直	-	-	-	120	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	11	縄土 (P-80)	1.0000	直	-	-	-	109	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	12	縄土 (P-35)	1.0000	直	-	-	-	112	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	13	縄土 (P-40)	1.0000	直	-	-	-	4	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	14	カマツチ (P-1)	1.0000	直	-	-	-	54	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/1					
-	-	15	縄土 (P-6)	1.0000	直	-	-	-	54	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/3					
-	-	16	カマツチ (P-36)	1.0000	直	-	-	-	270	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	17	カマツチ (P-25)	1.0000	直	-	-	-	414	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 3/4					
-	-	18	カマツチ (P-26)	1.0000	直	0.80	0.60	11.0	-	70	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/3				
-	-	19	カマツチ (P-100)	1.0000	直	-	-	-	462	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/6					
-	-	20	縄土 (P-25)	1.0000	直	-	-	-	420	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/3					
10014	1	縄土 (P-100)	1.0000	直	0.80	0.60	13.0	3.0	43	80% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	2	縄土 (P-100)	1.0000	直	0.80	0.40	-	45	25% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	3	カマツチ (P-1)	1.0000	直	-	-	-	60	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 4/5					
-	-	4	縄土 (P-1)	1.0000	直	11.2	5.7	2.2	77	80% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 5 YR 3/4					
-	-	5	カマツチ (P-100)	1.0000	直	0.80	0.60	13.0	-	54	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/4				
-	-	6	縄土 (P-5)	1.0000	直	-	-	-	38	40% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 10Y 4/2					
-	-	7	縄土 (P-10)	1.0000	直	-	-	-	19	+ 5% 縄 (P) ハサズギ	昭和町: 10Y 5/6					
-	-	8	縄土 (P-30)	1.0000	直	-	-	-	28	10% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 4/4					
-	-	9	縄土 (P-30)	1.0000	直	-	-	-	50	5% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 5 YR 2/2					
10015	1	縄土 (P-100)	1.0000	直	11.0	5.0	3.0	140	80% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 5 YR 4/4						
-	-	2	縄土 (P-25)	1.0000	直	16.2	8.0	5.0	230	85% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/1					
-	-	3	縄土 (P-1)	1.0000	直	0.80	-	-	153	20% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/2					
-	-	4	縄土 (P-210)	1.0000	直	14.0	-	-	53	20% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 5 YR 4/6					
-	-	5	縄土 (P-30)	1.0000	直	0.80	-	-	255	10% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 3/4					
10016	1	縄土 (P-31)	1.0000	直	11.7	5.2	2.3	70	70% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 5 YR 5/6						
-	-	2	縄土 (P-32)	1.0000	直	0.80	-	-	12	5% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 6/4					
-	-	3	縄土 (P-300)	1.0000	直	0.80	-	-	392	10% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 5/6					
-	-	4	縄土 (P-1)	1.0000	直	0.80	-	-	102	20% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 12Y 4/4					
10017	1	縄土 (P-70)	1.0000	直	11.0	5.4	2.0	263	60% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 12Y 5/6						
-	-	2	カマツチ (P-1)	1.0000	直	0.80	-	-	40	15% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 7/					
-	-	3	縄土 (P-40)	1.0000	直	-	-	-	70	25% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 12Y 5/6					
-	-	4	縄土 (P-50)	1.0000	直	12.0	7.0	-	22	34	50% 無 (P) ハサズギ, 有切端	昭和町: 12Y 5/2				
-	-	5	縄土 (P-40)	1.0000	直	30.2	-	-	51	5% 無 (P) ハサズギ	昭和町: 5 YR 4/2					

(注) 表中の() 内の数値は左側による記述、右側の() は右側による記述

第12表 土器類觀察表 (10)

上図・現行の（ ）内数字は右側による標記地。現存率の×5%は5%45%

第13表 土器類觀察表 (11)

（前記・後記の（一）内数値は税制による算定値、税率率の（1）は5%を基準とする。

第14表 瓦類觀察表

図	No	出土遺物等	出 土 位 置	種 别	重 量 (g)	焼 成	色 調	備 考
第78回	1	J 1号住居跡	廻上	丸瓦	32	良	暗灰黄色: 2.5Y 5/2	
-	2	7号住居跡	廻上 (B区画)	丸瓦	29	良	に赤い黄褐色: 10YR 5/3	
-	3	8号住居跡	廻上 (P-14)	平瓦	179	良	黄褐色: 10YR 8/6	
-	4	8号住居跡	カマ F内 (P-2)	折平瓦?	137	やや不良	褐色: 5YR 6/6	
-	5	11号住居跡	廻上 (P-28)	丸瓦	196	良	に赤い黄褐色: 10YR 5/3	
-	6	22号住居跡	廻上 (P-2) - カマ F内 (P-40)	平瓦	332	良	灰褐色: 7.5Y R 5/2	
-	7	34号住居跡	カマ F内 (P-62)	平瓦	220	良好	灰-暗褐色: N 3-4-/0	
-	8	39号住居跡	廻上	丸瓦	48	良	黄褐色: 2.5Y 6/2	
-	9	45号住居跡	廻上 (P-457)	丸瓦	130	良好	に赤い赤褐色: 2.5Y R 5/4	
-	10	48-65-73号住居跡	廻上 (P-109)	丸瓦	482	良好	に赤い褐色: 7.5Y R 6/4	
第79回	11	48号住居跡	廻上 (P-252-265)	丸瓦	933	良好		
-	12	50号住居跡	廻上	丸瓦	2419	良	に赤い褐色: 7.5Y R 6/4	
-	13	54号住居跡	廻上	丸瓦	431	良	に赤い褐色: 7.5Y R 6/4	
第80回	14	64号住居跡	廻上 (P-10)	平瓦	189	良好	灰褐色: 10YR 5/2	
-	15	65号住居跡	廻上 (P-156)	平瓦	115	良好	海灰色: 7.5Y R 4/1	
-	16	65号住居跡	廻上 (P-3)	平瓦	139	良	褐色: 7.5Y R 4/4	
-	17	65号住居跡	廻上 (カマF付近、P-3)	丸瓦	140	良好	褐色: 5YR 6/6	
-	18	65号住居跡	廻上 (P-34)	丸瓦	101	良好	褐色: 5YR 6/6	
-	19	65号住居跡	廻上 (P-38)	丸瓦	73	良好	に赤い褐色: 7.5Y R 6/4	
-	20	65号住居跡	廻上 (P-54)	丸瓦	83	良	に赤い黄褐色: 10YR 6/4	
-	21	68号住居跡	カマ F内 (P-55)	丸瓦	48	良	に赤い褐色: 7.5Y R 6/4	
-	22	65号住居跡	廻上 (P22-31-87)	丸瓦	482	良	褐色: 2.5Y R 6/6	
-	23	68-73号住居跡	68号廻上 - 73号廻上 (P-5)	平瓦	211	良好	海灰色: 7.5Y R 4/1	
第79回	24	68号住居跡	カマ F内	丸瓦	176	良	に赤い褐色: 7.5Y R 6/4	
-	25	69号住居跡	カマ F内 (P-5) - I-8グリッド - 評議	平瓦?	615	良好	褐色: 7.5Y R 4/6	
-	26	69号住居跡	カマ F内 (P-10-13)	丸瓦	400	良	褐色: 2.5Y R 7/6	
-	27	62号土坑	廻上	丸瓦	168	良好	に赤い赤褐色: 5YR 5/4	
-	28	H-11グリッド	グリッド F内 - 壁中	平瓦	90	やや不良	灰褐色: 10YR 5/2	
-	29	I-24グリッド	壁中	丸瓦	106	良	灰オリーブ色: 5Y 6/2	
-	30	J-3グリッド	グリッド F内 - 壁中	丸瓦	89	良	褐色: 5YR 7/6	
-	31	K-13-4グリッド	グリッド F内 - 壁中	丸瓦	151	良	灰褐色: 10YR 6/2	
-	32	表塗	表面塗装資料	平瓦	90	良好	海灰色: 7.5Y R 5/1	

第15表 鉄製品観察表

団番号	No.	出土遺物等	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	出土位置	備 考
第15回	1	2号住居跡	刀子	12.0	1.6	0.4	13	カナフ内(F-1)	
-	2	6号住居跡	刀子	7.2	1.3	0.3	6	覆土(P-21)	
-	3	4号住居跡	針か	4.0	1.3	0.8	7	覆土	
-	4	6号住居跡	針	2.0	0.6	0.4	1	覆土(P-19)	
-	5	試掘19号トレンチ	用途不明金具	3.1	1.3	0.5	5	トレンチ内-活中	
-	6	8号住居跡	鍔	18.6	3.0	0.5	37	覆土(F-1)	
-	7	24号住居跡	瓶の金具?	7.3	2.2	0.6	12	覆土(F-1)	
-	8	25号住居跡	鍔	9.9	2.7	0.8	12	覆土(F-2)	
-	9	25号住居跡	用途不明金具	3.2	2.8	0.6	4	覆土	
-	10	33号住居跡	刀子	12.8	1.5	1.2	21	覆土(F-23B)	
-	11	30号住居跡	用途不明金具	9.7	5.4	0.5	49	覆土(F-1)	No. 10486
-	12	44号住居跡	刀子	9.0	1.7	0.7	8	覆土(F-30)	
-	13	44号住居跡	針?	8.2	1.1	0.5	8	覆土(F-31)	
-	14	48号住居跡	針?	8.3	0.8	0.7	7	覆土(F-1)	
-	15	49号住居跡	針?	10.7	1.6	0.8	8	覆土(F-2)	
-	16	62号住居跡	鍔斧	12.9	5.3	3.0	365	覆土(F-5)	
-	17	62号住居跡	用途不明金具	5.3	5.5	0.8	24	覆土(F-1)	
-	18	62号住居跡	用途不明金具	6.0	2.3	1.0	32	覆土(F-2)	
-	19	62号住居跡	用途不明金具	13.7	1.1	0.7	9	覆土(F-4)	
-	20	62号住居跡	用途不明金具	8.5	1.2	0.7	13	覆土(F-1)	
-	21	64号住居跡	針?	7.3	1.1	0.6	6	覆土	
-	22	64号住居跡	用途不明金具	5.3	4.2	0.7	17	覆土(F-24)	
-	23	64号住居跡	刀子?	16.8	1.8	0.7	21	覆土	
-	24	66号住居跡	針?	7.5	0.9	0.7	12	覆土(F-2)	
-	25	66号住居跡	用途不明金具	8.0	1.7	1.1	11	覆土(F-4)	
-	26	67号住居跡	用途不明金具	5.1	2.3	1.1	13	覆土(F-2)	
-	27	74号住居跡	刀子	11.3	1.8	1.5	17	覆土(F-2)	
-	28	5日号住居跡	刀子	13.6	1.8	0.8	19	覆土(F-1)	No. 10492
-	29	E-6グリッフ	用途不明金具	5.5	0.6	0.3	3	グリッフ内-活中	No. 10490
-	30	2号住居跡	針?	22.5	1.6	0.9	23	覆土(F-1)	No. 10491
-	31	ss-02	針?	9.3	0.9	0.7	8	覆土(F-6)	
-	32	ss-05	用途不明金具	6.4	1.7	1.0	5	覆土(F-5)	

第16表 羽口観察表

団	No.	出土遺物等	種 別	長さ(cm)	内径(cm)	外径(cm)	重さ(g)	形状・材質等	出土位置	備 考
第16回	1	45号住居跡	羽口?	(5.7)	(11.0)	(2.6)	60		覆土(P-421)	
-	2	74号住居跡	羽口?	(5.5)	(9.2)	(2.4)	53		覆土	
-	3	H-12グリッフ	羽口?	(5.2)	(5.9)	(1.5)	20		覆土	

第17表 鉄滓・石製品観察表

団	No.	出土遺物等	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	形状・材質等	出土位置	備 考
第17回	4	13号住居跡	鉄滓	9.5	8.8	3.5	153	塊状	覆土(S-2)	
-	5	12号住居跡	鉄滓	7.0	3.5	2.4	56		覆土	
-	6	2号溝	滑石	10.6	4.4	2.8	160	粘板状	覆土	
-	7	26号住居跡	石杵	19.3	4.7	4.8	620	研磨済	覆土(S-1)	

第18表 錢貨観察表

団	No.	出土遺物等	出土位置	錢 様	外徑(cm)	内径(cm)	重さ(g)	形状	真跡情報	備 考
第18回	8	試掘14号トレンチ	トレンチ内-活中	治平元寶	2.3	0.7	4.0	北宋・治平元(1064)年初期 葵唐		
-	9	8号住居	覆土	熙寧元宝	2.3	0.7	4.0	北宋・熙寧元(1068)年初期 葵唐		
-	10	1号住居状遺跡	覆土	元豐通寶	2.3	0.7	2.0	北宋・元豐元(1078)年初期 行書		
-	11	F-23号グリッフ	グリッフ内-活中	聖宋元宝	2.4	0.8	4.0	北宋・聖宋元(1063)年初期 葵唐		
-	12	96号土塹	覆土	寛永通寶	2.3	0.7	2.0	江戸・寛永13(1636)年初期 行書		
-	13	G-21号グリッフ	グリッフ内-活中	天聖元宝	2.4	0.8	3.0	北宋・天聖元(1023)年初期 葵唐		
-	14	K-14号グリッフ	グリッフ内-活中	皇宋通寶	2.4	0.8	3.0	北宋・皇宋元(1058)年初期 葵唐		
-	15	9号住居	覆土	崇和通寶	2.4	0.8	2.0	北宋・崇和元(1054)年初期 葵唐		

第19表 磯石観察表

碑誌番号	No.	出土遺物等	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	色調	石 材	備 考
第18組	1	13号住居跡	廻上(S-1)	11.1	5.2	11.4	230	に赤い黄褐色: 10Y R 5/4	砂岩	
-	2	22号住居跡	廻上(P-7)	9.7	4.5	2.7	140	に赤い黄褐色: 10Y R 7/4	砂岩	
-	3	25号住居跡	廻上	11.4	4.5	4.5	263	海浜岩: 7.5Y R 4/1	海浜岩	
-	4	31号住居跡	廻上(S-18B)	10.5	4.7	3.8	235	明るい褐色: 10Y R 7/6	砂岩	
-	5	33号住居跡	廻上(P-69)	8.7	3.4	4.6	220	に赤い黄褐色: 10Y R 6/4	砂岩	
-	6	35号住居跡	廻上	12.9	5.6	6.2	360	に赤い黄褐色: 10Y R 7/4	砂岩	
-	7	39号住居跡	廻上(S-1)	6.6	4.6	3.1	108	灰褐色: 5Y 5/2	緑色凝灰岩	
-	8	40号住居跡	廻上	7.7	4.7	4.5	187	灰褐色: 2.5Y 8/2	海浜岩類	
-	9	45号住居跡	廻上(S-2)	10.5	5.5	2.2	150	黄褐色: 10Y R 8/6	砂岩	
-	10	43号住居跡	廻上(P-11)	7.1	3.3	1.7	38	黄褐色: 10Y R 8/6	砂岩	
第19組	11	47号住居跡	廻上(S-3)	12.0	9.0	4.8	565	閑色: 7.5Y R 4/3	砂岩	
-	12	53号住居跡	廻上(S-1)	6.5	3.3	4.4	95	に赤い閑色: 7.5Y R 6/3	砂岩	
-	13	58号住居跡	カド内(P-3)	8.9	4.1	4.0	140	浅褐色: 7.5Y R 8/4	砂岩	
-	14	59号住居跡	廻上(S-1)	8.2	4.0	5.6	210	に赤い閑色: 7.5Y R 7/4	砂岩	
-	15	66号住居跡	廻上(廻石-1)	11.3	5.2	5.5	250	に赤い黄褐色: 10Y R 7/4	砂岩	
-	16	66号住居跡	廻上(廻石-2)	11.4	4.7	4.7	260	に赤い黄褐色: 10Y R 7/3	砂岩	
-	17	70号住居跡	廻上(S-1)	7.0	6.4	3.2	150	に赤い黄褐色: 10Y R 7/4	砂岩	
-	18	75号住居跡	廻上(S-1?)	8.3	4.6	2.9	110	浅黄色: 2.5Y 7/3	緑色凝灰岩	
-	19	K-9グリット	グリット内一括中	8.4	6.0	4.6	220	に赤い黄褐色: 5Y R 5/4	砂岩	
-	20	表 拙	表面採集資料	9.3	6.1	3.3	194	に赤い黄褐色: 10Y R 7/3	砂岩	

* 第19表中の石村の記述は(日)・東京大学山形文化財研究所河西氏による

第20表 石器観察表

碑誌番号	No.	出土遺物等	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	石 材	出 土 位 置	備 考
第20組	1	包含層(苔状)	打製石斧	19.8	7.6	3.0	505	砂岩	包含層確認トレンチ内(No.3)	
-	2	包含層(苔状)	打製石斧	17.0	8.3	2.4	400	砂岩	包含層確認トレンチ内(No.2)	
-	3	包含層(苔状)	打製石斧	16.6	8.0	2.8	450	砂岩	包含層確認トレンチ内(No.1)	
-	4	試掘9号トレンチ	打製石斧	8.2	5.2	1.2	50	粘板岩	トレンチ内一括中	
-	5	試掘13号トレンチ	打製石斧	7.5	5.6	1.2	65	粘板岩	トレンチ内一括中	
-	6	H-6グリット	打製石斧	8.1	5.4	1.2	70	粘板岩	グリット内一括中	
-	7	H-6グリット	打製石斧	6.3	4.8	1.1	45	粘板岩	グリット内一括中	
-	8	G-2グリット	打製石斧	10.0	4.7	2.0	98	粘板岩	グリット内一括中	
-	9	J-4グリット	打製石斧	10.8	3.9	2.1	105	砂岩	グリット内一括中	
-	10	K-11グリット	打製石斧	9.3	4.0	1.4	71	粘板岩	グリット内一括中	
-	11	7号住居跡	打製石斧	11.4	4.8	1.1	68	粘板岩	廻上(P-31)	
-	12	60号住居跡	打製石斧	8.2	3.8	1.2	40	粘板岩	廻上(S-1)	
-	13	表 拙	打製石斧	9.7	4.2	1.4	60	粘板岩		
-	14	64号住居跡	打製石斧	7.0	6.0	1.2	98	粘板岩	廻上(S-1)	
-	15	包含層(ビット状)	削留	3.5	2.3	0.8	6	頁岩	包含層(P-48)	
-	16	68号住居跡	打製石斧	10.8	3.9	1.3	60	粘板岩	廻上	
-	17	74号住居跡	打製石斧	12.9	4.9	1.5	70	粘板岩	廻上(S-1)	
-	18	包含層(苔状)	石器	2.00	(1.40)	0.35	0.8	珊瑚岩	包含層内一括中	
-	19	E-24グリット	石器	1.50	(0.80)	0.40	0.4	珊瑚岩	グリット内一括中	
-	20	I-22グリット	石器	(1.05)	(1.25)	0.35	0.5	珊瑚岩	グリット内一括中	
-	21	I-9グリット	石器	2.20	(1.35)	0.30	0.6	珊瑚岩	グリット内一括中	
-	22	26号住居跡	石器	2.25	(1.65)	0.50	1.5	珊瑚岩	廻上	
-	23	43号住居跡	石器	1.95	(1.25)	0.40	0.7	珊瑚岩	廻上(S-1)	

第2節 造構外の遺物

前節で見た造構に伴わない造構外の遺物のうち主要なものについて報告する。

(1) 造構外の縄文時代遺物（第86・87図、第88図4～23）

この時代の造構外遺物としては、第86・87図に掲載した縄文土器と第88図に掲載した石器がある。なお、平安時代住居跡の覆土内から出土した縄文土器・石器も造構外として扱っている。

まず土器の方だが、第86図52～66は前期諸磯B式段階のもので浮線文系のものと沈線文系のものとがあり、67も縄文のみだが該期のものと見られる。68～70は十三菩提式に相当すると見られるものである。71～85は中期初等の五頭ヶ台式の段階のものである。86・87は勝板式段階の、88～92は曾利式段階のものである。93～97は縄文のみまたは無文の資料であるが中期のものと認められる。このうち96は手捏ね土器である。98～102は後期前半の段階のものと見られる。103～122は晩期清水天王山式に比定される土器群である。

石器は第88図4～23に示したもののがそれである。4～14および16・17は打製石斧で、9が砂岩製である以外は粘板岩製である。15は頁岩製の削器である。18～23は黒曜石製の石鎌である。

(2) 造構外の古墳時代遺物（第75図4～10）

第75図で造構外遺物の4～10は、基本的に古墳時代遺物と見られる。4および6～8はいわゆるS字甕の破片資料である。5は壺の頸部の破片資料だが、破片の割れ口を丁寧に研磨し、2か所に焼成後両側から穿孔した小孔が見られる。この小孔は破片の二次加工段階のものと推測されるが、そうであれば壺の破片が垂飾のようなものに加工されたものかと考えられる。9と10は手捏ね土器であるが、平安時代の可能性も否定しきれない。

(3) 造構外の平安時代遺物（第75図1～3）

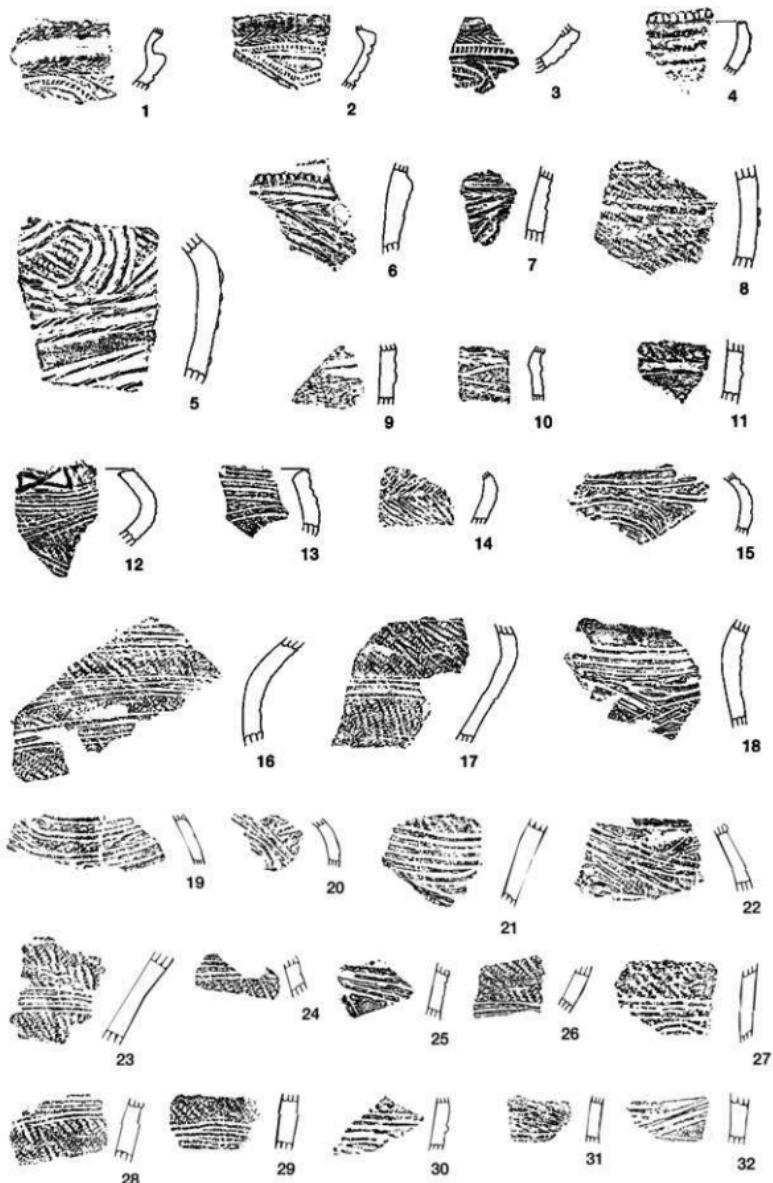
第75図の造構外遺物の1は、I-11グリッド出土の土師器の壺で、底部外面に「上門ヶ」と読める墨書が認められる。2は、土師器の最も新しい段階の皿で、H-8グリッドで出土した。3は須恵器の甕の破片で、内面に擦り痕が見られる。

(4) 造構外の中世遺物（第75図11～20、22・23）

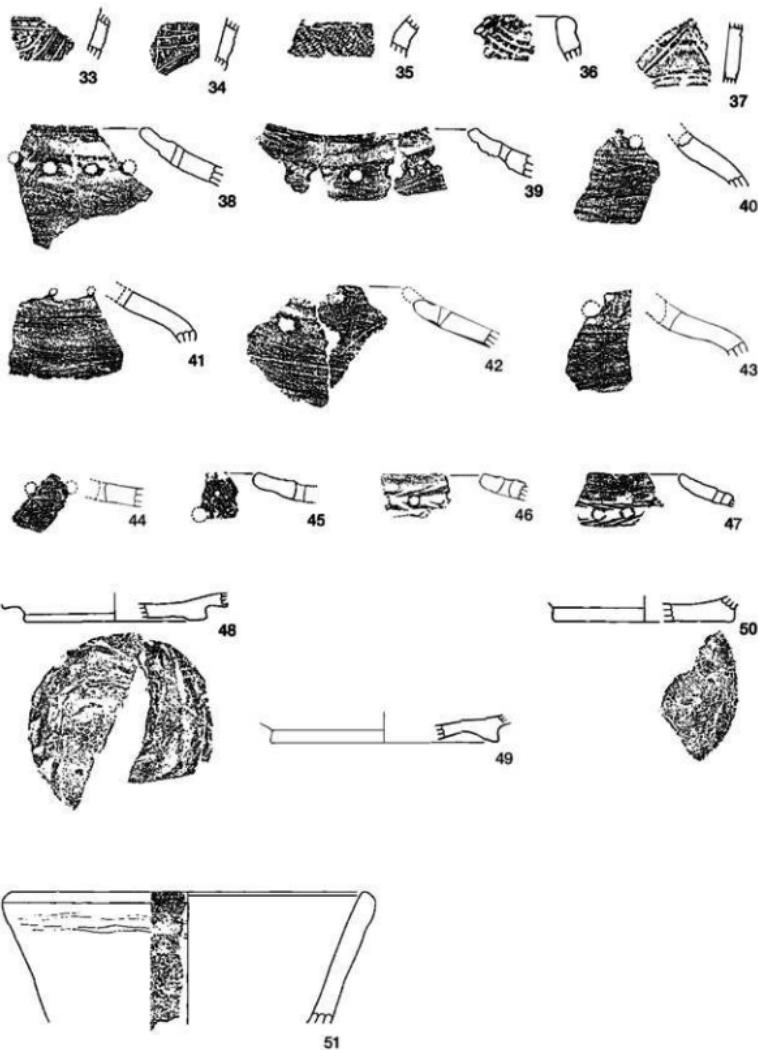
第75図で造構外遺物の11～17は、龍泉窯系の青磁で蓮弁文のある碗の破片資料である。おのおの接合することなく別々の個体である。18は白磁の壺と見られるものの口縁部付近の破片資料である。19は長石釉がかかる志野焼の皿で、また20は鉄釉の天目茶碗の底部破片である。この19・20は、あるいは江戸期まで下る可能性がある。22は内耳土器の鍋の口縁部破片で、23は常滑焼の甕である。

(5) 造構外の近世遺物（第75図21、24～26）

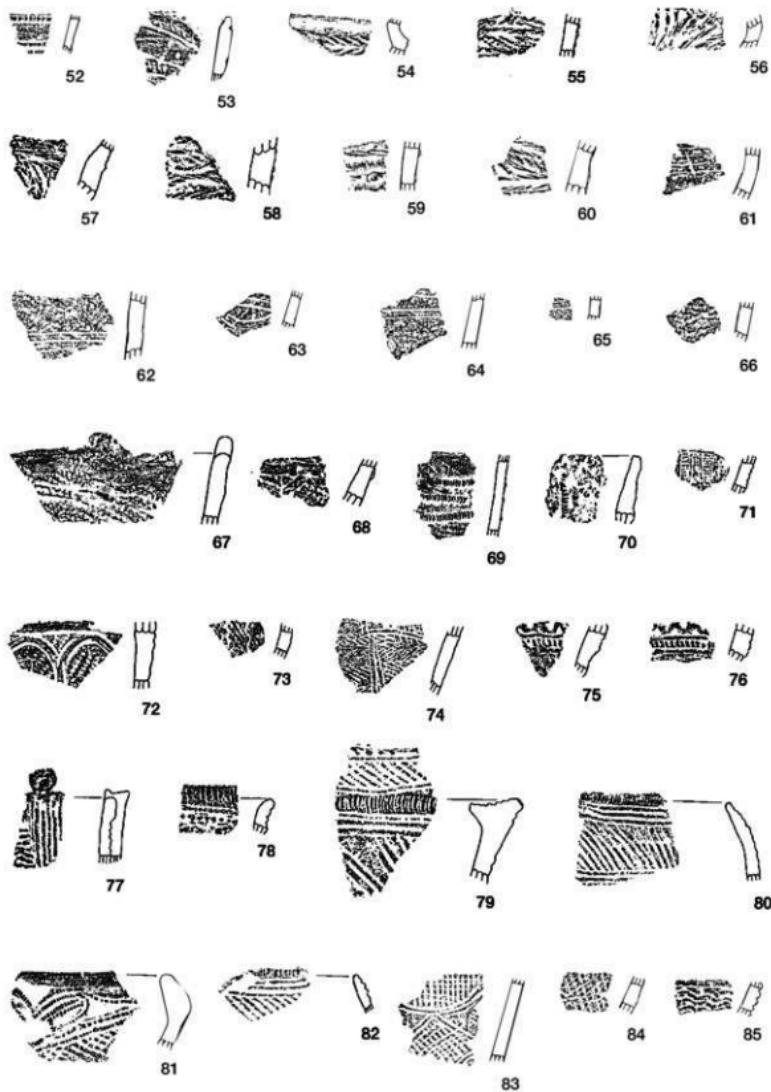
第75図の造構外遺物の21と24～26は、近世遺物の一部を図化したもので、21は瀬戸美濃の染め付けのよく見られる碗である。24・25は土製の人形である。ともに大黒天かと見られる。26は煙管の吸い口部であるが残りは余りよくない。



第84図 縄文時代遺物—土器・その1 (1/3)

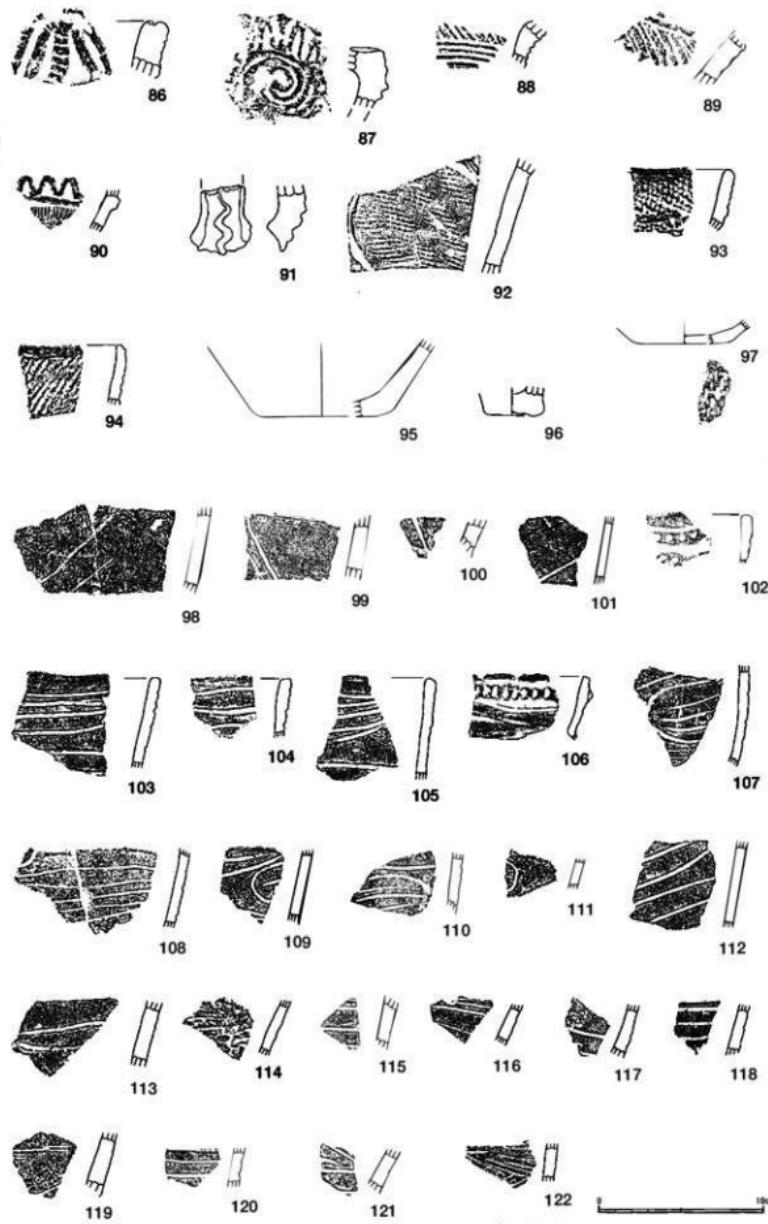


第85図 縄文時代遺物—土器・その2 (1／3)

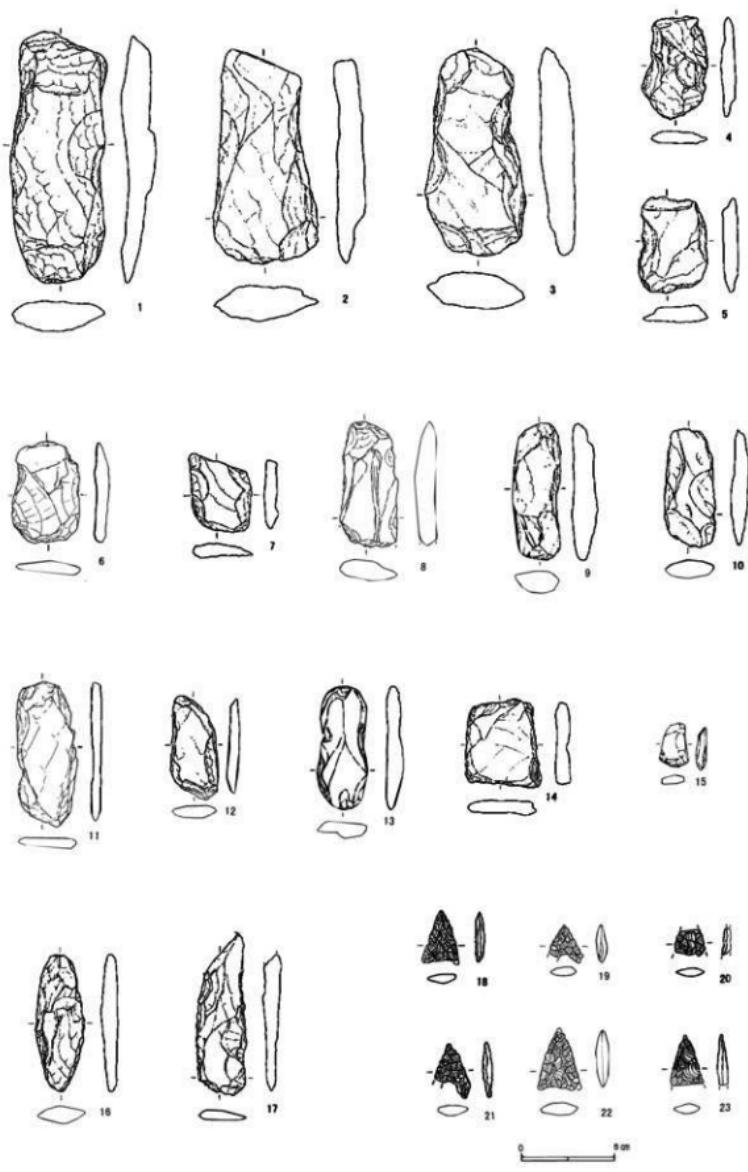


第86図 縄文時代遺物—土器・その3 (1/3)





第87図 縄文時代遺物—土器・その4 (1/3)



第88図 縄文時代遺物—石器 (1/4・1/2)

第5章 遺構・遺物についての検討

第1節 平安時代土器について

今回の北中原遺跡の発掘調査で、主体をなす平安時代の土器について概観すると、土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器の4種類があり、この地域の平安時代遺跡に通例としてみられるように、出土品から見られる生活什器の主体は土師器であり、本遺跡においてもこの点は例外ではない。

出土した土器は、9世紀から11世紀代にかけてのものである。このうち土師器については、この時期の甲斐地域を分布エリとして特徴的に存在する「甲斐型土器」として把握されているものと、甲斐型としての特色は消失するものの、その延長上に位置する平安時代後半の土器群に相当する。甲斐地域における平安時代土師器の編年研究は、1990年代にいたって「甲斐型土器」編年研究を機軸に一段と深化し、整備されてきている。

一方で須恵器については、甲府盆地周辺における集落遺跡においては希薄で、その生産や供給については、隣接の関東や東海、信州地方などと比べてもきわめて詳細を欠く状況にあるといえる。また灰釉陶器や綠釉陶器については、生産年代や流通状況について解明が進んでいるが、ここでは須恵器と同様に客観的な方といえる状況を確認したにとどまった。

以下、出土土師器を中心に平安時代の土器について、一、二の検討を行いたい。

(1) 土師器の器種と年代

ここでは77軒の平安期の住居跡より出土した土師器について、器形の種類、変遷および年代的位置づけ等について整理しておきたい。

今回の調査にかかる土師器の器形としては、壺、高台壺、高足高台付壺、皿、高足高台付皿、柱状高台付皿、壺系鉢などの壺系のものと、甕、小型甕、甕系鉢、羽釜、置きカマドなどが見られた。

無高台の壺についての特徴を段階的に見ると、つぎのようになる。

- ①口径と底径の比が2:1程度で、体部外面の下半に斜め方向のヘラ削りが見られ、底部は回転糸切りの後にヘラ削りを行い、体部内面には放射状の暗文が施される。甲斐型の壺の特徴をよく備えている。
- ②底径が口径の1/2を下回るようになり、体部外面下半のヘラ削りの間隔が開き、底部にはヘラ削りが行われなく回転糸切りがそのまま残り、体部内面には暗文は施されなくなる。例外的に体部内面にまばらに放射暗文が見られる資料がわずかにある。なお同じ形態で体部外面のヘラ削りが行われないものが出でてくる。甲斐型の特徴が衰退する。
- ③器形的には大きく変わらないが、ヘラ削りはほとんど行われなくなり、甲斐型が終わり、それが粗雑化した古代末の土器制作の盛期といえる段階のもの。柱状の粘土の台に、帯状の粘土を巻き付け、回転撫で調整を行った後、糸切りを行う底部円柱造りの技法（玉口ほか1984）が明瞭に観察されるものが見られる。
- ④つくりがさらに粗雑になり、底部が厚くなる。古代末の土器制作の盛期を過ぎた段階のもの。
- ⑤器壁が全体的に厚味を持ち、小型化したものが多くなる。古代末の土器制作が衰退していく段階のもの。

この土師器の壺に見られる特色の各段階をもって、本遺跡の土師器に5つの段階設定し、以下にその変遷を概観する。

①段階

基本的な壺のほかに、削り出し高台をもつ壺、甕があるが、資料的に豊富とはいえない。

甕は、壺と同様に甲斐型の特徴をよく備える。器高が比較的高く、体部外面は縦方向のハケメ調整、内面は横方向のハケメ調整がなされ、口縁は薄口縁型（保坂康夫1992）となる。底部外面には木葉痕が見られる。土師器以外では、須恵器の壺、壺蓋、「壺G」などがある。

②段階

基本的な壺のほかに、皿、壺系の鉢、甕、小型甕、甕系の鉢、羽釜、置きカマドなどがある。

皿においても、壺と同様に、甲斐型の特徴をふまえたヘラ削りのある土器と、従的な存在だがヘラ削りのないものがある。また壺系の鉢としたものは、わずかに見られるもので、口径が22cmを超えた、ヘラ削りのない壺を大型化した存在である。甕は、口縁が厚口縁型となる。甕と同じ器面調整を行う羽釜が登場する。置きカマドは1例のみが確認されている。

須恵器は壺と「壺G」の断片的な資料が見られるのみである。灰釉陶器は瓶頸の破片資料が若干あり、綠釉陶器の輪花皿と小破片だが耳皿が見られる。

③段階

基本的な壺のほかに、皿、高足の高台を持つ壺、壺系の鉢、甕、小型甕、甕系の鉢、羽釜などがある。

この段階で登場する高足の高台を持つ壺は、壺と脚の接合部の破片資料が多く、そうしたものの観察によれば、大部分の資料が、まず底部円柱造りにより壺部を形成し、その後脚部を接合するという手順で作成されている。この高足高台付き壺については、使用状況も注意される存在である。完形資料は非常に少なく、使用的最終段階で破碎されている可能性が考えられるほどで、とくに脚部の下端は打ち欠きが明瞭に観察されるものが多い。また2次被熱の痕が見られるものの何点がある。おそらく供養用というよりは祭祀のための什器といえるのではなかろうか。なお、1点だけ置きカマドの小破片が見られるが、この段階には置きカマドはすでなく、混入品である可能性もある。また壺が1点あるがこれも同前であろう。

須恵器は壺の破片資料が見られるのみである。灰釉陶器では碗が入ってくる。綠釉陶器についても碗がわずかに入る状況にある。

④段階

基本的な壺のほかに、皿、高足高台付き壺、高足高台付き皿、甕、小型甕、甕系の鉢、羽釜などがある。

この段階の土師器は、全体的に作りや器面調整が粗雑化していく。高足の高台を持つ土器は前段階の壺のものばかりに、皿に高足高台がつくものが増加する。

須恵器は急激に減少する。灰釉陶器では碗、段皿などが入る。綠釉陶器は見られなくなる。

⑤段階

基本的な壺のほかに、小皿、柱状高台を持つ皿、甕などがあるが、土器作りの上でかなり衰退の傾向が進んでいく傾向が看取される。

(2) 須恵器と施釉陶器、および「転用視」

まず須恵器について、この発掘調査で確認されている器形の種類をあげると、壺、壺蓋、甕、「壺G」などがある。それらのあり方を見ると、つぎの2点に集約される。

まず1つめには、器形を把握しうる良好な資料は、9世紀代前半の北中原①期にのみ存在するということである。具体的に見ると、いずれも完形ではないが、40号住居跡の壺、壺蓋、「壺G」が各1点と、50号住居跡の壺4点があげられる程度である。

2つめには、甕はほとんどが北中原②期～④期の土師器に伴う破片資料であるということ。さらにその多くは破片の周辺が粗い調整をされた、手のひらくらいの大きさをした体部破片であり、なおかつ内面に一定の範囲で擦り痕が認められるものとなっている、ということである。

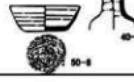
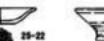
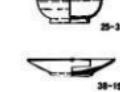
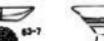
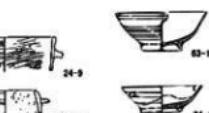
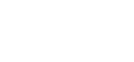
この2点目については、近年かなり注目されてきている、いわゆる「転用視」とよばれているものに相当する。遺構外資料も含めて図示したものとしては7点ほどであるが、確実に墨痕（朱墨も含めて）が観察されたものはなかった。

また平安期の須恵器にあって、特徴的な器形から、県内でもその確認が進んでいる「凸帶付四耳壺」については、今は明らかにそれとわかる、すなわち「凸帶」や「耳」がついたものは1点も確認されていない。

つぎに施釉陶器について、灰釉陶器から見ると、器種的には碗・輪花碗が中心で、ほかに皿・段皿や瓶類の破片資料がある。時期的には北中原②期～⑤期に伴うが、とりわけ③・④期に多く見られる。量的には、残りのよい該期の住居に1～2点が用いられているといった程度である。形式的には、確実な同定は行っていないが、黒窯90号窯式（第3型式）、羅岡4号窯式、大原2号窯式（後半期）、新しいところで百台寺窯式（第2型式）、西坂1号窯式、などと考えられるものがある。

また綠釉陶器については、碗、輪花皿、耳皿などの器種が認められている。内容的には、③期の25号住居跡の碗（第52図31）は深い緑色を呈し、入念な整形で、胎土は白みがかった柔らかめのものである。また②期の38号住居跡の輪花皿（第58図15）は、黄色みがかった緑色をするが、発色は均質でなく、胎土は灰色味を帯びたものである。また高台の内側底面に三叉トチンの痕跡も観察できる。

なお、この輪花皿には口縁部にタール状の付着物が見られ、見込み面には擦り痕がかすかに見られることから、観などとして転用された可能性も推定される。また同様なタール状または墨状の付着物が見られ底部内面が摩擦の痕跡をとどめている状況は灰釉陶器においても、24号住居跡の7の碗や44号住居跡の32の碗など数点確認されている。また4号住居跡の17の壺のように、墨痕こそないが内面の擦り痕が観察されるものが、土師器の中にも存在する。

時期区分	坪 三 高足高台・柱状高台 三 林	明器 磁器マフ 酒器・泡物器	年代	編年区分
北中原①期			800	 甲斐型V三期
△△△			850	 甲斐型V四期 甲斐型IX期 甲斐型X期
北中原②期	       	900	 甲斐型X一期	
北中原③期	       	950	 甲斐型X二期	
北中原④期	         	1000	 古代末 1期	
北中原⑤期	   	1050	 古代末 2期	
			1100	 古代末 3期
				 古代末 4期
				 古代末 5期

(注)「甲斐型昭和」(山下1982)
「古代末昭和」(2000)

(3) 墓書・ヘラ書土器について

今回の調査では、第91図に示したように、平安時代の豈穴住跡から34点、遺構外で1点、計35点の墨書および墨痕（以下墨書と一括して扱う）の認められる土師器が確認された。またヘラ書の見られる土師器も2点出土している。ここでは、これらの墨書・ヘラ書土器について、いくつかの観点で所見を整理しておきたい。

まず手始めに墨書・ヘラ書土器を時期的に見ておくと、北中原①期から④期の住跡から出土しているが、墨書に限って見ると、④期というのは56号住跡の1点のみである。これについては、墨書された土器の細片が④期の住跡に混じり込んだもので、墨書そのものは②の土器になされている。よって、墨書の時期は①～③期となるが、①期と②期には半世紀ほどのブランクがあり、これを境に前後二時期、すなわち①期の第一段階と②～③期の第二段階に分けて見ることが適当と考えられる。

なお、県内出土の墨書・刻書土器を集めた平野修の研究（平野1992）によると、墨書は基本的に8世紀中頃から10世紀末まで見られ、とくに9世紀後半から10世紀代に盛行するとされている。これに即していえば、北中原遺跡の墨書土器も全体的な傾向によく合致し、ここでの第一段階は甲斐全体での出現～発展期、第二段階が甲斐全体の盛行期に相当する。

ヘラ書土器については1点が③期、もう1点が④期となり、ヘラ書された土器自体、墨書のものに比べていくぶん新しい傾向にあることが確認される。

墨書・ヘラ書の見られる資料は、ここでは基本的にこの時期の土師器の坏もしくは皿に限って観察されるのであるが、この後ふれるように、第一段階と第二段階とでは、内容的にいくぶん変化が見られるようと思われる。

つぎに35点の墨書の具体的な状況についてみると、記載内容は、細片のため確実に言い切れないものもあるが基本的に漢字で、その文字数は、ほぼ確実に1文字と認められるものが5点（14%）、1文字のみと推定されるもの28点（80%）、2文字のものと2文字以上ものがそれぞれ1点（3%）ずつとなっている。

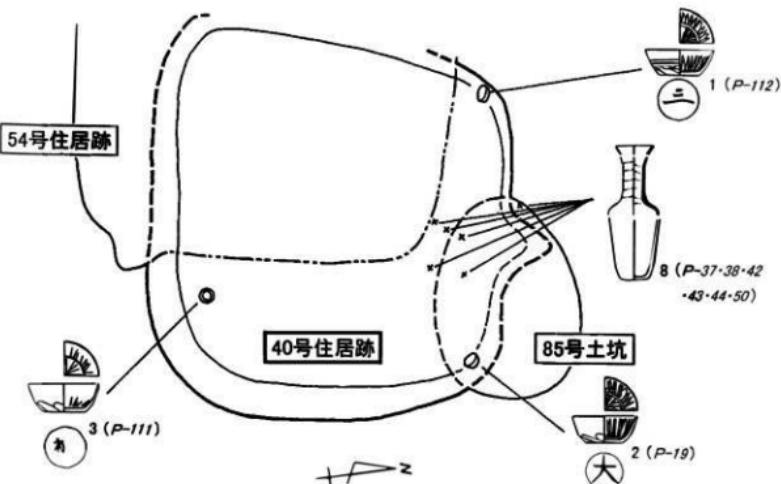
さらに墨書の行われている部位置についてであるが、底部外面に行われているもの11点（31%）、体部外面に施されているもの24点（69%）となっている。さらに体部外面の記載の向きを細かく分ければ、正位のもの5点、逆位のもの9点、倒位のもの2点で、さらにわずかな墨痕程度のため、いずれとも判別できないものは8点を数える。墨書の行われる部位置について、時期的なものを加味して見たとき、底部外面への墨書は、その大部分が第一段階のものとなっている、という傾向以外はほとんど抽出されない。

これらの墨書の文字の内容であるが、最初の段階には、楷書に近い書体をもって「三」、「大」、「有」（以上40号住居）、「上」（50号住居）などのような、明確に判読される、比較的画数の少ない文字が多い。また「上門ヶ」（I-11グリッド）と2文字のものも存在する。この時期の国分寺周辺も含めた盆地東部の墨書土器について「土師器坏の底部外面に（略）、中心よりはずれたところに、広いスペースのわりには比較的小さく、しかも丁寧に記されていることが特徴」との指摘がある（平野1992）が、体部外面に正位で書かれたものや底部外面にいっぱいに書かれたものなど一部例外的な部分もあるが、基本的にはここでもそうした特徴が首肯されるといえる。

墨書土器の第二段階では、草書的な筆運びの文字が多くなる傾向が見られ、破片資料が多いこともあるが、判読しがたいものが大部分となる。不確かながら読みが推定できるものに「有ヶ」（4号住居）、「親ヶ」（7号住居）、「几」（24号住居）、「増ヶ」（25号住居）、「是ヶ」（33号住居）、「禾ヶ」（44号住居）、「而ヶ」（45号住居）などがある。また25号住居の土師器坏（5）には体部外面を一周するように多くの文字（一部に記号もしくは絵画的要素を含む可能性がある）が認められるものがあり、欠損部分が多く、また墨の遺存も全体的にかかるなもので、ほとんど判読困難であるが、そうした資料は希少であり注目されるものといえる。読み取り方を工夫し、その記載内容を明らかにすることは今後の課題としたい。

つぎにヘラ書の認められるもの2点についてであるが、1点目は48号住跡から出土の土師器坏で、見込みに焼成前にヘラ状工具で、曲線的な流れのような線で3画分が書き込まれているものである。「女」という漢字に近いとも見られるが、とくに漢字と決めてかかる必要はなく、記号的な書き込みかもしれない。当然、出来上がりの坏などに使用段階の書き込みがされる墨書土器とは、だいぶ意味合いがことなるものであり、製造段階での特定の意味を込めた書き込みと思われるが、その意とするところは現段階では十分に明らかにしない。2点目のヘラ書資料は、65号住居から出土の土師器坏の小破片で、その体部内面に絵画的な要素を持つ、焼成前のヘラ書が見られる。ヘラ状工具による線の運びは絵画の一部であるとしか思えないが、何分小破片のため何を描いたものであるのかなど詳細なことはいえない。

以上、概略的に本遺跡における墨書土器とヘラ書土器の在り方にについて整理を行った。墨書土器はなどは、日常の什器として用いる土師器の坏や皿に一定の意図、目的をもって墨で文字を書き付けたものであるから、その意味するところが問題になる。ほとんどが1字程度の断片的な文字情報のため、書かれた文字そのものからそうした意味合いを把握するのはなかなか困難である。あえて考えれば、わずかにI-11グリッドで確認された「上



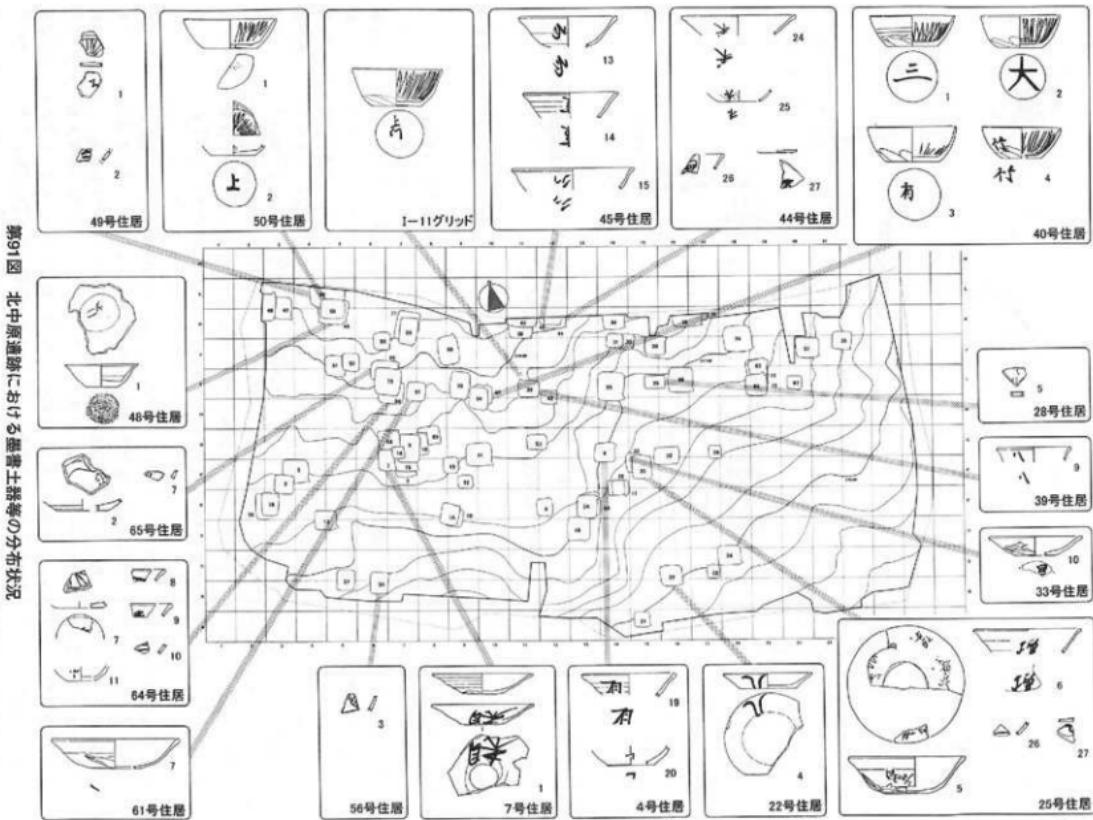
「94.10.27付調査速報『北中原遺跡調査だより 08』掲載図を再構成した
第90図 40号住居跡における墨書き土器の状況

「門カ」と読める墨書きなどは、2字目が「門」であったとして、上門と呼ばれる施設的なものか、あるいはそれがあった地名などを意味するかとも見られるが、具体的にはよくわからない。

そこでつぎに出土状況などを合わせ見ていくなかで、その在り方に有意性を認められるのではないかとして注目されるのが、40号住居跡における第一段階の墨書き土器3点である。第90図にその出土状況を示した。

40号住居跡は、北中原①期の豎穴住居で、確認面からの深さが40数cmと比較的深く、しっかりととした豎穴住居であったが、南西側の上部に③期の54号住居跡が15cmほどの床面レベル差をもって重複し、また北辺東寄りを85号土坑が、40号住居跡の床面から20cmほどまで切り込んでいる状況にあった。どちらの遺構も40号住居跡の床面まで若干の間隔を置いて切り込んでいたので、床面近くに確認された3点の墨書き土器は、それらから全く影響を受けずに確認されている。調査段階でまず最初に「大」の墨書きのある壺が北東コーナー部で壁にもたれるように内面を上にして斜めに発見された。続いて南東コーナー部でも「有」の墨書き壺が、これは壁を離れや内寄りの位置に正位で検出された。これにより残りの北西、南西の隅を精査したところ、北西コーナー部で「三」の墨書きのある壺が、「大」の壺と同様な状態で確認されたが、南西隅では墨書き土器はおろか他の遺物も確認されなかつた。

このように南西隅を除いて三つのコーナー部から、3点の底部外面に墨書きの施された壺が見いだされたのであるが、記載された文字とそれぞれの発見された位置との関係や相互の関連などを読みとることはできなかったものの、墨書き土器をあえて3方向に配したという意図的なものが見られるのでないかと思われる。どのような目的があってこのような配置がなされたのだろうか。単に推測でしかないのだが、豎穴住居を遺棄するときの祭祀の現れではないかと想像される。ほかに同様な、あるいは類似した事例があるのかどうかは、いまのところ確認しきれていない。しかし、こうしたあり方は、文字情報としてはかなりの蓄積になっていても、なかなか具体的な土器への墨書き行為の全体像を解明しきれないでいる現状の中で、一定の手がかりとなるのではないかと考えられるものである。



第91図 北中原遺跡における埴輪土器等の分布状況

第2節 注意をひいた平安時代遺物

前節では平安時代遺物の中でも中心となる土器について検討したが、つぎには土器以外の資料で注目すべきものいくつか見ておきたい。

(1) 古代瓦

豎穴住居内から26点、土坑から1点、遺構外より5点、計32点の瓦を検出している。50号住居跡の完形の丸瓦1点(第77図12)以外は、大部分が破片資料である。住居跡からの出土についても詳細に見ると、カマド内部から出土したものは7点を数え、住居内出土の点数に占める割合は27%で、さらにカマド付近1点というのも加えるとその割合はさらに増すことになる。また複数の住居間で接合したものも2例あることが目をひいた。

種類ごとに見ると、丸瓦21点(66%)、平瓦9点(28%)となっており、ほかに軒平瓦の瓦頭部と接合する部位に当たる平瓦部分かと思われるもの1点(第76図4)と、平瓦が変形したような特異なもの(第79図25)が1点が確認されている。住居跡よりの出土に限って年代的に見ると、北中原③期と④期の住居跡にはほぼ同じくらいの割合となっている。

これらの古代瓦をどう見るかということになるが、今回の調査範囲の中では村落内寺院を想起させるような遺構は見られず、出土した瓦はみな国分寺に供給される目的で作られた物であり、何かの事情でこの国分寺近隣の集落に流れた物と見るのが自然であろう。それにしても小破片が中心ながら結構な量が認められたのであるが、それは本遺跡が甲斐国分寺跡から直線で500mあまりの至近距離にあるために、こうした数が確認されている、というのが第一議的な説明にならうかと思われる。しかし国分寺との空間的な位置関係だけで瓦の存在は説明しきれないのではないか。ほぼ同程度に距離をおいた笠木地蔵遺跡(1980~81年に約1万m²を調査)や北堀遺跡(1980~81年に約1万4千m²を調査)などでは、今回以上に広範囲の調査にもかかわらず量的には本遺跡を下回っていることなどを併せ見ると、国分寺とのかかわり方(時期や関係の深さ)などにおいて一定の事情があったのではないかと推測される。今後さらに詳細な年代的物差しと国分寺周辺遺跡群の出土情報の悉皆確認とによって定量的に分析し、国分寺と周辺集落との関係を浮き彫りにする作業が必要となり、そうした中であらためてここでの瓦のあり方の評価が定まることになろう。

(2) 鉄製品・砥石・鉄滓・鰐羽口

この調査で確認された鉄製品の豊富さについても注目される。第80図に図示しただけでも32点があり、図化するほどにいたらなかった小片まで含めればさらに多くなる。全体的に見て、これは近隣の遺跡でのあり方と比べても多いといえるのではないかと思われる。その鉄製品について、帰属する住居から年代を推定できるもので見れば、②期から④期にまとまりており、とくにその60%は③期に集中している。

内容的に見ると、刀子・鎌・斧・鉄鎌などの利器や、釘、その他いくつかの性格未詳の形態のものなどがある。それらの中で出土状況の上で注意されたのは、31号住居跡から1点の刀子(第80図10)で、住居北西寄り壁際の貼り床下から検出されたものである。これは豊富な利器のうちの一つを豎穴住居の構築過程で、貼り床の下に埋め込みながら行われた地鎮めの祭祀の跡、と理解されるのではないかと思われる。また30号住居跡の西壁寄りの床面直上から出土した三日月形の板状の鉄製品1点(同図11)は、類例の見られない用途未詳のもので、類例の追加を待ちながら性格を考えていくべき資料である。

もとより古代において鉄は貴重で、痛んでも小鍛冶などで補修して使い続けたり、打ち直して別な製品とし再利用されたりするものと考えられていて、なかなか簡単に廃棄されるものではないと見られている。ということで、遺跡から出土する鉄製品の量がそのまま当時の鉄の使用量と見ることはできない。こうした前提に立って本遺跡の出土鉄製品を見るれば、あらためて比較的多めの出土のし方に注意が向くのである。

しかし鉄製品の豊富さばかりではなく、利器としての鉄を研ぐのに用いる砥石の量も、図化されたもので20点(第82・83図)という数にのぼっていることも特筆されよう。大部分がにぶい黄橙色をした砂岩製で、ほかに凝灰岩、緑色凝灰岩、花崗岩類などを用いて作られている。総数20のうち18点は住居跡出土で、それぞれの住居の年代によって分析すると、①期から④期に及んでいるが、50%は③期に属し、28%は④期のものとなっている。こうした点は鉄製品のあり方と相關性を持つものと思われる。

つぎにとりあげるのは、鉄滓と鰐の羽口である。まず鉄滓は十分に出土量を把握し切れていないが、住居の覆土中や遺構外に多く散見されている。その中で第81図4に実測図を掲出したものは、③期の13号住居跡から出土したもので、碗形をしている。何か取瓶のような容器におさまって固まった状況を想起させるものである。

また羽口は、②期の45号住居跡覆土から1点(第81図1)、④期の74号住居跡覆土から1点(同図2)、遺構外で1点(同図3)の3点が確認されている。

(3) 50号住居跡における「被熱土塊」

50号住居跡は、北中原①期の竪穴住居で、同じ①期でありながら50号住居跡より新しい49号と、これと床面レベルをほぼ同一にしながら切り合う、③期の48号の2軒の竪穴住居の張り床下に確認されたものである。すなわち、重複する2軒の寄り新しい住居に、床面から30cm程度までが封じ込まれた状況が50号住居の検出状況であり、その住居内の東半部の覆土中に、床面に対し間層をそう置くことなく、注目すべき多量の「被熱土塊」(仮称、以下同じ)は存在したのである。伴出した土師器の环は、9世紀代前半の年代に位置づけられるもので、以下に見る被熱土塊の年代も、平安時代の初め頃の西暦820~30年前後の所産になるものと理解される。

被熱土塊と仮称したのは、発掘調査段階で、スサなど入れながら土を固めて何らかの高熱を扱う施設付近にあり、それがやがて解体され、その施設を構成していたと思われる土のかたまりが、50号住居内に廃棄されるとものと予想されていた。しかし、本来どのようなものであったかがまったく想像もつかなかったため、整理調査段階で、つぎに見るような観察要点に基づいて暫定的にその呼称を考えた結果である。当然これは、今後の類例等を検証して適切な名称に改められるべきものであるが、現時点ではここでこの呼称することにより報告を行うことを許されたい。

さて、被熱土塊の検出状況を見ると、住居の東寄りに積み上げられるようにまとまって見られ、一方向から竪穴内に投棄されたような状況を呈していた。それを覆う土層には、ところどころに焼土が混じっており、伴出遺物の多くも焼土に紛れていた。

住居覆土に混じて確認された時点で、被熱土塊は、施設の一部として高温下で溶融し冷却後に固まり、結果的にかなりの強度を持ったものも一定の割合で見られたが、多くは脆弱で崩壊しやすい状態であった。いくつかのブロックに分けて取り上げを進めたが、取り上げたばかりの時点では水分が多く、取り上げ後は第一に十分な自然乾燥をおこなった。乾燥の後は、ブラシと写真器材のプロワーでクリーニングし、適宜酢酸ビニル樹脂系の接着剤の水溶液を時間をかけて塗布・含浸させ、固定をはかった。

こうした取り上げ処理の結果、17cm大から1cm大まで、大小421点の被熱土塊が確認され、その総重量は29,637グラムとなった。

- これらの被熱土塊を観察すると、つぎのような諸点が認められた。
- ①平らな面有するもの…………… 26点 (6%)
 - ・しかもそれが平滑な状態のもの…………… 13点 (3%)
 - ②曲面有するもの…………… 29点 (14%)
 - ③指頭による調整痕有するもの…………… 55点 (13%)
 - ④溶融面有するもの…………… 221点 (52%)
 - ・しかもそれにガラス化が見られるもの…………… 34点 (8%)
 - ⑤鉄錆が見られるもの…………… 63点 (15%)
 - ⑥スサが入るもの…………… 294点 (70%)
 - ⑦スサの入らない被熱土塊…………… 127点 (30%)

上記の観察要点に対し、あわせて該当する資料の点数および総量に対する割合を示したが、それらは重複カウントされた数字である。

ここで確認されたそれぞれの点について踏み込んでみると、何かの構造体の一部であったことを示す平らな面または局面をもつものが20%程度であること。全体の3%ほどのものに何かの型の一部であったことを窺わせる平滑に仕上げられた状況が見られること。また表面に指頭による整形のための痕跡を有するものが13%であること。ほぼ半分の資料には溶融面が見られ、しかもそのうちの15%ほどのものにはガラス化が認められること。全資料の15%に鉄分の付着が観察されること。7割の被熱土塊にスサの混入が見られること、などが所見としてあげられるのである。

つぎにこれらはいったい何であったのか、を検討すると、最初にいえるのは、何かの構造体(施設)を構成していたものらしい、ということだ。しかも、それはたいへん高い温度を扱うものと見られる。別にまた、資料の一部に型のようないわゆる存在する、ということも注意される。

調査段階では、土器を焼成する窯のようなものと考え、窯胎が崩されたようなものである可能性を想定して処理を進めたが、クリーニング後の観察により、溶融面にガラス化した部分がかなりの割合で見られることなどから、窯の場合より高い温度を扱った可能性があり、またそうした溶融面に鉄分の付着がまま見られることなどを考え合わせると、一概に窯を想定するわけにも行かないと思われようになった。そして結果的にどうかというと、現時点では、性格不明のまま被熱土塊として暫定的な報告となつたのである。この段階で性格を見極めることは困難であるが、確実にいえることは、9世紀前半代に、住居の廃絶とともに、近くに存在した施設が解体され、

投入されたということである。

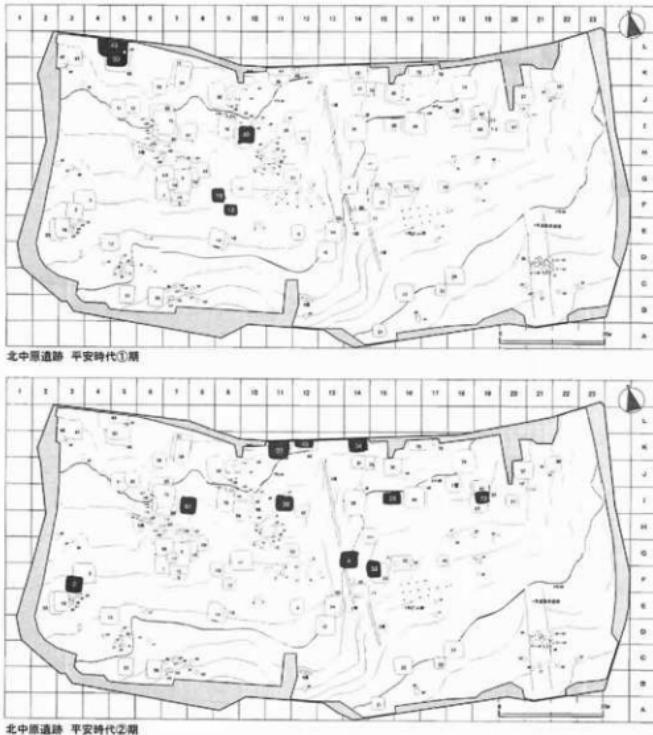
第3節 平安時代集落の変遷と位置づけ

前節まで土器やその他の出土遺物について少々踏み込んで見てきたが、そこで検討結果を踏まえながら、この遺跡の歴史的位置づけ、あるいは性格について確認したい。

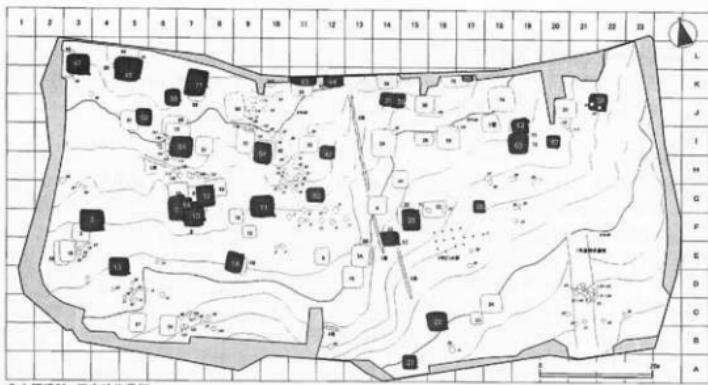
(1) 集落内の変遷

今回調査の実施範囲において明らかになった平安集落は、土師器の年代検討から5段階の変遷をたどるものと理解される。なお、住居跡のなかには遺物を伴わないなどで確定な時期を把握しがたいものも若干あるが、それらを除き、北中原①段階から⑤段階までの変遷を、第92・93図に示した。土師器の時期区分は50年単位を目安としており、このため集落の動向の把握には十分とはいえないが、概略の傾向を掴むことができると考える。

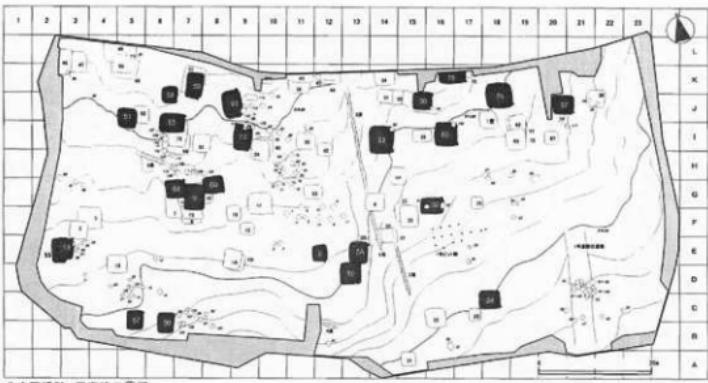
既に述べたように①期から②期に移行する間に50年前後のブランクが考えられ、集落としては②期から③期にいたる150年余りの消長を中心とする。この間、各期のいくつかの住居の配置にある程度の計画性をうかがえるよう見受けられること、特定の場所に継続的に住居が営まれる所があることなどが気付かれる。前者の点に関しては、側々の住居を見たとき、それぞれの設営された場所が、地山の疊層までが深く床面が安定しているものもあるが、地山疊層が生活面近くまで上がっていて、床面に疊の頭頭が現れるようなものも多く見られ、そうしたものについては、その背後に、豊穴の掘削に向かない状況でもあえてその場所に設営することを求めた意向が存在した、と推定されるのである。



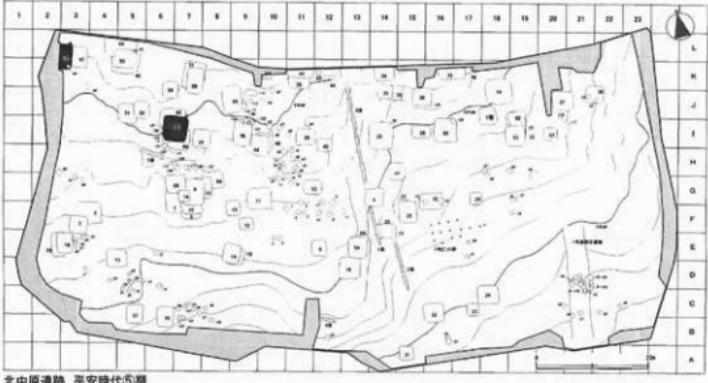
第92図 北中原遺跡における平安時代住居の変遷（1）



北中原遺跡 平安時代③期



北中原遺跡 平安時代④期



第93図 北中原遺跡における平安時代住居の変遷（2）

(2) 穫穴住居内の礫の問題

今回の調査で確認された竪穴住居の大部分の住居で、覆土内、とくに床面近くに自然礫の存在が認められた。こうした礫の存在については、甲斐国分寺跡周辺の平安遺跡では、かなり一般的に見られるようで、そのためもあってか、その存在意義についてはあまり省みられることはなかった。今回の調査においても、途中までは何ら特別な注意を払うことなく進んだが、26号住居跡の調査段階で、以下のような経過から、礫の詳細観察の必要性を認識するに至った。

26号住居跡は、小振りの竪穴住居であったが、石組みカマドを東壁の南寄りに持ち、その石組みの残存状況は、両サイドの袖石の上に架けられた前後の梁石まで残る、たいへん良好なものであった。

そして、そのほぼ原型をとどめる石組みカマドの前面に床面に接して、礫が積み上げられており、詳細に観察したところ、それらの自然礫の中には煤の付着が見られるものがいくつか認められたことから、カマドを解体した際の、構築材であった礫を投棄したものとの認識を持った。問題は、当該住居のカマドの石組みは、解体を受けずにいるのに、そのカマド前に、ほかの住居から抜き取られたと見られるカマド構築材の礫が積み上げられておれば、その住居は廃棄されたも同前で、これはすなわち複数の住居の廃棄がなされていたことを意味するのか、というものである。

調査段階の当初には、ある程度カマド解体の事例研究のことは念頭にあったが、それは個々の住居の中で完結するところがとくに程度に認識がとどまっていた。しかしこの26号住居跡を契機に見方が変わった。そうした現象はきわめて特異なものか、それとも現象に程度の差はあれ一般的なことなのか。それによっては集落像の現実への理解がまったく変わることになる。このため、それ以後は状況を見て、出来る限り竪穴住居内の礫の存在に注意を払い、調査を進めてきた。

具体的には、①礫の出土位置を平面図に書き込み、②ほぼ全てにナンバーを振り、③レベル等の記録後は、④水洗いをして、煤の付着の有無やひび割れ等の被熱の状況を観察した。さらにもカマドとの関係が良好なものについては、取り上げを行い、⑤再度洗浄し、⑥実測し、煤の付着状況やひび割れなどの状況を書きとめた。

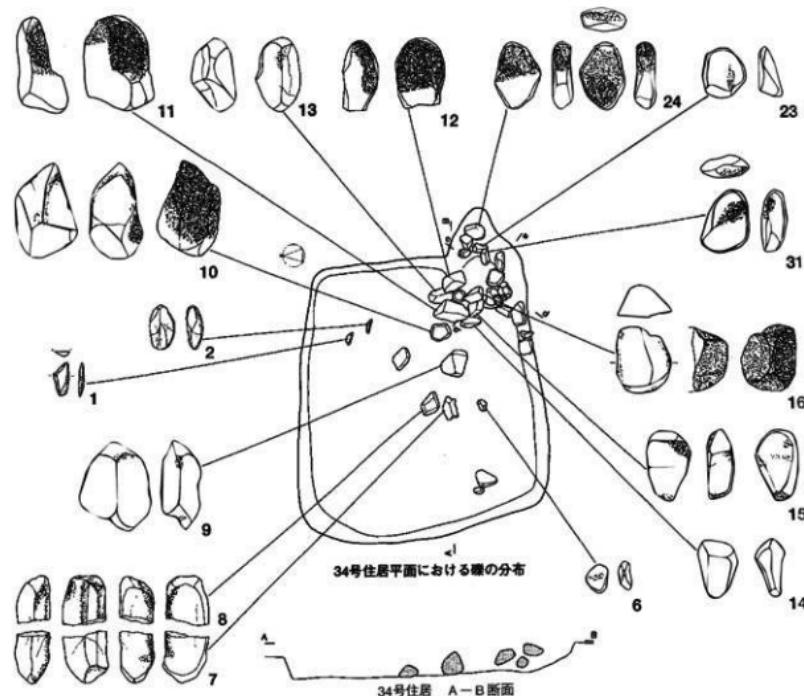
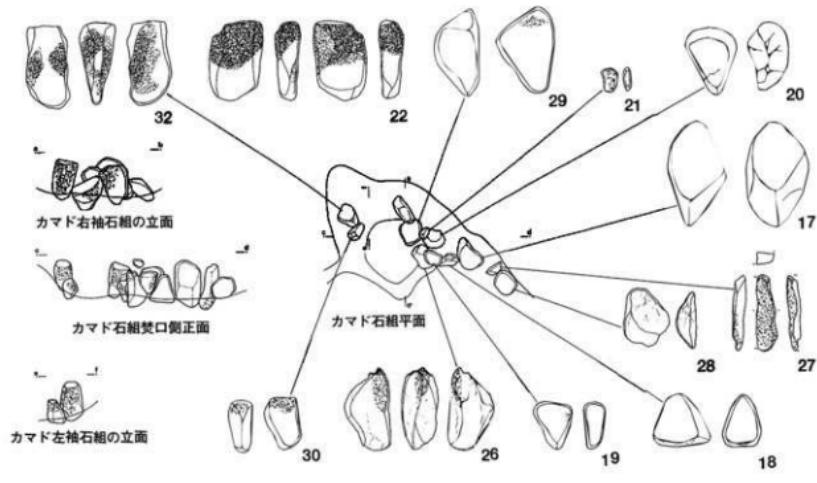
調査行程の後半でこうした観察を進めてきたが、その成果の一部として第94~96図に、34号、37号、42号住居竪穴住居内の礫の観察結果を示した。それぞれにカマドの石組みにかかる礫と、それ以外の礫とに分けて、形状や煤の付着状況、ひび割れ等を記録した個々の礫の実測図を、その出土位置と合わせて示したもので、これにより、先にあげた住居内の礫の問題に迫ってみたい。

まず34号住居跡（第94図）から見る。礫の番号は調査段階の取り上げ順を示しているもので、欠番もあって多少わかりにくいくらい、1から16までの11点はカマド前面を中心に住居内に残された礫であり、17から32までの15点はカマドの石組みを構成していたものと考えられる。ここでカマドの石組みは、左側袖石列の前よりの2石ないし3石と前後の梁石を失っている状態である。一方住居内の礫はというと、7と8は接合し、その形状からすると明らかにカマド焚き口側の梁石である。26号住居跡などでもうそであるように、焚き口側の梁石は強い被熱のため中央で割れる傾向がある。結論は下せないが7と8の礫はこの住居のカマドの梁石であったと見ることもできる。9・10・11・12・13・15・16などはカマドの石組みの袖石に相当する礫である。この住居では、いま見たように欠失する袖石は多く見て3個と推定されるので、住居内に分布する袖石と見られる礫は、数の上で多すぎるとといえ、多い分は他の住居の石組みカマドから供給されたとの見方が出てこよう。

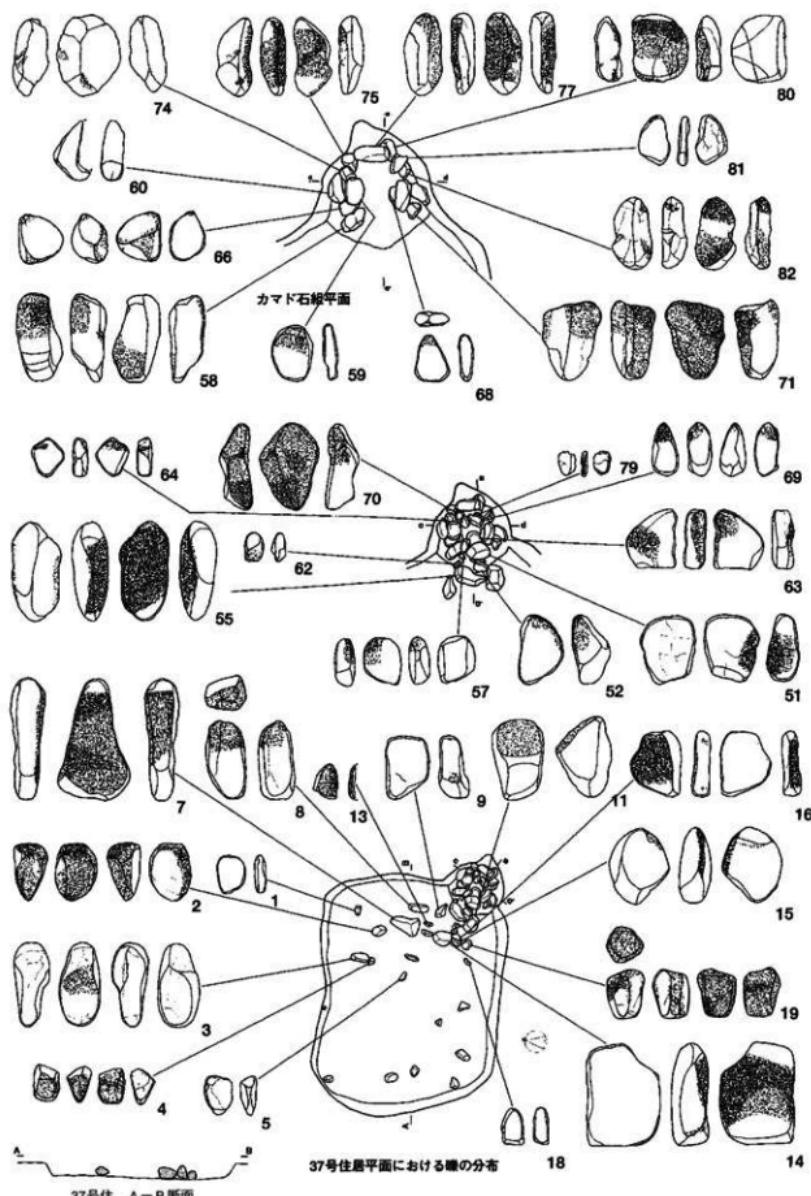
37号住居跡（第95図）について見ると、これも34号と同様な礫の遺存状況が見て取れる。1から19までの15点はカマド付近の住居内に残された礫であり、51から82までの22点は石組みカマドを構成する礫（同図の上段）とやや原位置を離れた石組み関係の礫（同図中断）である。図の上段に見るように、この住居のカマド石組みは焚き口側の梁石を失う程度でかなり良好な造りといえる。カマド燃焼部に見られる69は支脚に相当するものかと見られ、64・67・79などの小さめのものは、石組みの隙間の詰め石であったと考えられる。さて、カマド焚き口前に横たわる55の礫は形状と煤の付着状況から、ここの梁石である可能性が高い。しかし、7と14の礫もやはり焚き口側梁石そのものと見られるので、これだけでも1軒分のカマド部材としては多すぎる事がわかる。34号住居跡における袖石の場合と同じように、他の住居からもたらされたものがあることの例示の一つとなろう。

つぎに42号住居跡の場合（第96図）であるが、これはこれまであげた2軒とは違い、必ずしも他から運びもたらされたとは限らない例である。この住居跡の中央には、煤や被熱の痕もなく、一人の力では持ち上がりにくい大きな礫が床面直上で検出されている。その近くに見られた4の礫は焚き口側梁石であり、この住居のカマドのものである確率が高い。

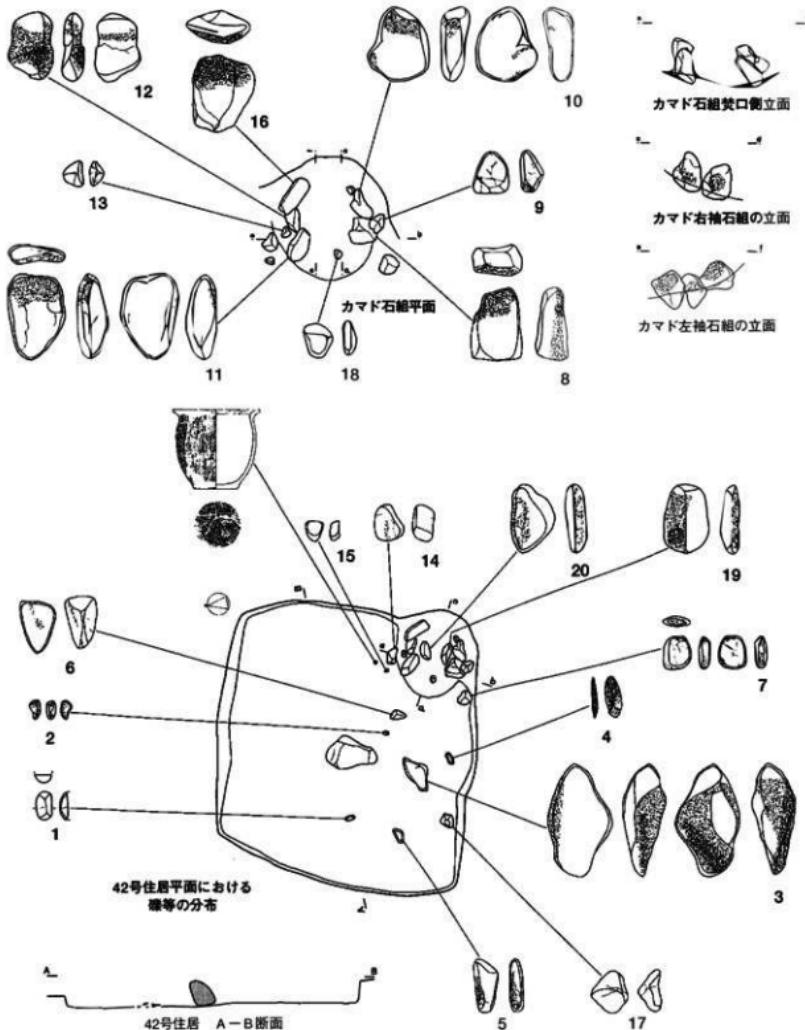
このように3軒の状況を見ると、42号住居跡の場合のように、その住居の中でカマド構築材の礫の解体を考えられるケースもあれば、34、37号住居跡の場合のように、他の住居のカマドの解体を前提にしなければ、理解できないような例もあることが理解できよう。こうした見通しは、一歩進めて具体的に集落の動態の把握を進める



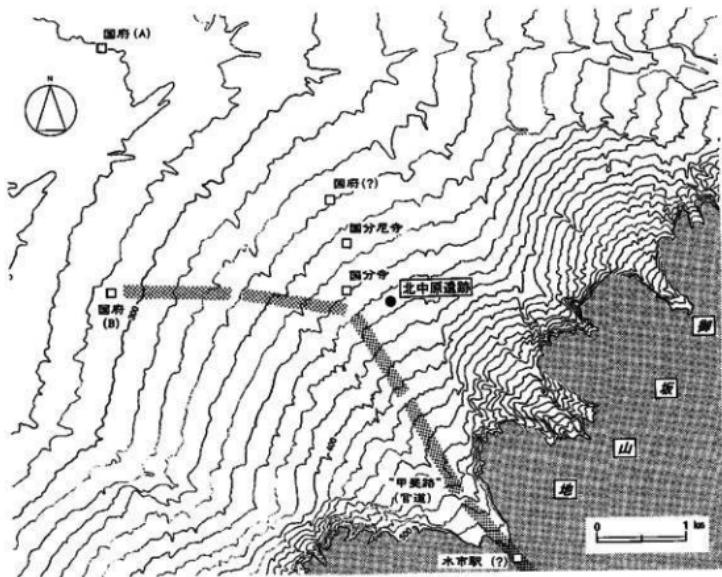
第94図 34号住居跡における礫の状況



第95図 37号住居跡における砾の状況



第96図 42号住居跡における磁の状況



第97図 北中原遺跡周辺の古代情報

材料として有効だと思われるが、さらに検証を必要としていることでもある。

(3) 北中原古代集落の位置づけ

これまで、集落の変遷と、その細部に内在する住居の廃絶にかかわる事象としての住居内の疎の問題を見てきた。そこで終わりに、この北中原の平安集落の位置づけを考えておきたい。

細かく見ると①期とした時期については、集落はさらに北側に展開するのではないかと推定され、ここにはその一部が現れていると考えられる。全体的な把握は難しいが、50号住居跡に廃棄された被熱土塊の存在から、この段階の集落の中には、高熱で処理を行う工房が存在していたとの推定もなされる。

また、北中原③期から④期の時期を中心とした段階では、国分寺所用瓦の破損品が集落内に多く持ち込まれる。また豊富な鉄製品と、それを研ぐ砥石、鍛羽口や鉄滓などが目に付き、活発な生産力をもった集落像が浮かび上がる。

さらに踏み込んだ詳細な関連性は明確にしがたいが、いずれにしろ甲斐国分寺と有機的な関係の下に存在した、国分寺周辺集落の一つとして位置づけて間違いない集落であろう。

第97図に平安時代の北中原の歴史的位置を示した。西方1km足らずのところに甲斐国分僧寺が、その北側に国分尼寺が置かれていたことは、第2章でもふれたとおりで、この遺跡の位置づけを考える上で、繰り返すまでない重要なポイントといえる。また、初め北西約5kmの春日町国府に置かれた初期国府は、この時代には西方3kmの御坂町国衙に移転していたと考えられている（さらに、国分寺の北方1km余りに移転したとする三輪説もあるが確証は得られていない）。その後期国府も考古学的に確認されてはいないが、後期国府推定地から国分寺周辺まで、二之宮・姥塚遺跡や大原遺跡、狐原遺跡など、いくつかの重要な集落遺跡が確認されている。これらは古代の甲斐国を中心地域に位置を占める拠点的集落であり、本遺跡のような国分寺周辺に散在する集落群もそれらに含めてとらえることも出来ようが、こちらはとにかく国分寺との少なからぬ関連を第一に重視して見ていく必要があるようと思われる。というのは、本遺跡の南と東に隣接して発掘調査が行われた笠木地蔵遺跡や北堀遺跡と対比してみたとき、それぞれの集落の年代が少しづつずれており、集落の位置が徐々に移り変わっているように思われるのである。平安期全体から見てたいへん早い動きといえ、それは時々の国分寺の置かれた状況と結びつくのではないかと推測されるからで、今後この点をさらに深めて見ていく必要があると思われる。

第4節 中世遺構について

今回の調査においては、主体となった平安時代の遺構群に混じって、いくつかの中世の所産と見られる遺構が確認された。ここでは、それらの性格を、遺跡周辺に見られる中世の情報と関連させながら若干の検討を試みる。

まずここで関連する成果を再度確かめておくと、明確な遺構としては1号道路状遺構があり、また状況的に中世になると思われるものに1から5号までの溝状遺構と1号竪穴遺構がある。ほかに中世の陶器片等が見られたことなどから中世と判断された土坑が数基ということで、遺物では、蓮弁文の青磁碗の破片や常滑やそれに類似する焼き物の断片の資料、若干の北宋錢といったところであった。

このうち、もっとも注目されるのは、調査区のやや東寄りのところを南北に、直線的に横切るかたちで確認された、1号道路状遺構である。

その幅約4mで、長さ約29m分が確認された。南側の延長は調査区外に続くと見られる。北側については途中から確認できなくなったが、おそらく真っ直ぐ北に続いているものと推定される。部分的に側溝が確認されたが、基本的には浅い皿状の断面形をしており、幅の中程では良好な硬化面が認められたが、両側寄りでは硬化が弱くなるといった状況のものであった。これを道路と見たのは、道路以外の遺構としては考えられないような長さと幅をもち、加えてほとんど平坦な底面に強い硬化面が形成されているからで、積極的に道路跡と呼称してもよいかもと思われる。

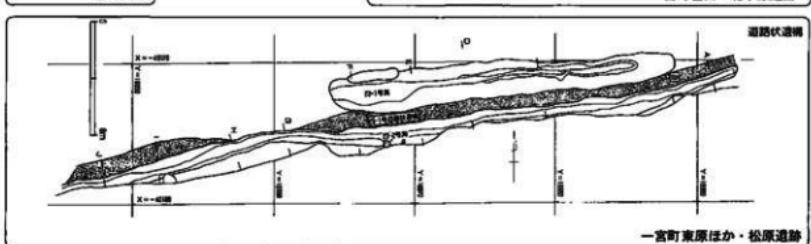
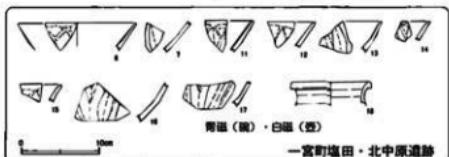
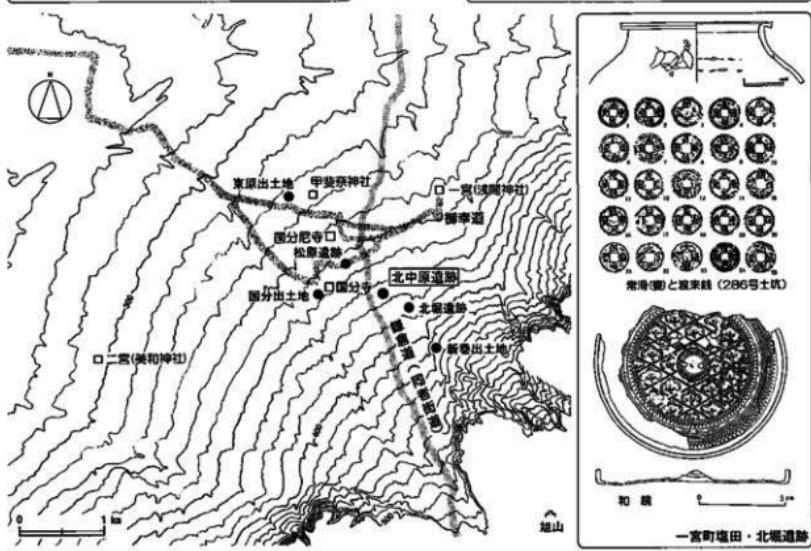
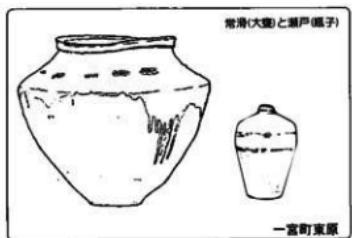
この道路状遺構の年代は、一部で平安末ないし中世の初めと見られる土坑を覆うように造られていることや、硬化面近くで蓮弁文青磁碗片（第74図7）が出土していることなどから、中世の所産で、細かくは14世紀前後くらいではないかと推定される。周辺地形に合わせて南から北に傾斜を持つものの、直線的に通過していく点に特徴があるといえよう。

また1号溝（その延長である3号溝も含めて）と2号溝は、平面的にのみ見ると相互に、道路の側溝に当たるような位置関係にある。両者の間には2号が高く1号がやや低いという若干の高低差があるが、道路の両側側溝との推定を阻むほどではない。二つの溝の間に硬面などの確認はなく、この点に関していえば直ちに道路遺構とはいひ難いが、方向は1号道路状遺構とほぼ同じようになる。

この周辺で道路の遺構というと、地元の一宮町教育委員会が1991年に調査した松原遺跡での調査例が参考になる。これも出土遺物などの状況から中世の所産で、そこでは東西方向に延びる幅約1m、長さ約49mにわたる硬面が検出されている（一宮町教委ほか1992）。幅1mとういのは調査が道路の拡幅に係る細長い調査区であったことや並行するより新しい溝状遺構に切られていたためで、本来はそれ以上の幅があった本格的な道路遺構であったと見られている。報告ではこの道路遺構について、確証はないながらも「御幸道」との関連を想定している。御幸道は、甲斐一宮浅間神社から川嶋祭礼の折りに御輿が御幸する道路で、1967年に刊行した『一宮町誌』や、山梨県教育委員会が1980年代に調査を行い『山梨県歴史の道調査報告書』として刊行した成果を参考にする。松原遺跡の道路状遺構については、その蓋然性が高いと思われる。本遺跡の道路状遺構も同じように考える。こちらは現在本遺跡の西側を掠めるように通過している「同者街道」に沿ったものもあり、より古い段階にはこれが同者街道であったと考えることが出来ないだろうかと考えられる。同者街道とは、秩父方面あるいはその先の北関東からの富士講の行者（同者）が通ったと伝えられている古道で、「鎌倉道」の支道の一つである。もっとも中世の前半に「御幸道」とか、「同者街道」などと呼ばれ、あるいは名称の由来となるような道路の性格が定まっていたかどうかはわからない。それぞれの古道が一定の性格づけによる位置づけが定まってきたのは中世後半のことではないかとみられるからで、だが、名称はともかくとして中世前半から往来の固定は民間ベースで進んでいたことは想像に難くない。すなわち第98図に示したような状況が推定で復元される。

ところで、この北中原遺跡の所在地は、中世では塩田郷の中にあり、古代末から中世にかけて、かなり活発な歴史的展開があったものと考えられ、それを物語る“塩田の長者”伝説というのがよく知られている。よくいわれることだが伝説はそれそのものが事実ではないことが一般的だが、伝説の成立する背景にはおおかた実際に存在した事象が底流に横たわっているのである。塩田長者伝説に関しても、国分寺に隣接して繁栄した古代集落の展開を下敷きに、つぎの中世の紳組みの中でも新しい流れに乗った勢力がこの地域に隆盛したことを示唆するものと考えられる。第98図に古道の展開と合わせてまとめたように、この周辺に中世の遺物が比較的まとまって見られることはよく知られている。

今回の発掘調査では、初めて課題づけられた平安期の遺構の把握に主眼がおかれて、中世の遺構や遺物の把握には焦点が定まらないまま進められてきたので、道路状遺構にしても、その他の遺構・遺物にしても、今ふれた中世塩田郷の実像に迫るにはなお不十分な成果であるが、当時のこの地域の隆盛に直接結びつくと考えられる内容がこれまで一つ追加されたことは間違いないと思われる。



第98図 北中原遺跡周辺の中世情報

第6章 調査のまとめ 一問題点と課題一

県営住宅建設に起因しての2年次にわたって発掘調査が実施された北中原遺跡は、試掘調査以前にもたれていた当初の見込みをはるかに上回るものとなった。というのは、甲斐国分寺跡の近傍でありながら、周知の遺跡として把握されていなかったこともあり、こうした重要な中身をもつ遺跡が表面観察では、なかなか把握し得ないという限界があったためである。そうしたなかで、関係者の調整の末、記録保存の措置がとられ、結果的に大きな成果を得られたことは幸いであった。

調査成果の中心は、何と言っても平安時代の集落跡の状況がまた一つ具体的に明らかとなつたことにある。9世紀代から11世紀代までの77軒の竪穴住居からなる古代の集落は、地域の歴史の変化をつぶさに反映したものといえ、9世紀の前半にわずかな竪穴住居がこのエリアに登場し、半世紀ほどの空白期をおいて、10世紀から11世紀半ば頃まで全面的な展開が見られた。しかし、11世紀後半にはエリアの中の集落は急速に衰退していく。その消長には何らかの歴史の必然性が込められているのであろうが、今回の調査とその成果報告の中だけでは明らかにし得なかった問題であり、今後の課題といえる。

出土土器については、土師器壺を中心にその変遷を5段階に設定してみた。さらには詳細な段階設定が求められるが資料的にまた時間的にそれ以上は出来ずにつながっている。墨書き土器については甲斐での出現～発展期に当たる第一段階と盛行期に当たる第二段階の資料が確認されているが、その判読については課題を残すものもある。

また土器以外にも国分寺所用瓦が比較的多く見られたり、鉄製品そのものや砥石、さらに鉄滓や籠羽口など、盛んな鉄の利用をうかがわせる資料も豊富に出土しているなど、この遺跡の性格を考える上で注目されるデータが多く得られているが、それらを注意深く分析し、十分な歴史的位置づけを行なうことも今後に残された。

今回の調査では、主体となつた平安時代の遺構群に重複して、いくつかの中世の遺構が確認され、また将来品と見られる青磁碗の破片資料などを併せて見て、伝承される中世塙田郷の隆盛の一端を物語るものと考えたが、とりわけ南北に延びる道路状遺構は、現状でなかなか把握していない状況にある中世の遺構を見定めていく上で注目されよう。だが、ここでも多くをこれからの説明の調査研究にゆだねる結果となっている。

調査では多くの知見が得られたが、またそこから多くの課題をかかえたことを確認して結びにかえたい。最後に、調査に関しご支援ご協力頂いた多くの方々に感謝の意を表し、内容的に十分とはいえないまでもこの報告が各方面に利用され、地域の歴史理解の一助となること願って報告を閉じることにしたい。

(参考文献) 報告に当たって多くの文献を参考にしたが、基本的なものののみの掲出とする。

一宮町教育委員会ほか 『松原遺跡』 1992

猪股喜彦 「山梨県における出土窯をめぐる現状と課題」『山梨県考古学協会誌』第6号 山梨県考古学協会
1992

上野晴朗ほか 『一宮町誌』一宮町誌編纂委員会 1967

瀬田正明 「甲斐型土器の年代」「甲斐型土器—その編年と年代—」甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会 1992

巽淳一郎ほか 『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東3 施釉陶器』古代の土器研究会 1994

玉口時雄・小金井靖 「土師器・須恵器の知識」東京美術社 1984

中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

萩原三雄 「ハッ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会 1986

平野 修 「山梨県内出土の墨書き土器と線刻土器」「帝京大学山梨文化財研究所研究報告」第4集 帝京大学山梨文化財研究所 1992

保坂康夫 「山梨県下の平安時代鍛冶遺構の様相」「山梨県考古学協会誌」第5号 山梨県考古学協会 1992

保坂康夫 「甕」「甲斐型土器—その編年と年代—」甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会 1992

森原明廣 「山梨県地域における古代末期の土器様相—「甲斐型土器」の消滅とその後察」「丘陵」第14号 甲斐丘陵考古学研究会 1994

山下孝司 「甕」「甲斐型土器—その編年と年代—」甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会 1992

山梨県教育委員会 「御幸道」山梨県歴史の道調査報告第17集 1988

山梨県教育委員会 「鎌倉道」山梨県歴史の道調査報告第18集 1988

山梨県教育委員会ほか 『北堀遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第7集 1985

山梨県教育委員会ほか 『笠木地蔵遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第12集 1985

図 版



発掘調査前の状況（北西から）



試掘調査作業状況



試掘調査実施状況

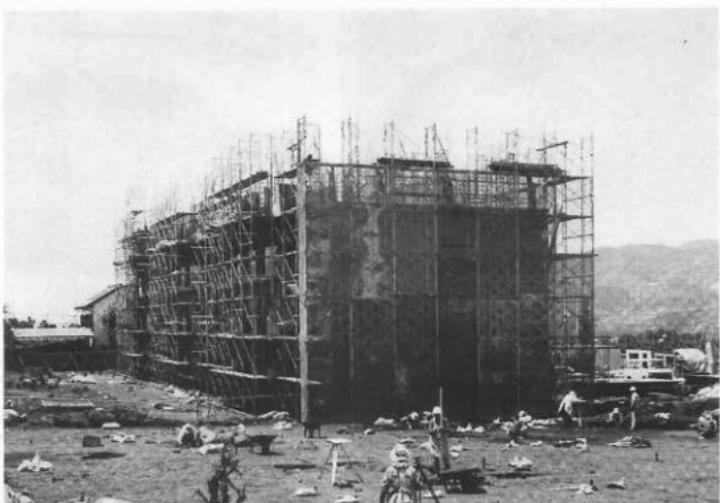
図版 2



第一次調査全景（北から）



第一次調査の状況



第二次調査の状況

図版 4



1 A・2 B号住居跡（南から）



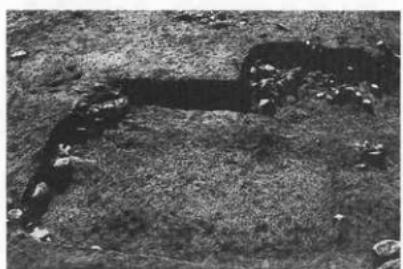
2号住居跡（北から）



1 A号住居跡 カマド



2号住居跡 カマド



3号住居跡（右上は2号住居跡、北から）



2号住居跡 鉄製品・釘



3号住居跡 カマド



18・2・3号住居跡（右より、南東から）



4号住居跡（東から）



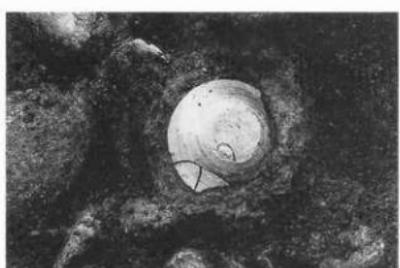
4号住居跡 カマド



5A・5B号住居跡（東から）



5A号住居跡 カマド



5A号住居内土坑 土器・皿（3）



4～6号住居周辺の調査状況 '93.11.25



6号住居跡カマド周辺



6号住居跡（北から）

図版 6



7・8・9・10・14・15号住居跡（南から）



15号住居跡周辺の床面下部の土坑



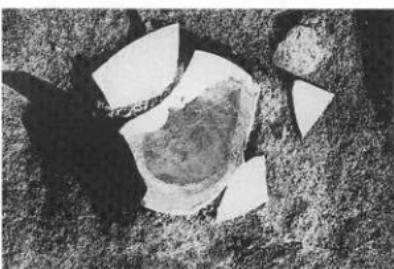
8号住居跡 カマド



15号住居跡 カマド



8号住居跡 鉄製品・錆



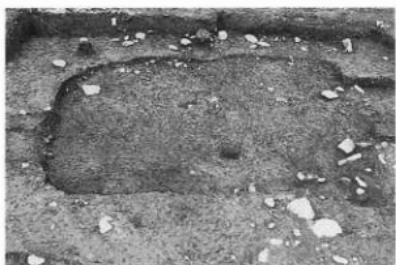
15号住居跡 灰釉陶器・椀



10号住居跡 カマド



14号住居跡 カマド



11号住居跡（南から）



11号住居跡 カマド



12号住居跡（西から）



12号住居跡 カマド



13号住居跡（西から）



13号住居跡 カマド



13号住居跡 カマド前遺物出土状況



13号住居跡 調査状況 ('93.12.1)

図版 8



16号住居跡確認状況（南から）



16号住居跡（東から）



17号住居跡（北から）



17号住居跡 カマド



18号住居跡（東から）



18号住居跡 カマド



19号住居跡（北東から）



19号住居跡（西から）



21号住居跡（西から）



手前左より21・22・23・24号住居跡（南から）



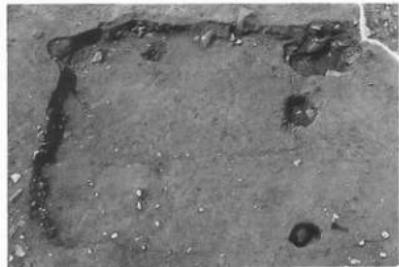
22号住居跡（西から）



22号住居跡 カマド周辺



24号住居跡（東から）



24号住居跡（北から）

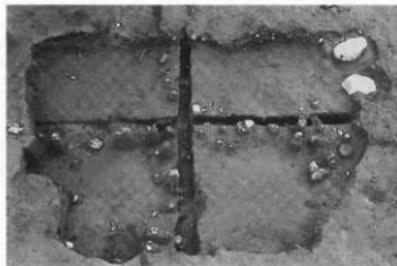


24号住居跡 カマド



24号住居跡 灰釉陶器・楕など

図版10



25号住居跡 遺物出土状況（東から）



25号住居跡および33号住居跡（西から）



25号住居跡 カマド前の状況



25号住居跡 カマド



26号住居跡（西から）



26号住居跡 カマド前の状況



26号住居跡 カマド



26号住居跡 調査状況



28号住居跡（東半、北から）



28号住居跡（西半、西から）



29号住居跡（西から）



29（中央）・31（中央奥）・28（右手前）・30（右奥）号住居跡



29号住居跡 カマド



29号住居跡 遺物出土状況



30号住居跡（西半、南西から）



30号住居跡（東半、南から）

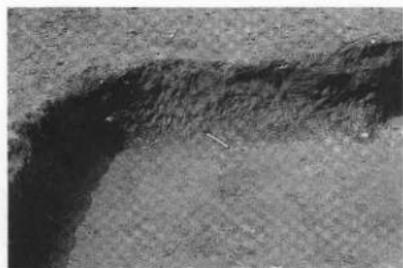
図版12



31号住居跡（西から）



31号住居跡 カマド



31号住居跡 鉄製品・刀子



31（中央）・34（左奥）・35（右）号住居跡（南から）



34号住居跡（西から）



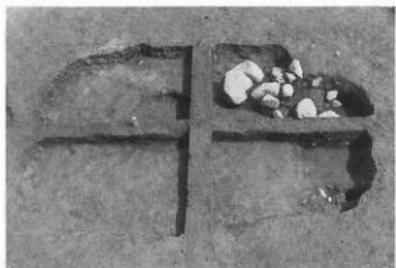
34号住居跡 カマド前の状況



34号住居跡 カマド



35号住居跡 カマド



32号住居跡（南から）



32号住居跡 カマド



33号住居跡（25号住居跡と重複、西から）



33号住居跡 カマド



36号住居跡（北から）



36号住居跡 カマド



37号住居跡（東から）



37号住居跡 カマド

図版14



38号住居跡（右）・43号住居跡（左）(西から)



30号住居跡 カマド調査状況 ('94. 9. 28)



38号住居跡 カマド



38号住居跡 緑釉陶器・輪花皿



43号住居跡の土層と床面上の様



43号住居跡 カマド



39号住居跡（西から）



39号住居跡 A カマド



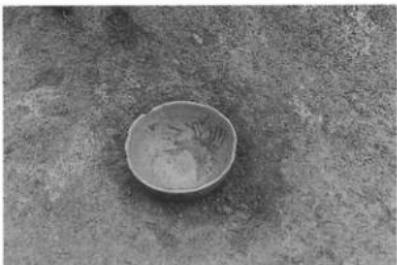
40・54号住居跡 (東から)



40号住居跡 カマド



40号住居跡 須恵器・坏壺



40号住居跡 土師器・坏



54号住居跡 カマド



39・40・42号住居跡周辺 (南から)



42号住居跡 (北から)



42号住居跡 カマド

図版16



44・45号住居跡（南東から）



44号住居跡 カマド周辺遺物出土状況



44号住居跡 カマド



45号住居跡 カマド



47号住居跡調査状況（右手前は46号住のカマド、北から）



46号住居跡 カマド



47号住居跡 カマド前の状況



47号住居跡 カマド



48・49・50号住居跡周辺（南から）



48号住居跡 Aカマド



48・49・50号住居跡（東南から）



48号住居跡 Aカマド



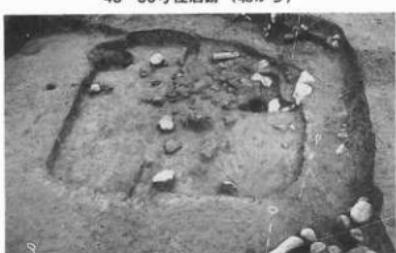
48号住居跡 Bカマド



48・50号住居跡（北から）



50号住居跡 調査状況



50号住居跡（西から）



50号住居跡 丸瓦および被熱土塊

図版18



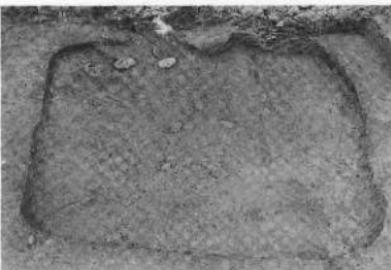
51(左)・52号住居跡(北から)



51・52号住居跡 調査状況



53号住居跡周辺(南から)



53号住居跡(北から)



53号住居跡 カマド



53号住居跡 調査状況



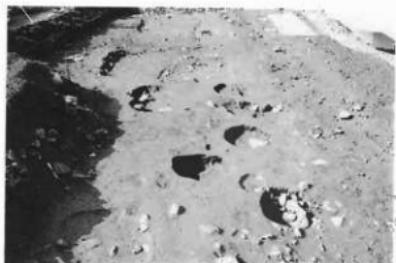
55号住居跡 調査状況



53号住居跡(南から)



56号住居跡(西から)



57号住居跡（中央上方、東から）



58号住居跡（南から）



58号住居跡 A カマド



58号住居跡 B カマド調査中



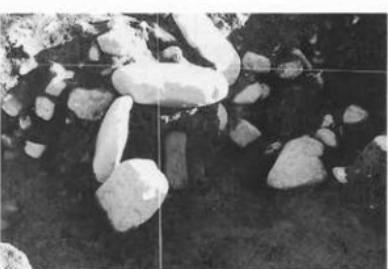
58号住居跡 A カマド



58号住居跡周辺調査状況



60号住居跡 磚の状況



60号住居跡 遺物出土状況

図版20



60号住居跡（南から）



60号住居跡 煙の状況



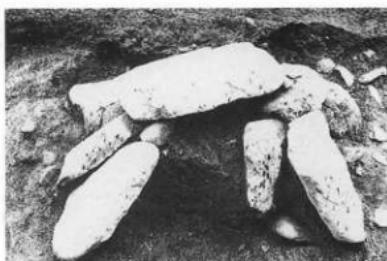
60号住居跡 遺物出土状況



60号住居跡 カマド



61号住居跡（東から）



61号住居跡 カマド



62号住居跡（東から）



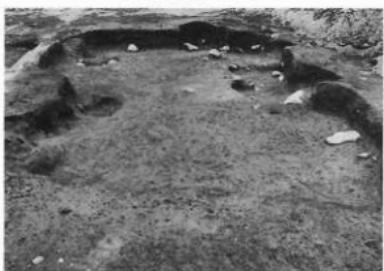
62号住居跡 カマド



63号住居跡 カマド



63号住居跡 遺物出土状況



64・65・73号住居跡（北から）



64・65・73号住居跡（南から）



66号住居跡（西から）



66号住居跡 カマド



66号住居跡 カマド



67号住居跡（北から）

図版22



69号住居跡（東から）



69号住居跡 カマド



69号住居跡 調査状況



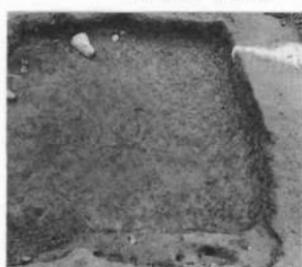
70号住居跡（西から）



70号住居跡（北から）



70号住居跡 カマド



65・73号住居跡（東から）



73号住居跡 カマド付近



73号住居跡 カマド



62・74号住居跡 周辺



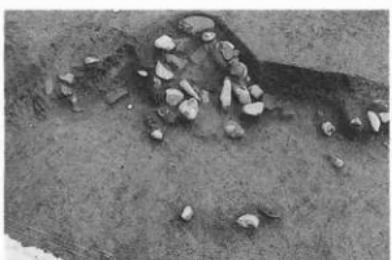
74号住居跡 調査状況



74号住居跡（西から）



74号住居跡 カマド



75・76号住居跡 カマド



75・76号住居跡 調査状況

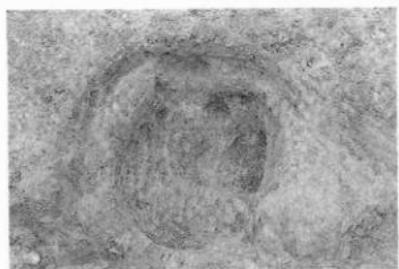


75号住居跡 カマド

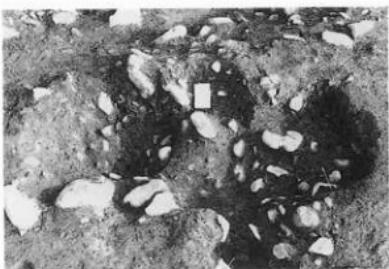


76号住居跡 カマド

図版24



1号土坑



2号土坑



3号土坑



6号土坑



8号土坑



10号土坑



11号土坑



11号土坑 土層断面



13号土坑



14号土坑



15~22号土坑



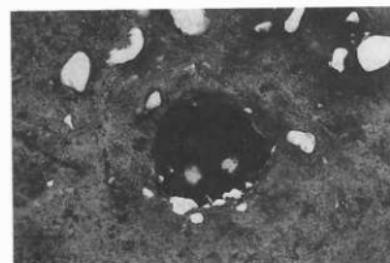
15~17号土坑



18~21号土坑



17・18号土坑



22号土坑



23号土坑

図版26



24号土坑



24・25号土坑



25号土坑



28号土坑



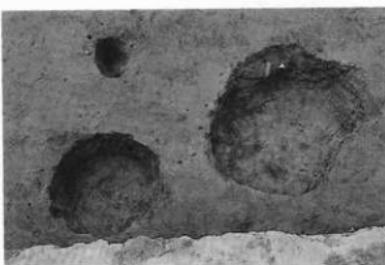
29・30号土坑



31・32号土坑（右手前、西から）



33号土坑



34・35号土坑



39号土坑



土坑群と1号道路状遺構



40号土坑周辺調査状況



41~49・53~59・91~93号土坑



44~46号土坑 土層状況



51号土坑

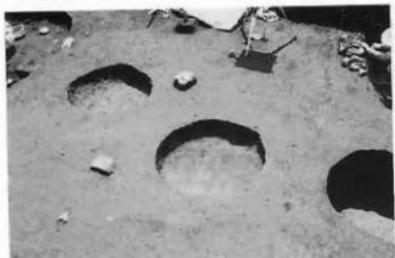


52号土坑



53 (中央)・54 (左)号土坑

図版28



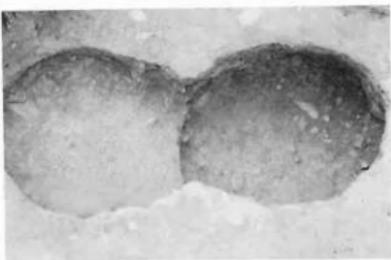
60~62号土坑（左から）



62号土坑 調査状況



62号土坑



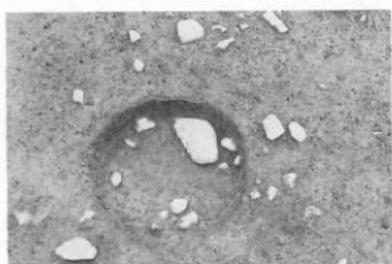
66・67号土坑



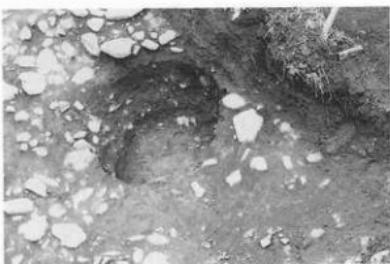
70~84号土坑



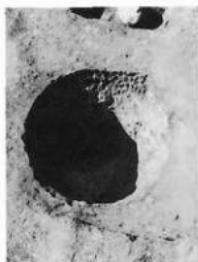
86~88号土坑（右から）



90号土坑



94号土坑



95号土坑



96~104号土坑



98号土坑



96号土坑



99号土坑



105~110号土坑



110号土坑周辺調査状況



123~128号土坑



119~122号土坑



1号特殊小坑



2号特殊小坑

図版30



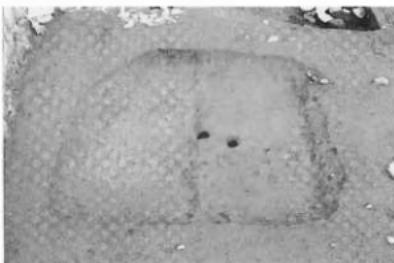
1号竪穴状遺構（北東から）



1号竪穴状遺構（東から）



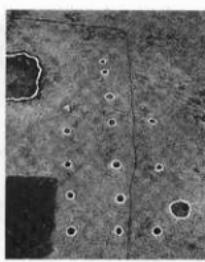
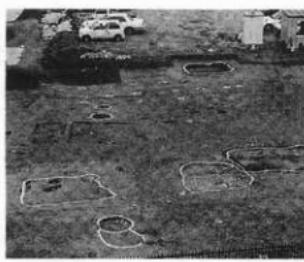
1号竪穴状遺構 磚の状況



1号竪穴状遺構 完掘状況



1号竪穴状遺構 調査状況



1号柱穴群（左：南から 中：西から 右：東から）



1号溝（南から）



2号溝（西から）



3号溝（南から）



3号溝（南から）



3号溝（南から）



3号溝 遺物出土状況



4号溝（西から）



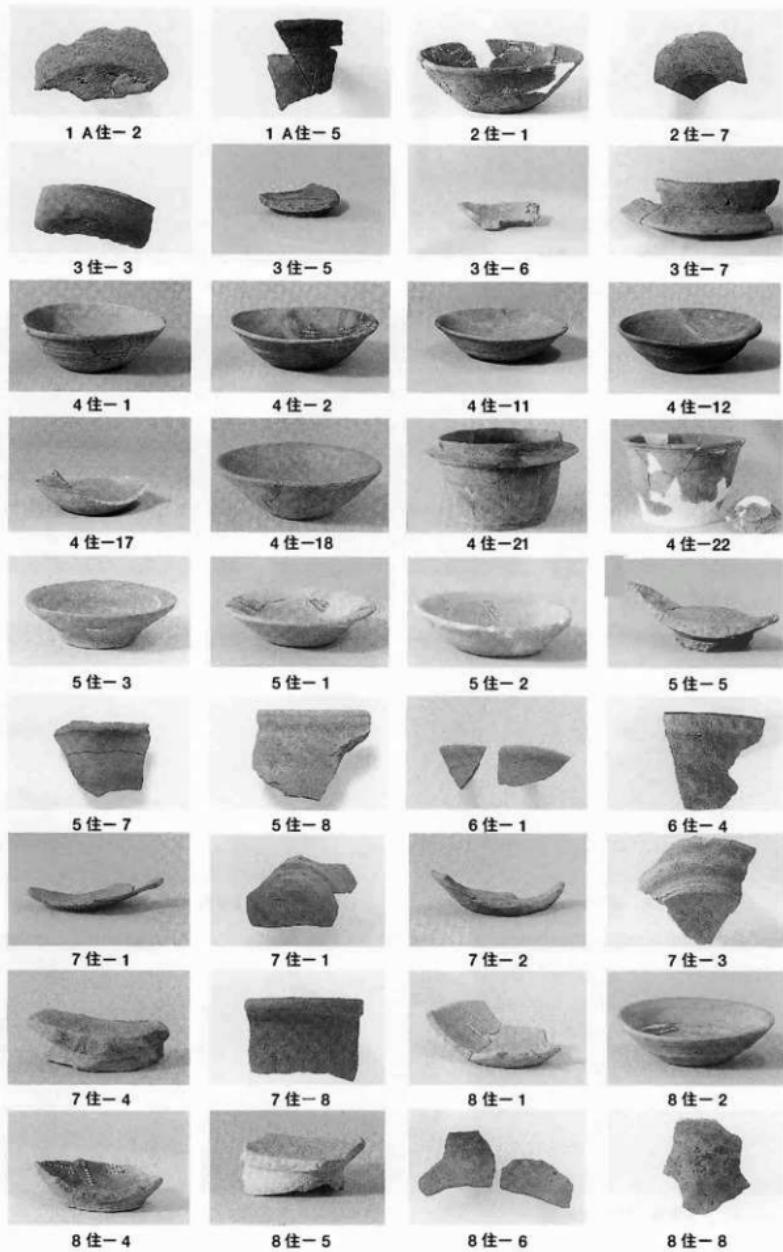
5号溝（西から）

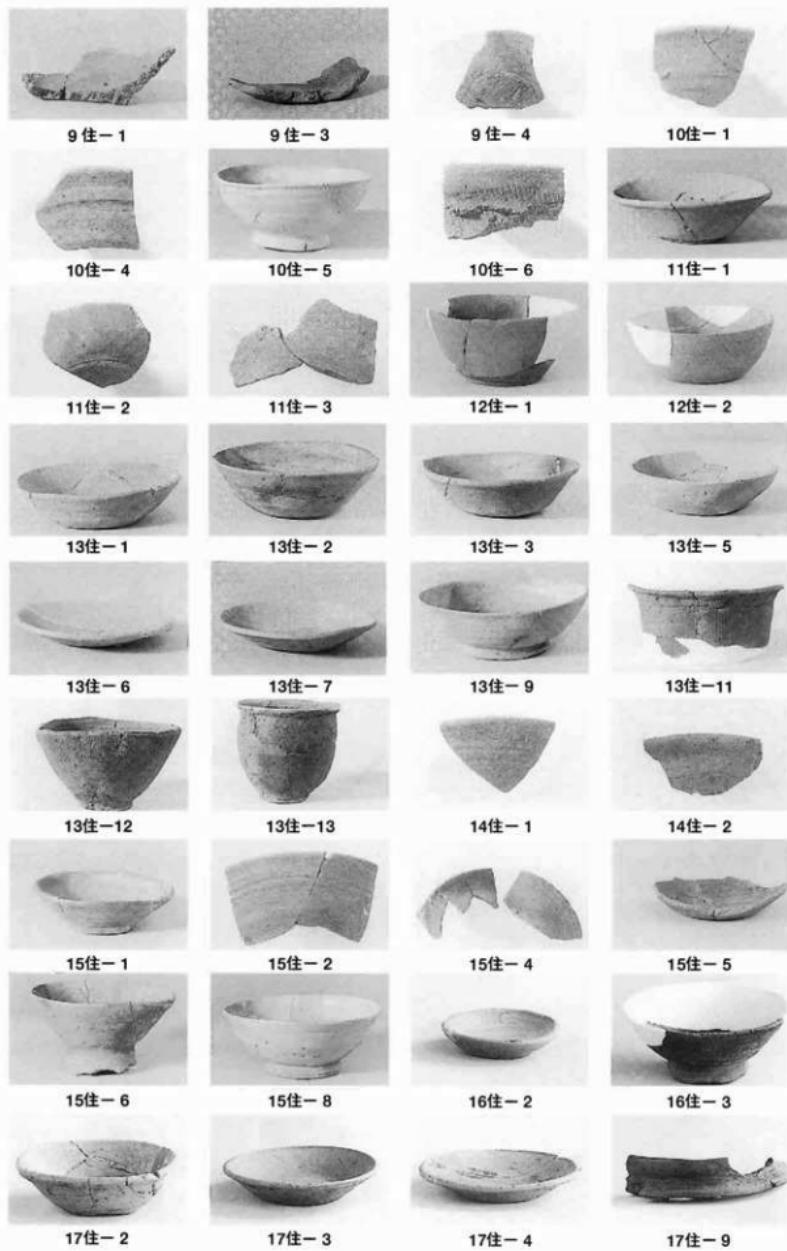


1号道路状造構（右：南から、左：北から）

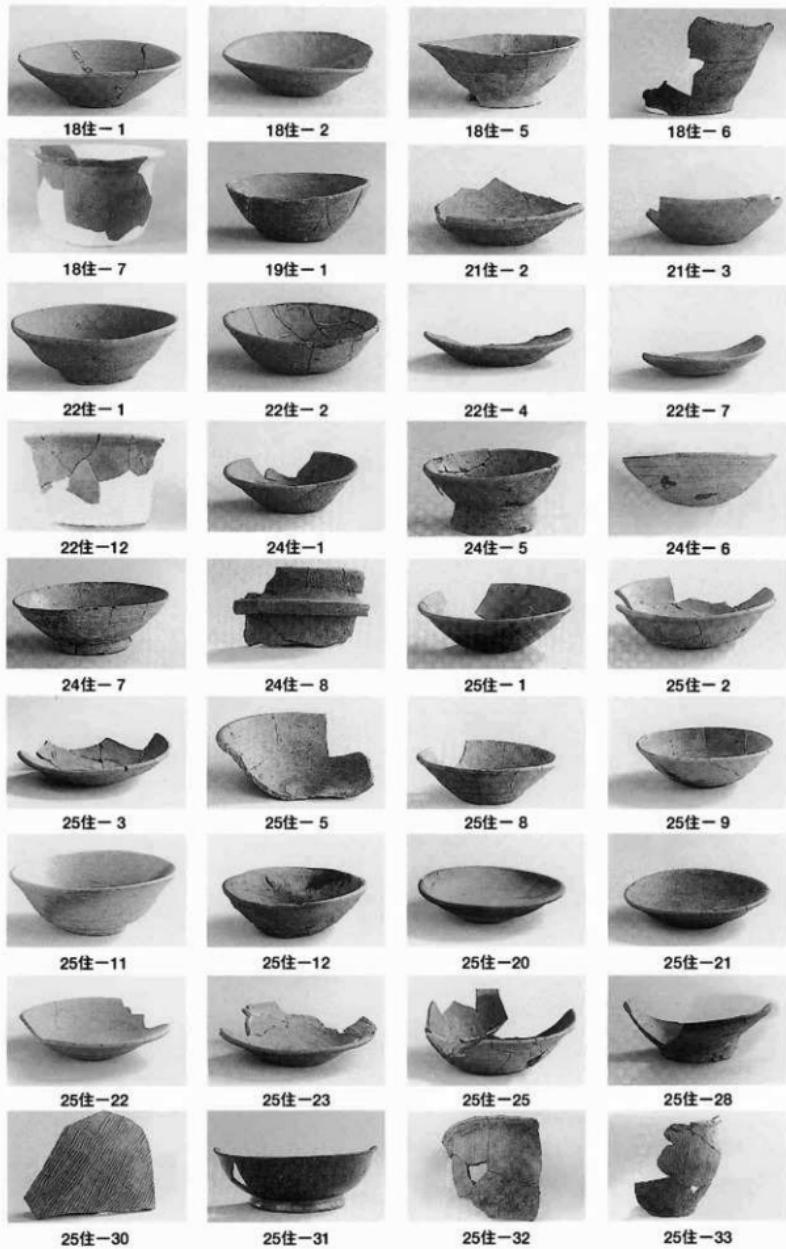


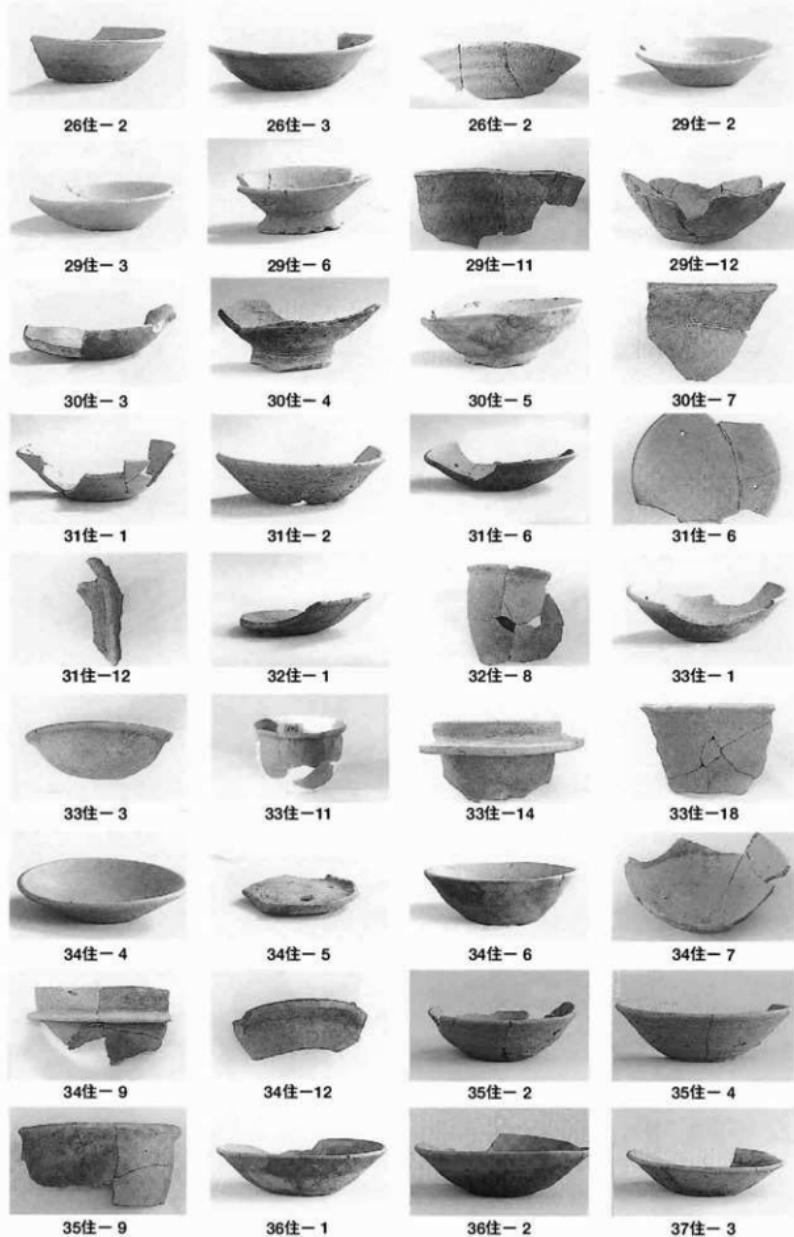
図版32



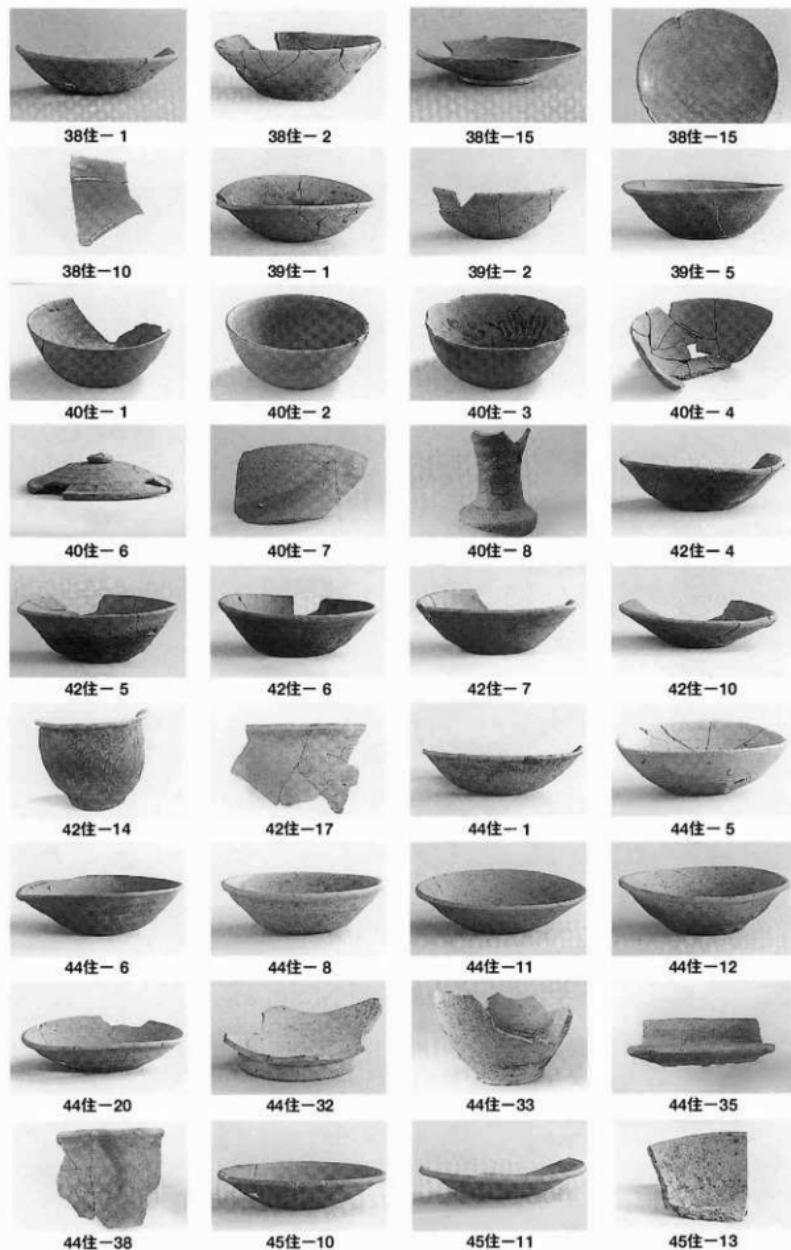


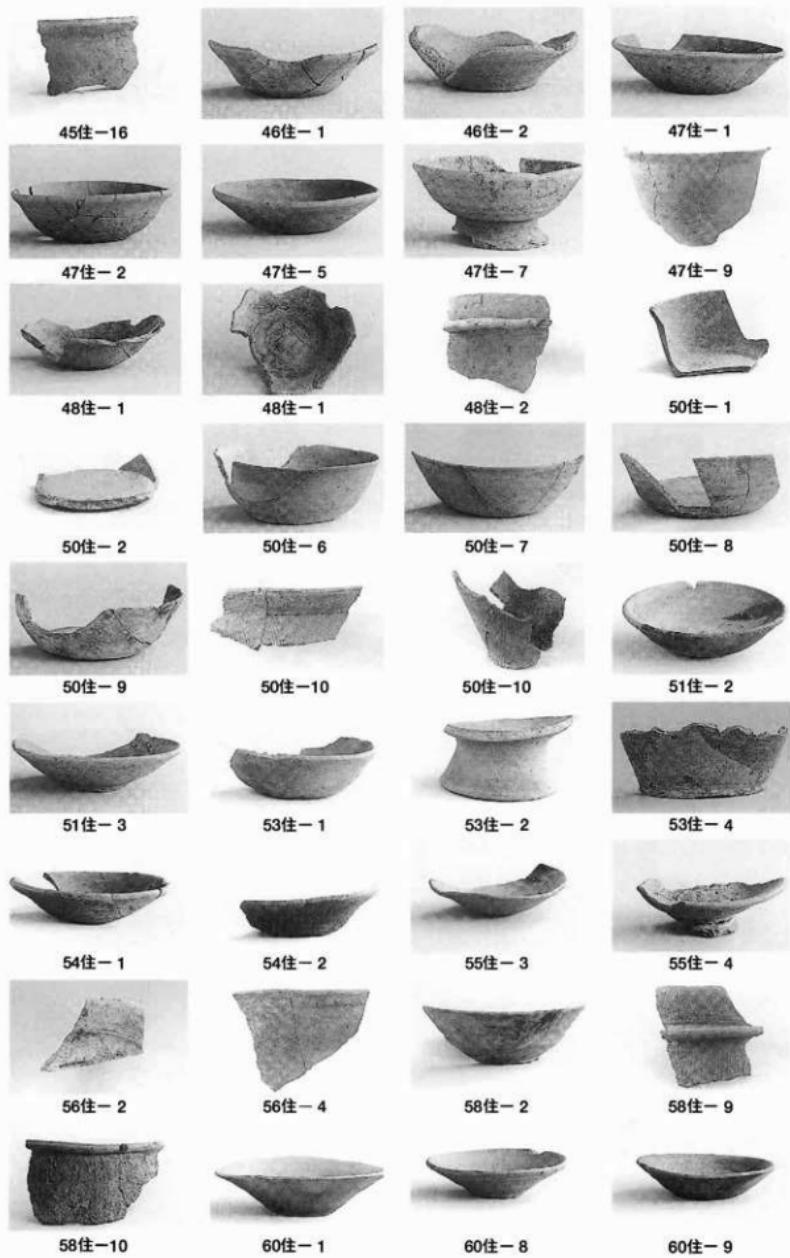
図版34



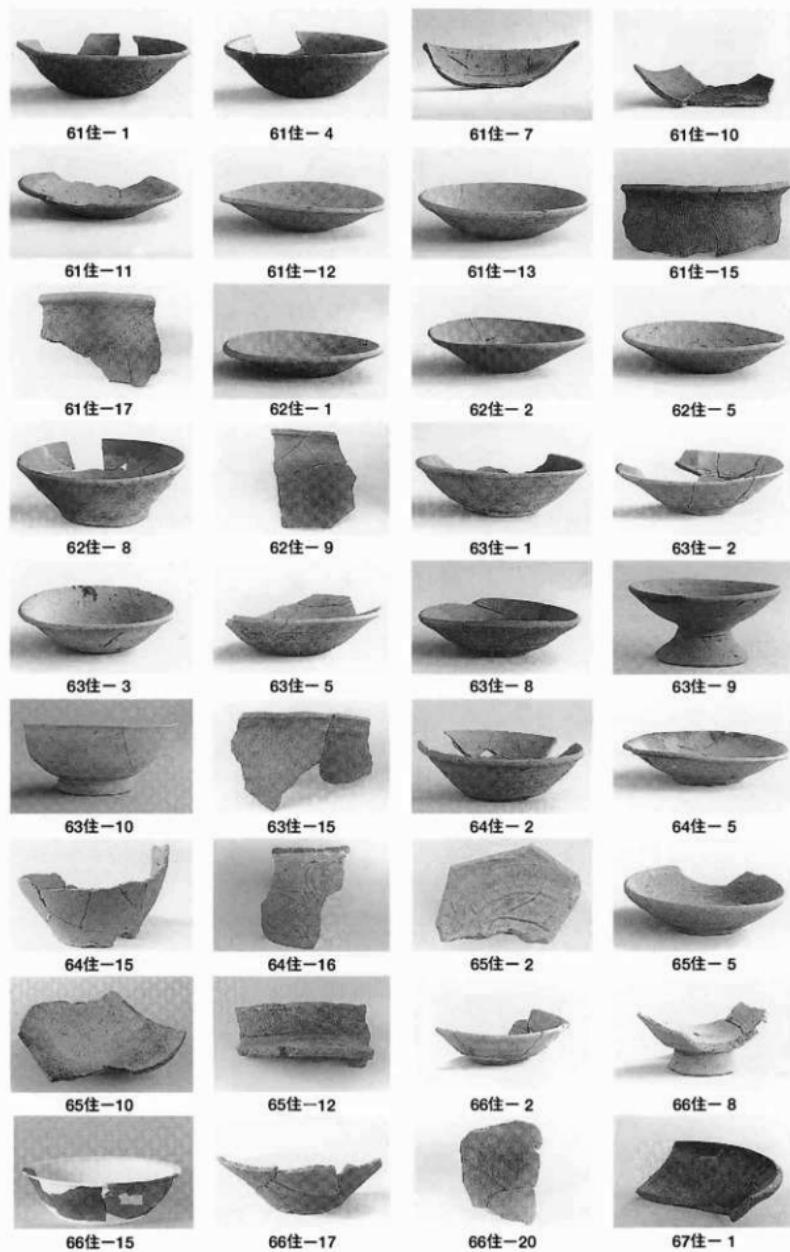


図版36

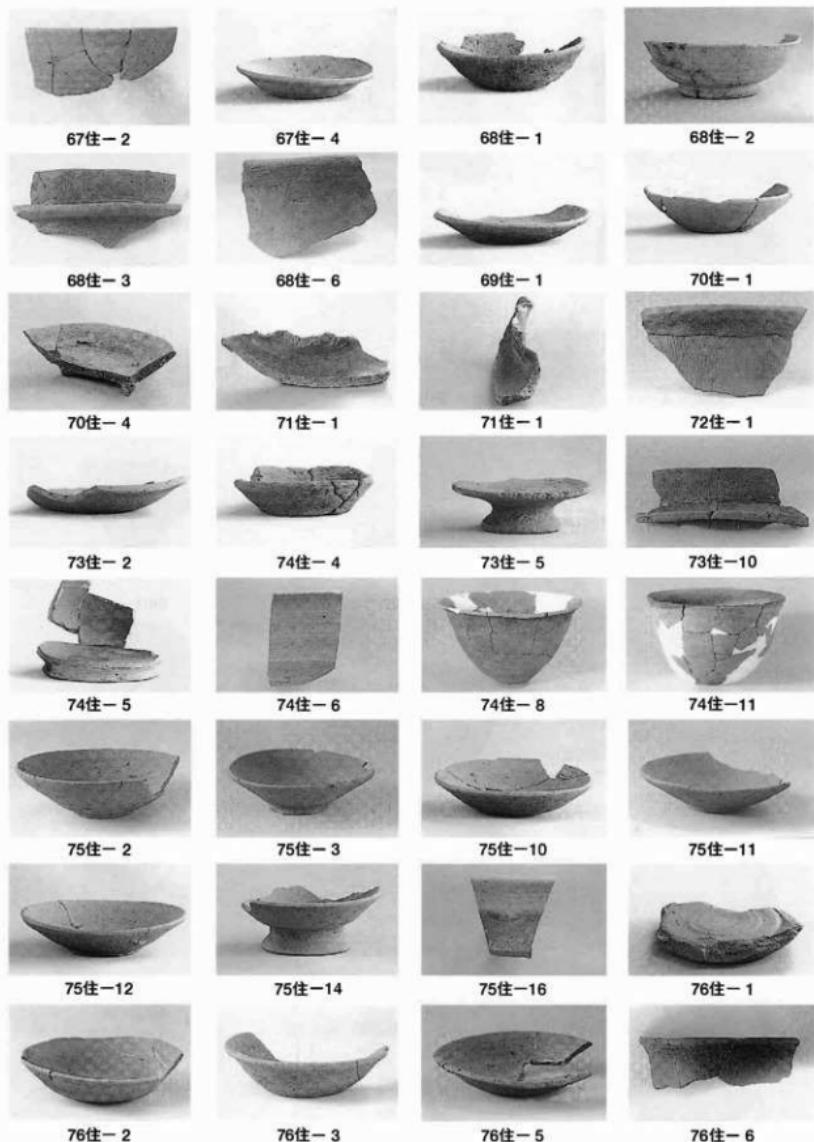




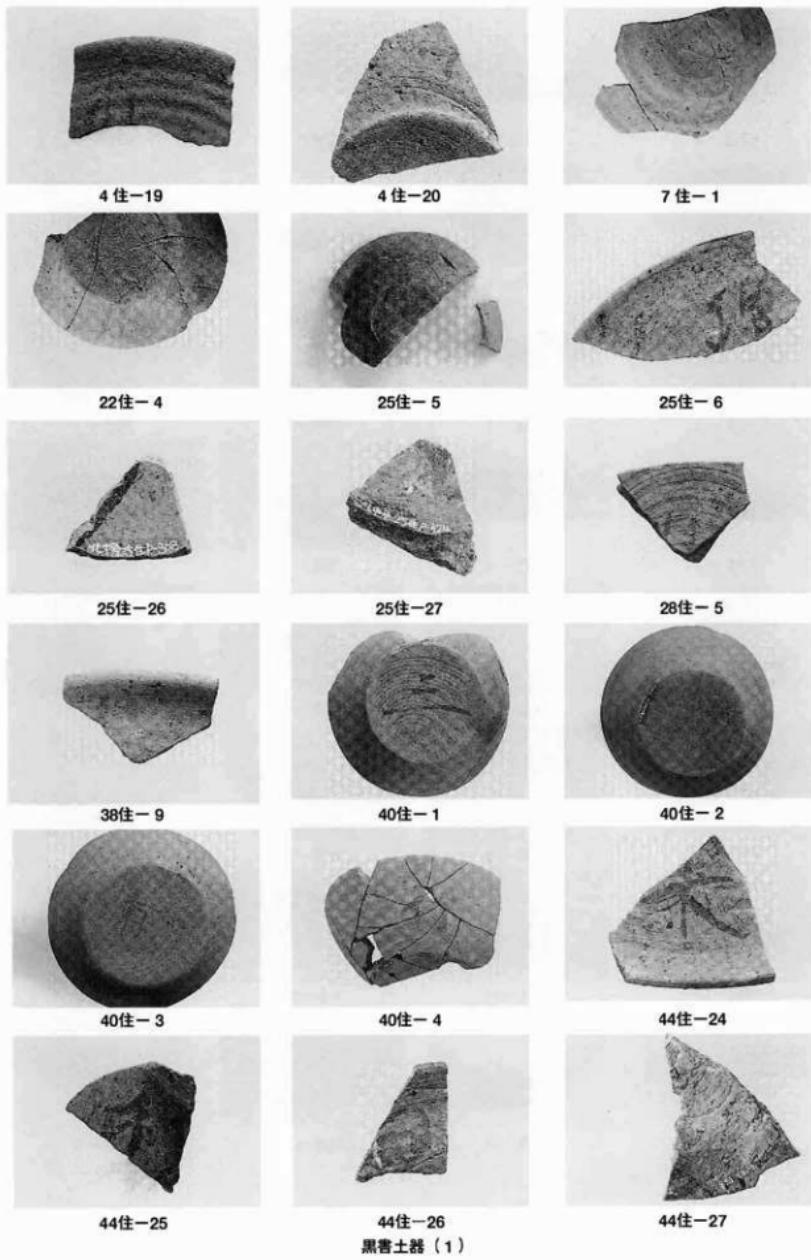
図版38



図版39



図版40



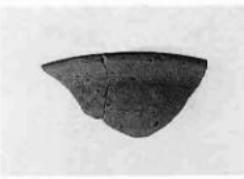
黒土器（1）



45住-13



45住-14



45住-15



45住-13



45住-14



45住-15



45住-13



45住-14



45住-15



45住-13



45住-14



45住-15



45住-13



45住-14



45住-15



45住-13



45住-14



45住-15

黒書土器（2）・ヘラ書土器

図版42



1 1 A住



2 7住



3 8住



4 8住



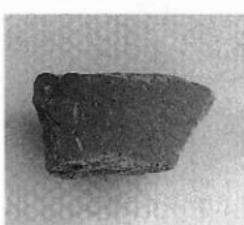
5 11住



6 22住



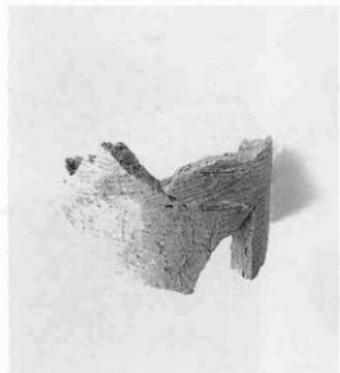
7 34住



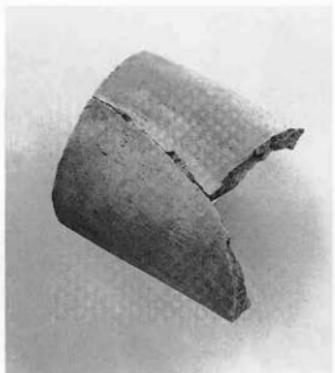
8 39住



9 45住



10 48・65・73住



11 48住

瓦 (1)



12 50住



13 54住



14 64住



15 65住



16 65住



17 65住



18 65住



19 65住



20 65住



21 65住



22 68、73住
瓦(2)

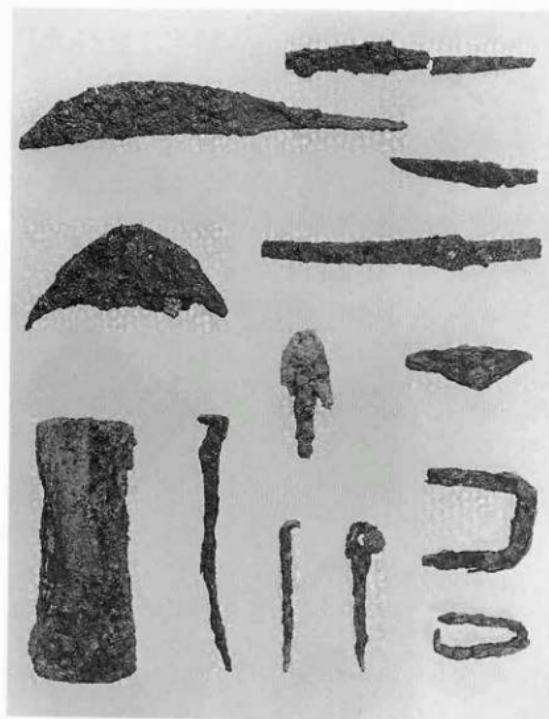


23 68住

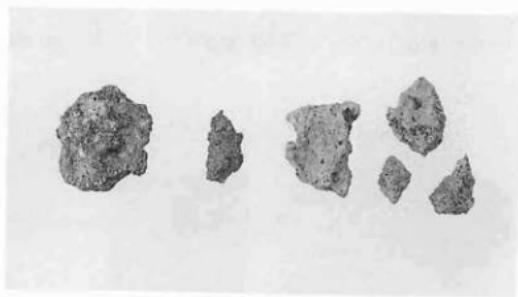


25 69住

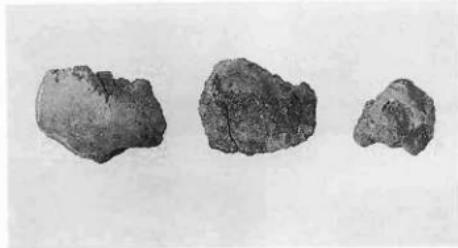
図版44



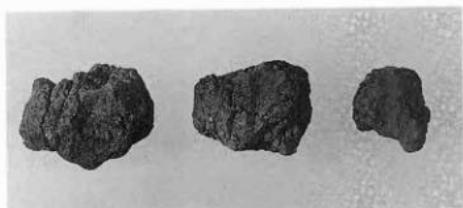
鉄製品



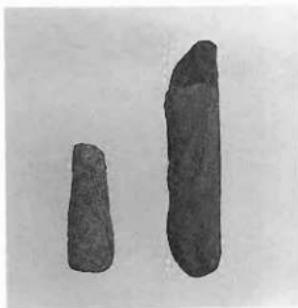
鉄 津



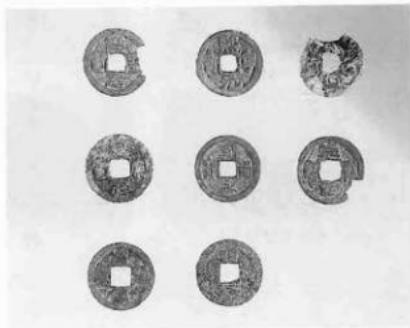
フイゴ羽口（表）



フイゴ羽口（裏）

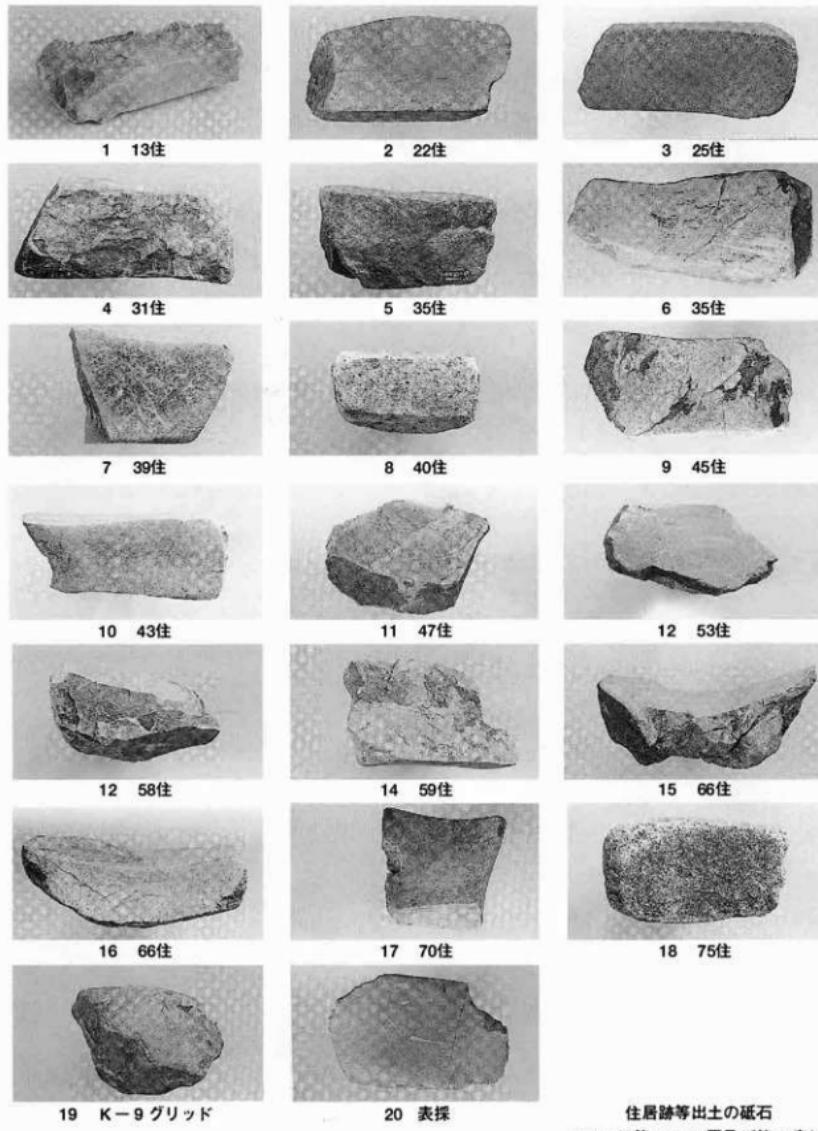


磨り石・石杵



錢貨

図版46



住居跡等出土の砥石

※No.は第82・83図及び第19表に
対応する



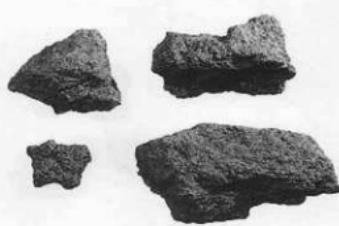
50号住居跡出土の被熱土塊（一部）



面をもつ被熱土塊



指頭による調整面をもつ被熱土塊



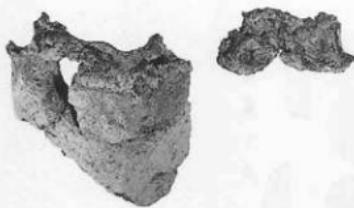
同左（裏）



溶融面をもつ被熱土塊



同左（裏・スサが顕著）

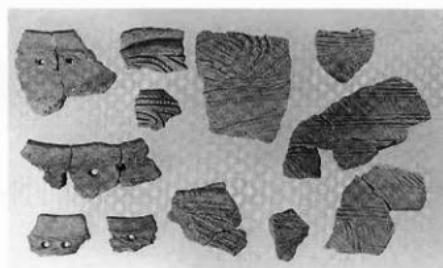


羽口状の形態をもつ被熱土塊

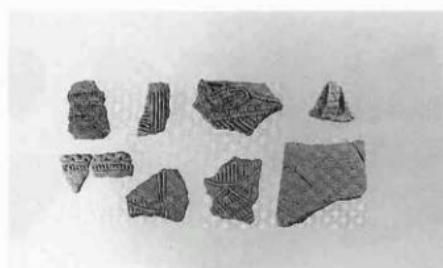


同左（裏）

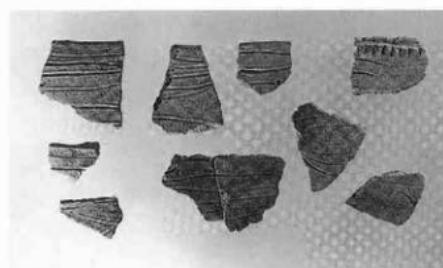
图版48



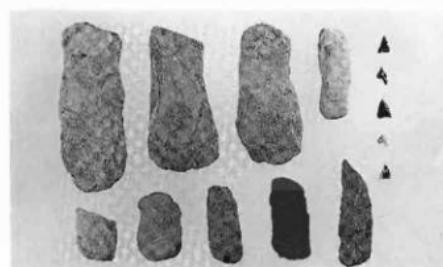
前期



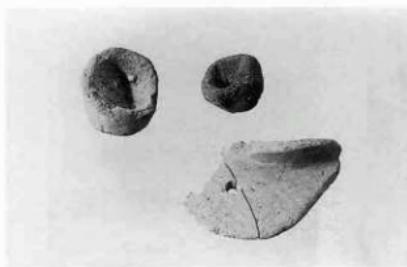
中期



晚期



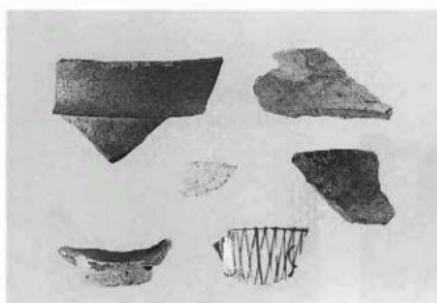
石器



古墳時代土器



青磁片



中～近世陶磁器・土器



煙管



土製人形

図版50



4号棟の建設にはいった調査区東半部



3号棟と調査区西北部



ブラジルからの研修により調査参加したサン德拉奈美さん



39号住居跡下部の地山の状況



整理調査の状況



現地での遺物水洗

報告書抄録

報告書概要	
書名	北中原遺跡（きたなかはら いせき）
副題	県営一宮団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第99集
編著者	出月 洋文
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
編集機関連絡先	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 電話 0552-66-3016
印刷所	ヨネヤ印刷
印刷・発行年月日	印刷：1995（平成7）年3月20日 発行：1995（平成7）年3月31日
報告書概要	
遺跡名	北中原遺跡（きたなかはら いせき）
遺跡所在地	山梨県東八代郡一宮町塙田585 緯度・経度 北緯35度38分04秒 東經138度41分32秒 地形図名 国土地理院 5万分の1 「甲府」、2万5千分の1「石和」
主な時代	平安時代
主な遺構	竪穴住居跡77軒のほか、竪穴造構・掘建柱建物跡・土坑・溝状造構・道路状造構など
主な遺物	土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・瓦
特記される事項	9～11世紀の竪穴住居群からなる集落跡で、甲斐国分寺周辺遺跡群の一つ墨書き土器（35点）・刻書き土器（2点）を含む豊富な生活遺物等が得られた。中世の道路造構（南北方向の道路と見られる）をも確認した。
調査期間	1993（平成5）年11月17日～12月27日 および 1994（平成6）年4月17日～12月27日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第99集

北中原遺跡

—県営一宮団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷日 1995（平成7）年3月20日

発行日 1995（平成7）年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会・山梨県土木部

印刷 株式会社 ヨネヤ

